福　岡　市

海の中道遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第87集

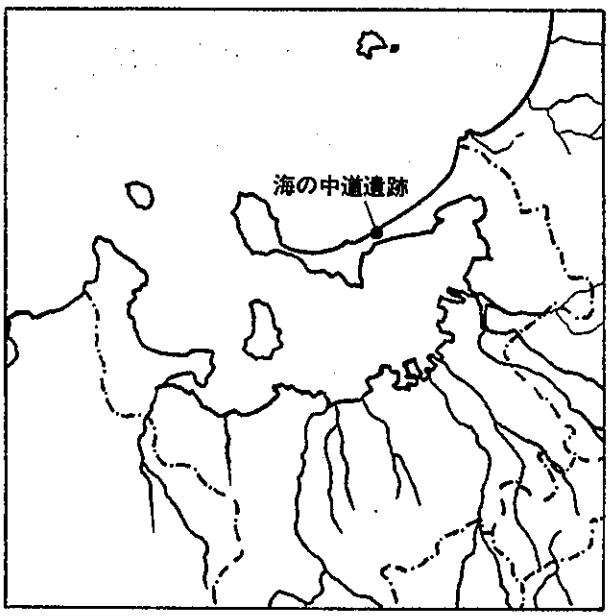
1982

福岡市教育委員会

福　岡　市

海の中道遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第87集



1982

福岡市教育委員会

例　言

1．本書は建設省が計画した海の中道公園建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会文化課・九州大学が1979年～1981年の３次にわたって発掘調査を実施した海の中道遺跡の報告書である。

2．本書の執筆には横山浩一、山崎純男、市橋重喜、横大路俊明、小畑弘己、矢野佳代子があたり、各分担は文末に銘記した。

3．高倉洋彰、森田勉、板楠和子の諸氏にそれぞれの分野において海の中道遺跡をめぐる諸問題の玉稿をいただいた。

4．本書に使用した図の作製は山崎、宮内克己、福尾正彦、木下尚子、市橋、横大路小畑、矢野、古庄秀樹、本田秀樹、唐沢洋司、寺師雄二、唐口勉三、福岡大学歴史研究部考古学班があたった。

5．本書の図の製図は山崎、小畑、矢野、平川祐介、堀川亮二、千々和謙策があたった。

6．本書に使用した写真は横山、山崎、市橋浜田昌治、松村道博によるものである。

7．本書第７章、自然遺物については整理が終了していないので、おって公表する予定である。

8．本書の編集は横山浩一の指導のもとに山崎がこれにあたった。

本 文 目 次

第1章　序説 …… 1
1　はじめに …… 1
2　遺跡の立地と歴史的環境 …… 3
第2章　調査の概要 …… 6
1　分布調査 …… 6
2　第1次調査の概要 …… 6
3　第2次調査の概要 …… 7
4　第3次調査の概要 …… 8
第3章　調査の記録　―遺構― …… 10
1　第1次調査の遺構 …… 10
(1)　土層 …… 10
(2)　住居址 …… 10
(3)　炉体（焼土）と土器集積の分布 …… 13
(4)　製塩土器Ⅱ類の分布 …… 16
2　第2次調査の遺構 …… 17
(1)　土層 …… 17
(2)　遺構の分布 …… 19
(3)　第4号竪穴住居址 …… 19
(4)　製塩土器集積の分布 …… 20
3　第3次調査の遺構 …… 21
(1)　土層 …… 21
(2)　遺構の分布 …… 23
(3)　貝塚 …… 24
第4章　調査の記録―遺物Ⅰ（容器）― …… 28
1　土器類 …… 28
(1)　古墳時代の土器 …… 28
(2)　第4号竪穴住居址出土土器 …… 29
(3)　須恵器 …… 33
(4)　土師器 …… 48
(5)　黒色土器 …… 66
(6)　貝塚出土土器 …… 71

(7) 墨書土器……72
2 施釉陶磁器……73
(1) 緑釉陶器……73
(2) 灰釉陶器……74
(3) 中国陶磁器……74
3 滑石製容器……78
(1) 石鍋……78
(2) 滑石製品……79
第5章 調査の記録—遺物Ⅱ（生産用具）—……98
1 製塩土器……98
(1) 古墳時代の製塩土器……98
(2) 製塩土器Ⅰ類……99
(3) 製塩土器Ⅱ類……103
2 漁撈具……107
(1) 錘……107
(2) 鉄製釣針……128
(3) 刺突具……131
(4) 銛……133
(5) 刀子……133
3 紡錘……139
4 鉈……139
第6章 調査の記録—遺物Ⅲ（その他）—……140
1 装身具……140
2 貨幣……140
3 角釘……140
4 武器……143
5 瓦類……143
第7章 調査の記録—遺物Ⅳ（自然遺物）—……146
1 貝類……146
2 魚類……148
3 哺乳類・その他……148
第8章 調査の総括……149

第９章　海の中道をめぐる諸問題 …… 154
1　文献から見た海の中道遺跡―大宰府主厨司考― …… 154
2　九州出土の皇朝十二銭 …… 170
3　出土陶磁器についての二、三の問題 …… 178

挿 図 目 次

第１図　海の中道遺跡の位置と周辺遺跡……2
第２図　海の中道遺跡の立地……4
第３図　発掘区の設定……7
第４図　第１次調査土層断面図……11
第５図　焼土と土器集積の分布……12
第６図　土器集積状況実測図Ⅰ……14
第７図　土器集積状況実測図Ⅱ……15
第８図　製塩土器Ⅱ類分布図……16
第９図　第２次調査土層断面図……18
第10図　第２次調査区遺構分布図……19
第11図　第４号竪穴住居址実測図……20
第12図　製塩土器集積群の分布……21
第13図　第３次調査土層断面図……22
第14図　第３次調査区遺構分布図……23
第15図　第１貝塚土層堆積状況実測図……25
第16図　第１～３貝塚土層断面図……26
第17図　土器実測図Ⅰ（古墳時代の土器）……29
第18図　土器実測図Ⅱ（第４号竪穴住居址出土土器）……30
第19図　土器実測図Ⅲ（第４号竪穴住居址出土土器）……31
第20図　土器実測図Ⅳ（第１、２次調査の須恵器Ⅰ）……35
第21図　土器実測図Ⅴ（第１、２次調査の須恵器Ⅱ）……36
第22図　土器実測図Ⅵ（第１、２次調査の須恵器Ⅲ）……37
第23図　土器実測図Ⅶ（第１、２次調査の須恵器Ⅳ）……40
第24図　土器実測図Ⅷ（第１、２次調査の須恵器Ⅴ）……42
第25図　土器実測図Ⅸ（第１、２次調査の須恵器Ⅵ）……43
第26図　土器実測図Ⅹ（第１、２次調査の須恵器Ⅶ）……44
第27図　土器実測図Ⅺ（第１、２次調査の須恵器Ⅷ）……45
第28図　土器実測図Ⅻ（第３次調査の須恵器Ⅰ）……46
第29図　土器実測図XIII（第３次調査の須恵器Ⅱ）……47
第30図　土器実測図XIV（第１、２次調査の土師器Ⅰ）……49
第31図　土師器実測図XV（第１、２次調査の土師器Ⅱ）……50

第32図　土器実測図XVI（第１、２次調査の土師器Ⅲ）……52
第33図　土器実測図XVII（第１、２次調査の土師器IV）……53
第34図　土器実測図XVIII（第３次調査の土師器Ⅰ）……55
第35図　土器実測図XIX（糸切り底土師器）……56
第36図　土器実測図XX（第３次調査の土師器Ⅱ）……57
第37図　土器実測図XXI（第３次調査の土師器Ⅲ）……58
第38図　土器実測図XXII（第１、２次調査土師器甕Ⅰ）……60
第39図　土器実測図XXIII（第１、２次調査土師器甕Ⅱ）……61
第40図　土器実測図XXIV（第１、２次調査土師器甕Ⅲ）……62
第41図　土器実測図XXV（第１、２次調査土師器甕IV）……63
第42図　土器実測図XXVI（第３次調査土師器甕）……65
第43図　土器実測図XXVII（第１、２次調査の黒色土器）……67
第44図　土器実測図XXVIII（第３次調査の黒色土器Ⅰ）……68
第45図　土器実測図XXIX（第３次調査の黒色土器Ⅱ）……69
第46図　土器実測図XXX（貝塚出土土器）……71
第47図　墨書土器実測図……72
第48図　施釉陶磁器実測図Ⅰ……75
第49図　施釉陶磁器実測図Ⅱ……76
第50図　施釉陶磁器実測図Ⅲ……77
第51図　石鍋実測図……80
第52図　滑石製品実測図……81
第53図　製塩土器実測図……99
第54図　製塩土器Ⅰ類実測図Ⅰ……100
第55図　製塩土器Ⅰ類実測図Ⅱ……101
第56図　製塩土器Ⅰ類実測図Ⅲ……102
第57図　製塩土器Ⅰ類実測図IV……103
第58図　製塩土器Ⅰ類実測図Ⅴ……104
第59図　製塩土器Ⅱ類実測図……105
第60図　石錘実測図Ⅰ……108
第61図　石錘実測図Ⅱ……109
第62図　石錘、土錘実測図Ⅰ……112
第63図　土錘実測図Ⅱ……113
第64図　鉛錘実測図……117

第65図　鉄器実測図Ⅰ（釣針）…… 129
第66図　鉄器実測図Ⅱ（釣針）…… 130
第67図　鉄器実測図Ⅲ（刺突具）…… 132
第68図　鉄器実測図Ⅳ（錐）…… 134
第69図　鉄器実測図Ⅴ（刀子）…… 135
第70図　鉄器実測図Ⅵ（刀子、武器）…… 136
第71図　紡錘車実測図Ⅰ…… 137
第72図　紡錘車実測図Ⅱ…… 138
第73図　装飾品、貨幣実測図…… 141
第74図　角釘実測図…… 142
第75図　瓦実測図Ⅰ…… 144
第76図　瓦実測図Ⅱ…… 145
第77図　九州出土の皇朝十二銭各種…… 175

図　版　目　次

図版１　(1)　遺跡の立地と第２次調査区
　　(2)　第２次調査　第４号竪穴住居址
図版２　(1)　第２次調査　製塩土器集積状況
　　(2)　第３次調査　鉄製紡錘車出土状況
図版３　第２次調査　土層断面
図版４　(1)　第３次調査区全景
　　(2)　第３次調査　土層断面
図版５　(1)　第３次調査　遺物出土状況
　　(2)　第３次調査　土錘出土状況
図版６　(1)　貝塚貝類出土状況
　　(2)　貝塚貝類出土状況
図版７　(1)　貝塚貝類出土状況
　　(2)　貝塚ウニ類出土状況
図版８　(1)　柱穴（第３次調査）
　　(2)　柱穴（第３次調査）
図版９　４号住居址出土土器（須恵器）
図版10　４号住居址出土土器（須恵器、土師器）

図版11　須恵器（高台付杯）
図版12　須恵器（杯、皿、蓋）
図版13　須恵器、土師器（甕、壺）新羅式土器
図版14　土師器（高台付椀）
図版15　土師器（高台付椀）
図版16　土師器（杯）
図版17　土師器（杯）
図版18　土師器（皿、托）
図版19　黒色土器
図版20　墨書土器
図版21　製塩土器
図版22　製塩土器Ⅱ類（内面の組織痕）
図版23　滑石製石錘
図版24　土錘
図版25　鉛錘
図版26　鉄製釣針
図版27　鏃、刺突具、刀子
図版28　紡錘車、容器蓋類
図版29　かんざし、巡方、唐銭、皇朝十二銭
図版30　瓦類

付　表　目　次

第１表　土器観察一覧表……83
第２表　土錘・鉛錘一覧表……119
第３表　西海道諸国貢上調、庸、中男作物食品関係……157
第４表　大宰府貢進年料御贄……159
第５表　大宰府厨戸の海河漁民……161
第６表　糟屋郡郷名比定地……161
第７表　大宰府および観世音寺の所領、諸施設……167
第８表　皇朝十二銭出土地名表……172

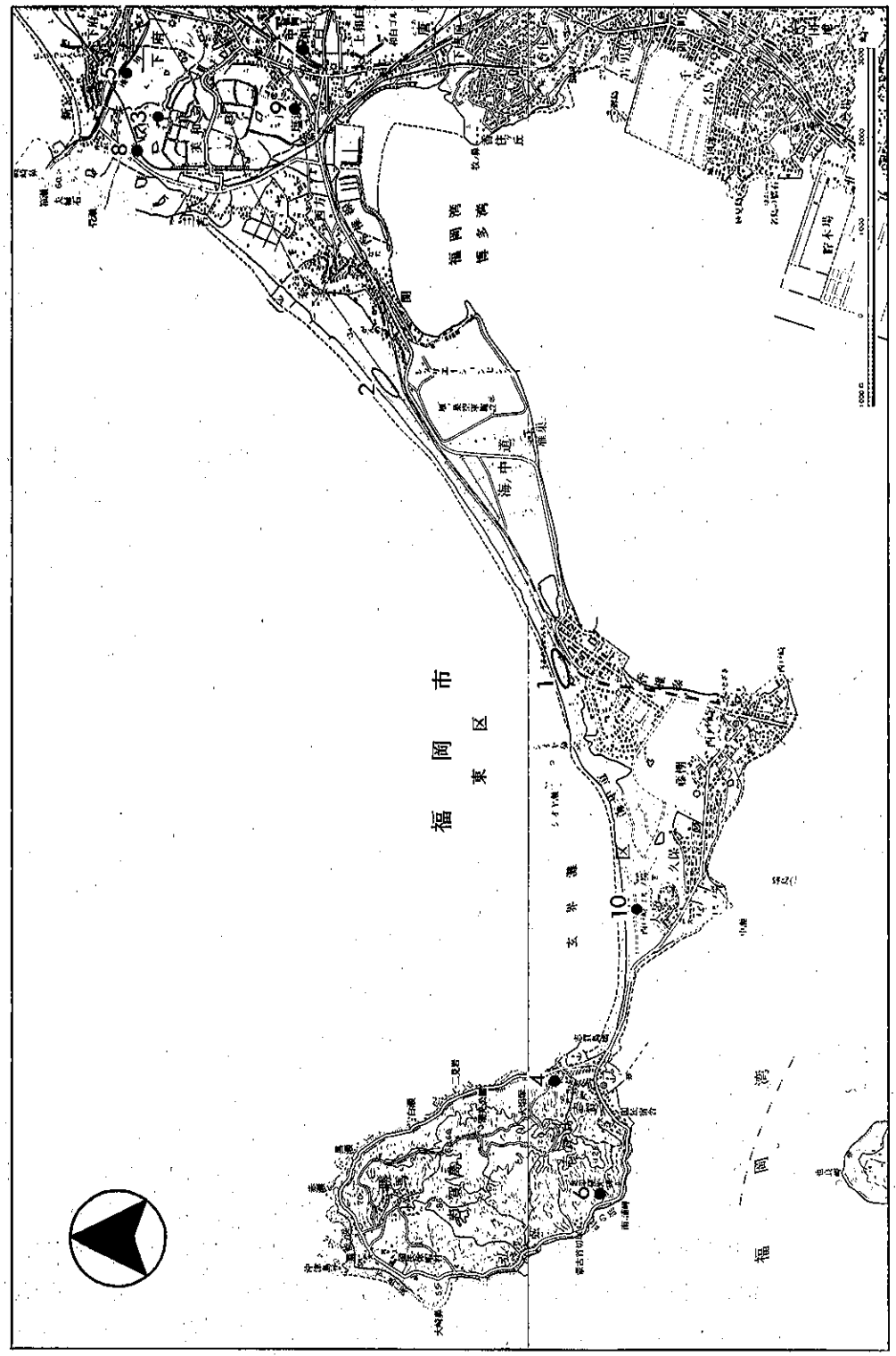
第1章　序　説

1　はじめに

1978年、建設省による海の中道公園の建設が具体化し、福岡市教育委員会文化課は、同敷地内における埋蔵文化財の分布調査を実施し、同敷地内の外海に面する砂丘上に奈良、平安時代の遺物包含層が一部露出する部分を確認した。同地域は海水浴場予定地で、ビーチハウスの建設が予定されており、建設省と文化課との協議の結果、海水浴場の建設によって破壊される可能性のある包含層の露出部分とビーチハウス建設地の発掘および遺跡の範囲確認とその性格を把握するために、3ケ年にわたって発掘調査を実施した。調査は、九州大学横山浩一を調査団長として九州大学、福岡市教育委員会文化課との合同調査である。

調査地区　福岡市東区海の中道（塩屋）
調査期日　一次調査　1979年11月1日～11月21日
　　二次調査　1980年7月11日～9月27日
　　三次調査　1981年8月20日～9月22日

調査団の組織
調査委託者　建設省九州地方建設局海の中道海浜公園工事事務所
調査主体　福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財第1係
　　教育長　西津茂美、教育次長　佐藤孝安、部長　志鶴幸弘、課長　井上剛紀（前）甲能貞行（現）、第1係長　三宅安吉（前）、柳田純孝（現）
事務担当　岡島洋一
調査団長　横山浩一（九州大学教授）
調査員　山崎純男、浜田昌治
調査指導、協力者
　　森貞次郎（九州産業大学教授）　坪井清足（奈良文化財研究所所長）　岡崎　敬（九州大学教授）　近藤義郎（岡山大学教授）　西谷　正（九州大学助教授）渡辺正気（前九州歴史資料館参事）下條信行（平安博物館助教授）石野博信（橿原考古学研究所）　渡辺　誠（名古屋大学助教授）　甲元真之（熊本大学助教授）佐原　真・岩本正二（奈良文化財研究所）　高倉洋彰、森田　勉（九州歴史資料館）後藤　直（福岡市立歴史資料館）　前田義人、奈良崎和典、西戸崎公民館



第1図　海の中道遺跡の位置と周辺遺跡

堺　敏雄、川島ミサオ（西戸崎青年団）

調査補助員　宮内克己、福尾正彦、木下尚子、田崎博之、市橋重喜、横大路俊明、寺師雄二、唐沢洋司、副島康司、石本晶義、矢野佳代子、福本　寛、仁田脇伴代、中山豪、河野マリ、久保智康、田中秋郎、上山義彦、鈴木　威、岩木玲子（九州大学）古庄秀樹、本田秀樹、唐口勉三（山口大学）　小畑弘己、米倉秀紀（熊本大学）前嶋秀張（別府大学）平川祐介、千々和謙策、堀川亮二、片山重明、熊崎農夫博、倉田浩一、沖　一郎、小口幸雄、中野治寿、高瀬広之、角　浩行、堤　孝二、高木裕之、仲田善則、梢野亮司、丸山明宏、荒川　理、足立博子、宮田昌之、小井田佳代（福岡大学歴史研究部考古学班）

2　遺跡の立地と歴史的環境

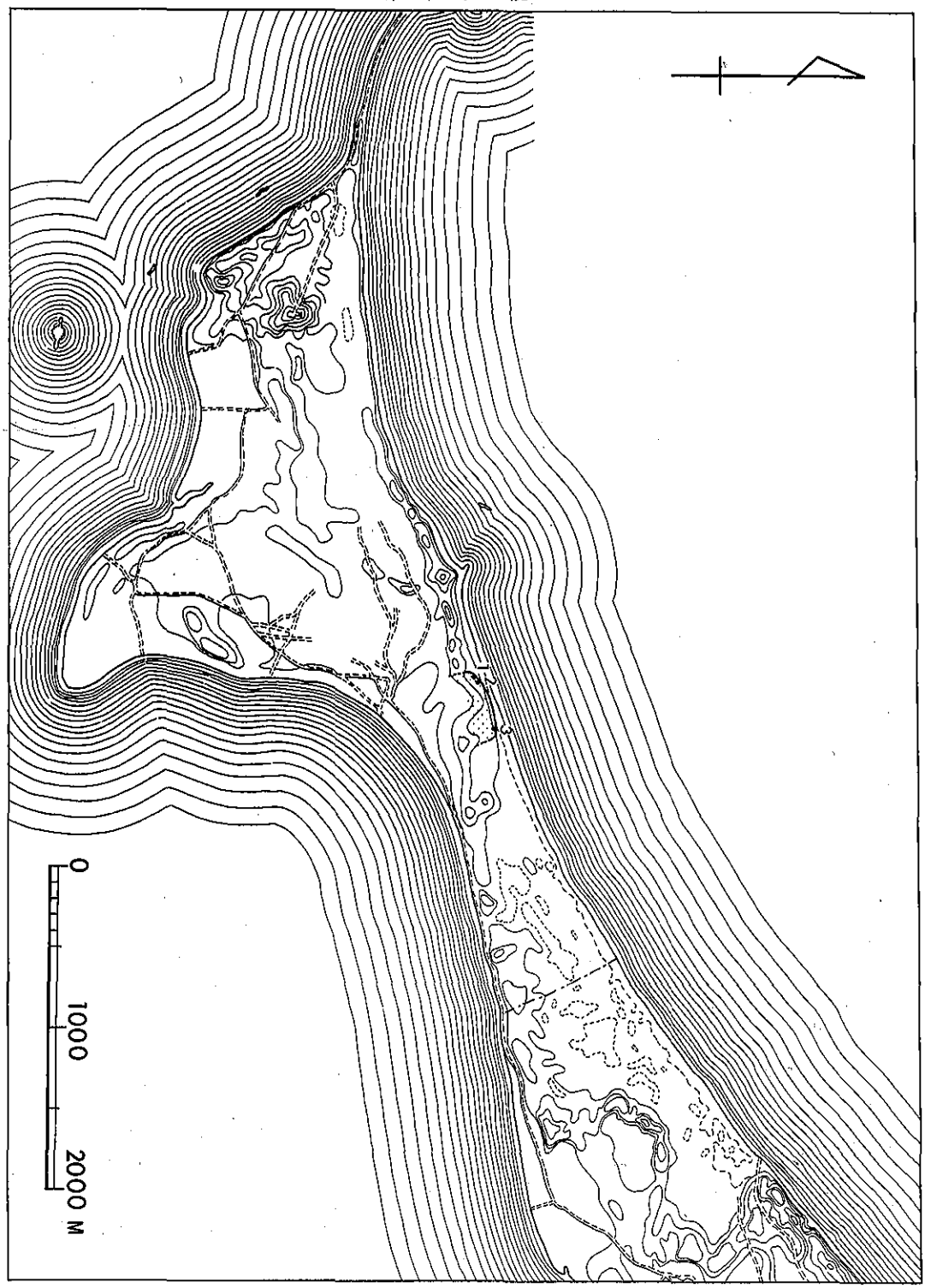
福岡平野の東限・三郡山地の支脈に属する立花山は、標高 376m であり、北方に樹枝状に延びる低平な丘陵を発達させている。その一つで北西に延びる標高60m前後の丘陵は、東区三苫で玄界灘に達し、福岡市と粕屋郡の境であり、海の中道の基部をなしている。

1.海の中道は、三苫から白砂青松の海岸砂丘を10km程延ばして博多湾北方の志賀島を繋ぎ、外海の玄海灘から博多湾を守る自然の大防波堤となっている。しかし、海岸砂丘であるため農業に適さず、江戸時代末期、海の中道中央部の西戸崎の戸数は10戸に満たないものであったとされている[1]。

海の中道遺跡は、この海の中道のほぼ中央部にあたる海の中道海浜公園にあり、シオヤ鼻の東500mに東西400mの幅を持ち、玄界灘に面している。

「此大岳濱及那多濱の中處々に、かはらけ塚とて、土器をうつみたる所あり。」という貝原益軒の『筑前国続風土記』（巻之五　那珂郡下　志賀島）の記事が海の中道遺跡を含むものか判断しかねるが、海の中道の玄界灘沿岸部に土器包含層のいくつかが知見にのぼっていたことは注目に値しよう。

海の中道周辺の遺跡としては、2.奈多砂丘[2]・3.下和白(旧石器時代)[2]や4.志賀海神社入口[3]・5.下府[4]（縄文時代）および夜臼[5]・立花[5]・須郷各塚[2]・細型銅剣鎔笵の出土した志賀島勝馬[6]や6.金印出土推定地（弥生時代）などの外に、立花山北方丘陵上の後期古墳として、中和白[2]・山口池[2]・9.塚原[8]・上和白[2]・上和白ゴルフ場内[2]および 10.大岳古墳[3]が知られている。また、和白塩浜は近世の塩業地であり奈多海岸は砂鉄の海浜鉱床であったが[7]、製鉄遺跡として7世紀後半から8世紀代に措定されている上和白遺跡から製塩土器が出土している[2]ことは、注目すべきことであろう。　（横大路）



第2図 海の中道遺跡の立地

2　遺跡の立地と歴史的環境

註

(1)　志賀町教育委員会「志賀町郷土史年表」1953・和田宗八「第十章藩政時代」（『志賀島の研究』1935）

(2)　柳田純孝・塩屋勝利ほか『和白遺跡群』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第18集）1971

(3)　福岡市金印遺跡調査団「志賀島」1975

(4)　石井忠氏の御教示による

(5)　森貞次郎「夜臼貝塚」（日本考古学協会編『日本農耕文化の生成』1961所収）

(6)　森貞次郎・渡辺正気「福岡県志賀島発見の細型銅剣鎔笵」（『九州考古学』3・4）1958

(7)　三島格「5　福岡平野の製鉄遺跡」（(2)報告所収）

(8)　山崎純男ほか「下和白塚原古墳群―山ノ下支群の調査―」福岡市埋蔵文化財調査報告書第55集　1980

第2章　調査の概要

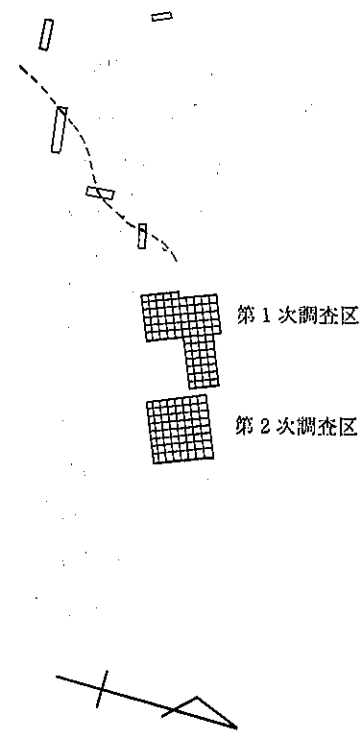
1　分布調査

海の中道海浜公園建設が計画された段階で福岡市教育委員会文化課は公園建設予定敷地が広大な範囲を占めるために、遺跡分布調査を福岡考古懇話会の浜田昌治氏に委託した。浜田氏は敷地全域をくまなく踏査し、従来より知られていた外海に面した砂丘上に露出している包含層を再確認した。包含層は波、風によって露出、崩壊し、多量の遺物が散乱していた。浜田氏は遺物と共にその状況を文化課に報告し、遺跡の自然崩壊を防ぐための処置が必要であることを強調された。これを受けた文化課では、塩屋勝利、力武卓治の両名が、現地におもむき、露出した包含層（約 100㎡）をビニールシートでおおい、固定し、自然崩壊を防ぎ、来たるべき本格調査にそなえた。

2　第1次調査の概要

第1次調査は1979年11月1日～11月21日の約3週間を要した。その間、調査員の不足、天候不順によって調査は困難をきわめたが、多くの方々の協力で無事終了することができた。調査は露出している包含層を中心としてその状況をみるために試掘トレンチを設定した。試掘トレンチの発掘で、包含層は海側から南に向かって傾斜し、その上部に1～4 mの厚さで砂が堆積していることがわかり、包含層がさらに広がることが予想できた。そこで、急遽、機械力を動入し、包含層の上部に堆積する砂を除去し、改めてグリットを設定した。グリットは2 m方眼で地形に合わせて設定し海側から南に向ってアルハベットのA、B、Cを、東から数字1、2、3として呼ぶ。発掘区は南北方向でB列～N列までの25m、東西が5列～17列までの26m、面積は 420㎡ であるが、完掘したのはB～F列の9～16列までで、他は包含層の最上面を発掘したにすぎない。包含層の状態は凹凸が激しく、地区によってマウンド状の高まりが存在し、その部分に遺物が多く、焼土、灰層が多く出土した。特に最初露出していた包含層の部分、B－1区を中心とした部分が最も高く他より約60cm高くなっていた。また同様の高まりは東に約10m離れたE－8区を中心とした地域にも存在し、この包含層の形成過程を暗示するものであった。発掘は砂層であるため土層等の区別が困難で、多くの間違いをおかした。特に包含層中に存在する竪穴住居址についてはそのプランを確認するのがやっとで結果的には住居址の存在を確認したのみである。住居址はいずれも方形プランで、B、C－12、13区、D－13区に一軒、B、C、D－9、10区に一軒、B－5～8区の断面に一軒の3軒が存在する。出土遺物は

奈良時代を中心とする時期のもので、須恵器、土師器が多いが、特に注目すべきものに叩きをもった土師器の甕、内面に布痕をとどめる円筒状の土器があり、その出土状況が部分的に集中堆積する傾向があることから、調査区の東でその状態を露出した。その結果、これらの土器は先にあげた高まりを中心として集中投棄されものであることをつきとめることができた。また、同時に出てくるものに焼土、焼石、灰、炭が多く、スサ入りの炉壁も多量に存在し、土師器も火を受けて変色していて、これらの土器が生産、特に製塩との関連が把握できるのはないかと判断した。また、発掘区南側では焼土面が広がり、炉の存在をうかがわせたが時間の関係で包含層下部の調査にはいたらなかった。発掘調査と同時に進めた試掘調査では、包含層がかなりの広さにわたることもつきとめることができたが、遺跡の性格が、海に関連した生産遺跡であることを確認し一次調査を終了し、2次調査にその結論をまつことにした。

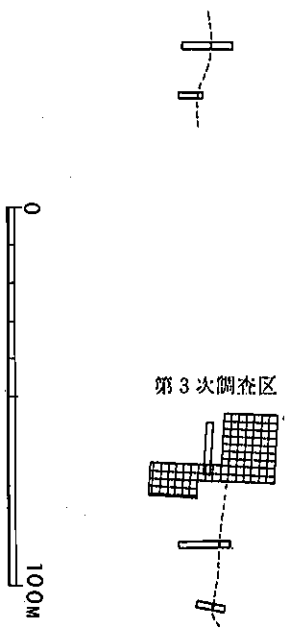


3　第2次調査の概要

第2次調査は1980年7月11日～9月27日の約2ケ月半にわたって実施した。この調査は例年にない長雨と台風にたたられ、予期した成果をうることはできなかった。特に調査中に遭遇した台風では調査区がすべて埋没してしまう事故にあい、完掘できたのは後にトレンチ状に掘ったグリットのみである。

2次調査の発掘区は第1次調査の発掘区の東に隣接して設定した。発掘区のグリットは1次調査のものを延長したものであるが東西の呼び方は1列より東は01、02…とした。第2次調査の範囲は東西が3列～05列の16m、南北がE列～L列の16m、面積256m²である。

第2次調査では包含層上部のみの所見であるが第1次調査と同様にF－1区を中心に高まりがある。第1次調査区の東側の高まりと12m離れている。この高まりを中心に焼石、焼土、製塩土器を中心とする集中堆積部を南北に34ケ所確認し、第1次調査の所見を裏づけたが、図化した段階で台風のため埋設し、



第3図　発掘区の設定

遺物を一部とりあげたのみである。しかし、この上部包含層は1次調査と比較し、時期的にややおくれ、出土遺物には、越州窯青磁器、緑釉陶器、灰釉陶器を多く含み、時期によって、その場所が移動していた状態が把握できた。調査中台風によって埋没した以後は、調査区の再発掘が時間的、経済的にみて続行不可能であるため、3列とL列のグリットを鍵状に完掘し、下部の状態の観察に務めた。土層の堆積は複雑であるが、大きくは下層と上層に分かれ、下層は第1次調査の時期と符合する。上層にはその下面から掘り込まれた柱穴があり、下層では竪穴住居を確認した。竪穴住居から掘立柱への移行を確認できたのは重要な成果であった。竪穴住居はH、I—01～3区に出土したもので拡張して完掘した。住居址は壁の高さは低いが、埋土中より多量の須恵器、土師器が出土し、良好な一括資料として重要である。出土遺物中には先述した青磁器、緑釉陶器、灰釉陶器をはじめ、日常生活用具、土錘、鉛錘、釣針等の鉄製品があり、製塩土器と共に漁業活動が活発であったことを示すものが多く、その性格が普通の漁村と考えるより公的な関連性で出現するものであることをうかがわせるのに充分であった。青銅製の巡方、金銅製のかんざしはそれを証明している。2次調査は悪条件が重なり、充分な成果を得るにはいたらなかったが、製塩に関してはほぼまちがいのない証明を得、九州地区にも古代に土器製塩が存在することを立証した。

また、調査に平行して行った範囲確認調査では、遺跡の範囲が東西400m、南北50m以上、2万㎡以上に広がることを確認した。

4　第3次調査の概要

第3次調査は、1981年8月20日～9月22日の約1カ月をかけて実施した。この遺跡の全体的な把握を目的とし、第1、2次調査区とは別に約200m離れて発掘区を設定した。発掘区は地形に合せたため、グリットの方向は統一していない。グリットは南北をアルファベットで、東西を数字で示す。発掘したのは東西が4～13までの20m×南北がA～Gまでの14mと、砂丘断面の状況をみるために設けた12、13、14列の幅6m×H～N列の14mで、発掘面積は332㎡である。第3次調査区は、時期的にさらに新しくなり、遺跡が全体的西から東へ移動している状況が把握できた。第3次調査で特筆すべきは、L—12、13、14、15区、M—13区に検出した貝塚の存在である。貝塚は4m×6m前後の小規模なもので約50cmの高まりをみせ、それが連続して存在し、この遺跡の包含層形成について示唆を与えるものであった。すなわち、包含層は、このように連続した貝塚が拡散、再堆積によってできたもので、本来は、こうした貝塚が連々と連っていたと考えられる。貝塚の形成状況では海岸部がより古く、南に向って移動している。

遺構としては包含層の下面において柱穴を多数検出した。建造物としてまとまるものは確認

できなかったが、柱穴内には柱根を残すもの4ケ所があった。なお、第3次調査区包含層は満潮時には完全に水面下に位置するようになり、海進海退による海面の移動を考える上で極めて重要である。

出土遺物には注目すべきものが多い。特に年代の目安となるものに皇朝十二銭、唐銭がある。万年通宝1、貞観永宝1、延喜通宝3、開元通宝1で、延喜通宝がもっとも多いことから、第3次調査区の形成年代が10世紀前半～中頃にかけて行われたことを示唆している。このことは、同時に出土した新羅焼の扁瓶が統一新羅末に編年されるもので、他の出土土器の年代観とも矛盾しない。滑石製品（石鍋等）は現時点でもっとも古いもので、石鍋の出現、流通を知る上で重要である。越州窯青磁器をはじめとする陶磁器、緑釉陶器、灰釉陶器の出土は多量で皇朝十二銭とも相まって、この遺跡の性格が公的関連性の上で成立したことを有弁に語っている。

生産活動を示す遺物には、漁業関係のものが多い。漁網錘、あるいは釣り用の錘として使用された石錘、土錘、釣針、刺突具、藻刈りの鉄鎌は、その量も多く、貝塚より検出した多量の漁骨との関連で漁業活動のあり方を具体的に把握できる。魚類の解体、処理用としての刀子も注目される。製塩土器は第1、2次調査に比較するとその数は少なくなるが形の上では大きな差はない。製塩土器Ⅱ類（布痕土器）は検出されず、この土器の時期は限定できる。

なお、包含層中には明らかに混入するかたちで、5～6世紀の遺物がある。製塩土器、タコ壺等の漁撈具が存在し、第3次調査区周辺に本遺跡に先行する漁業村落があったことを示唆している。特に5～6世紀代の製塩土器の検出は博多湾周辺における4世紀代から古代にかけての製塩土器の変遷の概略を把握できたことは、今後、九州における製塩研究に有意義である。

本遺跡は、第1～3次にわたる調査で、遺跡の性格として、単なる漁村集落ではなく、後章でのべるように大宰府に関連した公的性格を有した遺跡であることがほぼ判明した。今後、組織的な調査を経て、保存対策をこうじる必要性があり、それによって解明される問題は大きいものとなろう。

（山　崎）

第３章　調査の記録―遺構―

１　第１次調査の遺構

第１次調査で確認した遺構は住居址３軒および２ケ所に認められるゴミダメ状の高まり（土器の集中堆積部）および焼土面であるが、充分にそれを把握することはできなかった。以下、各遺構別に説明する。

(1)　土層

第４図に示した土層断面図は１が、Ｂ～Ｆ―16区西壁の土層である。この土層は当初より露出していた包含層で、西側の高まりの南北断面の状況を示したものである。Ｂ―16区がこの高まりの最高所で順次南に向って下がっている。Ｉ層はこの高まりの頂部部分のみに存在する層で、土器片、炭を多量に含んだ黒色砂層で、厚さ20cmをはかる。Ⅱａ層は高まりの全域をおおう層で、土器片やわずかに貝類を含む灰褐色砂層で、厚さ10cm前後、Ⅱｂ層はＥ、Ｆ―16区に認められる層で、製塩土器、炉壁片、焼土、灰を含む明灰茶褐色砂層で、後で述べる土器集積の部分にあたる。Ｂ―16区ではⅡａ層の下位に部分的にⅡｃ層、暗茶褐色層、厚さ５cm前後、Ⅱｄ層、焼土炭化物を混入する暗茶褐色砂層、厚さ５cm前後が堆積する。Ⅲ層は淡黄色砂層で厚さ70cm前後、遺物包含層の褐色砂層と黄色砂層の互層で包含層が風によって再堆積して形成したと思える風成層である。Ｃ、Ｄ、Ｅ―16区では部分的に焼土、炭を混じえた混黄褐色砂層、厚さ５cm～10cm前後のブロック層が存在する。Ⅳ層、黄色砂層の基盤層となる。

２はＢ―９～16区南壁の上層である。基本的な層位関係は１と同様である。第Ｉ層は高まりの頂部のみで、第Ⅱ層も高まりより東へは広がらない。第Ⅲ層は全面に広がっているが、この層中に竪穴住居址が切り込まれている。Ｂ―13、14区の住居址は灰色砂層によって埋まり、壁の高さは良好な部分で30cmである。Ｂ―９、10区の住居址は、焼土を混じえた褐色土層で埋まり、埋土は固くしまっている。Ⅲ層上面から切り込まれている。８例より東は包含層の一部を発掘したにすぎないが、Ⅲ層の上部に焼土、炭を混じえた茶褐色砂層が堆積し、一つのたかまりを形成している。

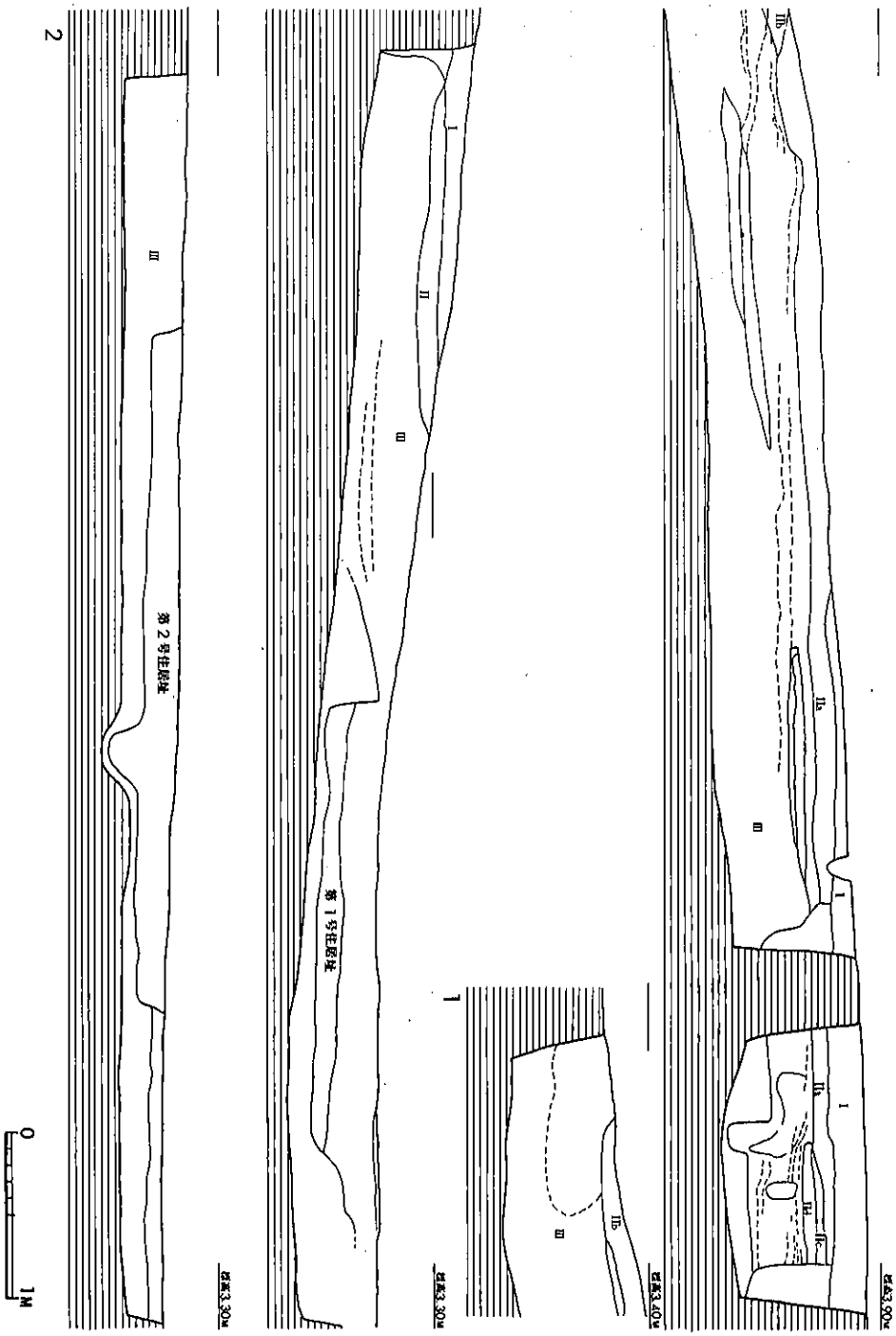
(2)　住居址

竪穴住居址３軒を確認した。いずれも長方形プランを有する。

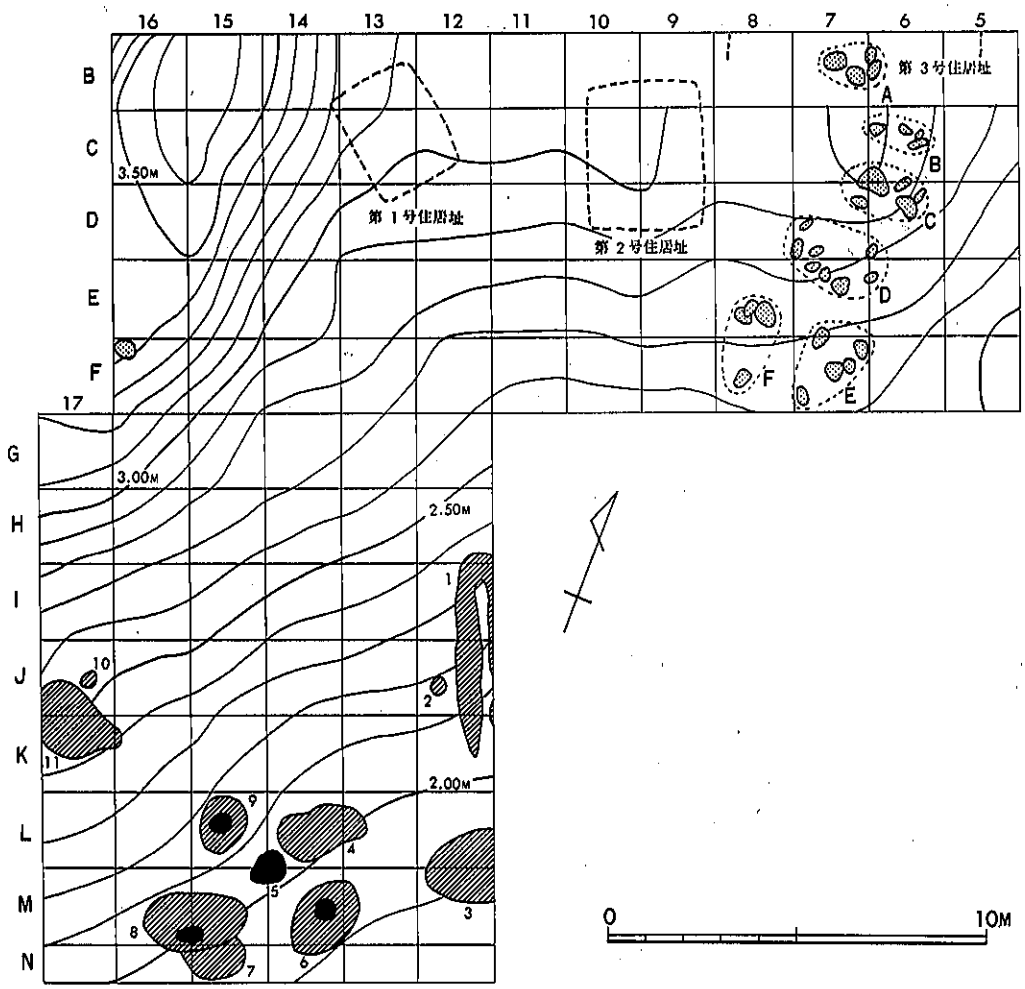
１号竪穴住居址

Ｂ―12、13、14、Ｃ―12、13、Ｄ―13区にわたって検出した住居址である。長軸３ｍ、短軸

1　第１次調査の遺構



第４図　第１次調査土層断面図



第5図　焼土と土器集積の分布

2.5m の長方形プランで、壁の高さ30cm、灰色砂層で埋まり、中より須恵器、土師器、焼石等が出土した。炉址、柱穴については確認できなかった。第Ⅲ層包含層中に切り込まれたもので、床面等に特別の配慮はみられない。

2号竪穴住居址

B－9、10、C－9、10、D－9、10区に検出した住居址である。長軸4m、短軸3mの長方形プランで深さ20cm、Ⅲ層上面から切り込まれている。竪穴内は焼土、炭、灰まじりの砂層で埋まる。平面プランの検出が困難で、固くしまっていたため、作業場ではないかと思い、発掘をとめていたので結果的に住居址の外側を堀ってしまい、かろうじて平面プランを確認した

にすぎない。埋土中からは須恵器、土師器、鉄器、魚骨、ウロコ等が出土した。住居址として廃棄後、その窪みに廃物を投棄したものと考えられる。炉址、柱穴は確認できなかった。床面には特別の配慮はない。

3号竪穴住居址

B－5～8区の北側断面に確認した住居址で、三層の下面から深さ約50cmの掘り込みが存在する。床面近くに黒褐色の砂層が存在し、若干の須恵器、土師器、鉄器、貝類を検出した。断面観察のみで発掘はしていない。

(3)　炉体（焼土）と土器集積の分布

明確な遺構として確認していないが、炉体の存在を示すと考える焼土面の分布は、この遺跡の性格を特徴づけるものである。また、土器集積の分布も一連の作業工程の中で生じたことはその状況から肯首でき、その状態を観察しておくことはこの遺跡を理解する上で必要である。

①炉体（焼土面）の分布（第5図）

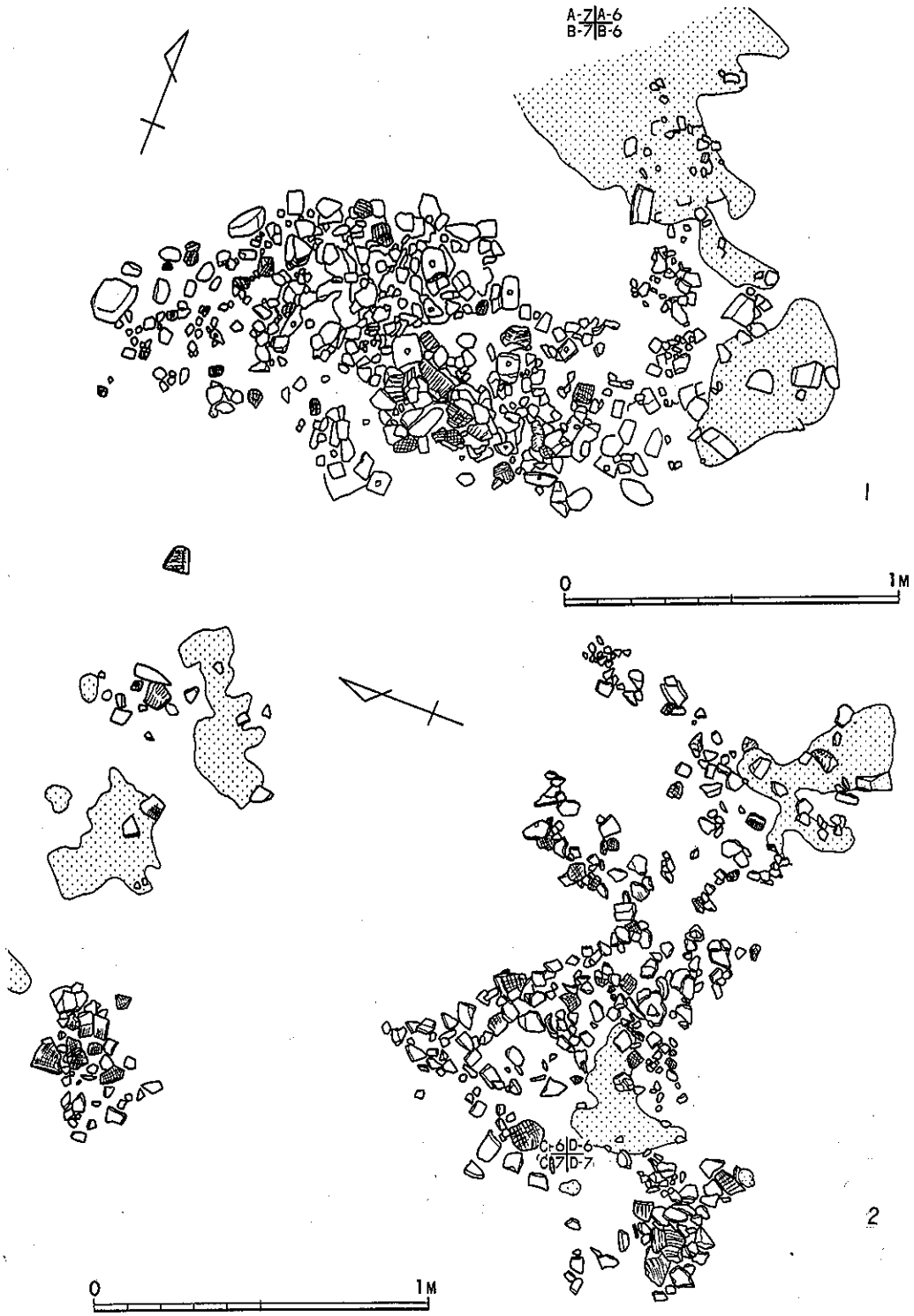
炉体の存在を示す遺物として、炉壁片、焼土塊があるが、これらはいずれも発掘区の東西の2ケ所に存在する高まりを中心として出土し、本来の位置と考えるところに検出した例は少ない。発掘区の南側（H列より南）では包含層の上部を露出したのみで、以下を発掘していないが、その上面に比較的しっかりした焼土面の広がりと灰層、計11ケ所を確認した。これらは表面観察によるかぎりは原位置を保っていると考えられる。以下、それらの概略を記しておく。

1、2号焼土は本来一つのものである可能性がある。1号はU字形をしていて、長軸5.4m、短軸1m以上である。3、4、7、11は焼土を混えた灰層、6、8号は焼土面のまわりに灰層が堆積している。5号は焼土面で径約1m、9は径1.2mの焼土面でその中心部径0.5mの範囲はスサ入りの炉壁部で真赤に焼けている。10は焼土面、いずれも焼土面のまわりに灰層があり、炉体を含めた作業場である可能性がある。

②土器集積の分布と出土状況

土器の集積は製塩土器Ⅰ類を主体とするが、中にはスサ入りの炉壁、焼土をまじえ、その分布は東西の2ケ所のマウンド状の高まりと密接な関係がある。マウンド状の高まりの形成過程を示唆している。西側の高まり部分は発掘の失敗によって土器の集積状況は把握できなかったが、断面観察等から土器集積の存在が推測できる。東側の高まりの頂部を中心として南北に細長い10m×4mの範囲に土器集積の分布が認められる。土器集積部は大きくはA－Fの6群に分けられ、その群の中でさらに3～4の小群に分けることが可能である。この小群と群は廃棄に際する一単位を示し、この群の分析から、一度に使用された製塩土器の単位が抽出できる可能性がある。

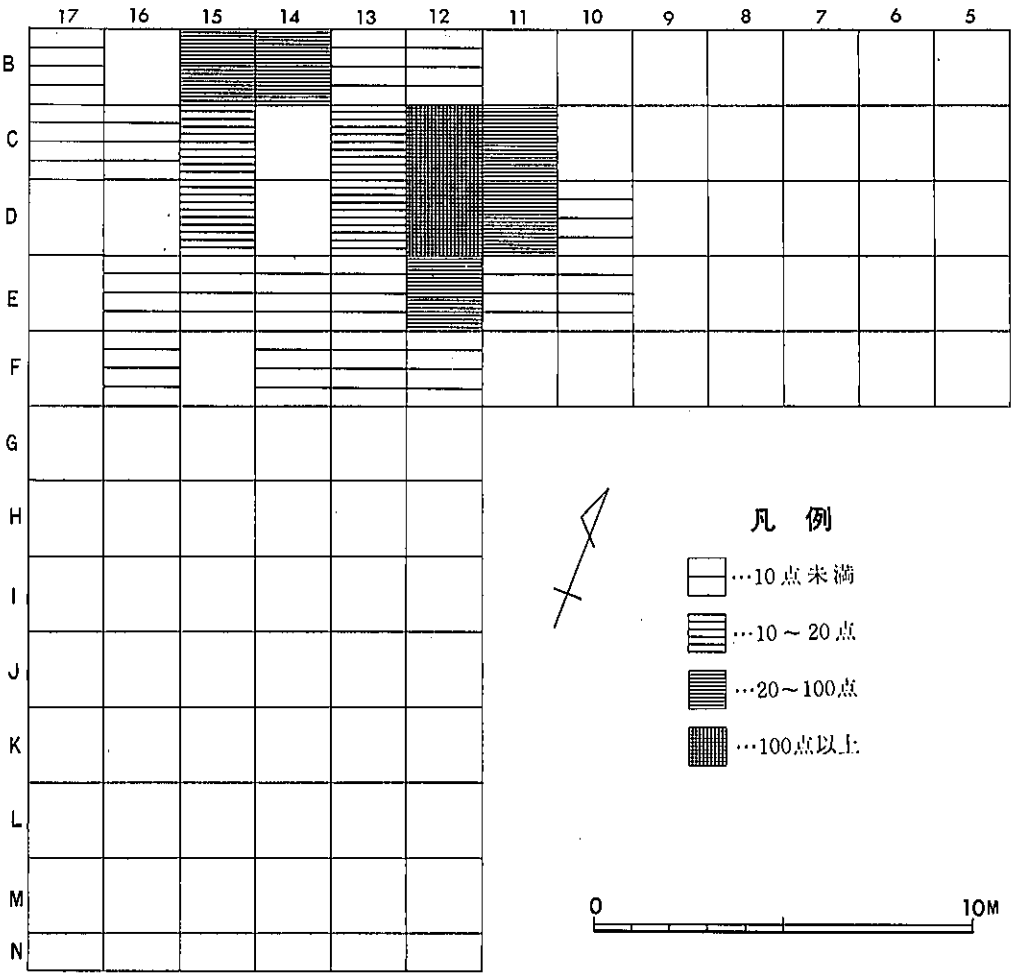
第6図1はA群、2はB、C群、第7図1はD群、2はE群の出土状況である。この中で、



第6図　土器集積状況実測図Ⅰ

1　第1次調査の遺構

第7図　土器集積状況実測図Ⅱ



第8図　製塩土器Ⅱ類分布図

特にD群はその小群が明らかな前後関係をもって連続的に堆積していったことがうかがえる。

(4)　製塩土器Ⅱ類の分布（第8図）

製塩土器Ⅰ類の出土状況およびその分布は集積状態でマウンド状の高まりに集中するのに対し、Ⅱ類は破片が小さく、内面の布痕は水洗後でないと判明しないため、その出土状況が集中するものかどうかは明らかにできなかった。各グリットにおけるⅡ類土器の破片点数を集計し、グリット上に表わしたのが第8図である。Ⅱ類土器の分布はⅠ類土器とは全く異った分布を示し、Ⅰ類土器の集中する東西のマウンド状の高まりの間にその分布範囲があり、特にC―12区

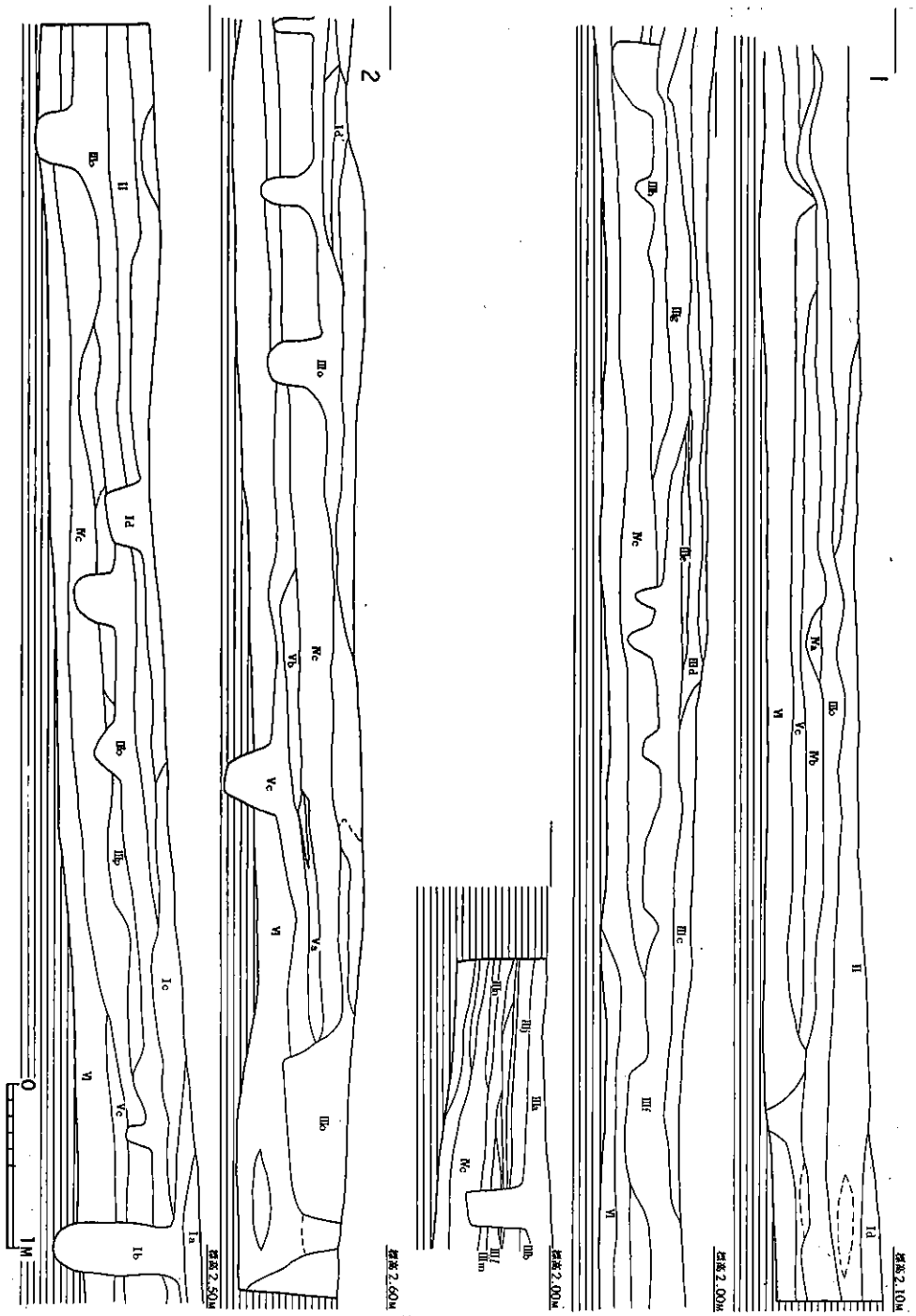
では283点、D－12区では122点が出土している。このように製塩土器Ⅰ類とⅡ類の間には形体状の差異はもちろんのこと、出土分布の違いにも明瞭な差異があり、両製塩土器の使用目的の違いを示唆するものがある。特に生産遺跡である本遺跡内においての違いは重要であろう。(山　崎)

2　第2次調査の遺構

等2次調査で検出した遺構は少い。台風により埋没したのはL列と3列と第4号竪穴住居址のみである。上層より切り込まれた柱穴があるが、建物として組み合うものはない。製塩土器1類の集積状況は第1次調査と同様に高まり部に集中している。

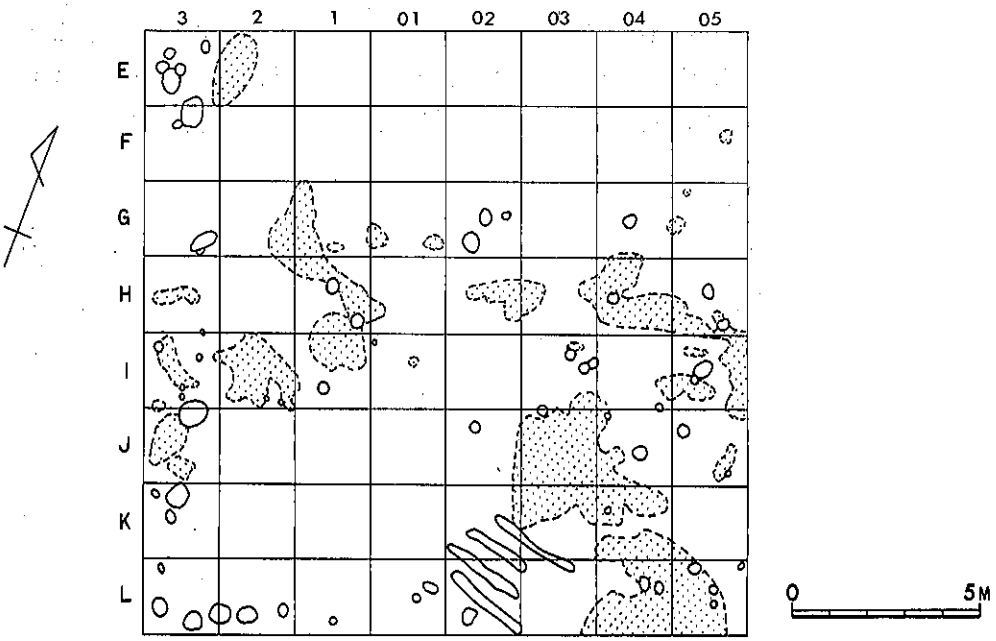
(1)　土層

第9図に示したのは、第2次調査区の土層断面である。1はL列南壁、2は3列西壁の土層である。層位は第1次調査で観察したのと同様、その堆積状況は生産活動における廃棄物の連続した遺棄を示し複雑である。Ⅰ層は黒色砂層を基本とする層で遺物量も多い。Ⅰa層暗褐色砂層、土器片を多く含みしまる。厚さ10cm。Ⅰb層茶褐色砂層、厚さ10cm前後。柱穴が掘り込まれる。Ⅰc層暗茶褐色砂層で焼土を含む。厚さ10～30cm。Ⅰd層黒褐色砂層で、土器集中と一致し、焼土を多量に含む。厚さ20cm前後。Ⅱ層は灰褐色砂土器小片、灰を含むが量的にきわめて少い。Ⅲ層は黒灰色砂層を基本とする層で、遺物量も多く、柱穴等の掘り込みもこの層の下面からが多い。Ⅲa暗灰褐色砂層。厚さ10cm。下面から柱穴が掘り込まれる。Ⅲb層淡茶褐色層。厚さ10～20cm。Ⅲc層暗灰褐色砂層。木灰を多く混入し遺物が多い。厚さ10cm前後。Ⅲd層暗茶褐色砂層（木炭、粘土、炉壁片、焼土を多量に含む。）Ⅲe層粘土分、木炭を多く含む暗茶褐色砂層。厚さ5cm前後。Ⅲf層　暗灰褐色砂層。遺物が多い。厚さ10～20cmで、下面は凹凸が激しい。Ⅲg層　暗灰褐色砂層。やや粘質で厚さ10～15cm。Ⅲh層　暗灰褐色砂層。やや明るい。焼土を混入し下面にピット状の掘り込みがあり、Ⅲℓ、Ⅲm層を切っている。Ⅲi層焼土層。厚さ3cm前後。Ⅲj層　暗灰褐色砂層。粘土を含む。厚さ5cm前後。Ⅲk層　暗灰褐色砂層。焼砂を含む。厚さ3cm前後。Ⅲℓ層　暗黄白色砂層。厚さ10cm前後。Ⅲm層　暗黄白色砂層。粘土を含む。厚さ8cm前後。Ⅲn層　暗黄白色砂層。木炭片を含む。厚さ4cm前後。Ⅲo層　黒灰褐色砂層。厚さ10～40cm。下面には柱穴等の掘り込みが多い。Ⅲp層　暗黄褐色色砂層。焼砂を多く含み赤味を帯びる。厚さ10cm前後。Ⅳ層は黄白色砂層を基本とする層で、無遺物の間層となっている。Ⅳa層　暗黄白色砂層。部分的な凹み。厚さ10cm前後。Ⅳb層　黄白色砂層（やや暗い）。厚さ10cm前後。Ⅳc層　黄白色砂層。厚さ10～30cm。Ⅴ層は暗黄白色層を基本とする層下部の遺物包含層である。Ⅴa層　暗黄褐色砂層。赤みをおびていて、焼けた層でややしまる。厚さ10cm前後。Ⅴb層　暗黄白色砂層。土器片、木炭片を含み、厚さ10cm前



第9図　第2次調査土層断面図

2　第２次調査の遺構



第10図　第２次調査区遺構分布図

後。Ⅴc層　暗黄白色砂層。遺物を多量に含む。下面に柱穴あるいは住居址の切り込みがある。厚さ10cm前後。Ⅵ層は基盤層である黄白色砂層となっている。第２次調査区の層位は以上の如くであるが、全体的にみた土層堆積は上層で西から東へ移動している。

(2)　遺構の分布

第２次調査の遺構は少く、若干の柱穴と第４号竪穴住居址があるのみである。柱穴はⅠ層を発掘した段階で表面的におさえたものと、L列３列の発掘したものであるが、いずれも建物として組み合うものはない。柱穴の掘り込みは上層（Ⅰ～Ⅲ層）の各層より掘り込まれたもので、時期的に若干の開きがある。柱穴の周囲には焼土層、焼砂の分布があるが、これについては、他所より運ばれたものと現位置を保つものがあるが、その判別は困難であった。下層（第Ⅴ層）の下面に検出した竪穴住居址は次節でのべるとうりである。下層の竪穴住居址から上層の掘立柱の建物への移行を把握できたのは大きな成果であった。

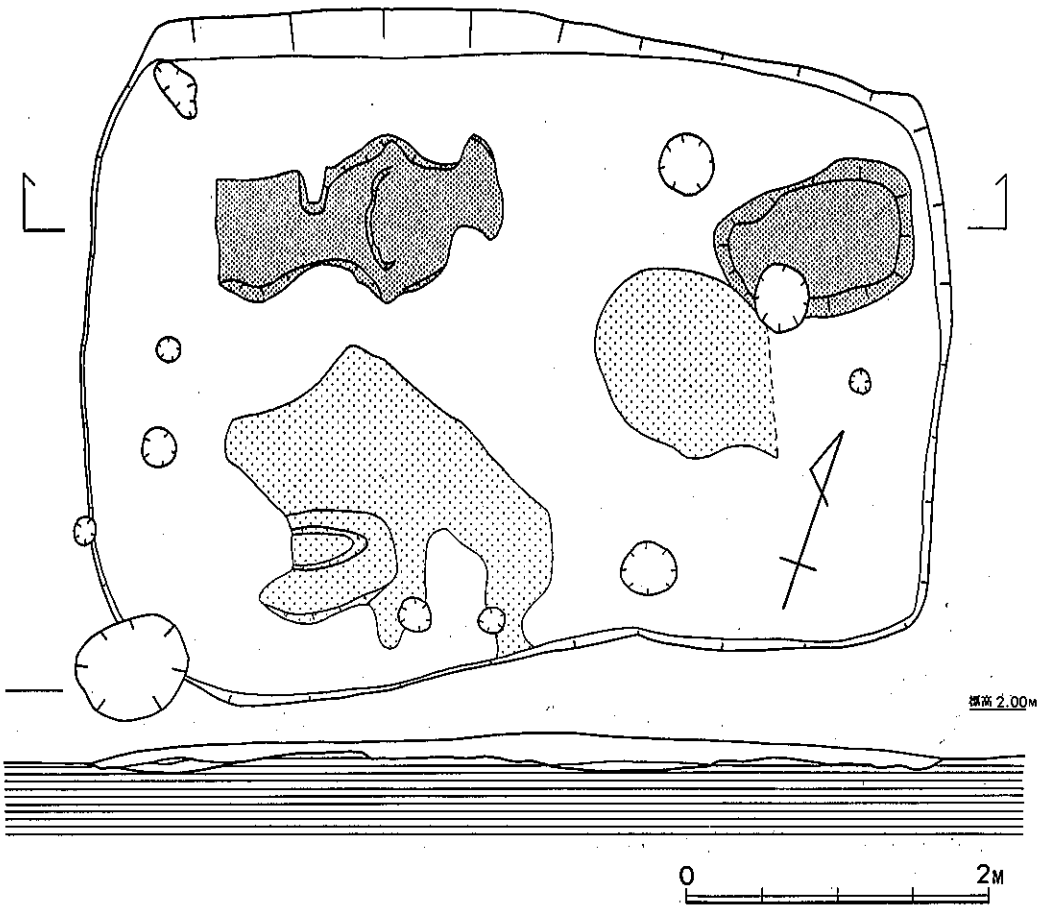
(3)　第４号竪穴住居址（第11図）

第４号住居址は第Ⅴ層の下面に検出した竪穴住居址で、その範囲はG.H、I－１～3.01区におよんでいる。長軸 5.75m短軸 4.5mの不整長方形プランを有する。掘り方は浅く最も深い部

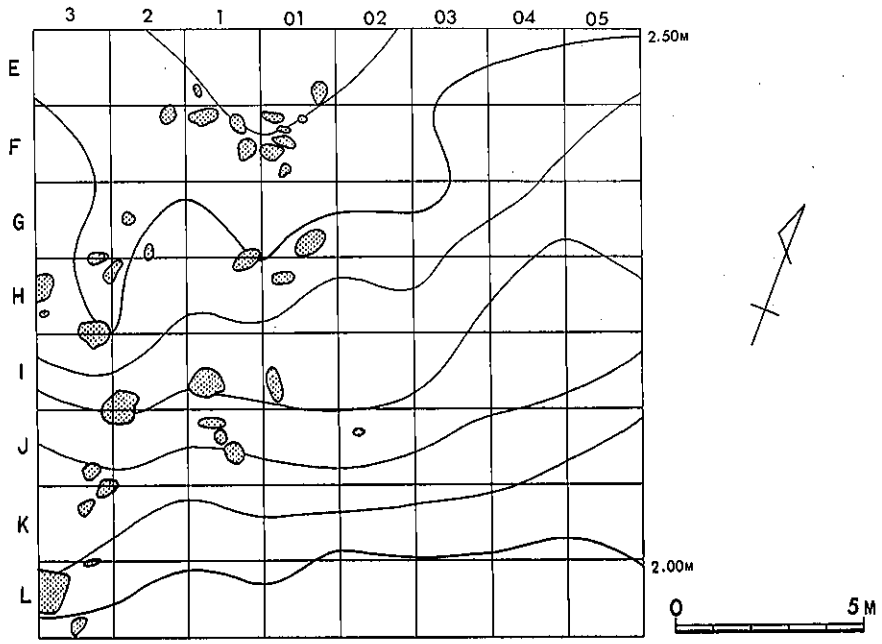
分で10cmをはかり、かろうじてそのプランがわかる程度である。床面には柱穴は検出できなかった。図中の柱穴は上層よりの掘り込みである。床面には火を受けた部分がひろがり、北西部には粘土、石を使用して炉体状のものが存在したが、使用される以前にこの住居址が放棄されている。埋土中には多量の須恵器、土師器、鉄器等があり、一括遺物として重要である。

(4)　製塩土器集積の分布

製塩土器Ⅰ類は第1次調査で検出したのと同様に、1ケ所に集積されて、使用における単位あるいは放棄する単位を示すものである。今回の調査では、調査区の西半部にその分布を確認した。その分状状況は第12図に示すとうりであるが、この土器が集中放棄される位置は他より高まりをみせ、炭、灰、焼石、炉体等も多く、一種のゴミダメ状をなしていたと考えられる。



第11図　第4号竪穴住居址実測図



第12図　製塩土器集積群の分布

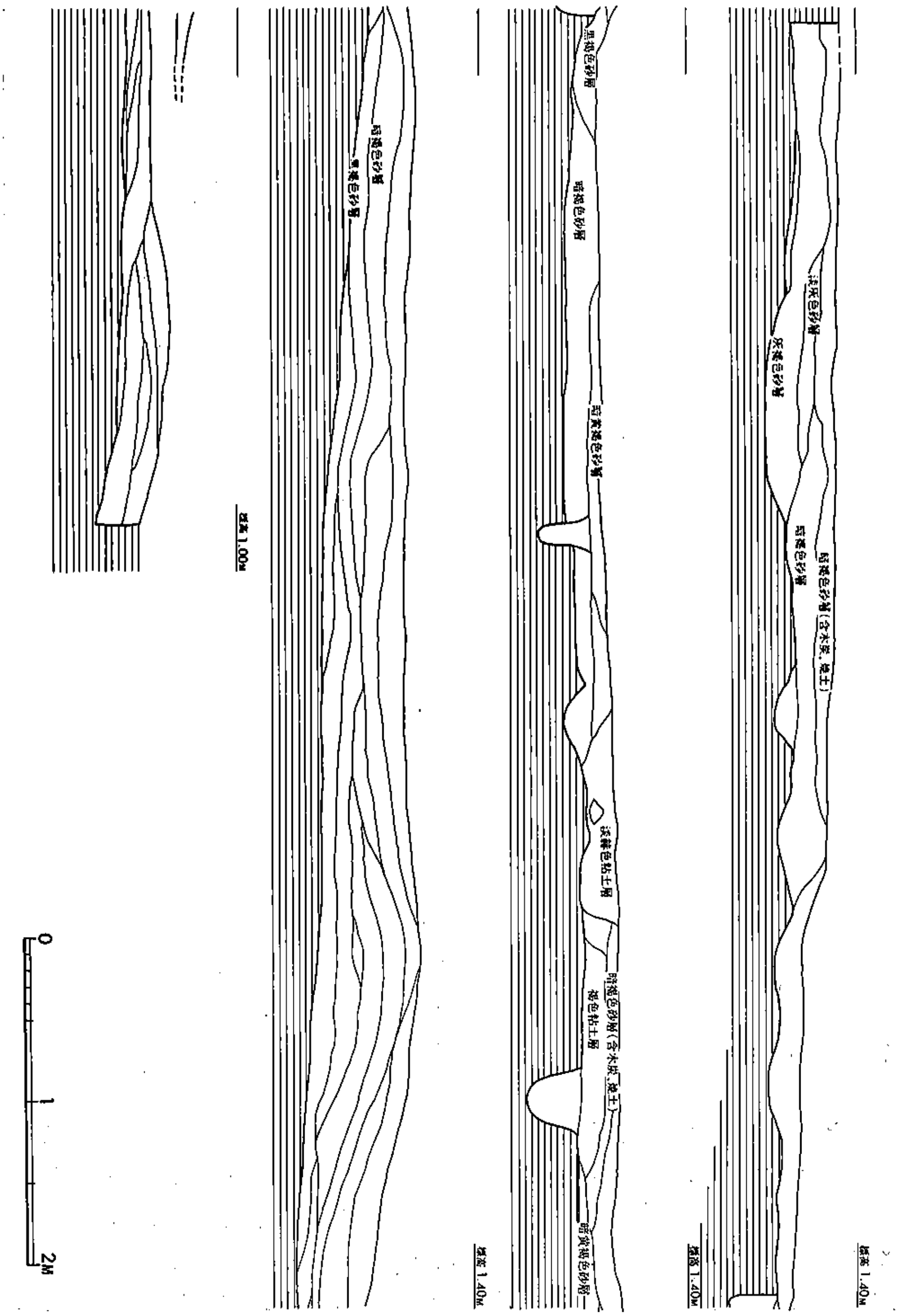
集積状態を露出した時点で台風にあい埋没したことは残念である。　　（山　崎）

3　第3次調査の遺構

3次調査で検出した遺構は建物の柱穴多数と貝塚3ケ所である。焼土層、焼砂面を多く確認したが、遺構として把握することは困難であった。

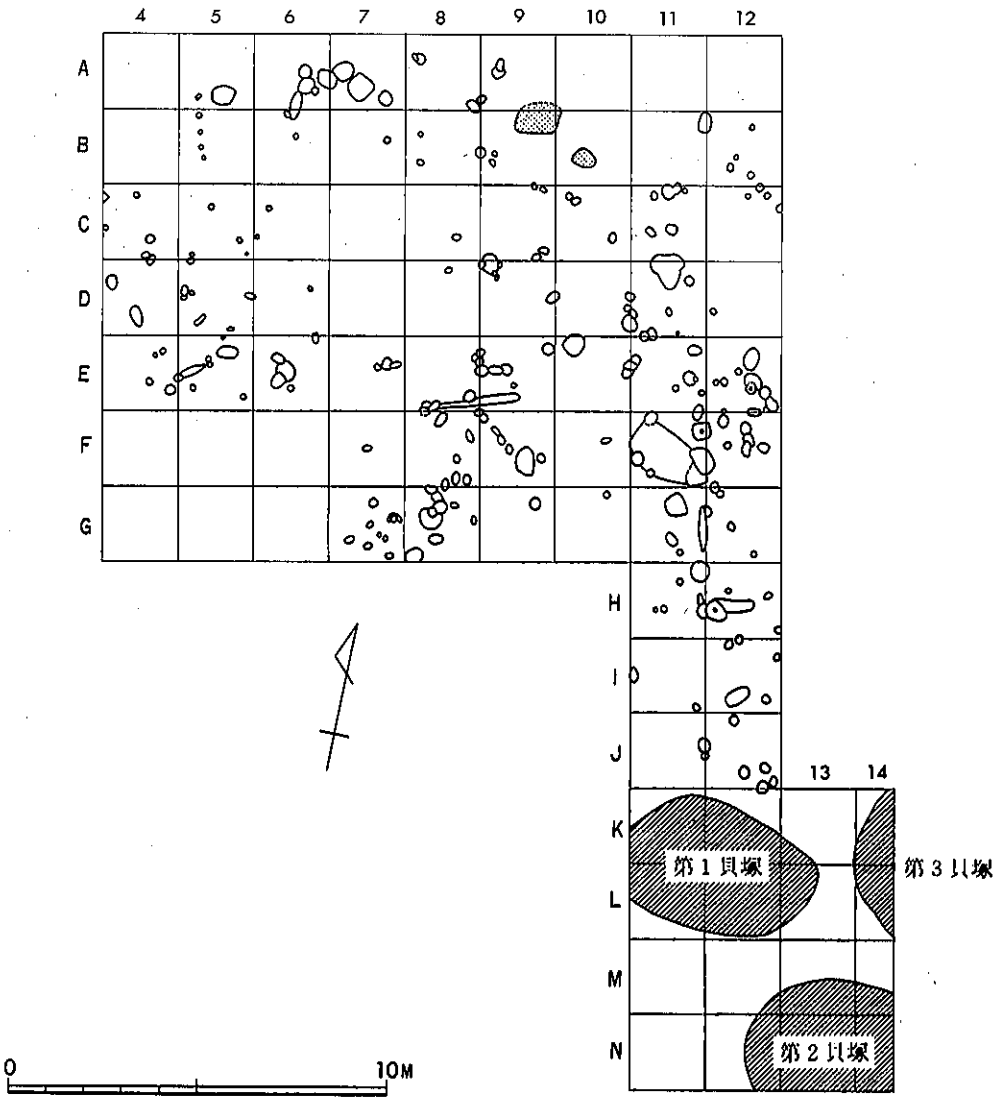
(1)　土層

第13図に示したのは第3次調査区東壁の土層断面である。基盤層である白色砂層は北の海側が高く南にむかって序々に下っている。大潮時の満潮では包含層は完全に海面下に位置する。包含層には、焼土、焼砂、灰、炭、焼石を多量に含み、この層のできた成因がうかがえる。層は広く分布するものは少く、途中でとぎれるものが多い。後にのべる貝塚の堆積が、風等によって拡散再堆積したものとみることができる。層の中でも貝類、魚骨を残しているものがあり、このことを裏づけている。各層の堆積は、海側から順次南に向って堆積したことがうかがえる。また、部分的ではあるが、この包含層の上に約50cmの間層をはさんで包含層の存在する部分がある。これにも、同様の遺物が含まれており、この層は他所より移動したものと考えら



第13図　第３次調査土層断面図

3　第３次調査の遺構



第14図　第３次調査区遺構分布図

れる。

(2)　遺構の分布

遺構は柱穴のみで、その形もいろいろで大小がある。このうち４ケ所の柱穴には柱根が残存していた。方形に面とりしたものであるが、中には丸太のままのものもある。柱穴は発掘区の全面に広がるが建物として組み合うものはない。

(3) 貝塚

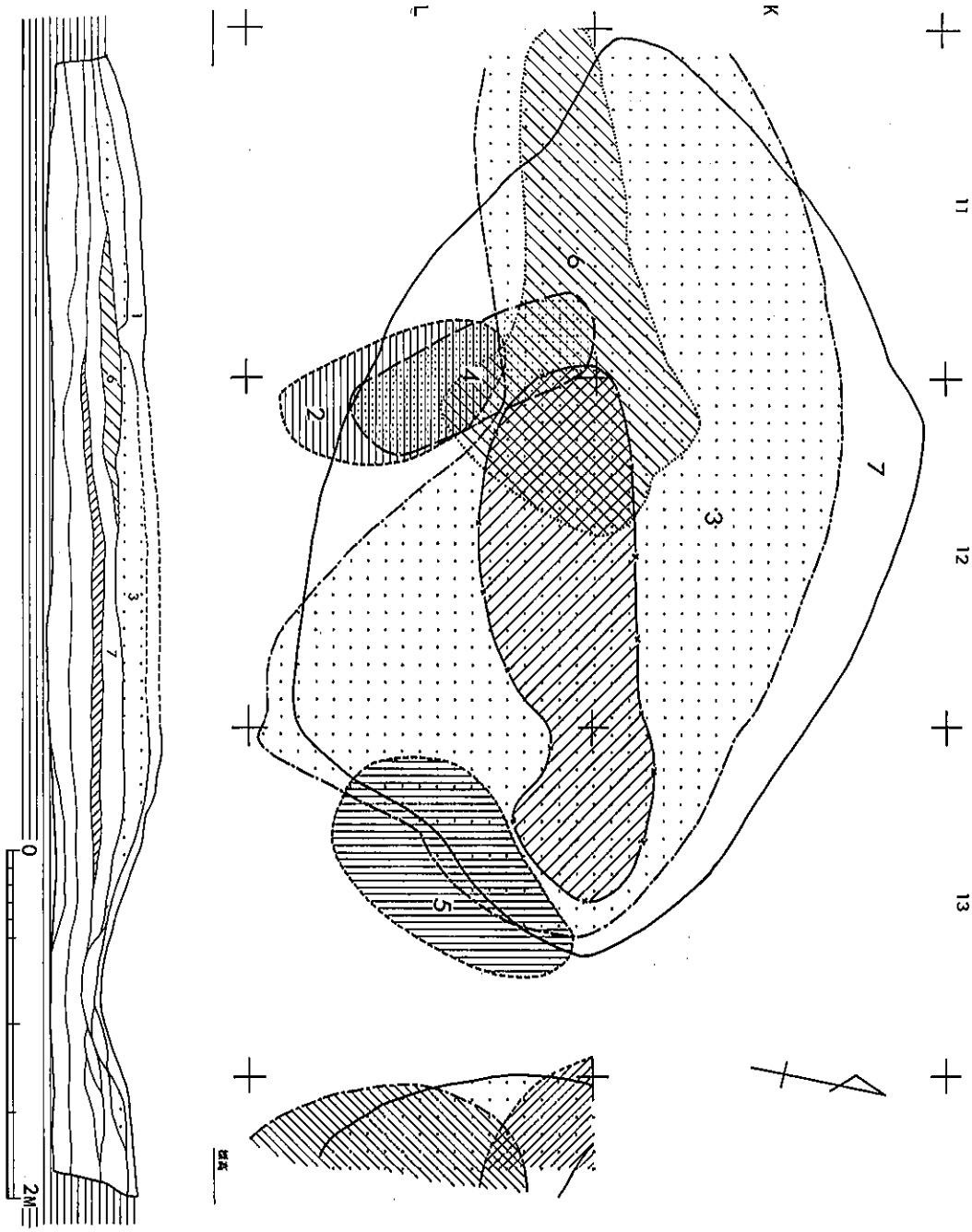
第3次調査で、調査区の東南部K—11～13、L—11～13、M、N—12～14、K・L—14区に保存状態の良好な3ケ所の貝塚を検出した。貝塚は互いに裾を接するように連たっている。径5m前後の小規模なもので塚状に50cmほどの高まりをみせる。完掘したのは第1貝塚のみで、第2、3貝塚はその一部を発掘したにすぎない。貝塚からは、貝類の他、多量の魚骨、ウロコ等自然遺物と土師器、須恵器、黒色土器、青磁器、緑釉陶器、製塩土器I類、石鍋などが出土する。以下、各貝塚について説明を加える。

① 第1貝塚

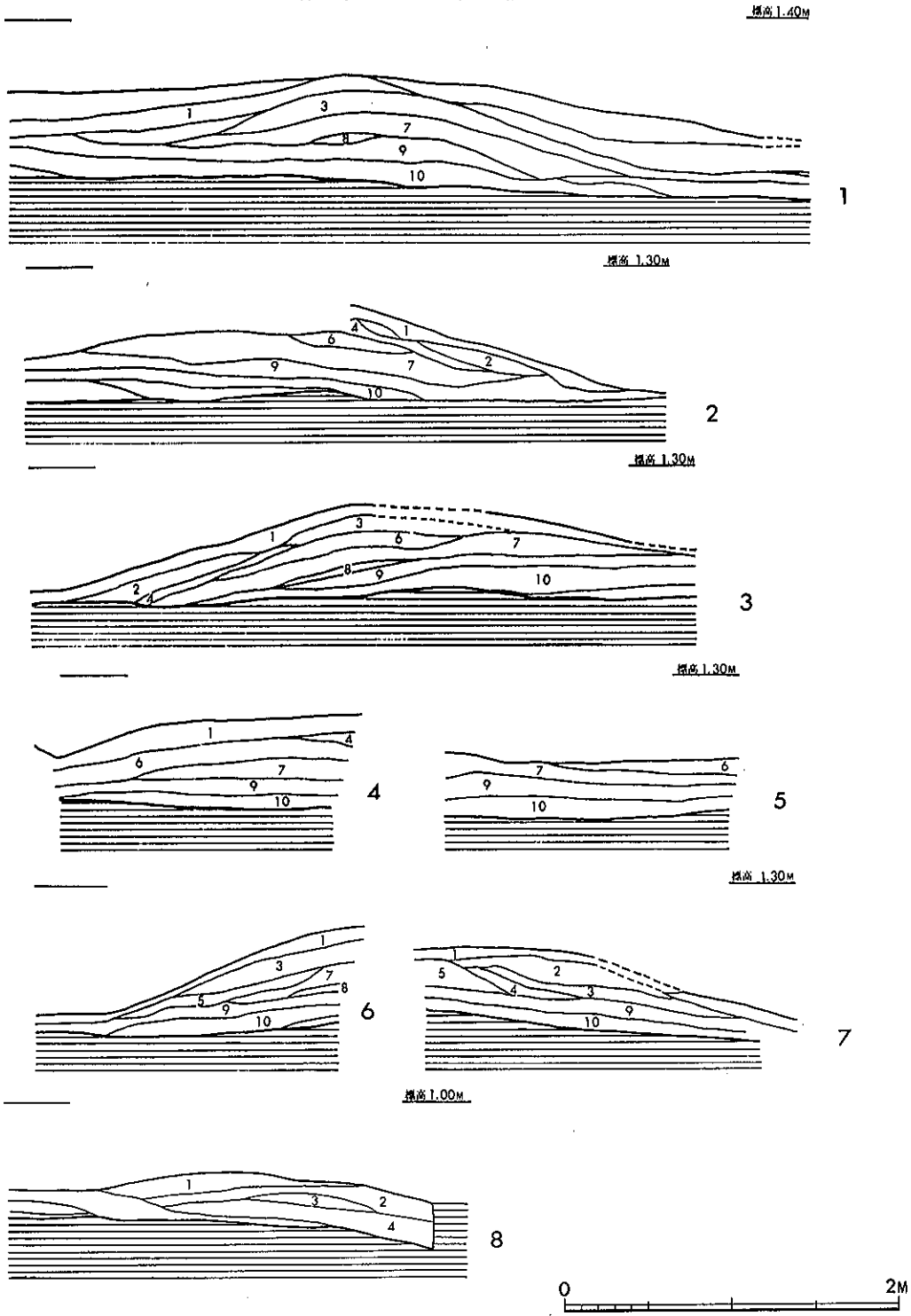
K—11、12、13、L—11、12、13区にまたがる貝塚で長径5.4m、短径3.8mの楕円形をなし、高さ約50cmのマウンド状に堆積している。層位は9層に分離できる。上部より第1層、貝塚の表面をおおう層で、炭をまじえた褐色砂層、厚さ10cm前後、第2層、炭、貝を含むやや粘質の混貝砂層、厚さ10cm前後、第3層、炭を多量に含む黒色砂層、厚さ10cm前後、第4層、灰を多量に含み、粘質の淡赤色灰層、厚さ5cm前後、第5層、灰を多量に含み、粘質の淡赤色灰層、厚さ10cm前後、第6層、炭を多量に含み、第3層より黒色が強く、砂粒がやや大きい黒色砂層、厚さ10～15cm前後、第7層、若干の灰と炭を混入し、やや粘質をおびた混貝砂層、厚さ20cm前後、第8層、灰を含む黄灰色粘質土層、厚さ10～20cm前後、第9層、上部に貝を混入した褐色砂層、厚さ15cm前後、第10層、無遺物層である褐色砂層（基盤層）となっている。なお、この貝塚をおおうのは白色砂層（無遺物）で、さらにその上部に第1層よりややうすい色をした褐色砂層が20cm前後の厚さで堆積するが、この層はこの貝塚形成後に堆積したことは明らかである。

次に、この貝塚の堆積状況についてみてみよう（第15図）。第10層は基盤層であり、その上部の第9層は遺物包含層であるが、この貝塚とは直接的な関連はない。ただし、この9層のおわる地点（端）に貝塚の形成がはじまることは、この遺跡の包含層形成過程を考える上で、きわめて示唆的である。第8層はこの貝塚の形成の最も最初の層でK—12、C—12区の境に3m×1mの楕円形に廃棄された層である。第7層はこの貝塚の基底をなすもので、この貝塚の規模を限定している。第6層はK—11、L—11区の境を中心として第7層の上に3m×0.8mの楕円形に廃棄された層である。第5層は貝塚の東南部、L—13区の第7層の上あるいはその端に廃棄された層である。第4層はL—11、L—12区の境を中心として第6層、第7層の上に1.5m×0.5mの楕円形に廃棄された層である。第3層は第7層以降、部分的な廃棄による堆積であったが、第7層と同様に大きく貝塚をおおう層である。第2層はL—11、L—12区の境を中心として第4層、第7層の上に1.3m×0.7mの楕円形に廃棄された層である。第1層は貝塚をおおう層であるが、直接的に貝塚の形成層ではなく、形成後に堆積しなものである。

3　第3次調査の遺構



第15図　第1貝塚土層堆積状況実測図



第16図　第1～3貝塚土層断面図

3　第3次調査の遺構

以上のような貝塚の堆積過程は、その廃棄にあたって方向性を示唆しており、本貝塚の場合は第6、5、4、2層の廃棄状況からみて、南側より投棄したと考えることができる。貝塚を広くおおう第3層と第7層の形成は、後章の自然遺物との関連で季節的に春季と考えられ、生産との関連で興味深い。なお、第7層にはサンゴ（？）が焼かれて多量に存在し注目される。

本貝塚を形成する土層は、焼土、灰層、炭まじりの砂層、および混貝砂層の互層からなり、この廃棄物が単に生活によって生じたものではなく、生産活動の処理的過程の中で生じたことは、おびただしい魚骨、ウロコ等の自然遺物や連なる他の貝塚からも肯首でき、本遺跡の性格を特徴づけるものである。

②　第2貝塚（第16図8）

第1貝塚の南、M―12、13、14、N―12、13、14区に検出した貝塚であるが湧水が激しくその一部を発掘したにすぎない。貝塚は第1貝塚第1層が堆積した以後に形成されたもので、第1貝塚第1層の南端部に形成されたもので、第1貝塚同様4m×3m前後の小規模なもので高さ20cmの高まりをみせる。この貝塚の層位は，第1層、炭まじりの黒色砂層、厚さ10cm前後、第2層、貝、サンゴが焼けたものを混入する混貝砂層で、砂の粒子はややあらい。厚さ10cm前後。第3層は焼土、灰層からなる赤褐色灰層。厚さ5～10cm。第4層、混貝砂層で厚さ10～20cm、ウニの棘が目立つ。自然遺物等については第1貝塚と同様である。

③　第3貝塚（第15図）

第1貝塚の東に隣接して検出した貝塚でK―14、L―14区より東に広がるが全体の規模は確認していない。第1貝塚と約0.6m離れているが、層位的にもその前後関係は不明、横に並列すること、貝塚をおおう第1層が第1貝塚と同一層であることからほぼ同時期の形成である可能性が強い。高さ30cmの高まりをみせる。貝塚の層位は、第1層が炭を含む混貝砂層で厚さ20cm前後、第2層は焼土、灰層よりなる淡赤色灰層、厚さ10cm前後、第3層は黄褐色砂層、厚さ10cm前後、第4層は第2層同様に焼土、灰を含む灰層である。厚さ20cm前後、第5層は褐色砂層、第6層は黄褐色砂層で共に部分的に介在し、厚さ10cm前後。基底部は第1貝塚第9層と同一である。本貝塚の堆積状況も第1貝塚同様に南から投棄された状況を示している。

以上が第1～3貝塚についての概略であるが、この貝塚を形成する貝類、魚骨をはじめとする自然遺物については後章において述べるので本節ではふれない。　　（山　崎）

第4章　調査の記録――遺物Ⅰ（容器）――

本章で扱う容器類には、大別して、土器類、施釉陶磁器類、滑石製品の3種類がある。土器類は、須恵器、土師器、黒色土器が主体で一部古墳時代の土師器若干を含む。施釉陶磁器には、青磁器、白磁器、緑釉陶器、灰釉陶器がある。滑石製品には、石鍋および蓋類がある。なお、製塩用の土師器甕は、その使用目的の違いが明確なので、次章において説明する。

1　土器類

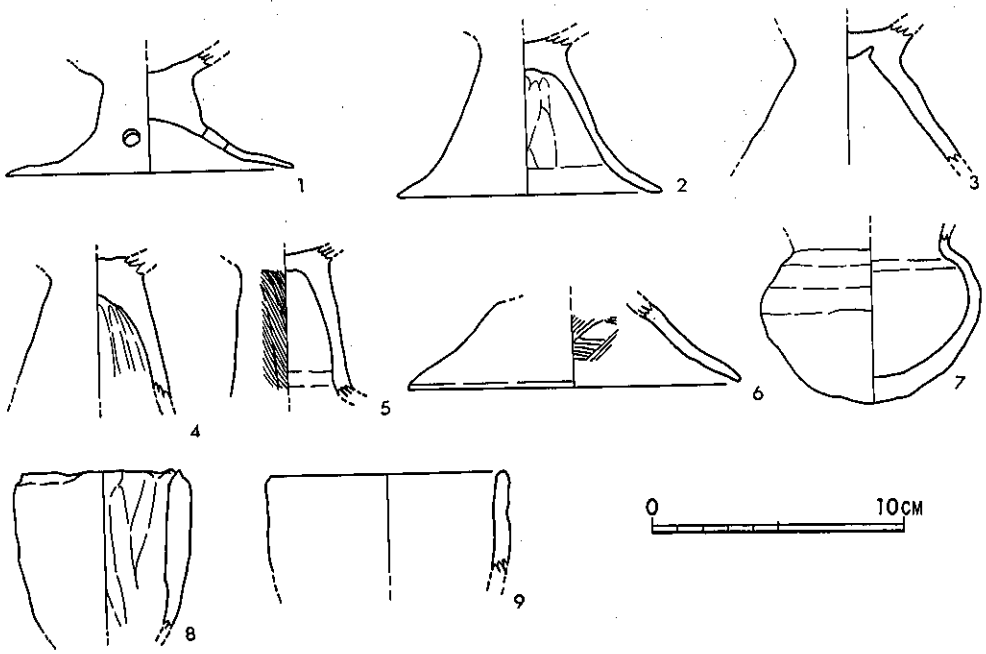
(1)　古墳時代の土器（第17図）

第3次調査において、数十片の古墳時代の土師器を検出した。小破片が多く明らかに混入したものであるが、このことは周辺に、古墳時代遺跡の存在を暗示している。図示し得たのは、9点である。

1～6の高杯は、低い脚部で杯部を失う。脚端部は脚筒中位で屈曲した後裾部を外反させつつ大きく開く。脚筒中位に3個の円形透孔を穿つ。器面は磨滅し調整は判然としない。わずかに、裾部内面に横ナデを認める。2はやや高い脚部破片で、脚端部はラッパ状に開く。調整は、器面が磨滅し判然としないが、脚部内外面にヘラケズリを施す。3は、やや高めの脚筒上部破片。脚筒を大きく開きつつ下方に移行する。脚部内外に縦方向のハケメ、杯部内面中央部に渦巻状のハケメ調整がある。4は、脚端部を失う。器面は磨滅しているが、内面にナデ痕跡を認める。5は、脚筒上部は余り開かず下方に移行し、下部で強く屈曲して裾部をなすものであろう。脚外面に縦方向のナデののち斜め方向のハケメ調整を施し、杯内面に不定方向のハケメを施す。6は、脚端部が大きく開く。外面下部をヨコナデし、内面は斜め方向のハケメ調整を施している。

7は、手捏ねの小型丸底壺。小坩で、口縁部を欠失している。頸部はやや外傾する。胴部は球状をなし、最大径は胴上半部にある。器面は何度もナデているが、凹凸が著しく、粗雑なつくりである。

8・9は、椀形品である。タコ壺の可能性が強いが紐孔の存在がなく判断しかねる。8は、復原口径6.2cmを計る。やや外開きで、口縁部に向かって器肉の厚さを増しており、口縁端部は断面三角形になる。全面ナデ調整している。特に内面は縦方向にナデた痕跡を明瞭に残している。9は、8に比してやや大きく、復原口径9.2cmを計る。ほとんど開かず、口縁端部は丸味をもつ。外面口縁下を一部ヨコナデし、他はナデ調整である。　（横大路）



第17図　土器実測図Ⅰ（古墳時代の土器）

(2)　第4号竪穴住居址出土土器

住居址出土土器では須恵器が主体を占め、その中でも特に高台杯と蓋が多い。その他に若干の須恵器杯、皿、土師器の杯、高台付盤、蓋がある。また小破片のため図示しなかったが、須恵器高杯、壺、土師器甕、製塩土器Ⅰ類がみられる。器種的にもバラエティーに富み、良好な一括資料とすることができる。

須恵器（第18～19図）

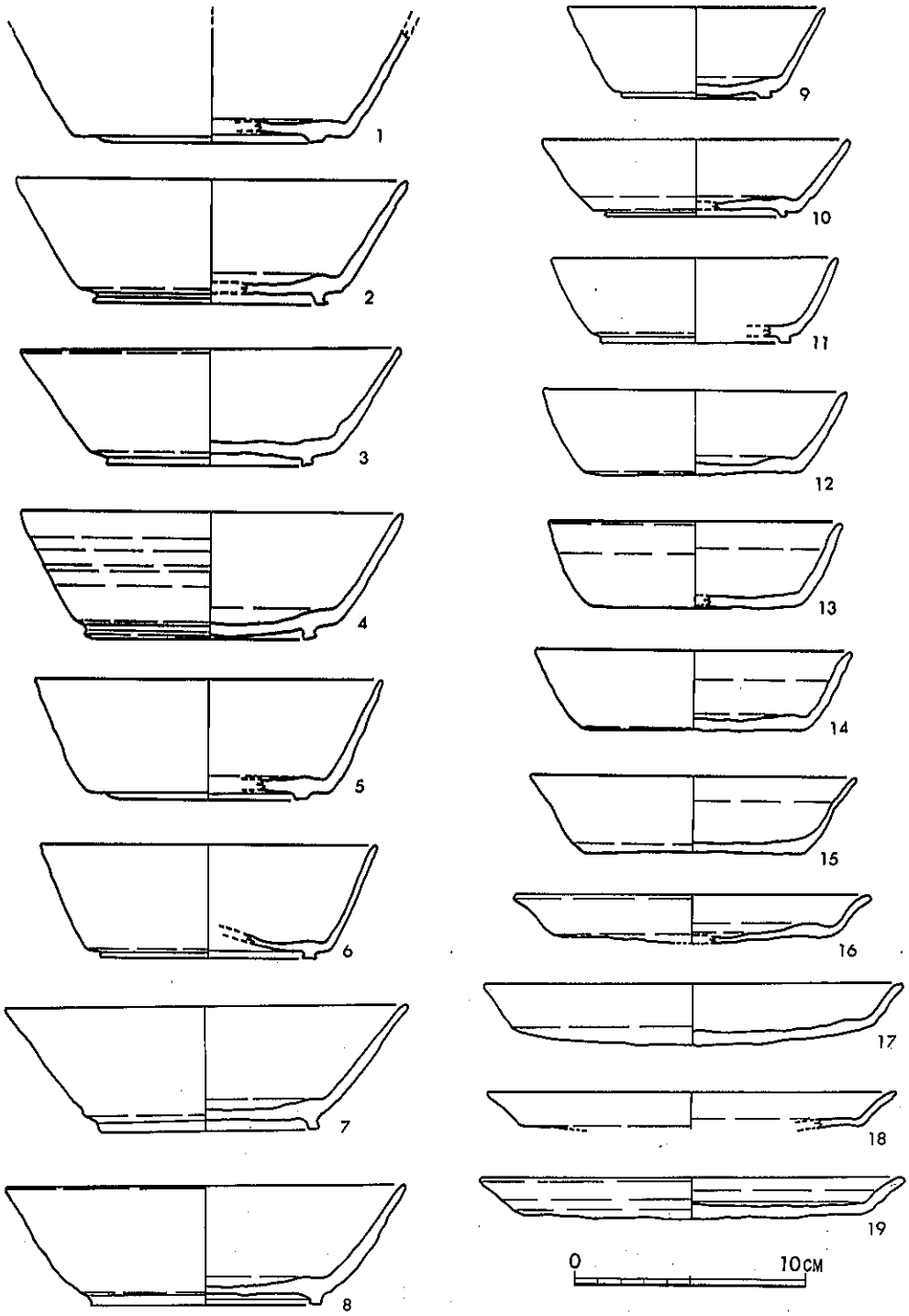
須恵器では杯類の身が27個体、蓋が23個体とほぼ近似した数を示しており、セットとしての使用が考えられる。

高台付杯（第18図1～11）

全部で17個体出土し、うち11個体を図示した。斜め上方に直線的にのびる体部に特徴をもち、口縁端部は丸くおさめる。高台の貼り付けされた位置と、口径・器高の大小から4タイプに分類できる。

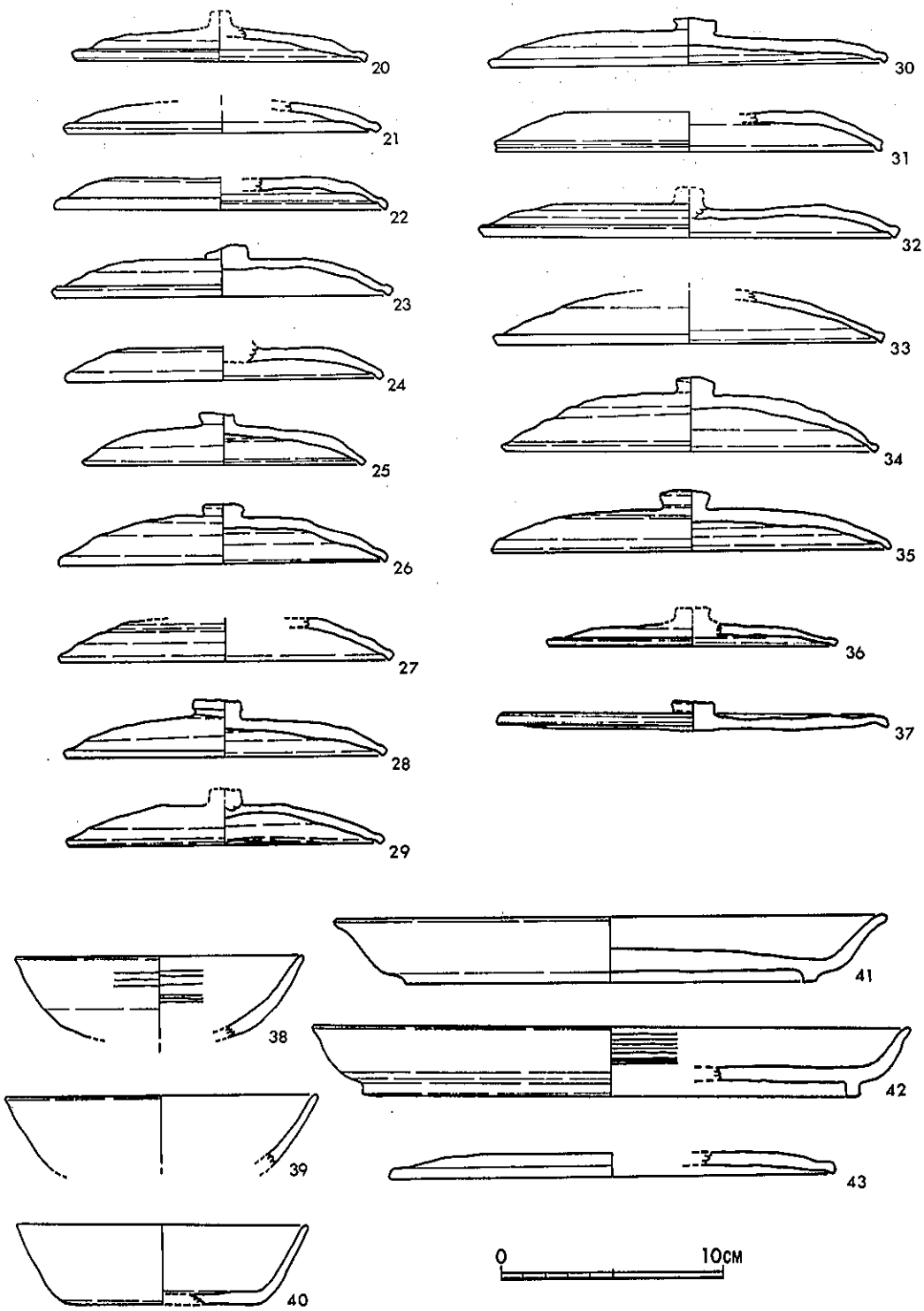
(i)　1～4は、口径16.5～17.0cm、器高5.1～5.6cmと大きく、体部の外傾度の強いもので、底部端より若干内側に高台を貼り付け、体部と底部の境に明瞭な稜をもつ。4は高台の貼り付けの中心が、杯部とずれている。

(ii)　5・6は口径14.6～15.1cm、器高5.0～5.2cmで、(i)に比べて口径がやや小さく、体



第18図　土器実測図II（第4号竪穴住居址出土土器）

1 土 器 類



第19図　土器実測図III（第４号竪穴住居址出土土器）

部の立ち上りの急な製品である。

(iii)　7・8は断面方形の高台が底部端近くに貼り付けされたもので、このため体部と底部の境は明瞭でない。口径17.2～17.5cm、器高5.2～5.5cmである。8は体部が若干丸味をもつ。

(iv)　9～11は口径11.2～13.4cm、器高3.3～4.0cmで、(i)～(iii)に比べ小型の土器である。10は器高に比して口径が大きく浅い感じを受け、11は体部に若干の丸味をもつ。

高台の形態には、偏平な断面長方形のもの（1、5、6）、断面方形のもの（3、7、8、11）、やや外向するもの（2、9、10）がある。体部はヨコナデし、底部はナデ調整するものが多いが、4は高台貼り付け前に外底部を回転ヘラケズリしており、1、2、3、5はヘラ切り離し（以後ヘラ切りとする）の痕跡をとどめている。ロクロ回転方向は判明する例3、4では時計廻りである。多くのものは精良な胎土で硬質に焼成され青灰色をなすが、9は砂粒を多く含み、2～4、8、11は灰白色～灰褐色を呈し軟質である。

杯（第18図12～15）

10個体出土したが、そのうち4点が図示できた。また、ここには含めなかったが、第21図1も4号住居址出土である。口径12.8～14.2cm、器高3.4～3.8cm。平底で、体部と底部との境に明瞭な稜をもち、体部はわずかに丸味をもって急な角度で立ち上る。15は、体部中位以上が若干外反している。外底部の調整は、ヘラ切りのままで未調整のもの（12）、ナデているもの（13）、板状圧痕をもつもの（14）があり、いずれも内底部はナデている。砂粒を含み、硬質に焼成されており青灰色をなすが、14は灰褐色でやや軟質である。12・15には重ね焼きの痕跡がみられる。

皿（第18図16～19）

口径15.6～18.5cm、器高1.9～2.2cmで、体部は底部との境に明瞭な稜をなして急に立ち上り、体部から短く外反する口縁部をもつ。底部が若干ふくらむもの（17）と、平底のもの（19）がある。16は小型の製品である。外底部はヘラ切り後、ナデ調整を行なっている。青灰色を呈し硬質で、胎土は精選されている。

蓋（第19図20～37）

全部で23個体出土したが、そのうち18個体を図示した。(i) 天井部がほぼ平坦で、器高が高くふくらみをもつもの（20～35）と、(ii) 偏平なもの（36・37）がある。

(i) では20～29が口径12.8～15.4cm、器高1.5～2.1cm（つまみを除いた数値で、以後も同様である）と小さく、30～37が口径17.0～18.0cm、器高1.5～2.6cmを測る大型品で、いずれも口縁部を断面三角形に低く折り曲げている。天井部から口縁部にかけて凹ませるもの（20～23、30、32、34）と、ストレートに移行するもの（24～29、31、33）、また、口縁端部外面に沈線を入れ、嘴状をなすもの（27、31）などがある。これらの多くに偏平な釦状のつまみがつき、つまみには低く鋭い稜をもつもの（25）と、中央部が突出しているもの（23、30、34、35）が

ある。天井部内面はナデ調整が多く、外面はナデている場合と、無調整の場合がある。全体的に胎土は精良で青灰色を呈し、硬質に焼成されているが，23は砂粒を多く含む。28は天井部に板目状圧痕を残している。33には重ね焼きの痕跡があり、口縁部内側に焼成時に付着した砂粒が認められる。35は口縁部の折り曲げが鈍く、この中ではやや後出する要素をもつもので、灰色を呈しやや軟質である。30は非常に偏平な特徴ある蓋で、37では口縁端部よりも天井部内面が低い位置にある。36は口径 13.1cm、器高1.0cmを測り、口縁部を断面三角形に折り曲げる。37は口径 17.7cm、器高 0.8cmで、釦状のつまみを有し、口縁部は鈍角に折り曲げられていてシャープさを欠く。いずれも砂粒を含み、青灰色で硬質に焼成されている。

土師器（第19図）

杯（第19図38～40）

口径12.9～14.0cmで体部に若干の丸味をもち口縁端部は丸くおさめる。38、39は体部の外傾度が強いもので、38では体部下半を回転ヘラケズリし、さらに体部内外に粗い回転ヘラミガキを施している。底部を欠くが、回転ヘラケズリされた平たい底部になるのであろう。40は安定した平底で、体部と底部の境に明瞭な稜をなし、体部の立ち上りの急なものである。体部下半と外底部を回転ヘラケズリしており、ロクロは時計廻りである。その他の破片も回転ヘラケズリと回転ヘラミガキをもつものが多い。19は砂粒を若干含むが他は精良な胎土で、褐色系の明るい色調をなし、硬質に焼成されている。

高台付盤（第19図41・42）

断面方形のどっしりと安定した高台を底部端に貼り付け、丸味をもつ体部と短く外反する口縁部をもち、重厚なつくりである。口径25.0～27.0cm、器高3.0～3.2cmで、外底部を回転ヘラケズリしており、ロクロは時計廻り。23はさらに内面にヘラミガキを施している。41は磨耗が激しく、外底部以外は調整不明で、砂粒を多く含む。

蓋（第19図43）

口径 20.0cm、器高 1.1cmで、偏平な体部に断面三角形の鈍い折り曲げの口縁部をもつ。胎土は砂粒を含まず、内外面とも密な回転ヘラミガキで、ていねいなつくりである。　（市　橋）

(3)　須恵器（第20～29図）

須恵器のうち高台付杯、杯、皿、蓋類は、第３次調査においては、明らかに混入と思われるものが若干出土しているにすぎず、図示したのはすべて第１・２次調査時のものである。壺、甕類については全調査出土分をまとめて説明を加える。

①　**高台付杯**（第20図１～23、第21図24～32）

(i)　体部と底部の境に丸味をもち、体部の立ち上りは急で中部から若干外反するもの（1、

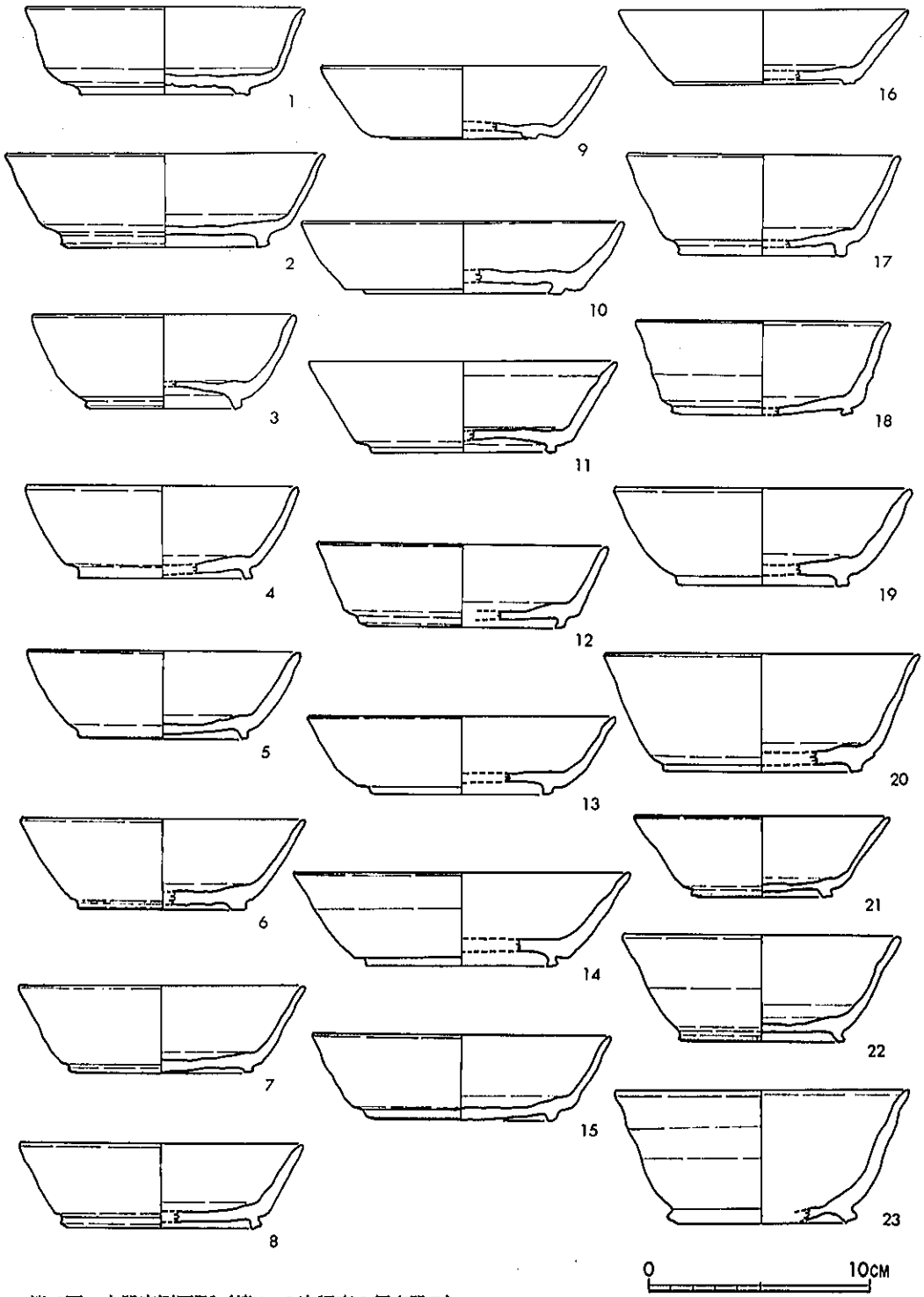
2）、(ii) 体部と底部の境に明瞭な稜を形成し、高台は底部端よりやや内側に貼り付けるもの（3～18）、(iii) 高台が底部端近くに貼り付けされ、底部と体部の境は明瞭でなく丸味をもつもの（19～23、26、28、30）、(iv) 高台が底部端に貼り付けされ、底部と体部が境をなさず直線的になるもの（24、25、27）、(V) 体部が内弯気味に立ち上り深みをもつ大型土器で、椀ともいうべき器形のもの（31、32）に分けられる。

(i)　口径 12.6～14.6cm、器高 4.0～4.4cm を測る。1の高台は非常に偏平な断面長方形で、外側の一端のみが地につき、畳付き部の中央がやや凹んでいる。底部にはヘラ切りの痕跡が明瞭に残っており、板目状圧痕をもつ。体部外面の下半3程は回転ヘラケズリを行なっており、ロクロの回転方向は時計廻りである。胎土には黒色微砂粒を多く含み、淡灰色をなす。2は1号竪穴住居址出土で、外端部がわずかに張り出し、どっしりと安定した断面方形の高台を付す。内底部ナデ、外底部未調整で、微砂粒を少量含み灰色である。これらは (ii) ～ (V) に比べ、やや先行する要素をもつものであろう。

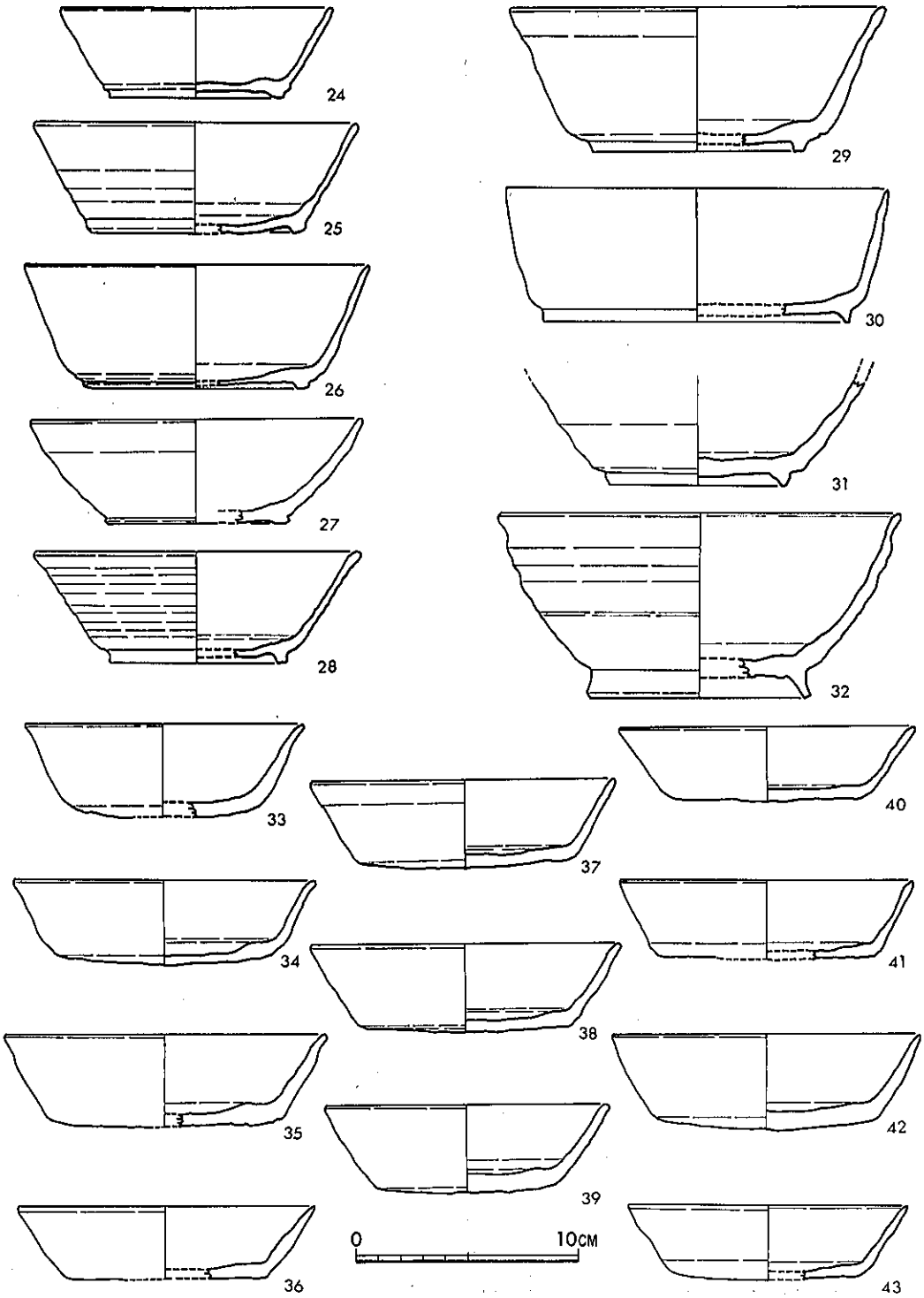
(ii)　4号竪穴住居址の須恵器杯 (iv) に相応し、高台は杯の中で最も多いタイプである。高台の形状と器形の大小に3タイプがある。Ⓐ3～8は、高台をやや外向気味に貼り付けたもので、3と5は高台の外端部がやや外方に張り出し、4と7は畳付き部が平坦となっている。6は偏平な断面長方形の高台の畳付き部中央をやや凹ませており、1と共通するつくりである。8は畳付き部を外傾させている。体部は斜め上方に直線的にのびるものが多い中で、3、4のように若干内弯気味のものもある。口径12.0～13.0cm、器高3.9～4.3cmを測る。底部内外は、外底部未調整の6を除いてナデ調整しており、青灰色～灰色をなし焼成は硬質である。8は胎土に砂粒を多く含む。Ⓑ9～18は、口径11.6～14.8cm、器高3.3～4.6cmで高台が垂直に立ち、畳付き部がほぼ平坦に仕上げられており、体部は直線的にのびる。高台の形態には、偏平なもの（9）、若干外傾するもの（10、12）、断面方形のもの（13、15～17）、端部の両側が張り出すもの（11、14、18）などがみられる。また、底部から体部へ低い位置で屈曲する製品がある。特に9、10、14などは、屈曲部が高台貼り付け部よりも下方にあり、そのため器形は偏平な感じを受ける。調整手法は底部内外ともナデ調整が多く、ロクロの回転方向は判明する例12では時計廻りである。9、13、15、18は微砂粒を多量に含み、17は淡灰色で軟質に焼成されている。Ⓒ29は、口径 17.0cm、器高6.5cmと大型の土器で、4号竪穴住居址の高台付杯 (i) に相応する。底部内外面ともナデ調整し、灰色で外面にはススが付着している。胎土には砂粒をかなり含み、硬質に焼成されている。

(iii)　19、20、28は、垂直に立つ断面方形の高台を有する。口径 13.5～14.8cm、器高 4.5～5.4cm、内底部はナデ、外底部は19では不調整である。灰色～灰白色をなし軟質で、20は胎土に砂粒を非常に多く含む。21～23は外向する高台をもつもので、畳付き部は外傾する。体部は丸味をもって立ち上るが、上位では若干外反気味である。21は口径 11.6cm、器高 3.7cmとやや

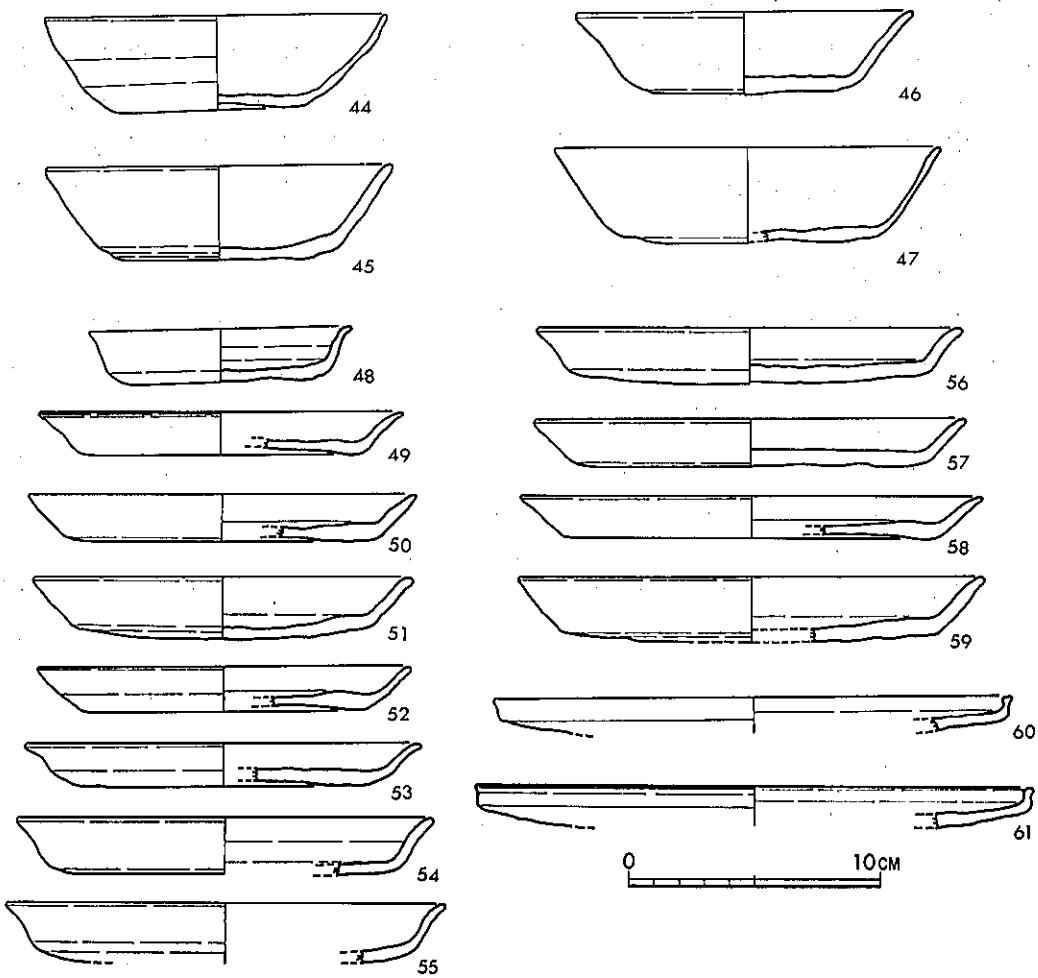
1 土 器 類



第20図　土器実測図IV（第１、２次調査の須恵器Ｉ）



第21図　土器実測図Ⅴ（第１、２次調査の須恵器Ⅱ）



第22図　土器実測図VI（第1、2次調査の須恵器Ⅲ）

小ぶりで、体部の外傾度が強い。いずれも砂粒を含み、灰色から青灰色で硬質に焼成されている。内底部はナデで、21、22は外底部に板目状圧痕を残している。26と30は口径15.6～17.8cm、器高5.6～6.1cmと大きく、体部の立ち上りの急なもので、26は断面長方形、30は断面方形の高台を付し、4号竪穴住居址の（ii）（第18図5・6）と近似した器形であるが、底部と体部の転換部が甘いところに差がある。26は底部内外ナデ調整で淡青灰色をなす。30は口縁部を細く仕上げ、外底部は回転ヘラケズリで、ロクロは時計廻り。灰褐色を呈し、やや軟質である。

（iv）　24、25は直線的な体部と断面方形の高台を有し、底部内外をナデ調整している。精選された胎土で、堅緻に焼成され、青灰色をなす。4はこのタイプに含めたが異質な土器で、低くひしゃげたような目立たない高台を有し、体部は若干内弯気味に立ち上る。灰白色で石英粒

を多量に含み器表の磨耗が著しい。

（V）　31は口縁部を欠くが、高台は先端が丸い断面三角形で、底部端よりやや内側に貼り付け、32は「ハ」の字形に外開する高い高台が底面いっぱいにつく。口径18.2cm、器高8.3cm、高台径8.0〜10.1cmで、ともに体部外面下半を回転ヘラケズリしておりロクロ回転方向は31では時計廻り、32では逆時計廻りである。胎土には砂粒を含み焼成は甘い。31は黒灰色、32は灰白色をなす。

②　杯（21図33〜43、第22図44〜47）

体部から底部への屈曲部と体部のつくりに3タイプがある。(i) 体部と底部の境が丸く、体部の立ち上りが急で口縁部は外反するもの（33、34）、(ii) 平坦な底部から明瞭な稜をなして立ち上る体部をもち、立ち上りは急で斜め上方に直線的にのびるもの（35〜39、41〜43）、(iii) 体部と体部の境に明瞭な稜をもたず、体部の外傾度の強いもの（40、44〜47）である。これらの杯は、口径13.5cm、器高3.8cm前後でほぼ同じ法量を示すが、形態的には (i) が (ii) (iii) よりも若干先行する要素をもつものであろう。47は口径15.4cmと他に比べ大きい。33は4号住居址出土で口縁部は細く仕上げている。底部内外面をていねいにナデ調整しており、外面には火襷がみられる。16、19は底部に厚みのある製品で、16は11、12、15とともに底部端の内面が肥厚する。12の体部は若干内弯気味にのび、13〜15は外底部端に段をもつ。調整手法は、基本的に底部内外をナデ調整するが、39、41、44、はヘラ切り痕を、35と39は板目状圧痕を残す。精選された胎土で、青灰色〜灰色をなす硬質のものが多いが、36、40、は灰白色で軟質である。36は体部に重ね焼きの痕跡をとどめており、重ねられた部分以外は淡黒灰色をなす。37は口縁部にススが付着しており、灯火器としての用途が考えられる。

③　皿（第22図48〜59）

皿は12点を図示した。体部のつくりと立ち上りの角度に、(i) 体部と底部の境に丸味をもち、体部の立ち上りが急で、口縁部が短く外反するもの（49、53〜56）と、(ii) 体部と底部の境に明瞭な稜を形成し、体部は外傾度が強く、直線的にのびるもの（50〜52、57〜59）の2タイプがある。これらはいずれも口縁端部を丸くおさめている。口径は15〜18cm前後と、かなり大きさにばらつきがあるが、大小のセット関係は明確にできない。器高は1.7〜2.6cmで、平底か若干上げ底気味のものが多いが、（56、）は底部がややふくらみをもち深みのある製品である。52は形態的には(i)に属するが、口径10.5cm、器高2.2cmと極めて小さく、特殊な製品である。いずれも底部はヘラ切りで、その後ナデ調整をするものとしないものがある。51では外底部にハケ目状の擦痕が認められる。ヘラケズリ調整をしたり、板目状圧痕をもつものは見当たらない。内底部も同様で、ロクロ水挽き痕をそのまま残したものとナデ調整したものがある。このようなナデ調整には、ていねいさに差がある。また、底部端の内面が肥厚するものとしないものがあるが、手法による差であろう。底部のヘラ切り痕が明瞭な例（56）では、ロクロ回転は

時計廻りである。胎土には砂粒をあまり含まず、青灰色～灰色を呈し硬質に焼成されているものが多いが、50は灰白色で軟質である。48は赤茶褐色で、55とともに火襷をもつ。58は口縁部内外にススが付着しており、灯火器として用いられたものであろう。

④ **高杯**（第22図60・61）

高杯には小破片が多く、ここには2点のみを図示した。杯部の屈曲部に稜を形成し、口縁部は、ほぼ垂直に立ち上る浅い製品で、口径20.6～22.2cmを測る。口縁端部はほぼ水平な面をなし、内外面ともヨコナデによって仕上げている。脚部の資料を欠くため、全体の器形については知り得ない。胎土は精良で青灰色を呈し、硬質に焼成されている。

⑤ **蓋**（第23図62～88）

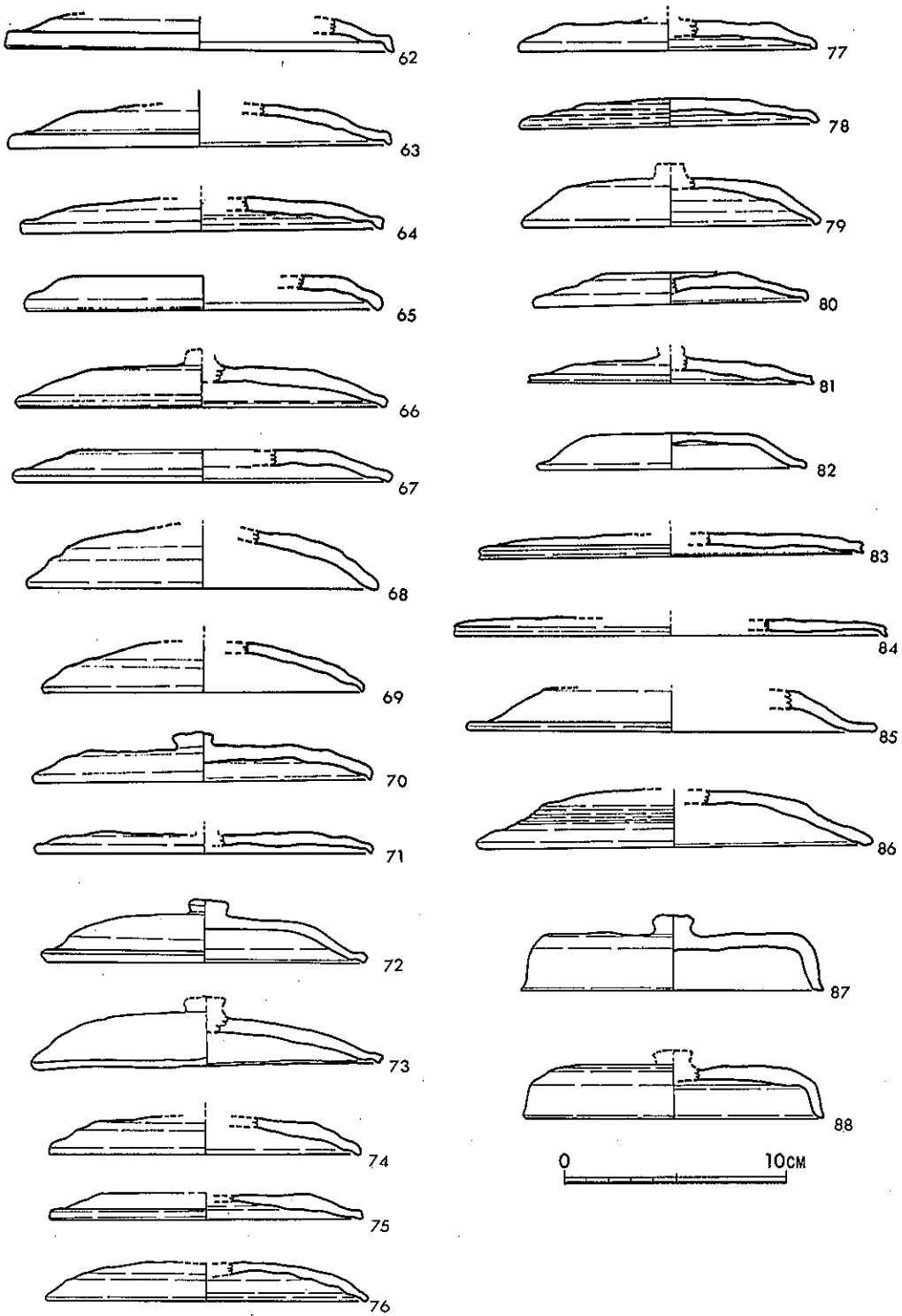
須恵器の中で最も器形のバリエーションに富む。また、口径も12.4～19.5cmと幅が大きいが、明確に大小関係を知り得るものは少ない。したがって身との関係は明らかでないが、87・88は壺蓋で、他は杯蓋であろう。

杯蓋 杯蓋には、時期的な特徴を最もよく反映していると考えられる口縁部の折り曲げの形態に注意すると、大別して (i) 折り曲げの背が高いもの（62、65）、(ii) 口縁端部を断面三角形に短く折り曲げたもの（63、64、66、67、69～73、76、79、80）、(iii) 口縁部の外端面が鈍角になるように小さく屈曲しているもの（74、75、77、78、81、83、84）、(iv) 口縁部に折り曲げのないもの（68、82、85、86）の4タイプがある。

(i) 口径16.2cm～17.6cm、器高1.3～1.6cmである。62は口縁端部がやや外反して嘴状をなし、内面が淡赤灰色を呈す。65は1号住居址からの出土で、厚ぼったいつくりの製品である。ともに残存部分では内外面ともヨコナデしているが、62と同形態の他の例では天井部外面を回転ヘラケズリしている。

(ii) 器高が1.9～2.2cmとやや高いもの（63、66、69、72、73、76、79）と、1.0～1.7cmと器高が低く偏平なもの（64、67、70、71、80）があり、いずれもほぼ平坦な天井部をもつ。79、80は口径12.4～13.5cmとやや小型で、他は口径14.5～17.3cmを測る。口縁部が強く外反する製品（72）や、天井部からストレートに口縁部に移行する製品（79）がある。これらの多くにはつまみがつくと思われるが、つまみが残存している資料は少なく、70は中央部がやや突出するつまみ、80は偏平な釦状のつまみを有する。天井部内面はナデ、外面は、64、67、70、71がヘラ切りのままである以外はナデ調整している。63、64、70、72、76は砂粒を多量に含んでいる。灰色をなすものが多い。

(iii) 平坦な天井部をもち、体部との境が明瞭で、全体に偏平度が強い。口縁外端部に沈線を入れるもの（81、83、84）と入れないもの（74、75、77、78）がある。83、84は口径17.3～19.5cmの大型品で、他は12.9～14.1cmを測る。78はつまみをもたない例である。基本的には天井部内面をナデ、外面をヘラ切りのまま残すが、84では天井部を回転ヘラケズりしており、ロ



第23図　土器実測図 VII（第１、２次調査の須恵器Ⅳ）

クロは時計方向である。灰色をなすものが多く、75は胎土に黒色粒子を多く含んでいる。

(iv) 68、86は、天井部に丸味をもつ厚ぼったいつくりである。86は口径 17.9cm、器高 2.6cmと大きく、口縁部内側に沈線をもつ。また体部外面上位に沈線を数条入れ、天井部との境を画す。68は口径15.9cm、口縁端部を丸くおさめた、のっぺりとした土器である。ともに細砂粒を多く含み灰色をなす。82、85は、口縁部が大きく外反し、舌状となってのびる形状をなし、天井部は平坦である。口縁部内側を凹ませており、わずかに折り返しの痕跡をとどめている。82は小型でつまみをもたず、85は大型の土器で、ともに内底をナデ調整し砂粒を多く含む。

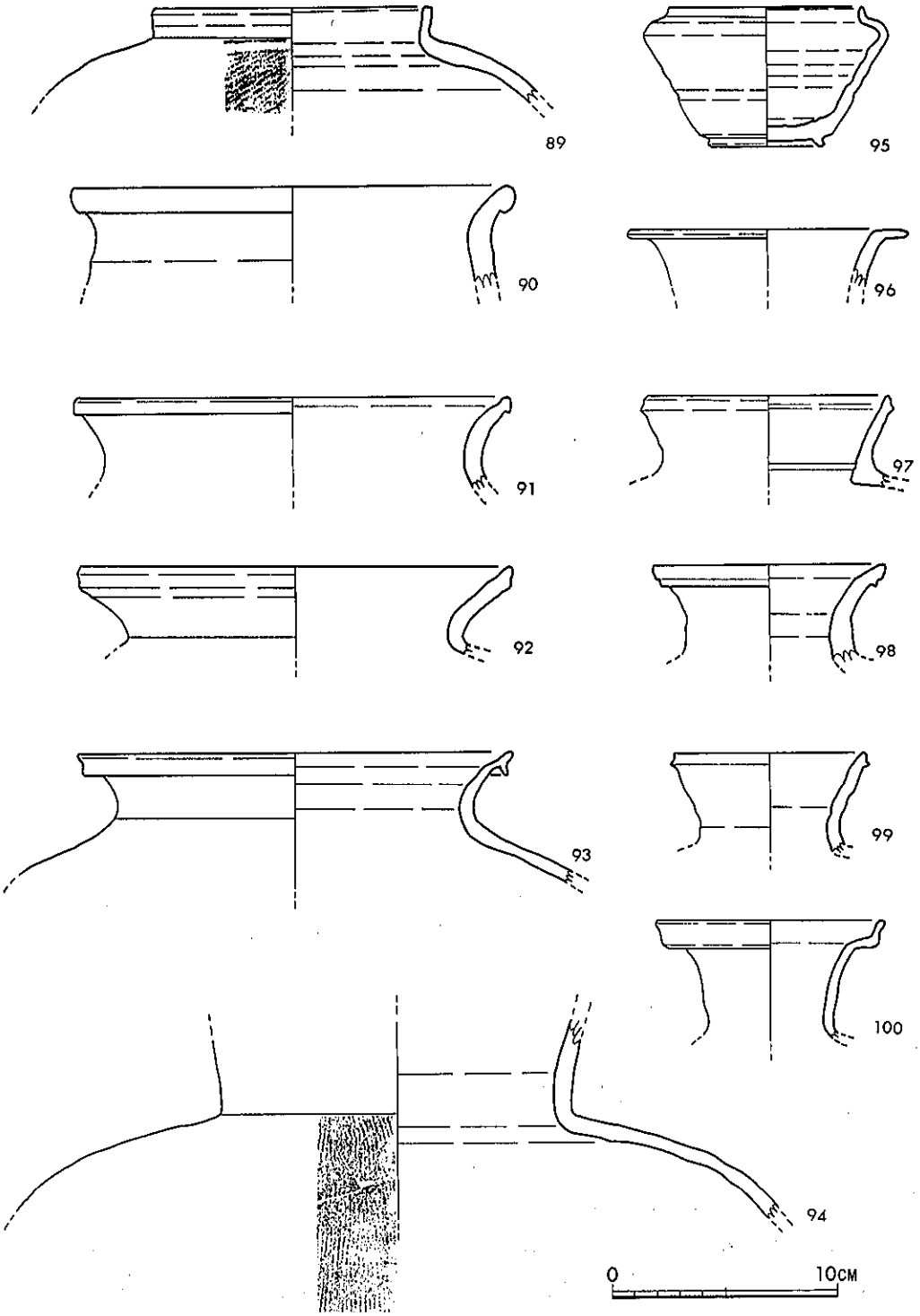
壺蓋（第23図87、88）

天井部外面は回転ヘラケズリをしており、平坦で87では釦状のつまみが付く。体部はやや内傾気味に高く立ち、口縁端部は面を形成して安定した感じを受ける。87は天井部に焼成の際に生じた凹凸がみられ、黒灰色を呈す。88は灰色でやや軟質で、ともに天井部内面はナデ調整でロクロは時計廻りである。（市橋）

⑥ **壺甕類**（第24～29図）

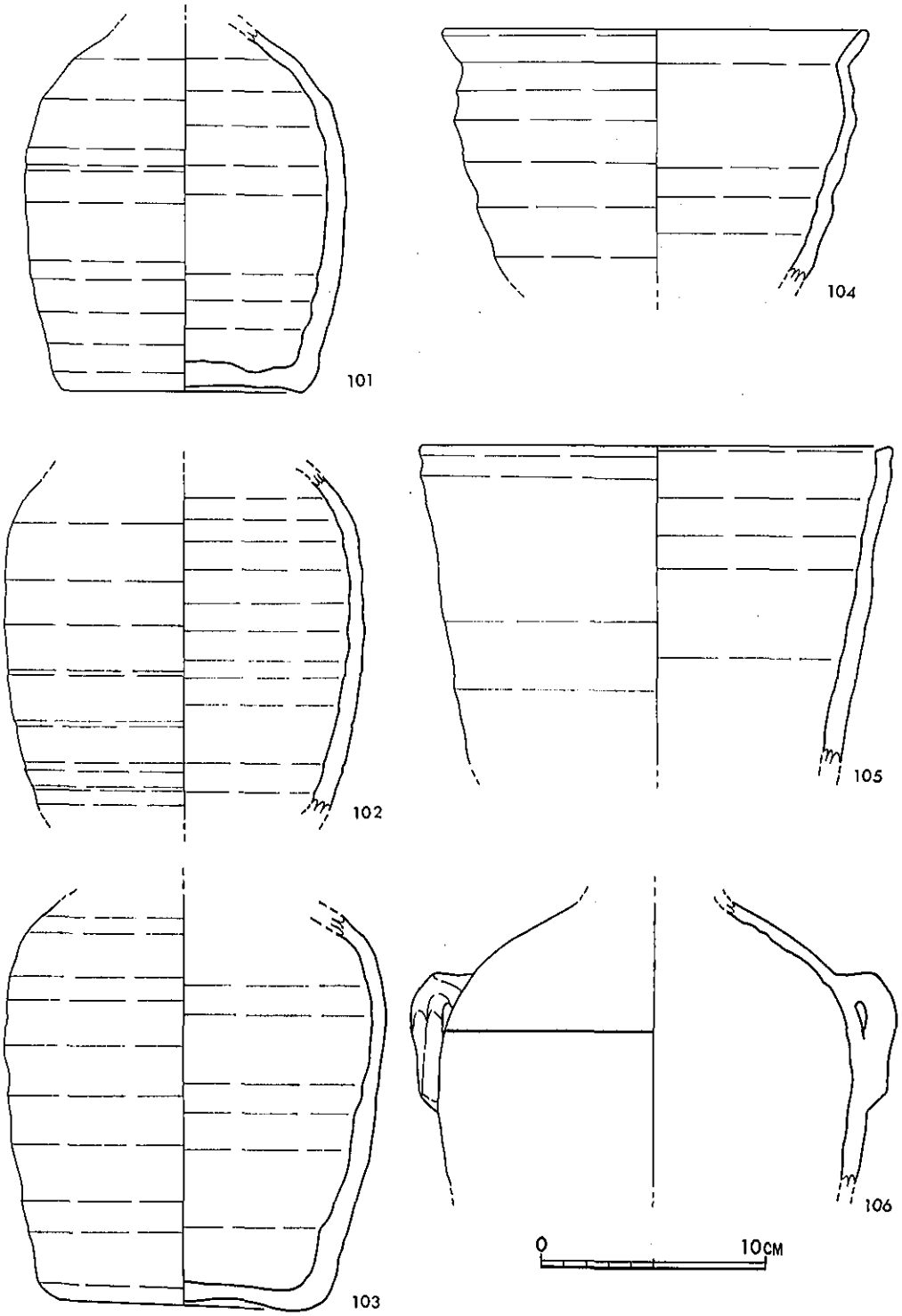
壺形土器

24図95は、口径 8.6cm、器高 6.25cmで、肩部に最大径10.8cmを測る。小型の台付短頸壺である。高台は低く外方に踏ん張っており、ほぼ直線的に外傾する体部を立ち上がらせる。肩部は強く張り逆「く」の字形を呈し、口頸部は短かくほぼ直立する。28図 118 は、口縁部を欠失しているが、ほぼ完形の「銚子形」を呈す新羅焼の小型壺[註1]である。推定器高12cm程である。底部は、やや上げ底気味であるが、殆んど平坦である。体部下半が大きく膨らんでおり、安定した形状を示す。底部から 1/3 高程のところで最大径 8.8cm を測る。頸部は短かく外反した後、緩やかに内弯しつつ体部に移行し、肩部は不明瞭である。体部中央に 1 条・肩部に 2 条の沈線をめぐらしているが、体部の一方を偏平にしており、体部の沈線は不明瞭である。底径 6.8cmを測る。24図89、96～100は、口頸部の破片である。89は、復原口径12.45cmを測る広口短頸壺である。やや内弯しつつ外傾する低い口頸部は、膨んだ肩部との境を明瞭にしている。96は高杯脚部とも考えられる。97はやや広口であり、復原口径11.1cmを測る。頸部は直線的に口縁部下に浅い凹線を施し、その下に断面三角形の凸帯状の段を突出させて外傾し、いる。頸部と肩部との境は比較的甘い。98は、復原口径 10.3cm、頸部高 3.5cmを測る。頸部は外反しつつやや外傾しており、端部に向かって器内の厚さを減じていく。口縁外部に浅い凹線をめぐらし、その下に小さな突帯状の段を持つ。99は、復原口径9.55cm、頸部高 4 cmを測る。頸部は、外反しつつ外傾しており、口縁部下に断面三角形の小さな段を有する。100は、復原口径 10.2cm、頸部高 5 cm程を測る、やや外反しつつ外傾した頸部は、口縁部下 1 cm程で大きく開いた後、若干外反しつつ再び立ち上がる。二重口縁をなす。25図 101～103 と106および28図119・121～123は、主として体部の破片である。101～103は、ほぼ平坦な底部上に弓状に内弯する体部を立ち上が

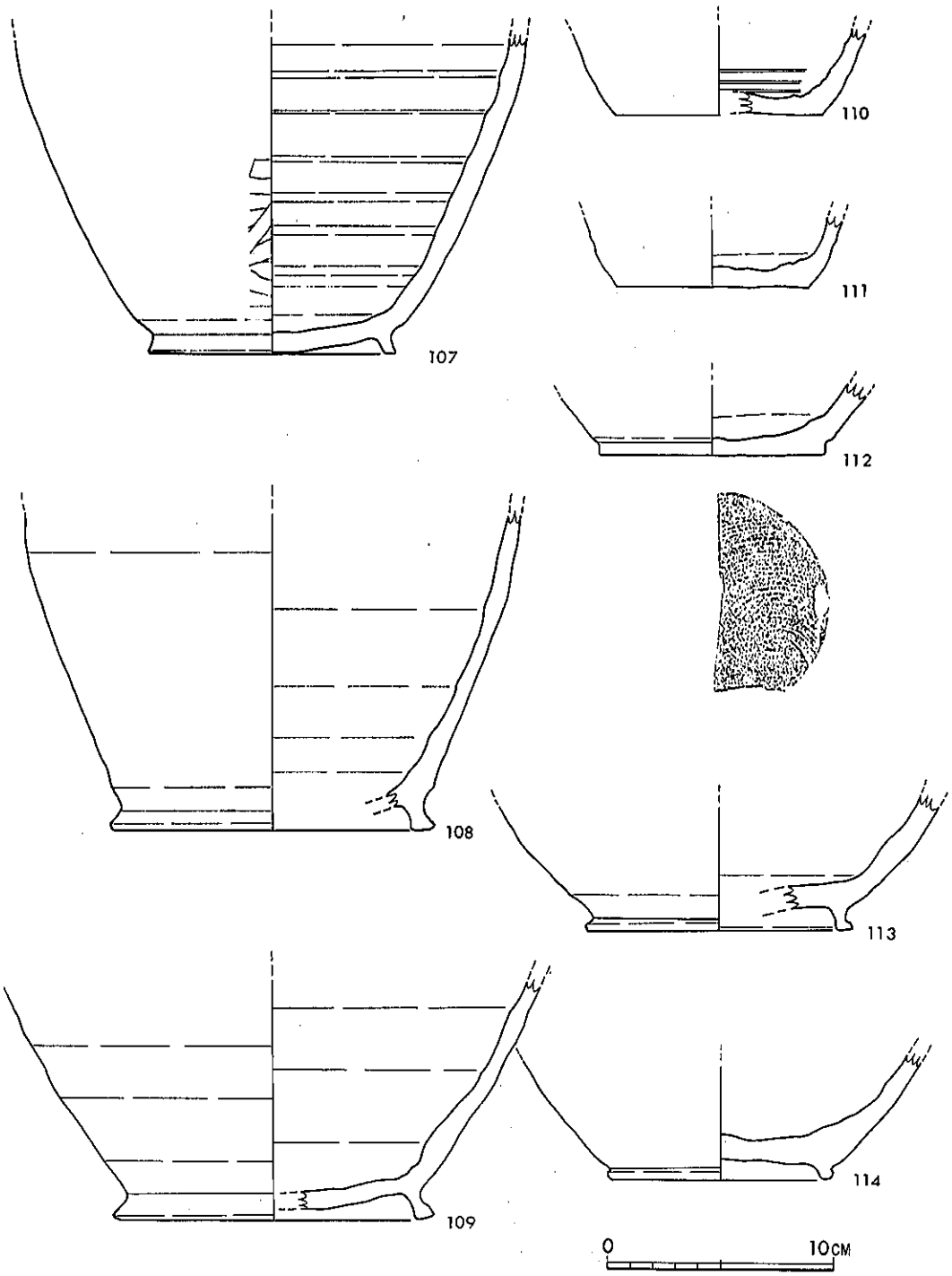


第24図　土器実測図 VIII（第１、２次調査の須恵器Ⅴ）

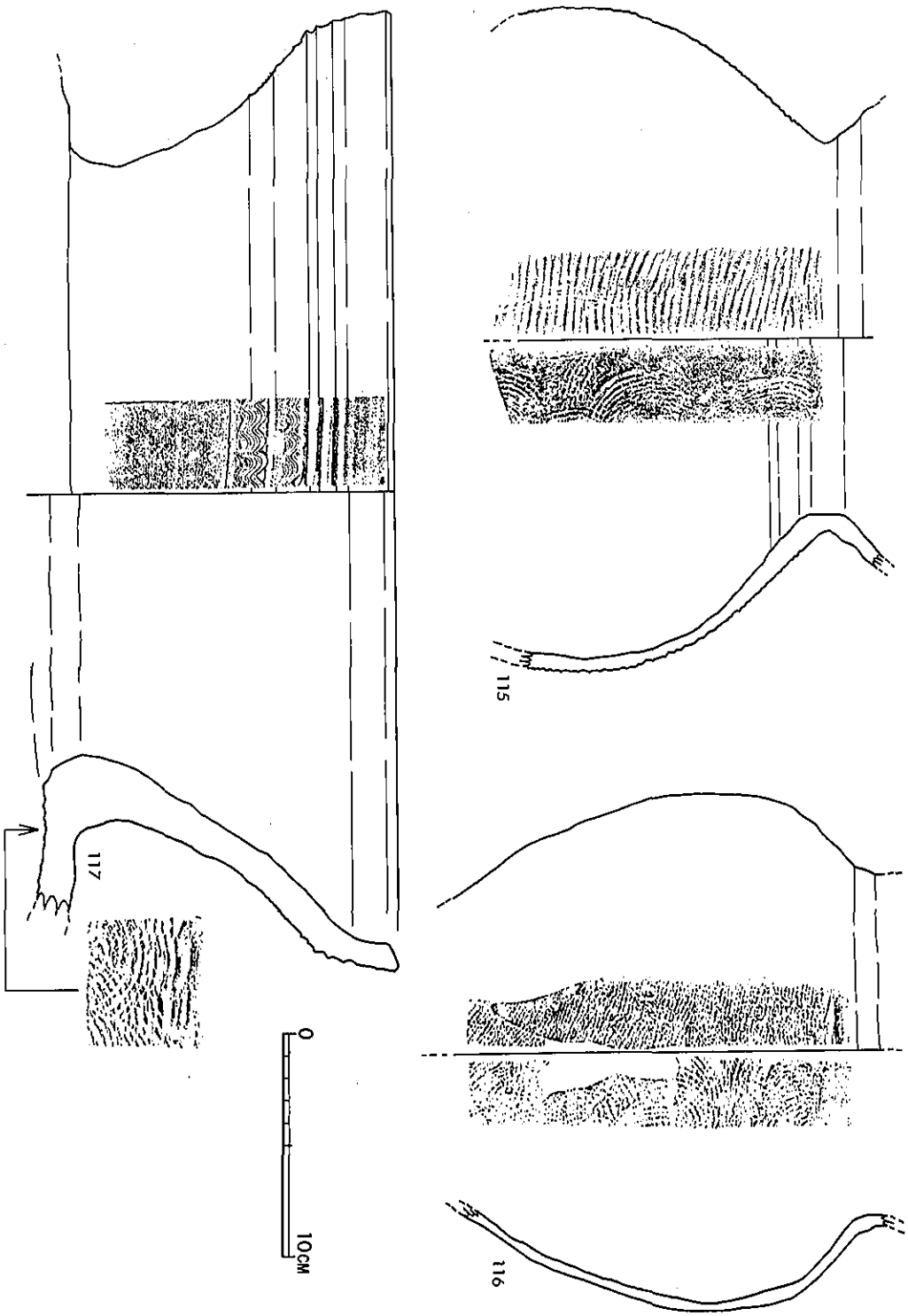
1 土 器 類



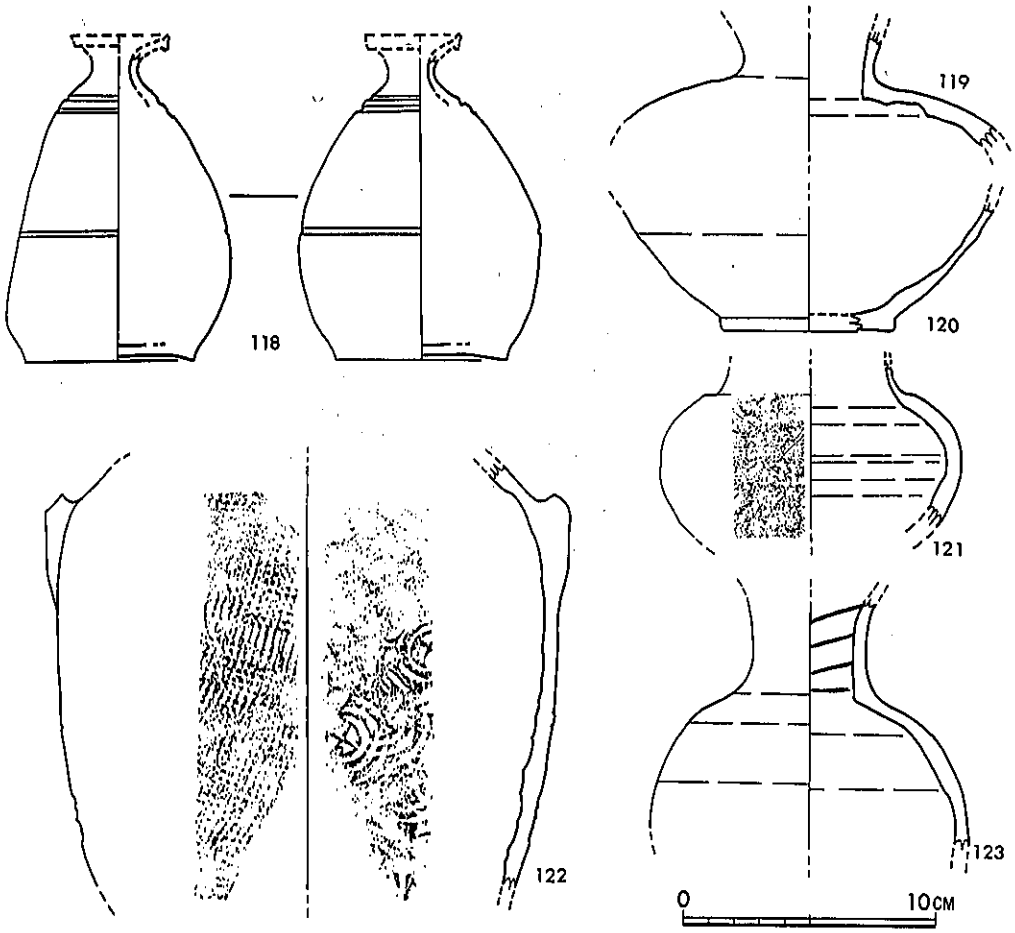
第25図　土器実測図 IX（第１、２次調査の須恵器VI）



第26図　土器実測図Ⅹ（第１、２次調査の須恵器Ⅶ）

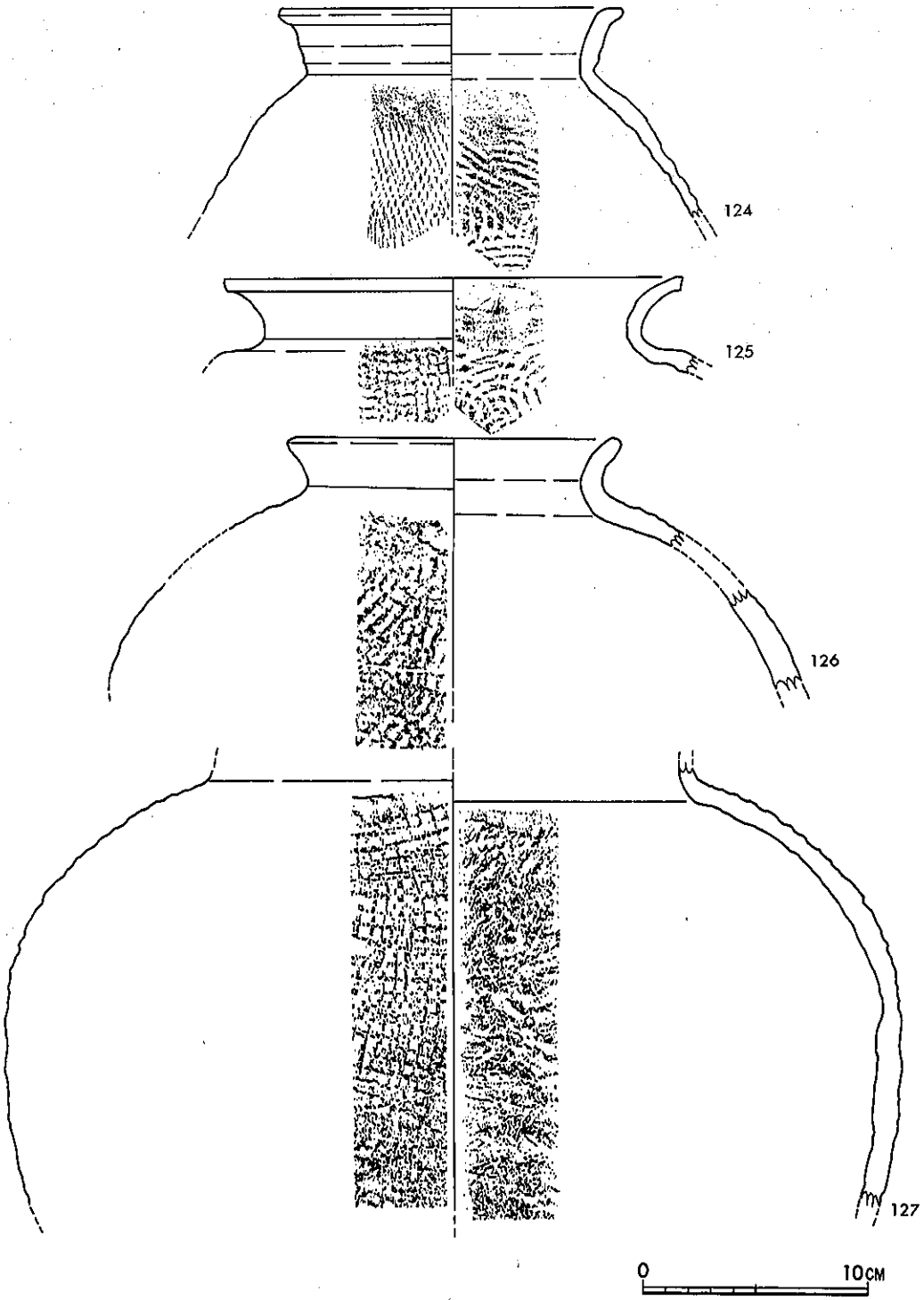


第27図　土器実測図 XI（第1、2次調査の須恵器Ⅷ）—



第28図　土器実測図XII（第3次調査の須恵器Ⅰ）

らせる。101は、やや上げ底の底部を残し肩部との境は不明瞭である。102は、体部から頸部にかけての破片で、体部最大径 16.0cmを測る。103は、体部の弯曲が小さく、肩部が若干張り、肩部付近で最大径 18.0cmを測る。106は、双耳壺で、肩部が若干張り気味に内弯している。耳は、肩部と体部の境部に、粘土紐両端を貼付してナデている。肩部付近で最大径 19.2 cmを測る。119・121～123は、主として頸部から肩部にかけての破片である。119は、頸部を若干外反させつつ外傾させ、肩部を緩く内弯させており、接合部は段を有している。肩部外面下方に格子状の叩き目を残す。121は、広口の短頸壺である。体部を大きく内弯させており、肩部との境は不明瞭である。口頸部は若干外反気味に短かく立たせるが、口縁部を欠している。口頸部と肩部との境は明瞭で、弱い段をなしている。122は、耳状の突起を有する。やや内弯しつつ外傾する体部は、上方で屈曲して内弯する肩部に移行する。肩部は若干張り気味で、耳状



第29図　土器実測図 XIII（第３次調査の須恵器Ⅱ）

の突起を付している。耳状の突起は、粘土紐を全体的に貼付し、角張った形にナデている。外面に格子目の内面に同心円状で中心に十字形文様を陽出する叩き目を残すが、内外共に部分的にナデ消す。26図は、主として下半部の破片である。107～109および113～114が有高台で、110～112が平底である。前者は、端部肥厚させつつ外開きに踏ん張る高台を有し、体部がやや内弯しつつ外傾している。後者は、平坦な底部上に体部をやや内弯しつつ外傾させるものである。外底は110と111がヘラ切りであり、112は糸切りである。28図130は、平坦な貼り付け高台上に若干内弯する体部を大きく外傾させる。

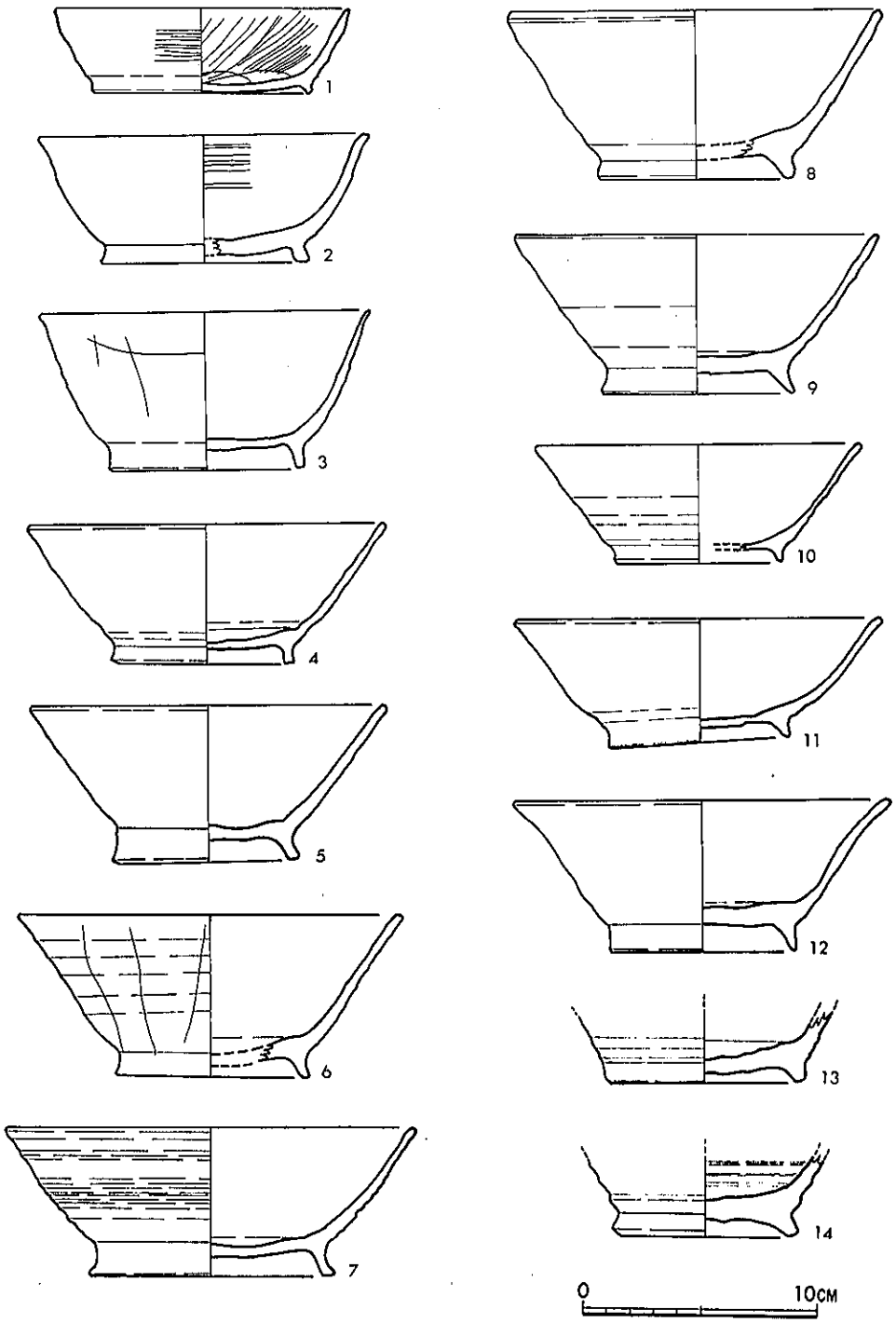
甕形土器

24図90は、口頸部が短かく外反して端部を肥厚させており、玉縁状をなす口縁部下に低い段を有する。91は、端部に向かって器肉の厚さを減じ、端部下に明瞭な段を有する。頸部外面に斜方向の刷毛目を残す。92は大きく外傾する口縁端部で口縁部下に1条の浅い凹線をめぐらし、低い突帯状の段をなす。93はやや内弯気味の体部から口頸部を大きく屈曲させて外反しつつ外傾させる。底部と頸部の境は、明瞭である。25図104は、やや外開きで内弯する体部上に口縁部を短かく屈曲させて立つ。105は、外方に直線的にのびる体部を有し、肥厚させた口縁端部下に浅い凹線をめぐらし、弱い段を形成している。27図125は、内弯する胴部上で大きく外方に屈曲させ、頸部を若干外反させつつ外傾させる。27図126図は、やや内弯する胴部が内方向に屈曲して肩部をなし、頸部をほぼ垂直に立たせる。127は、大型甕で、やや外反しつつ外傾する頸部が上方で内側に屈曲して口縁端部を垂直に立たせる。口縁端は断面方形を呈す。頸部外面上方の屈曲部に3条の凹線をめぐらして、突帯状の段をなす。また最下位の段の下方に2条の凹線をめぐらし、各々の間に2条の波線文をめぐらしている。肩部外面の叩き目はナデ消されており、頸部外面一部に黒飴状の自然釉を発している。29図124は、直線的に内傾する体部がやや屈曲して不明瞭な肩部をなし、口頸部が肩部との境を明瞭にして外傾している。口縁部は、端部を肥厚させており、断面三角形の段をつくる。125は、肩部との境がやや甘い口頸部を大きく外傾させつつ外弯させている。口縁端部は面取りを施し、断面方形を呈する。126は緩やかに内弯する体部上に器肉を肥厚させた外開きの口頸部をのばしている。口縁部は、かなり欠損し磨滅しているが、丸く収めている127は、やや内弯しながら立ち上がる体部は肩部を不明瞭にしているが、上方で内向ぎみに緩やかに屈曲し、ほぼ垂直に立ち上がり口頸部に連続する。（横大路）

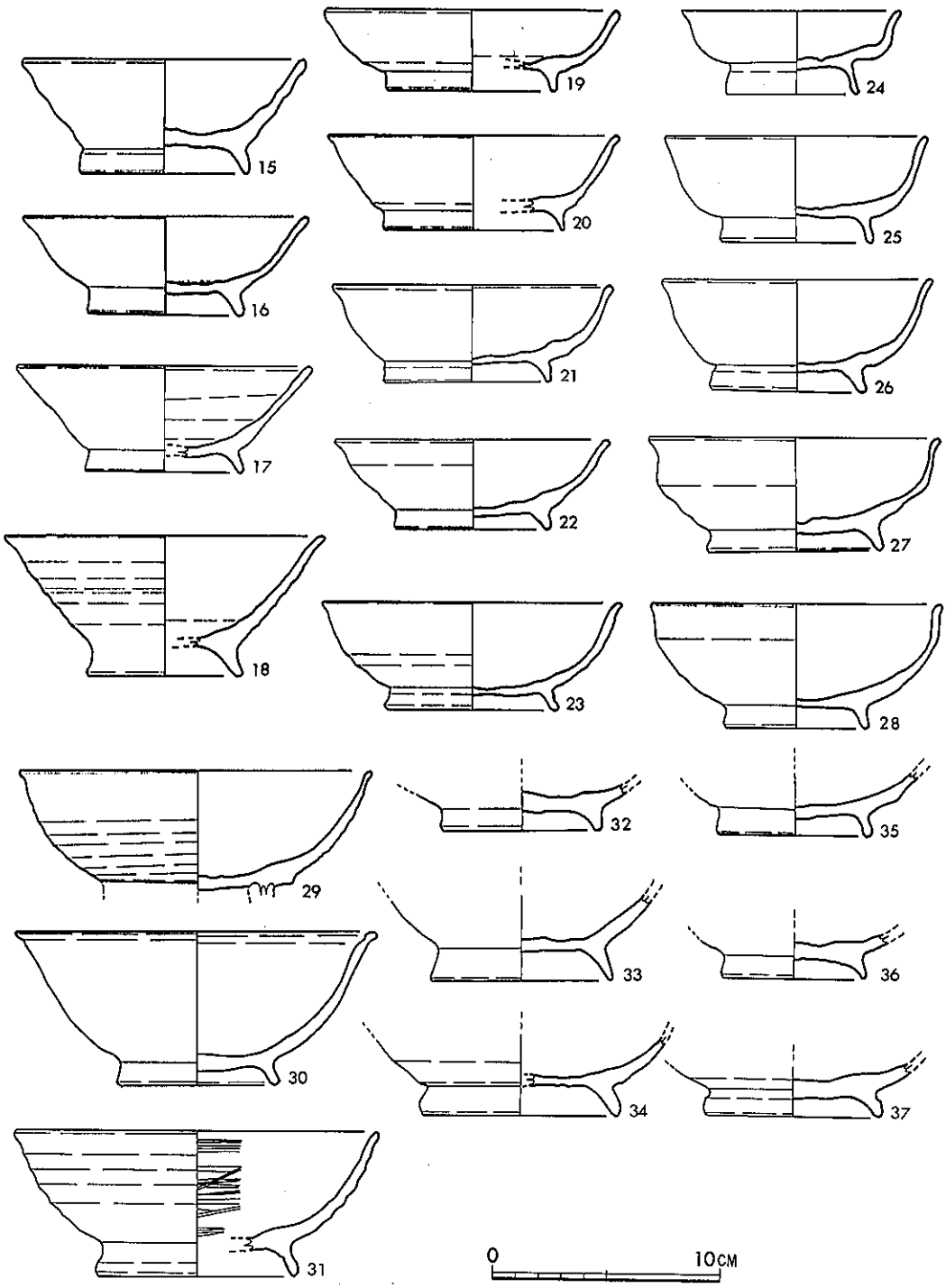
註　類例が韓国鬱陵島天府洞10号墳および慶州雁鴨池から出土しており、統一新羅末期の10世紀代のものとして知られている。（金元竜『鬱陵島』国立博物館古蹟調査報告　第4冊　1963　『雁鴨池発掘調査報告書』大韓民国文化広報部　文化財管理局　1978）

(4)　土師器（第30～42図）

土師器は、第1、2次調査と第3次調査とでは器種、器形に変化がみられる。たとえば杯や



第30図　土器実測図 XIV（第1、2次調査の土師器Ⅰ）



第31図　土器実測図ＸＶ（第１、２次調査の土師器Ⅱ）

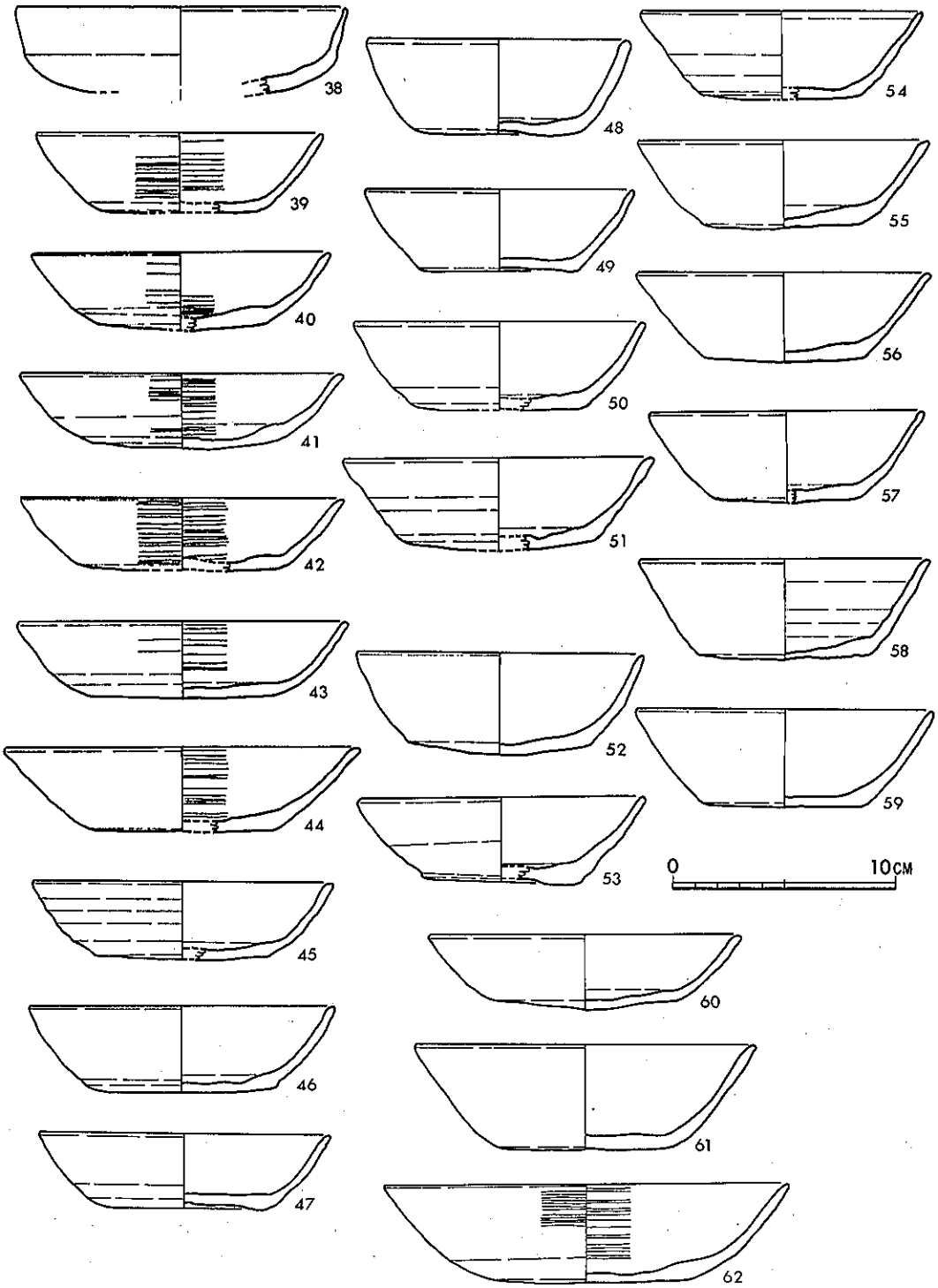
高台付椀における法量の減少化であり、また第１、２次調査で出土した蓋、皿が第３次調査になく、逆に後者において托が出土したことなどである。これらの変化は年代的な差によるものと考えられる。そこで、第１、２次調査分と第３次調査分を分けて器種ごとに説明を加える。

① **高台付椀**（第30図１～14、第31図15～37）

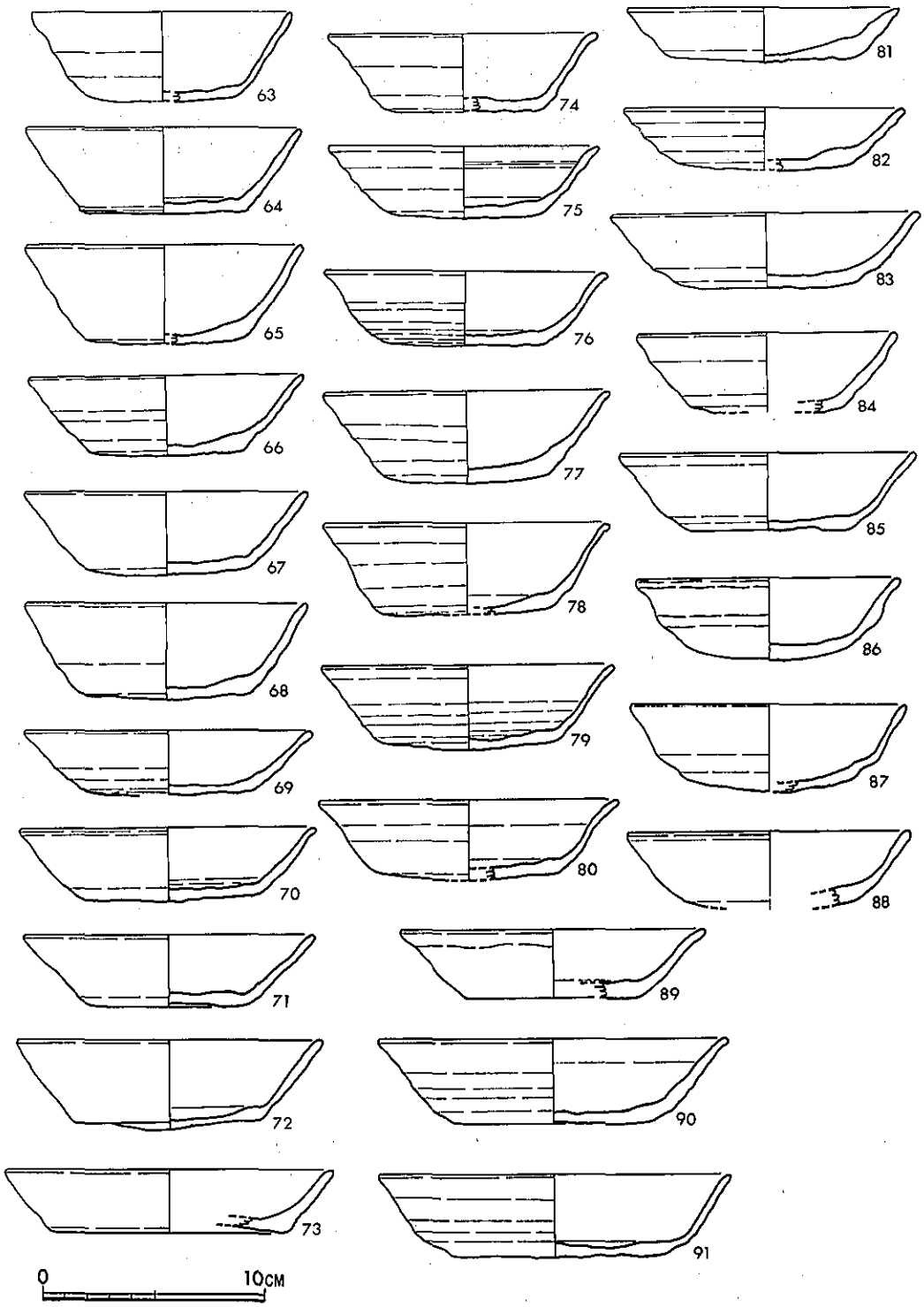
１～14は第１・２次調査、15～37は第３次調査出土分である。

１は高台付杯ともいうべき浅い器形で、平坦な底部の端に外向する低い高台を付し口縁端部を細く仕上げている。外底部は不特定方向に丁寧にヘラケズリし、体部内外は横方向、内底部には不特定方向にヘラケズリし、体部内外は横方向、内底部は不特定方向にヘラミガキしている。さらに体部内面に斜め放射状、内底部に螺旋状のヘラミガキ暗文を施す。外底部は暗黄褐色で、他は赤褐色をなす。２、３は体部が内弯気味に急な角度で立ち上り、口縁部は若干外反する。高台は底部端に付し、畳付き部が平坦で安定している。２は分厚いつくりで、体部内面を横方向に粗くヘラミガキしている。外面は磨耗が著しいが下半部に回転ヘラケズリの痕跡をとどめ、底部内外はナデで、砂粒を含み淡茶褐色をなす。３は薄手で深みをもつ製品である。茶色味が強く、外底部と体部内面に「サ」形のヘラ記号を有する。４～７は口径15.3～17.6cm、器高6.0～7.0cmで、平坦な底部に直線的に立ち上る体部が付く。高台は底部端に付され、垂直かやや外向する。体部はヨコナデで、底部は基本的にナデであるが、５は板目状圧痕を残す。７は高台端部が屈曲し踏ん張った形をなし、体部外面に沈線を数条施す。精良な胎土で赤味の強い茶色をなすものが多いが、６は白っぽい色調である。８、９は、４～７と同じく直線的な体部をもつが、外向する高台の先端部を丸くおさめたもので、その他の特徴は４～７と共通する。９は外底部に板目状圧痕をもち、８は体部内面をヘラ調整している。10は、口径14.0cmの小型の製品で、器壁は薄い。内面は淡黄灰色、外面は桃白色をなす。11は体部の外傾度が大きく内弯気味に立ち上り、口縁部が若干外反する浅い製品で、内底部はナデ、外底部には板目状圧痕を残し、赤茶色をなす。12は直線的に立ち上る体部中位から大きく外反して開く口縁部をもつ。高台端部は丸い。底部の器壁は厚く内外をナデている。13・14は、底部端に外向する安定した高台をもち、体部の形態は不明であるが立ち上りは急である。あるいは壺の底部かもしれない。高台径8.0～8.6cmで、底部内外をナデており灰褐色をなす。

15～18・20・22は直線的な体部をもつもので、口径12.1cm～14.1cm、器高4.0～6.2cmを測り、４～13に比べ小ぶりになっている。16、20・22は体部に弱い屈曲をもつ。外向する低い高台を有し高台端部を丸くおさめるが、20のみはほぼ垂直に立つ高台を細く仕上げている。体部はヨコナデ、内底部は概ねナデで、外底部にはヘラ切り痕を残し、22は板目状圧痕をもつ。胎土は精良で茶褐色をなすものが多いが、20、22は淡灰褐色をなす。これらの中では20、22はやや後出する要素をもつものであろう。19・21・23・25・26・29は、体部が丸く立ち上るもので、口縁部が直口のものとわずかに外反するものがある。口径12～13cm、器高4.5cm前後である



第32図　土器実測図XVI（第1、2次調査の土師器Ⅲ）



第33図　土器実測図 XVII（第１、２次調査の土師器Ⅳ）

が、19は杯に高台を付したとも言える器形で器高3.5cmと低く、29は口径15.5cmの大型の土器である。内底部は概ねナデ。21は外底部に板目状圧痕を残す。胎土に砂粒を含まず、赤褐色～黄褐色をなすものが多いが、21は砂粒を多く含み、23とともに白っぽい色調でやや軟質である。26は内底部と口縁部の一部にススが付着しており、灯火器としての使用が考えられる。24、27、28は底部からゆるやかに内弯しつつ立ち上る体部が中位ないし上位で稜をなして屈曲し口縁部が外反するもので、口縁部内側はわずかに面をなす。24は口径9.7cm、器高3.7cmと極めて小型の土器で、細身のやや高い高台を付し、底部内外はナデている。27・28は外向する低い高台を付す。胎土には砂粒を含まず、淡黄褐色で、やや軟質、28は外底部にヘラ切り痕を残す。27は内面、特に内底部をヘラで丁寧に平滑化しており、外底部は板目状圧痕の上をナデている。なおこのようなヘラによる内面の平滑化は、次に述べる30、31や黒色土器のヘラミガキとは異なるもので、一部の高台付椀や杯にみられる。30、31は大型の土器で、丸味をもって内弯しつつ立ち上る体部と外向する高台をもつ。30は口縁部内側に沈線を有し、口縁部を若干外反させ、体部内外は横方向、内底部は不特定方向に丁寧にヘラミガキしている。胎土は精良で淡黄灰色を呈し、硬質な焼成である。31は内面に粗いヘラミガキを施し、砂粒を含まず茶褐色をなす。これらの形態、手法の特徴は、黒色土器と通ずるものであり、黒色化がなされていないものとみることも可能である。32～37は底部のみの資料である。内外面はナデ、あるいは未調整で、33は板目状圧痕をもつ。高台は、32、36でほぼ垂直で、33は端部を細くし、34、37は若干内弯気味に立つ。

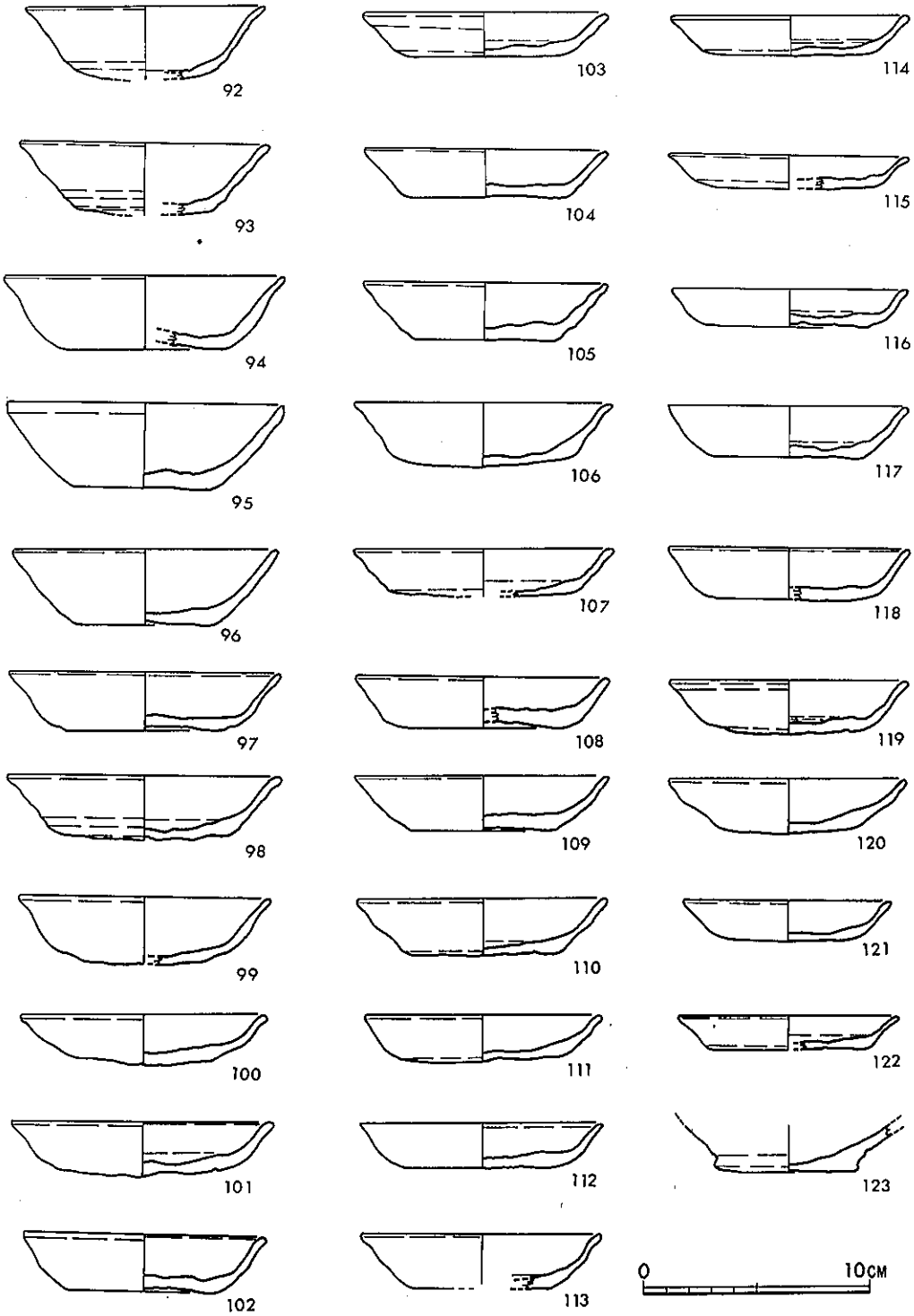
②杯（第32図～第35図）

（A）ヘラ切り底杯（第32図～34図、38～123）

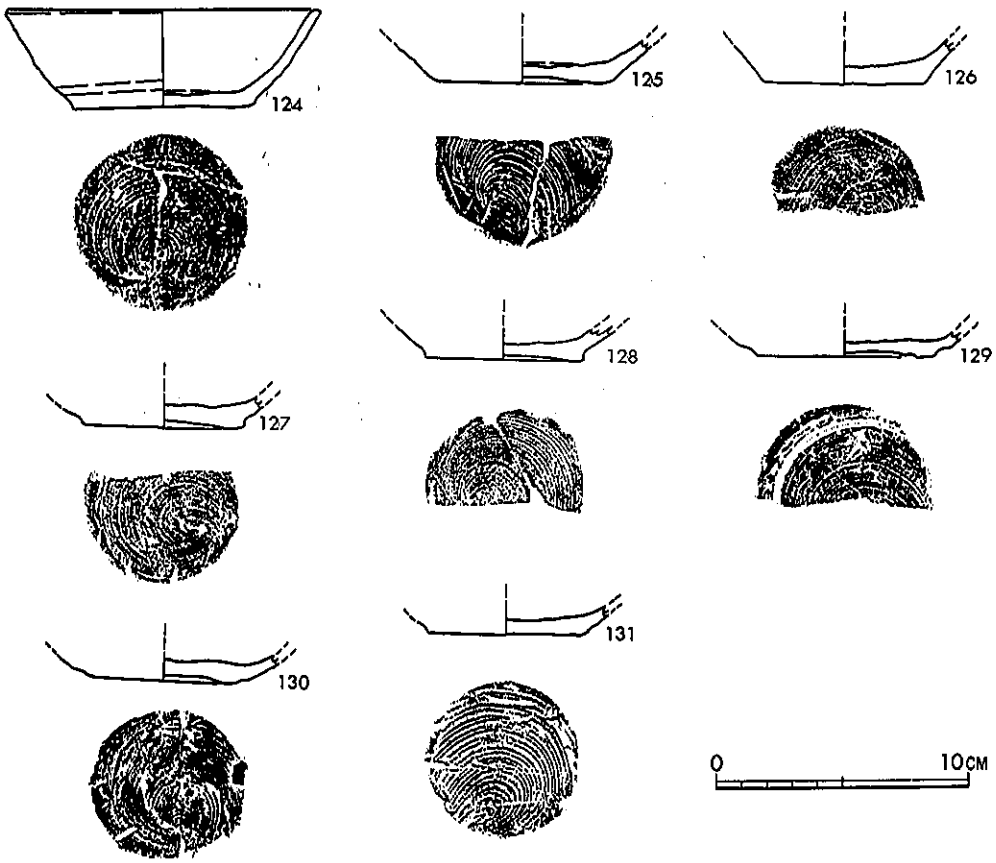
38～91は第1、2次調査、92～123は第3次調査出土である。器高が低く、小皿ともいうべきものもあるが、杯に統一した。時期的な特徴を最もよく表わしていると思われる調整手法の特徴と法量をもとに分類し、説明を加える。

38は、底部が丸味をもち、体部が稜をもって立ち上る形態をなし、底部は厚みをもつ。外底部は丁寧にヘラケズリし体部はヨコナデ。ロクロは使用していない。この杯は、干潟遺跡等、8世紀代の筑後川以北地域にみられるものに形態、調整手法が類似するが、器壁の厚さ、胎土、焼成等が異なり、その位置付けは現在のところ不明である[註]。39～91は、形態上から大別して、(i) 体部が丸味をもつもの（39～47、62）、(ii) 体部が直線的にのびるもの（49～51、54～59、63～73）、(iii) 体部が上位で外反するもの（74～80）に分けられ、(ii) には器高の高いものと低いものがある。口径は、11.7～18.3cmで幅をもつが、12～14cmのものが最も多い。さらに調整手法からは、ヘラケズリ、ヘラミガキをするもの（39～43、62）としないものがあり、前者は体部に丸味をもつものにほぼ対応し、14cmを超える大型品が多い。体部外面下半あ

1 土 器 類



第34図　土器実測図 XVIII（第３次調査の土師器Ⅰ）―

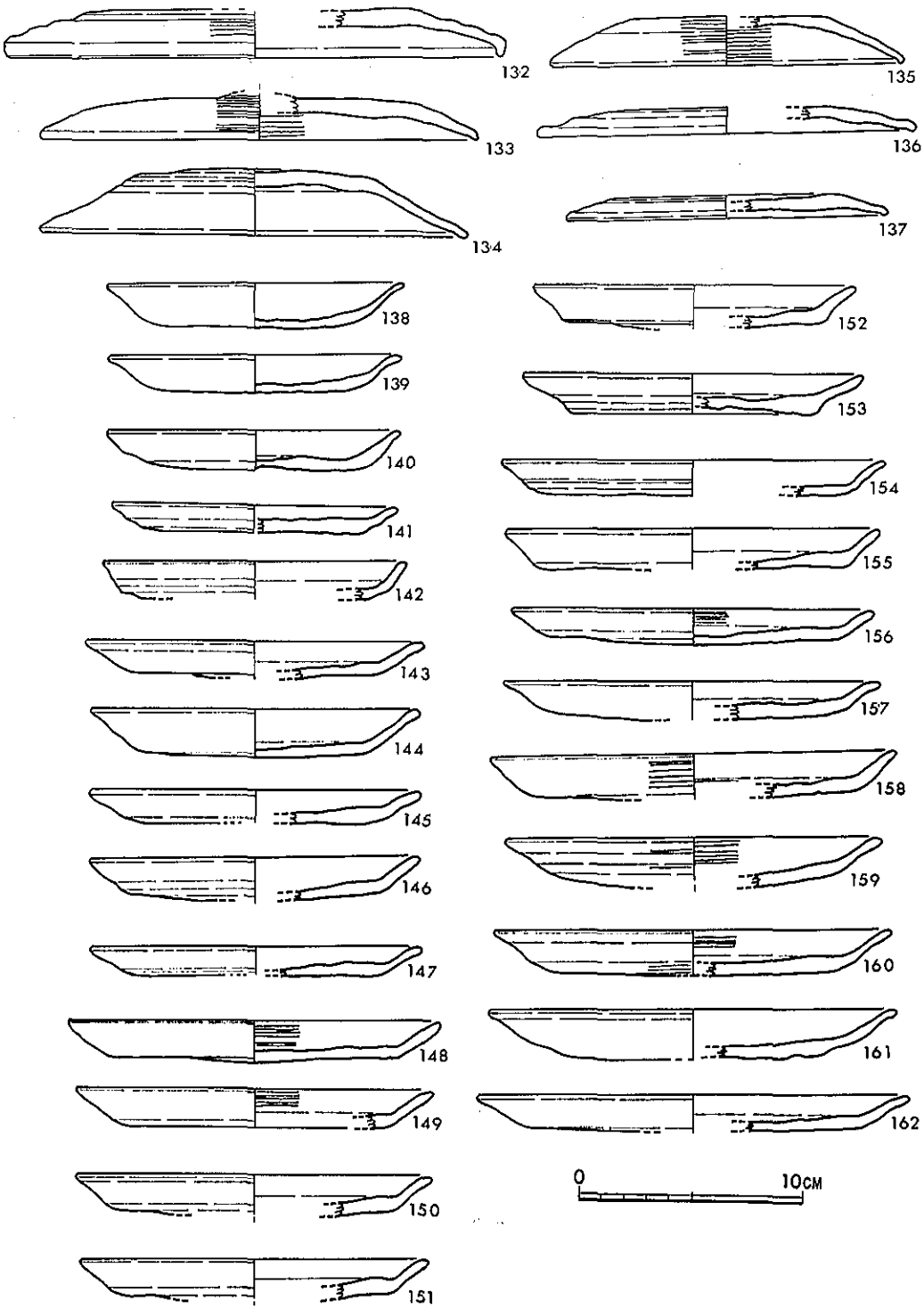


第35図　土器実測図XIX（糸切り底土師器）

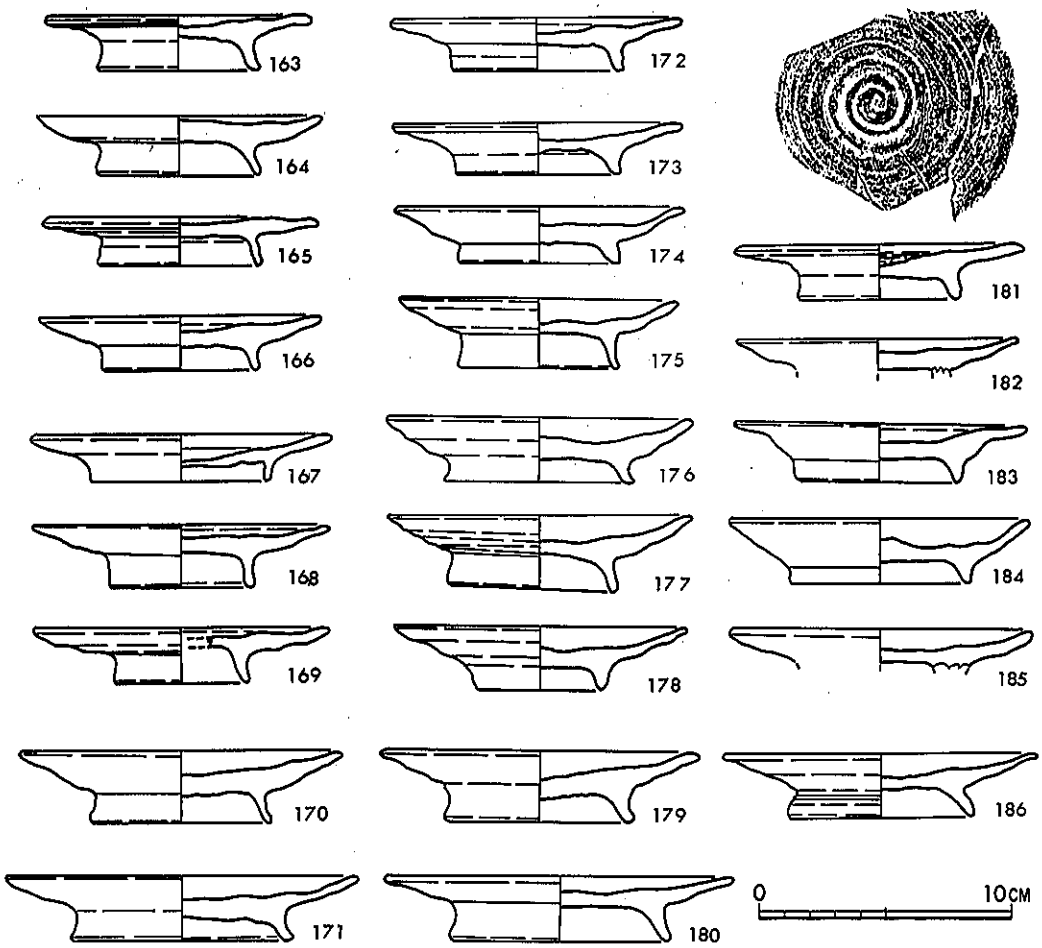
るいは外底部を回転ヘラケズリし、さらに内外面を回転ヘラミガキしたもので、調整には時計廻りのロクロを使用している。赤褐色～明褐色の明るい色調をなし、胎土は良質で精製された土器である。45～61、63～91は、平坦な底部をもち、体部との境が明瞭なものが多いが、86、87は底部に丸味を帯びる製品である。体部はヨコナデで、底部内外は基本的にナデ調整するが、未調整のものもある。また、外底部に板目状圧痕をもつ製品がある(55、64、76、86)が、内底部に強いナデの痕跡を残しており、圧痕の方向と対応している。胎土は概ね良質で、赤褐色～茶褐色をなすものが多いが、白っぽい色調のものもみられる。ロクロの方向が判明する例では時計廻りである。82は口縁部内外にススが付着しており、灯火器として用いられたものであろう。

92～123は、法量から (i) 口径12cm前後のもの (94～98)、(ii) 10.5～11.0cm前後のもの (92、

1 土 器 類



第36図　土器実測図XX（第３次調査の土師器Ⅱ）



第37図　土器実測図XXI（第3次調査の土師器Ⅲ）

93、99～120)、(iii) 10cm 以下のもの（121、122）に分けられる。底部は概ね平担であるが、92、99は丸味を帯びる。基本的には底部内外をナデるが、ヘラ切り痕や水挽き痕を残すものもある。外底部に板目状圧痕をもつものが多く、その中で103、104は細かい簾状の圧痕である。これらも内底部に強いナデの痕跡をもち、板目状圧痕と内底のナデとの関係が考えられる。110は高台付椀の 27 と同じく内面をヘラで平滑化している。胎土には砂粒を含まず、色調は様々であるが、茶褐色～明褐色をなすものと、黄灰色、黄灰色～黄白色のものがある。ロクロの方向は116が逆時計廻りである以外は時計廻りである。105は外底部に「＋」字のヘラ記号を有す。123は、円板状の高台を有する杯で、底径6.2cmの内底部はナデ、外底部には粗い板目状圧痕を残し、胎土は粗く、磨耗している。施釉陶磁器を模倣した器形である。

註　田崎博之氏の御教示による。

（B）糸切り底杯（124～131）

すべて回転糸切り底の杯で、ごく少量の出土をみた。全体の器形を知り得る例（124）では、口径12.6cm、器高3.9cm、底径7.1cmで、体部と底部の境に明瞭な稜をなし、平底である。体部は斜め上方にほぼ直線的にのびる。ヘラ切り底の杯（54、57）などと同様の形態、法量をもつ。体部はヨコナデで内底部はナデている。他の資料は体部を欠くが、ほぼ同様の器形になると思われ、底径6.0～7.0cm。平底のもの（126、131）と若干上げ底気味のもの（125、127、130）がある。また127～131は底部が若干の高さをもつが、糸切りの位置によるのであろう。内底部には糸切りの痕跡をそのまま残す。130は板目状圧痕をもつ。胎土には砂粒を含むものもあり、茶褐色をなし焼成は良好である。また、図示しなかったが糸切り痕の目の粗い資料もある。当地方の土師器におけるヘラ切り底から糸切り底への転換は、従来の研究によると12世紀以降とされているが[註]、本遺跡ではこれらの糸切り底の杯以外に年代を下らせ得る資料は検出されていない。形態、法量がヘラ切りの杯と近似していることなどから、当地方の糸切り底の土師器の出現期について問題を残すと言えよう。

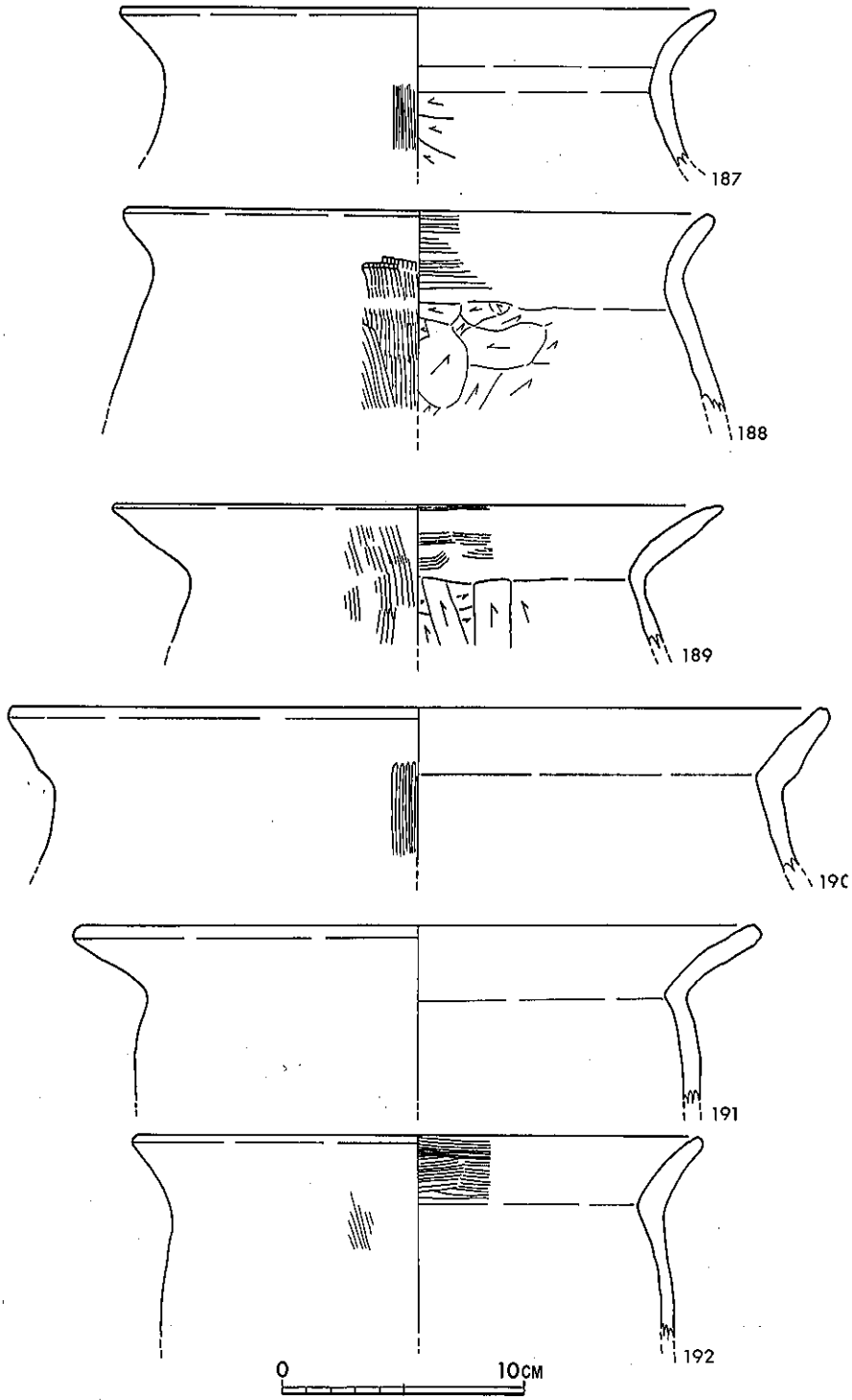
註　横田賢二郎、森田　勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『研究論集』　4　九州歴史資料館　1978

蓋（第36図132～137）

精製品が多く、胎土は良質である。色調は黄褐色～明褐色。口径14.4cm～22.1cm。器高が1.9～2.9cmの高いもの（132～135）と1.0～1.2cmの偏平なもの（136～137）がある。132は口縁部の折り曲げの背が高い製品で、平坦な天井部をもつ。体部と天井部外面をていねいに回転ヘラミガキで仕上げ、天井部内面もヘラミガキを施す。133は口縁部の折り曲げがほとんどなく、内面に段をつけた程度のもので、端部外面をやや凹ませる。天井部と体部の境は不明瞭で、つまみを欠損している。外面は粗い回転ヘラケズリの後、回転ヘラミガキを施し、内面は、体部が回転ヘラミガキ、天井部が不特定方向のヘラミガキである。134は、口縁部の折り曲げが鈍く内に段をもつ程度で、体部外面の上位に沈線を3本入れており、須恵器の蓋（86）と通ずる器形である。体部はヨコナデで天井部はナデ調整。135は口縁部を断面三角形に短く折り曲げたもので、外面の体部上半と天井部を回転ヘラケズリし、その後体部内外に粗く回転ヘラミガキを施している。天井部内面は不特定方向のヘラミガキである。136、137は偏平な体部に鈍い折り曲げの口縁部をもつ。口縁部と体部はヨコナデ、天井部内面はナデで、外面にヘラ切り痕を残す。

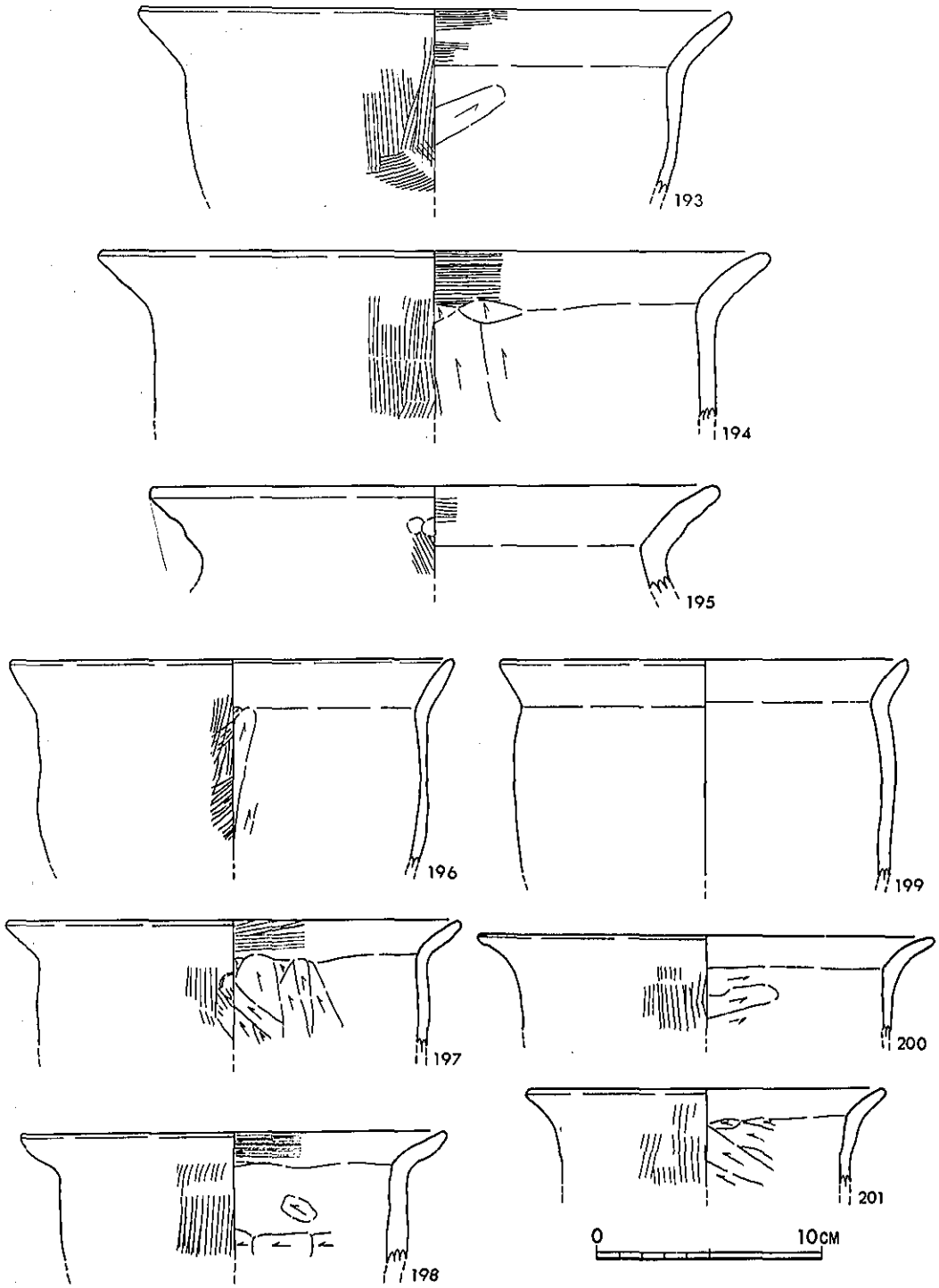
皿（第36図138～162）

口径の大きさから、13.2cm前後のもの（138～142）、15cm前後のもの（12～16、21、22）、16.5cm前後のもの（148、151、154、157、159）、18cm前後のもの（158～162）がある。器高はおおむね1.6～2.2cmの範囲におさまるが、141・147は1.3cmの浅い器形である。底部は平底

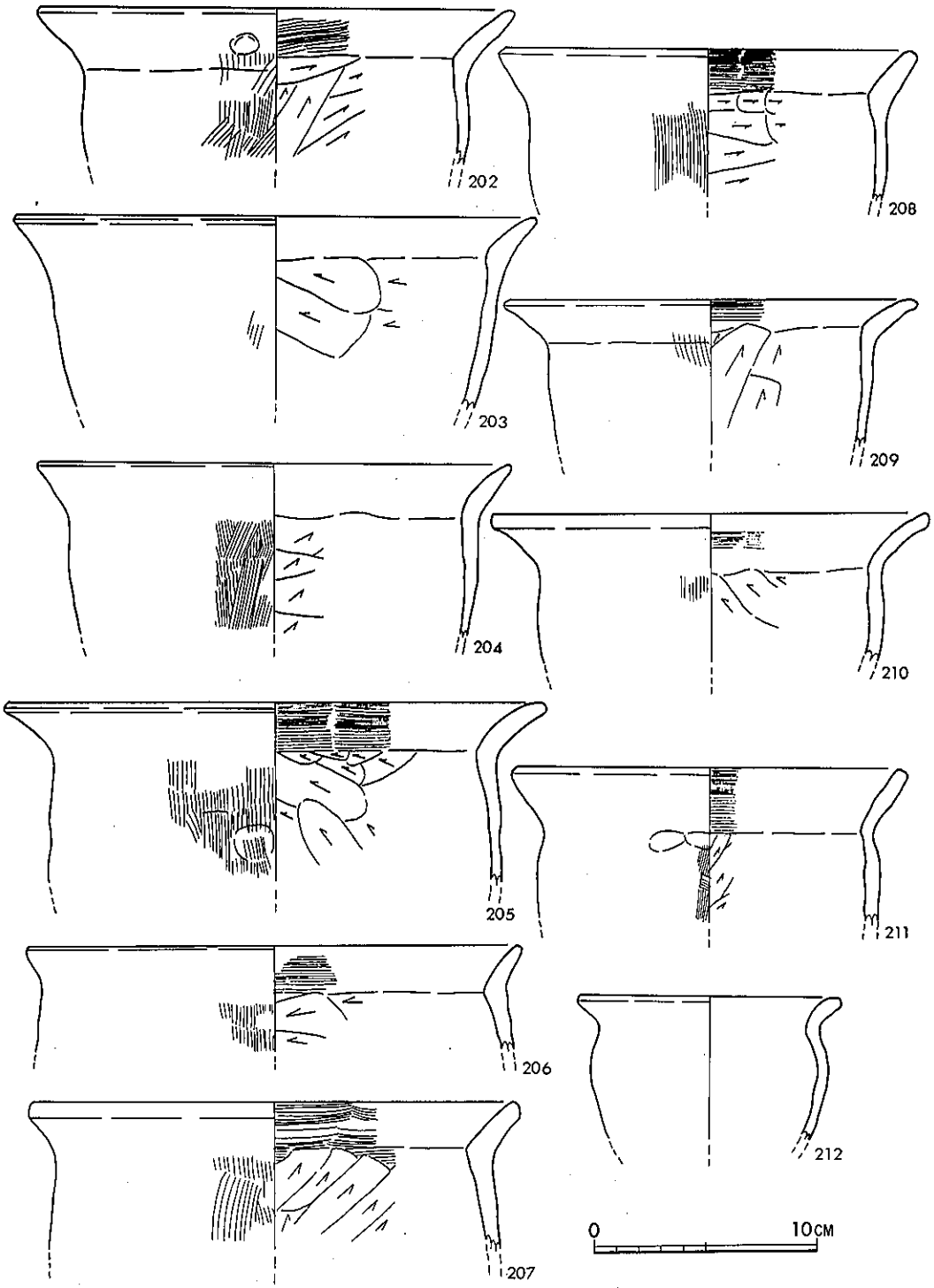


第38図　土器実測図XXII（第1、2次調査土師器甕Ⅰ）

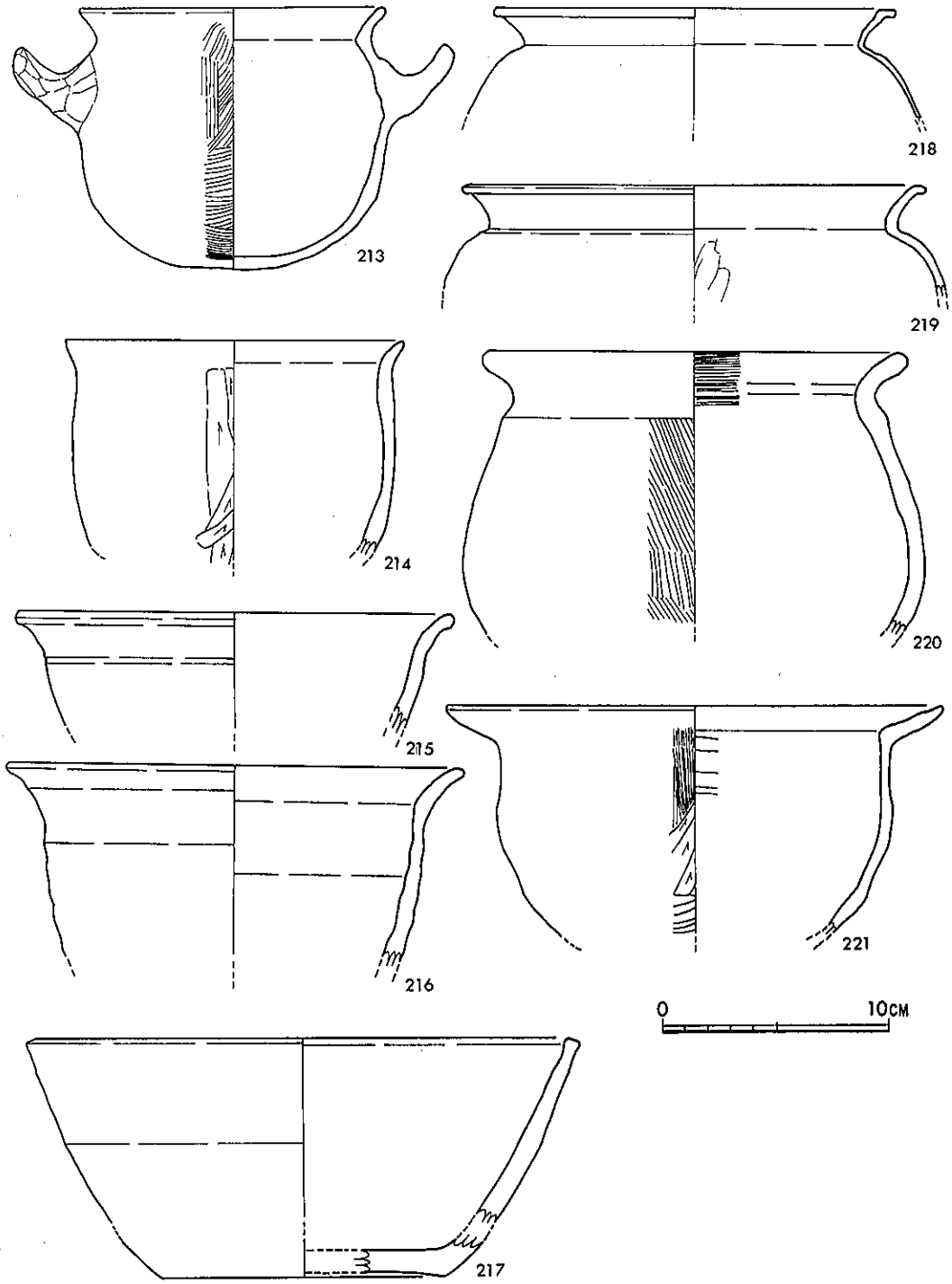
1 土 器 類



第39図　土器実測図 XXIII（第1、2次調査土師器甕Ⅱ）



第40図　土器実測図 XXIV（第１、２次調査土師器甕Ⅲ）



第41図　土器実測図 XXV（第１、２次調査土師器甕Ⅳ）

かややふくらみをもち、体部は直線的にのびるものと若干外反するものがある。前者においては、体部と底部の境が明瞭な稜をもつものが多い。138～140は体部と底部の境に丸味をもち、142は体部の立ち上りが急な製品である。153は若干上げ底気味で、体部を大きく外反させ、やや内弯気味にまとめている。161は蓋かもしれない。底部内外をナデ調整するものと、未調整のものがあり、144は板目状圧痕をもつ。また、146、148、149、156、158～160は、外面の底部あるいは体部下半を回転ヘラケズリし、さらに体部内面あるいは内外面を回転ヘラミガキした精製品で、これらは口径の大きい製品に多く、赤味の強い色調をなす。他の土器も茶褐色～明褐色を呈し、胎土に砂粒を含まず、焼成は良好である。ロクロの方向が判明する例では時計廻りである。

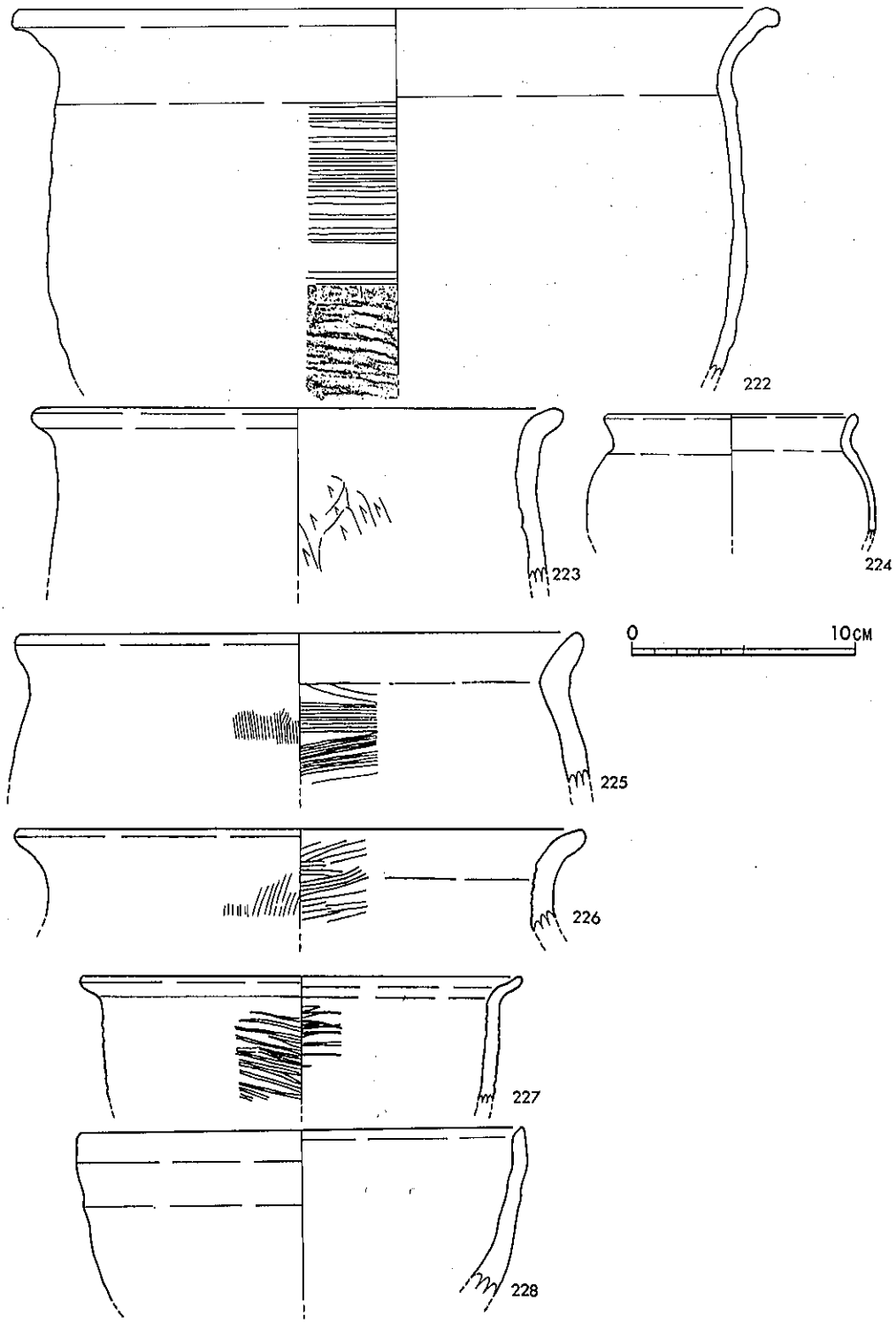
托（第37図163～186）

第3次調査においてのみ出土しており、この時期を特徴づける土器である。総じて器形の変化に乏しい。口径は11.5～12.0cm前後が最も多く、器高は1.8～2.9cmである。底部から体部へ直線的にのび、平坦な皿に高台を付した形のものが多いが、174・178・184は体部が若干立ち上り、深みをもつ製品である。183は体部と底部の境を肥厚させ、174・179・182・186は口縁部が若干外反して、端部上面に面をなす。高台には、垂直に立つもの（166～168・172・178）内面が内傾し、付け根部が肥厚するもの（173・174・183・184）などがあるが、最も多いのは外向する高台である。186は、中位で稜をもって屈曲し、やや内弯気味に立つ特徴ある高台をもつ。体部はヨコナデで、底部内外は基本的にはナデであるが、ヘラ切り痕を残すものもある。166・167・172・179・185・186は外底部に板目状圧痕をとどめており、167はさらに高台端部にも圧痕を有している。181は内底部のロクロ水挽き痕が明瞭な例である。多くのものが精良な胎土で硬質に焼成されており、茶褐色～黄褐色を呈するが、白っぽい色調を成すもの（167・185）もあり、168は二次焼成を受け赤褐色で器表が磨耗している。

甕・鉢（第38～42図、187～228）

187～221は第1・2次調査、222～228は第3次調査出土分である。187～211は口径16.0～38.6cmの甕で、大小がある。頸部が肥厚するものとしないものがあるが、いずれも基本的には「く」の字状に外反する直線的な口縁部を有し、体部があまり張らない製品である。これらの形態的特徴は、8、9世紀代の福岡平野地方に多くみられるものである。しかし、少量ながら187・188・205のよう口縁部が丸味をもち外弯気味にのびるものもあり、この違いは年代差によるのかもしれない。体部外面は縦横方向のハケメを施すものが多い。体部内面は、上あるいは斜め上へのヘラケズリ調整を行ない、口縁部との境は鋭い稜をなす。頸部直下を横方向にヘラケズリするものもある。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で黄褐色～赤褐色を呈す。外面にススが付着しているものが多くみられる。212は頸部に丸味をもつ小壷ともいえる器形で、外面にススが付着している。213は体部が丸味をもち上位に把手を付した甕で、あるいは片側のみ

1 土 器 類



第42図　土器実測図 XXVI（第３次調査土師器甕）

に把手がつくものかもしれない。体部内面はヘラケズリ調整を行い、口縁部との境に鋭い稜をなす。外面はハケメ調整で、把手は角状を呈して上方に内弯しつつのびナデ仕上げである。これ以外にも角状をなす、甑、把手付甕、カマド等の把手が少量出土している。214は、外面を下から上に粗くヘラナデし、口縁端部をそろえず、雑なつくりである。215、216は、内外ヨコナデ調整で口縁部はゆるやかに外反し、鉢とも言える器形で、215は外面の口縁部直下に沈線を施す。217は口径24.4cmの大型の鉢で、平坦な底部から直線的に立ち上る体部を有し、口縁端部は平坦に仕上げられている。外面の体部下半と底部を回転ヘラケズリしている。218、219は肩の張った器形で、頸部はすぼみ、口縁端部は外折して水平な面をなす。器壁を薄く硬質に仕上げている。220は胴部が張り、下位に最大径をもつ厚手の製品で、わずかに肩をもち、口頸部は丸く外反する。221は器高の低い鉢とも言える器形で外面の下位には平行叩きを施し内面はナデている。

222は口径34.6cmを測る特大の甕で体部に膨みをもたず口縁部はゆるやかに外反し端部が肥厚する。体部外面の上位は横方向のハケメ、中位以下は粗い平行叩き目を施し、内面はナデている。223、225、226は口径25cm前後で、227は口径20cmの甕で短く外反する口縁部を有し、胴部が張らない製品である。体部外面には横あるいは縦方向のハケメを施し、内面は205では下から上へのヘラケズリ、225、226、227では横方向のハケメである。225は小壺とも言うべき器形で短い口縁部と球形の胴部を持つ。228は鉢で、口縁部内側に外傾する面をなし、内外面をヨコナデで仕上げている。

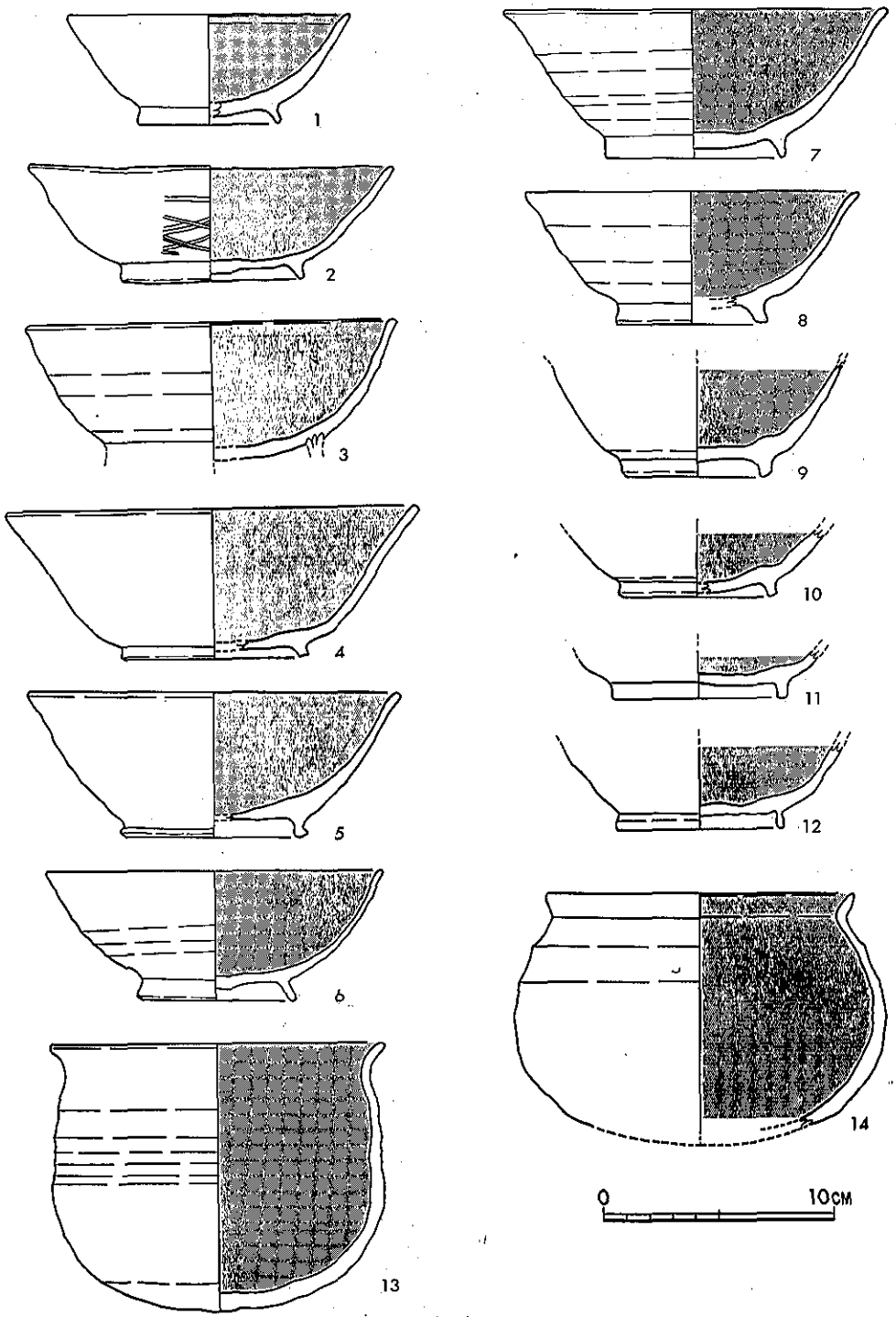
(5)　黒色土器（第43～45図）

器面をヘラミガキし、黒色に燻したもので、内面のみを燻した黒色土器A（内黒土器）と、内外面を燻した黒色土器Bがある。黒色土器Aはかなりまとまった量が出土しており、第3次調査においては、黒色土器Bよりも量は多い。高台付椀と甕がある。黒色土器Bは、第3次調査においてのみ出土しており、器種としては高台付椀だけである。

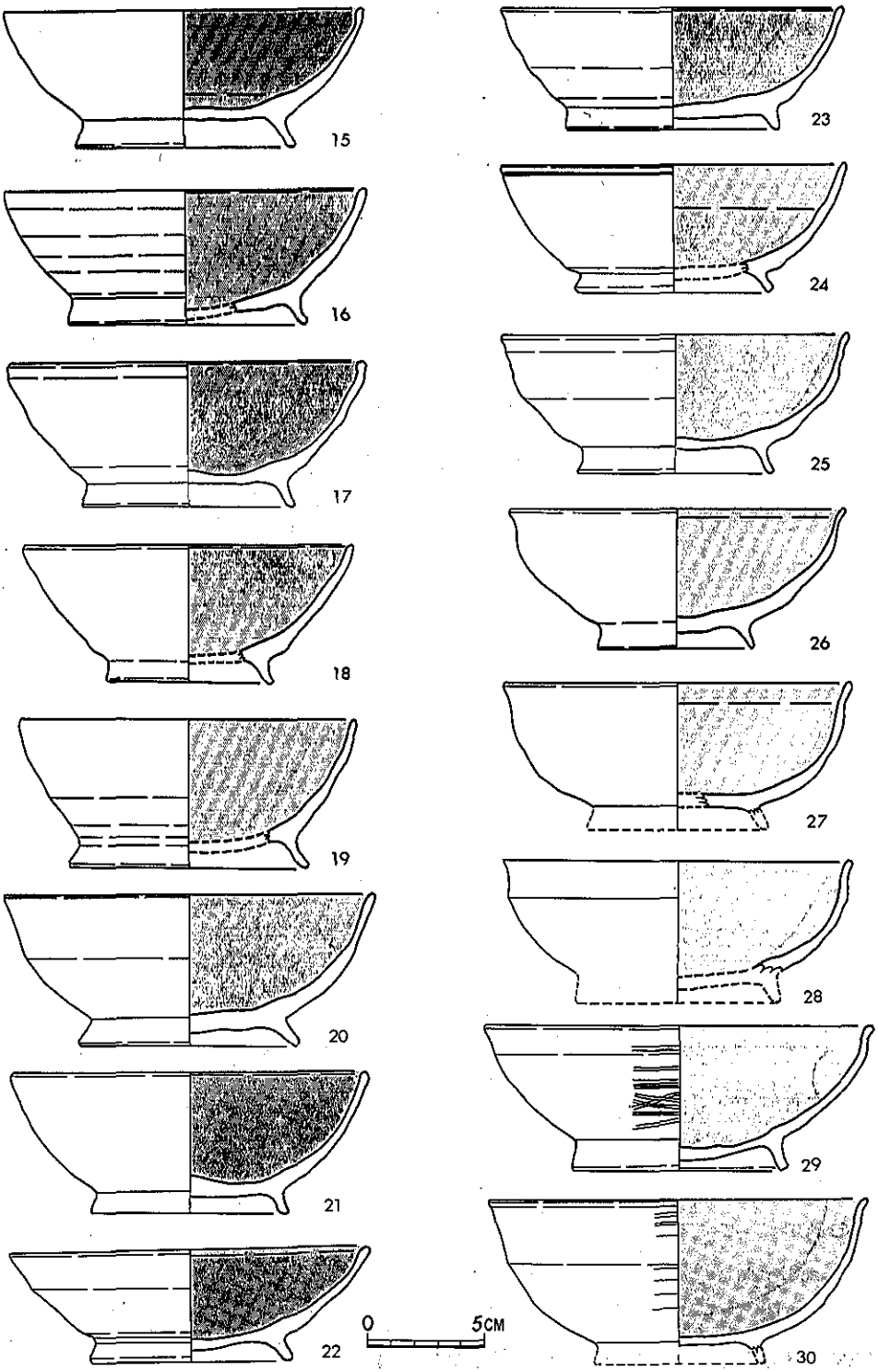
①黒色土器A（第43図1～14、第44図15～30、第45図31～34）

高台付椀（1～12、15～34）

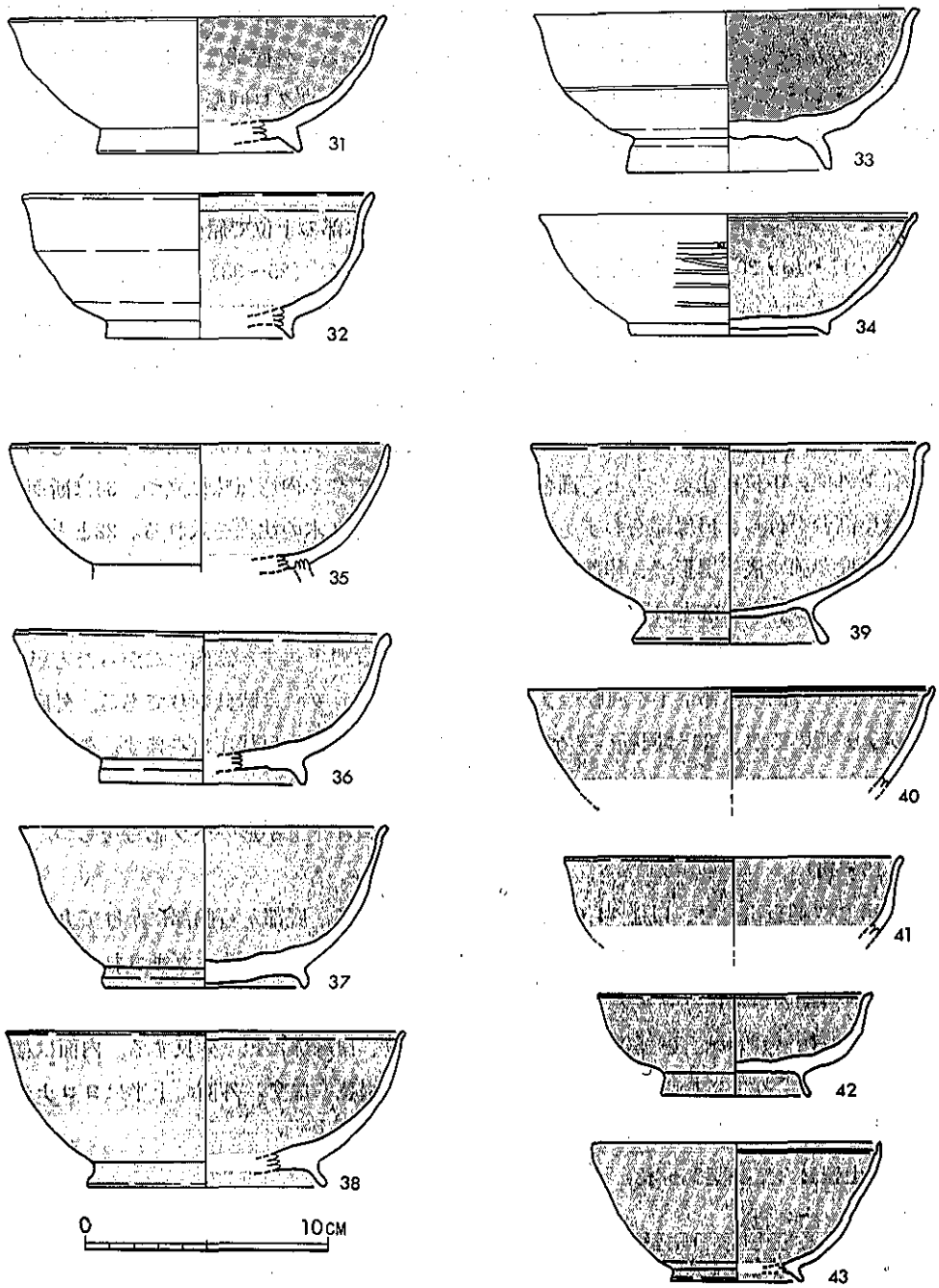
1～12は第1・2次調査、15～34は第3次調査出土である。形態的には土師器高台付椀と通ずるが、一般により大型である。1～12は、体部が直線的にのびるもの（4・9）と、体部が丸味をもち内弯しつつ立ち上るもの（1～3、6）に分けられる。5・7・8はその中間的な様相をもつ。高台は垂直に立つかやや外向し、端部は平坦に仕上げられている。5の高台は中位で屈曲してやや踏ん張った形をなし、6・12は細身のつくりである。口径15～16cm、器高5.5～6.5cm前後が多い。内面は、体部を横方向、底部を不特定方向ないし一定方向に丁寧にヘラミガキした後、黒色に燻しており光沢をもつ。口縁部の外側に炭素吸着が及んでいる例もあ



第43図　土器実測図 XXVII（第1、2次調査の黒色土器）



第44図　土器実測図XXVIII（第３次調査の黒色土器Ⅰ）



第45図 土器実測図 XXIX（第3次調査の黒色土器Ⅱ）

る。外面体部下半を回転ヘラケズリしているもの（1・4・7・8）がみられるが、ヘラケズリした範囲には差があり、4では、口縁部直下にまで及ぶ。2は体部の外傾度の強い浅い器形で焼き歪みが激しく、体部外面を乱雑にヘラミガキしている。外底部は、ナデているものが多いが、5・10・12・13ではヘラ切り痕と板目状圧痕を残す。ロクロ回転方向は判明する側では時計廻りである。胎土には砂粒をほとんど含まず、焼成は良好で、外面は赤褐色、黄褐色などをなす。15～34は、丸味をもち内弯しつつ立ち上る体部をもつが、口縁部のつくりに、(i) 体部からそのまま移行するもの（16・19・21～24）、(ii) 体部の上位で屈曲し、まっすぐ立つもの（15・17・18・20）、(iii) 屈曲した口縁部が外反するもの（25～33）があり、(iii) では屈曲部に稜をもつものともたないものがある。口径14.2～16.7cm、器高4.7～6.5cmで、高台は外向し端部を丸くおさめたものが多い。内面は、体部を横方向、底部を不特定方向ないし一定方向にヘラミガキし、黒色に燻して光沢をもつ。ヘラミガキの丁寧さには差があり、口縁部内側にミガキを施していない例もみられ、また、炭素の吸着が不充分で黄灰色をなすものもある。33は体部外面の中位に沈線をもち、高台は上位で屈曲してやや内弯気味に立つ。34は断面三角形の低い高台を付し、口縁部をわずかに外反させ、内側に2本の沈線を入れる。22とともに体部の外傾度が強く浅い器形で、体部外面には粗いヘラミガキを施し、焼成後、口縁部直下に径3mmの孔を穿つ。29、30も外面にヘラミガキを施しているが、これらのミガキは非常に乱雑で、後述する黒色土器Bの外面のヘラミガキとは異なり、黒色化する意図はなかったと思われる。26・31は外面の体部下半を回転ヘラケズリしており、ロクロは時計廻りである。外底部は大半がナデているが、26は回転ヘラケズリを施し、25・33は板目状圧痕を残す。外面の色調は、赤褐色系の濃いものと、黄灰色～乳灰色の淡いものがあり、胎土には20を除いて砂粒をあまり含まず、焼成は良好である。21は、焼成後、内底部に「＋」字形のヘラ記号をもつ。

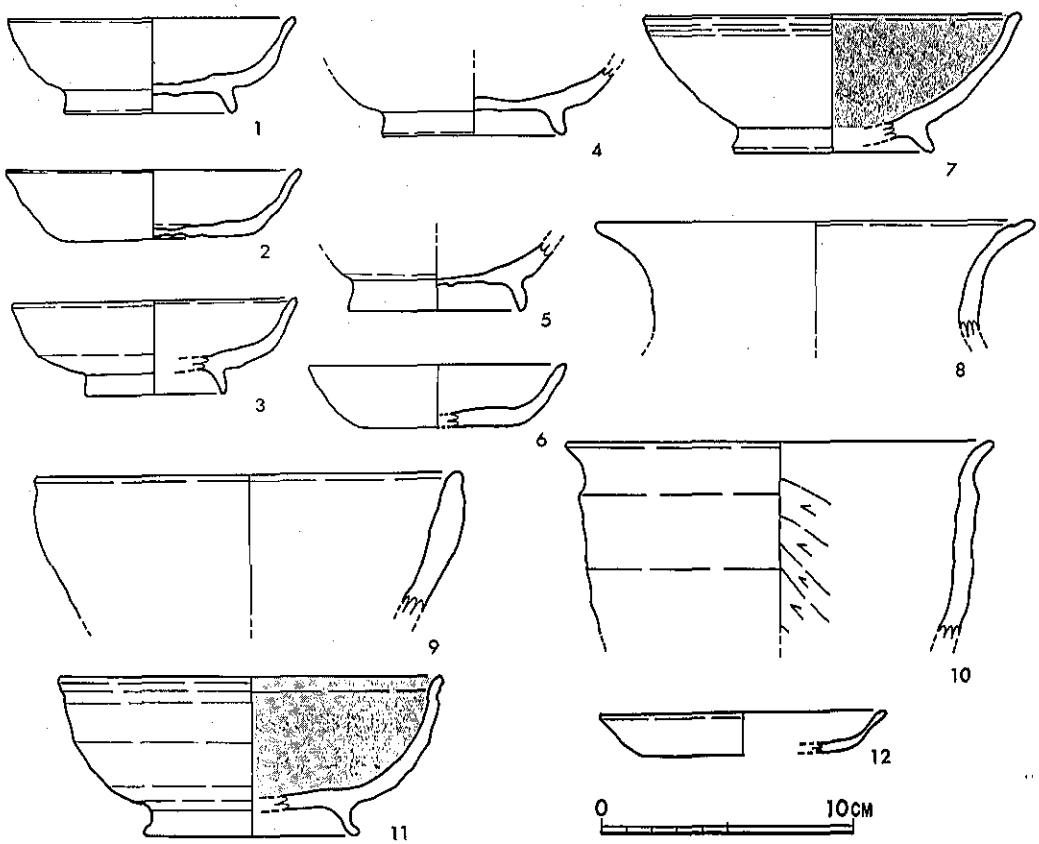
甕（13・14）

13は第2次調査出土で、口径14.6cm、器高11.7cmを測る。底部から胴部にかけて丸味を帯び、頸部はややすぼまって口縁部がゆるやかに開く。内面は丁寧にヘラミガキされ、黒色で光沢をもち、外面の体部はヨコナデ、底部はヘラナデが施され、暗茶褐色を呈す。14は第3次調査出土で、口径は13.4cm。胴部は丸味をもって強く張り、口縁部は短く外反する。内面は横方向に丁寧にヘラミガキされ、炭素の吸着が不充分で淡黒褐色をなす。外面の上半はヨコナデ、下半はナデで、一面にススが付着している。

②黒色土器B（第45図35～43）

高台付椀（35～43）

体部は丸く内弯気味に立ち立る。口縁部が外反するものとしないものがある。口径は16cm、器高は6.5cm前後が多い。高台は概ね外向するが、36・37は中位で屈曲し、鉤状に立つ。39は端部が肥厚する背の高い高台を付し、口縁部は強く外折する。40・43は口縁部内側に沈線を施



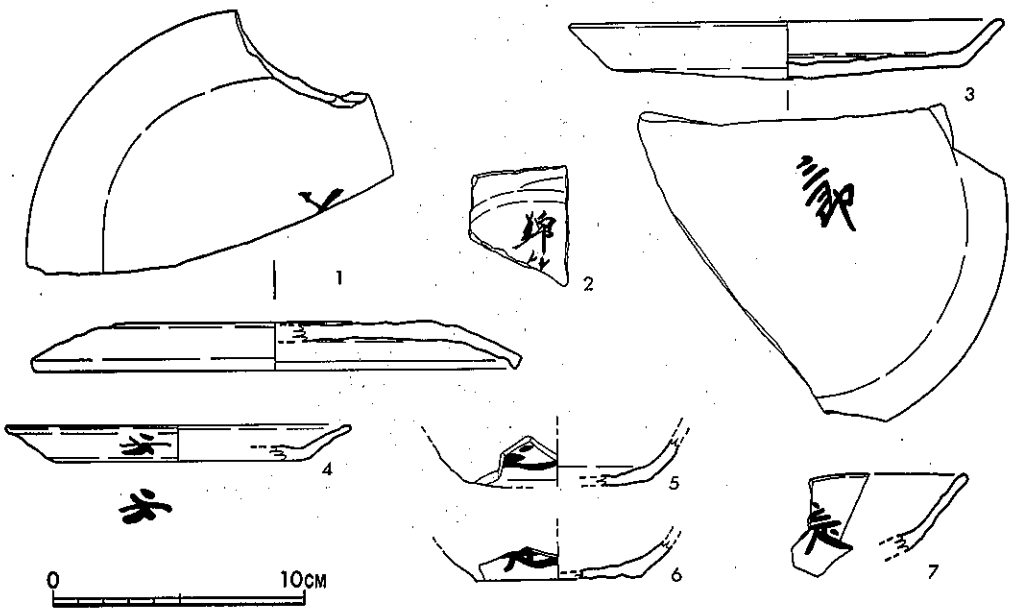
第46図　土器実測図XXX（貝塚出土土器）

し、43は器高に比して口径の小さい特異な器形である。42は口径 11.4cm、器高 4.3cm と特に小型で、口縁部内側に面をなす。いずれも体部内外を横方向、内底部を不特定方向ないし一定方向に丁寧にヘラミガキし、黒色に燻すが、ミガキの前に外面体部下半を回転ヘラケズリするもの（36・37・39）がある。37・39はさらに外底部をも回転ヘラケズリしている。ロクロの回転は時計廻り。42は板目状圧痕をもつ。胎土には砂粒を含まず、焼成は良好で、炭素吸着が不充分のため茶褐色をなすものもある。

(6) 貝塚出土土器（第46図）

貝塚からは多量の土器が出土したが、その多くは未整理で、とりあえず復元、図化されたものを示し、その概要を記す。

1～10は第1貝塚出土である。2・6は土師器で、2は口径 11.cm、器高 2.8cm、6は口径



第47図　墨書土器実測図

10.3cm、器高 2.5cm と前者の方がやや大きい法量をもつ。2は外底部をナデ調整し、黄褐色を呈すが、口縁部から体部にかけて赤褐色に変色している。1・3～5は土師器高台付椀で、1・3は杯に高台を付した形をなす。口径11.5cm前後、器高 3.8cm、高台径 5.7～7.4cmで、高台はやや内弯気味のもの（3・5）と、外方へ開くもの（1・4）がある。内底部はナデ、外底部には板目状圧痕を残す。体部は中位で屈曲し、杯に高台を付した形をなす。7は黒色土器Aの高台付椀で、外向する高台と丸味を帯びる体部をもつ浅い器形である。体部上位に弱い屈曲をもち、外面の口縁部直下には2条の沈線が走る。端部はやや肥厚して上面が面をなす。内面には丁寧なヘラミガキを施し、外面はヨコナデで赤褐色を呈す。8は製塩土器Ⅰ類の口縁部の可能性が強い。強く外反し、端部内面は凹んでいる。砂粒を多く含み外面にはすすが付着して黒褐色を呈す。9は土師器の鉢で内外をナデ、10は甕で内面をヘラケズリしている。11と12は第3貝塚出土で、黒色土器Aの高台付椀と土師器杯である。11は外方へふんばった高台を付し、体部は内弯しつつ立ち上る。口縁部は若干外反し、外面直下に2条の沈線を入れる。体部外面の中位を回転ヘラケズリし、内面はヘラミガキである。口縁部外面にも炭素吸着がみられる。12は口縁部がやや肥厚し、乳灰色をなす。（市橋）

(7)　墨書土器

1～3次調査で7点がある。いずれも断片的な資料で解読できるものは少い。1は蓋の天井

部外面、2は杯または皿の底部、4は皿の体部、5～7は杯の体部に墨書したものである。1は解読不明、2は「綿□」、3は「三郎」、4は「前」か、5～7は解読不明である。(山崎)

2　施釉陶磁器

(1)　緑釉陶器（第48図1～9）

出土した緑釉陶器は、皿、椀、壺である。また、それらは土師質のものと須恵質のものとにわかれる。

第1次調査出土（1）

本次調査により出土した数は極めて少ない。図化できるのは、僅かに1点だけである。

椀（1）同一個体と考えられる破片を合成図示した。口縁部を若干外反させ、円盤状の高台を造り出している。口縁部内外面および体部最下部と底部周辺部は生乾燥時にヘラ削り調整を行っている。生乾燥時に実施しているため、一見ヘラミガキ状を呈する。底部に糸切りの痕跡が僅かに観察できる。淡灰色土師質の胎土に施釉しているが、釉の大部分は剥離している。

第2次調査出土（2～5）

2、3は土師質、4、5は須恵質に焼成されている。

椀（2～4）2は体部中位で僅かに屈曲し、若干外方へふんばった貼付高台を有する。体部内面中位以下はジグザグ状のヘラミガキを行い、また、外面中位以下高台貼付部までは回転ヘラ削り調整を行なっている。内・外底ともに三足の小さな目跡が残っている。内底の目跡の各辺は約5.2cm、外底のそれは約4.1cmで、正三角形に近い焼台を使用している。淡黄白色の胎に淡黄緑色の釉を薄くかけている。3は円盤状の高台を有する。器面の風化が著しく、その調整は明らかでない。乳茶色の胎に淡黄色の釉が薄くかかる。4は口縁部を薄く引き出し、若干外反させるタイプのものである。灰色の胎に黒味をおびた濃緑色の釉がかかる。

皿（5）口縁部を薄く引き出し、円盤状の高台を造り出す。他の同一個体と考えられる底部片から判ずると、底部は円盤状に糸切りされ、その後に周縁部を一段高くするようにヘラ削り調整を行っている。灰的色の胎に淡緑黄色の釉が薄くかかる。

第3次調査出土（6～9）

6・7は土師質、8～10は須恵質である。

椀（6～8）6・7は丸味を有する体部と若干外反する口縁部とからなる。内外面ともにヨコナデ調整だけである。乳茶色緻密な胎に黄緑色の釉がかかる。8は4と相似した調整と釉調である。

皿（9）体部中位に屈曲を有する。体部外面は回転ヘラ削り調整、内面はヨコナデのみである。暗灰色の胎に緑色の釉が薄くかかる。

(2)　灰釉陶器（第48図10～15）

出土した灰釉陶器は、皿、椀、壺、平瓶、甕である。

第2次調査出土（10・11）

椀（10・11）11は口縁部が外反するタイプで、屈曲部以下は回転ヘラ削り調整を行なう。残存部全面は、淡灰色の胎に淡緑色の釉を薄くかける。11は底部を回転ヘラ削り調整を行なった後に高台を貼付している。内面の一部に緑色の灰釉がかかっている以外は無釉である。内面はヨコナデ成形時の凹凸が著しいことから、椀ではなく、あるいは袋物かも知れない。

第3次調査出土（12～15）

椀（12・13）13・13ともに底部を回転ヘラ削りした後に高台を貼付し、内底を露胎とする。灰色緻密な胎に淡緑色の釉がかかる。

皿（14）図上完形になる唯一の灰釉陶器である。内底および体部下位以下を露胎とする。底部回転ヘラ削り調整以外はヨコナデである。淡灰色の胎に淡緑色の釉が薄くかかる。

壺（15）口縁部は直立せず、やや外方へ反り、肩部は撫で肩になる。体部外面は回転ヘラ削り調整を行ない、灰白色の胎に鮮やかな緑色を呈する釉がかかる。

(3)　中国陶磁

1～3次調査を通じて出土した中国陶磁は越州窯系青磁、唐・古代の白磁および長沙窯系かと考えられる褐彩のある青磁に限定される。

第1次調査（第49図）

出土した陶磁器は少数である。

越州窯系青磁

椀（1・2）1・2ともに全面に施釉し、「蛇ノ目」高台を有するⅠ—1類である。1は体部外面中位以下を回転ヘラ削りしている。白灰色の胎に淡黄緑色の釉がかかる。細かい貫入を多数伴う。2は高台外側部分を焼台に載せるため釉を削り取り露胎としている。灰色の胎に細かい貫入を多く含む淡緑色の釉がかかる。

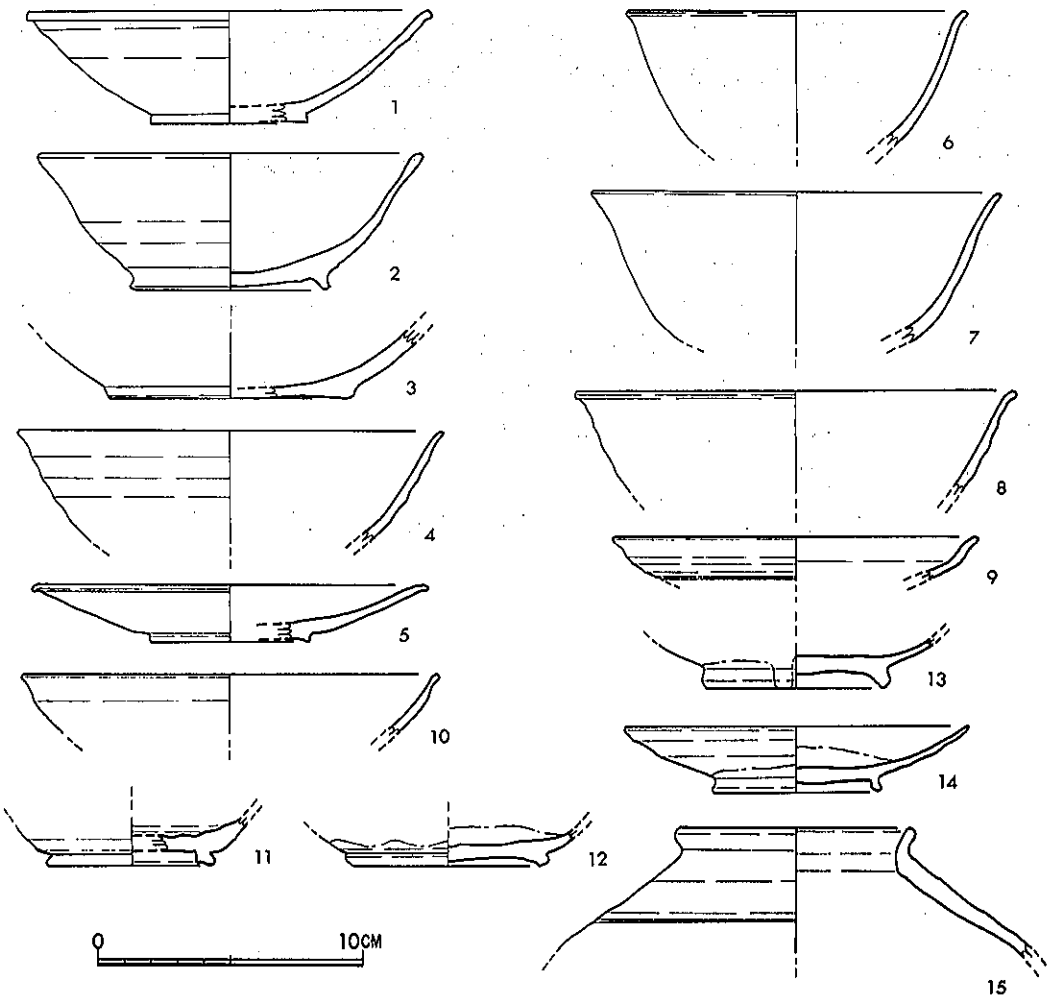
第2次調査（第49図）

越州窯系青磁

椀（3～13）Ⅰ類のなかではⅠ—1類（3～11）が圧倒的に多く、Ⅰ—2類（12）は極めて少ない。出土したⅠ類は体部中位か、それより下部以下を回転ヘラ削りしている。13は円盤状の高台を有し、口縁部を内弯するⅡ—2・d類である。釉下に白化粧土を施し、貫入がない淡黄色の釉がかかる。

白磁

2　施釉陶磁器



第48図　施釉陶磁器実測図Ⅰ

椀（14）小さな玉縁口縁を有する破片とともに14は出土した。白色緻密な胎に白色透明釉を高台端までかけている。畳付部分は手掛ヘラ削りにより釉を完全に取っている。Ⅰ－1類。

第3次調査（第50図、）

海の中道遺跡の発掘調査でもっとも集中して出土した地域である。

越州窯系青磁

椀（2～15）Ⅰ－2類（2～9）が圧倒的に多く出土し、Ⅱ類（11～15）がこれに次ぎⅠ－1類は数少ない。出土したⅠ－2類の特徴は口縁部を薄く引き出し、かつ外反させる。輪花や体部を縦線により区割りする例（7～9）も数多く出土している。10～14は円盤状の高台を有

し、また胎土や成形の粗いⅡ—2類である。いずれも釉下に白化粧土を施こし胎土の粗さをおおった後に淡黄緑色の釉をかける。12は残存部分が多く、内底に白色粘土による5個の目跡が観察できる。15は釉を体部下半以下を露胎とし、輪状高台を有するⅡ—1類である。

皿（16・17）細かい貫入を多数伴う淡黄緑色の釉を全面にかけた精良な造りである。高台畳付部分を焼台に蛾せるために露胎とする。椀Ⅰ—2類に対応するタイプである。16は内底に7個の目跡が残っている。

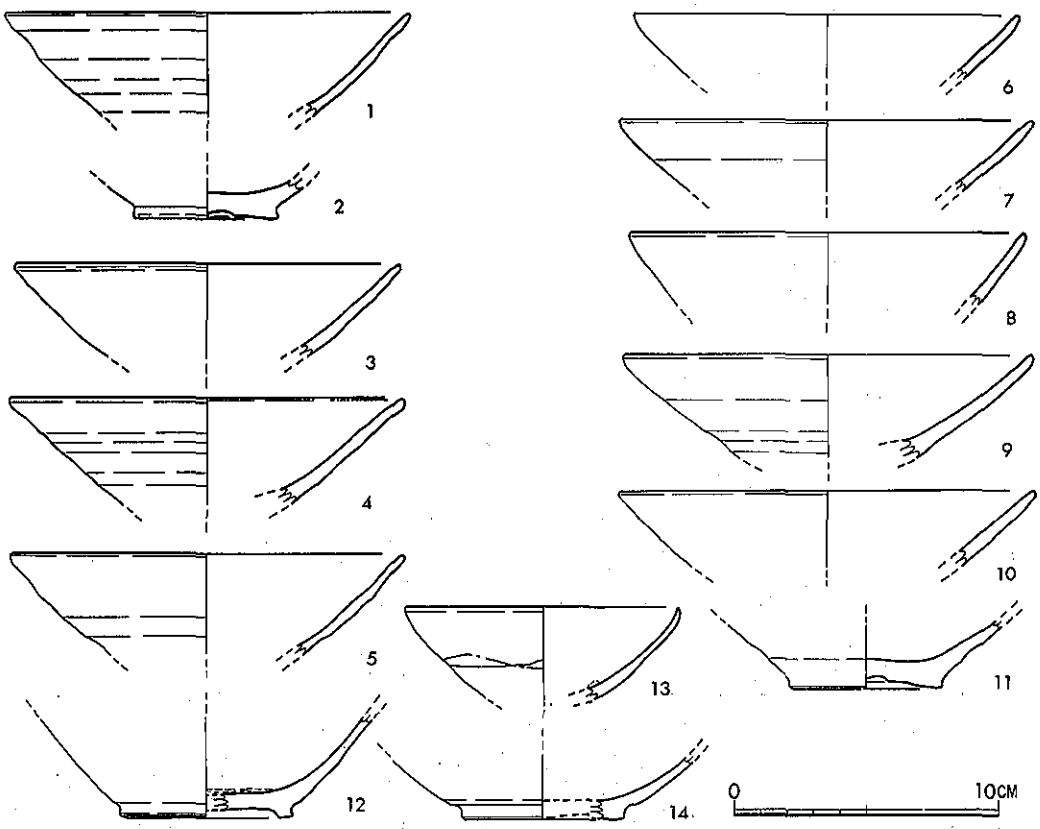
合子（21）暗灰色の胎に淡黄緑色の釉が全面にかかる。

水注（20）暗灰色の胎に淡黄緑色の釉がかかる。精良な造りである。把手の部分の細片も出土している。他に白化粧土をもつ下手の水注胴部片が出土している。

壺（22）白化粧土の上に淡黄色の釉をかけた壺の破片である。胎土は淡い栗色を呈する。体部外面下位は回転ヘラ削り、内面はロクロ目が目立つ。

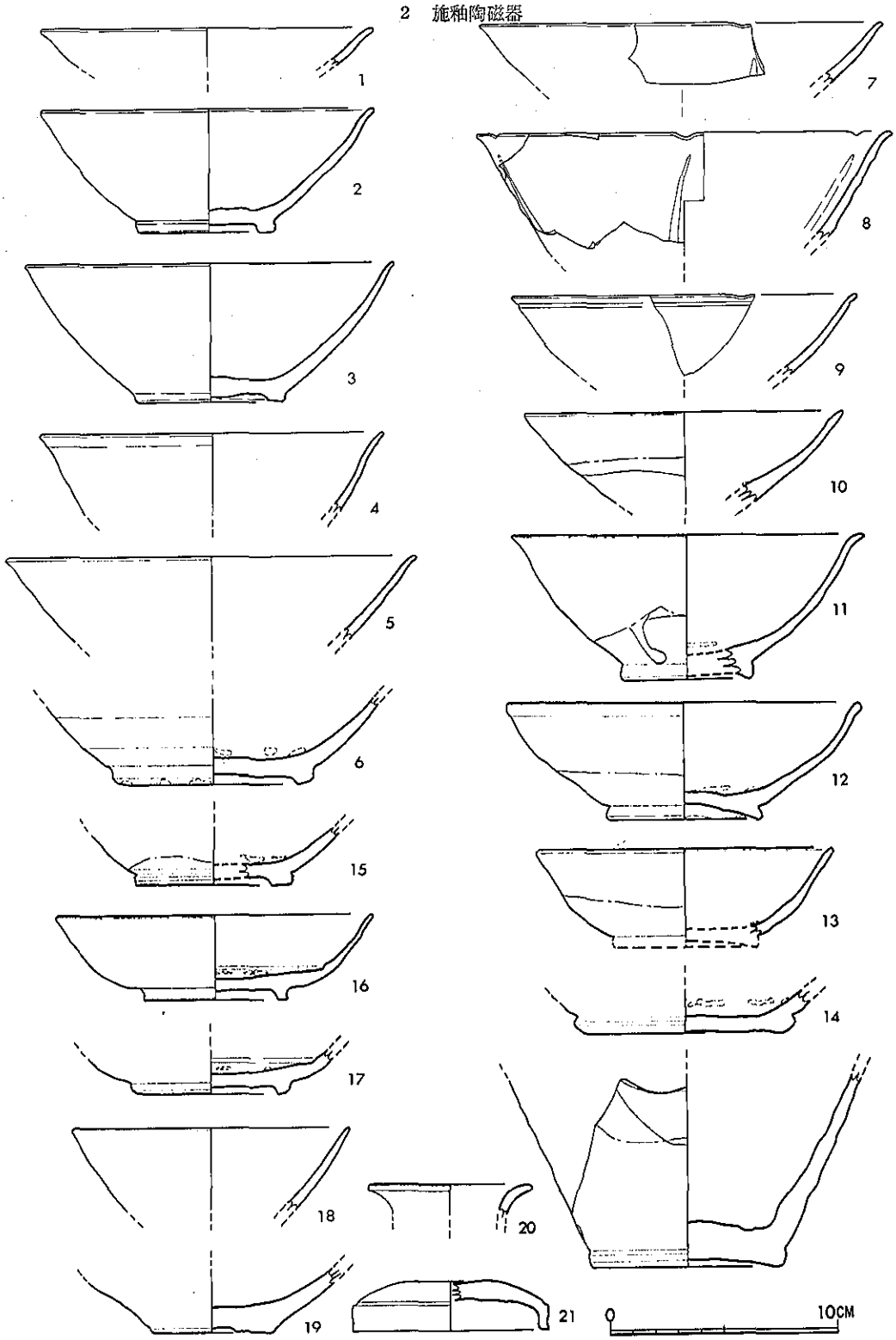
長沙窯系青磁（図版）

青磁釉に褐釉を主として口縁付近にかけた椀か杯の破片が3個出土した。胎土はいずれも暗



第49図　施釉陶磁器実測図Ⅱ

2　施釉陶磁器



第50図　施釉陶磁器実測図Ⅲ

灰色を呈し、白化粧土の上に淡黄緑色の釉をかけている。褐釉は明るい茶褐色を呈し、長沙窯の褐釉に極めて相似している。しかし、褐色部分を除くと、胎土・化粧土・青磁椀ともに越州窯青磁釉Ⅱ—2類と区別がつかないほどである。ここでは長沙窯系としたが、あるいは越州窯系のなかに、このような一群があるのかも知れない。

白磁

椀（1）口縁部丸く引き出したもので、白色緻密な胎に若干空色をおびた透明釉をかけている。外面口縁部付近に貫入を伴っている。椀ではなくて、体部中位で屈曲する高台付皿になるのかも知れない。いずれにしても出土類例の少ないものである。（森　田）

註　横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集　4』1978にて分類した記号を使用する。

3　滑石製容器

(1)　石鍋（第51図）

第3次の調査において、1～3の各層及び貝塚より多量の滑石製石鍋片の出土をみた。完形品はなく、全て破片であり，大きいものでも全体の略三分の一を占めるものが最高である。よって、その個体数については復原が困難で、確言し得ないが、おおよそ十数個体であろう。そのうち、比較的良好な形態を留める特徴的な資料を図化・掲載した。以下、それぞれについて詳述する。

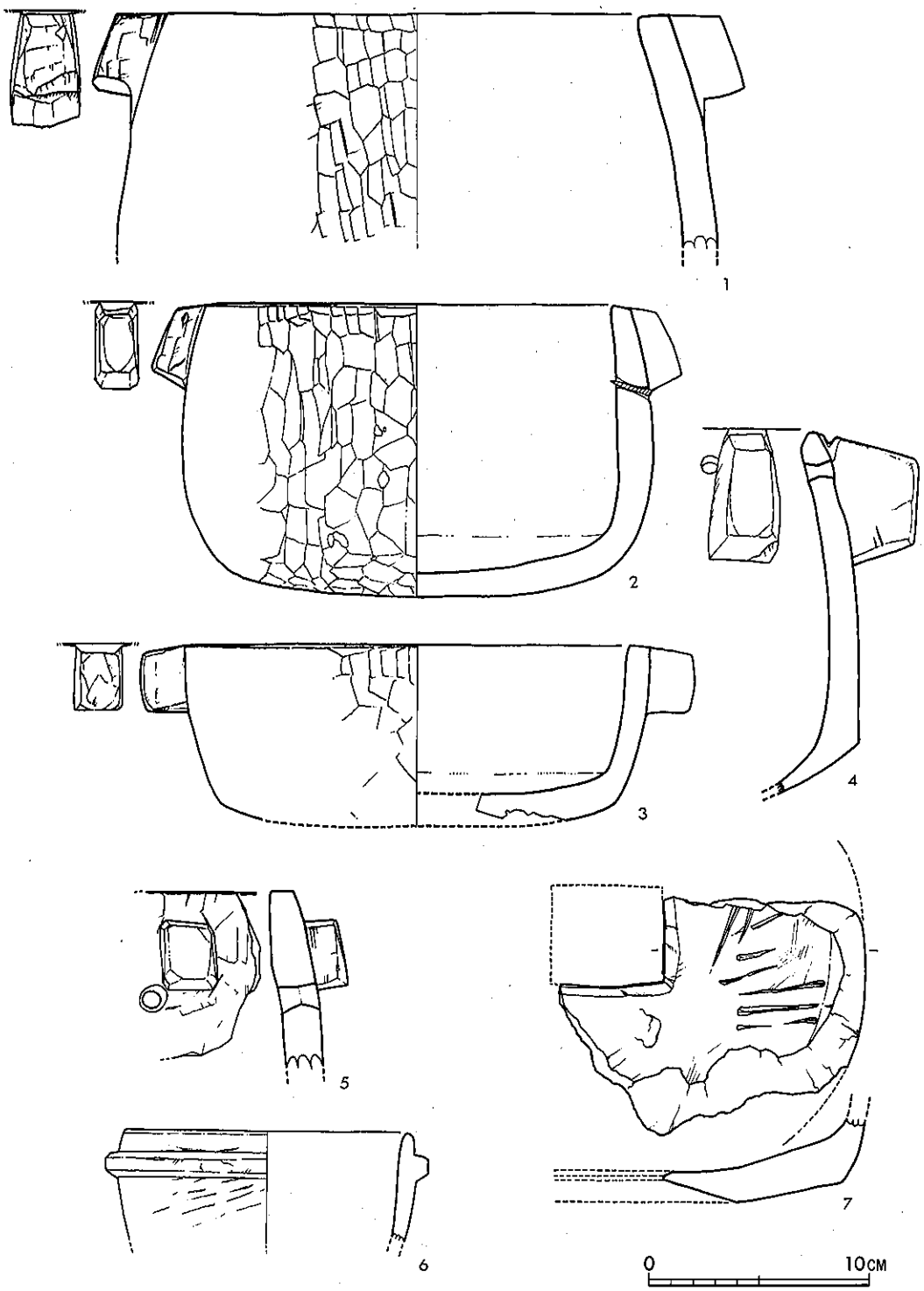
1は復原口径22.6cm（内径20.0cm）を数える、やや胴張りのする器形をもつ製品である。器壁の厚さは最大部で3.4cmである。方形の瘤状把手を有しているが、その数については不明。外面はノミによる削痕をもち、その製形作業は口縁部から胴部の順序で行なわれている。ノミ削りの方向は図上右から左である。略半分にススの付着が認められる。内面と口唇部はノミによる粗削りの後、丁寧な研磨が施されている。2は完形の約三分の一の残存品である。復元口径19.2cm（内径17.4cm）、器高13.4cmを測る。丸底を呈しており、そこからほぼ垂直に立ち上がる壁をもつ。器壁の厚さは1.6cmで、口縁部にかけて窄まっている。外面は右から左方向のノミ削りの痕がみられ、その上にススが付着し、全体に黒褐色を呈する。内面にはノミの粗削りの後、研磨が施されている。口縁下3.5cmのところに孔が穿たれ、クギ状の銹化した鉄片がその中に入った状態で残存している。また底部の破片は、破砕面にノミ痕を留めており、おそらくこの石鍋が割れた後、その破片を加工して再利用しようとしたものであろう。3は器高の低い平底の石鍋で、完形品の略三分の一の破片である。復原口径21.0cm（内径19.2cm）、器高8.3cmで、器壁は底部に厚く1.6cm、口縁、胴部は1.1cmと薄くなる。外面のノミの削痕は、ス及び炭化物の付着により明瞭でない。内面は丁寧な研磨によって仕上げられている。また、内面

の胴部への立ち上がり部には僅かな稜が認められる。4は現存器高16.5cmを数える大型品の破片である。器壁は底部と胴部の境の稜部が最も厚く、1.8cmである。底部は極めて薄く、現存の端部で0.5cm程しかない。外面の底部と胴部の境には明瞭な稜が存するが、内面はゆるやかなカーブを描きながら立ち上がる。外面は大きめのノミ痕を残し、ススの付着もみられる。内面は丁寧な研磨仕上げで、口縁部は角張らないやや丸味を帯びた断面形を呈している。方形の瘤状把手の上面はノミによるV字形の溝が口縁に沿って削出される。また、把手の側方には径1cm程の孔が穿たれている。5は器壁の厚さ1.9cmを測る口縁部の小片である。方形の把手は、他の1～4の資料と異なり、口縁部下1.3cmのところに作り出されている。また、その側下に4と同様の孔（径1.2cm）が穿たれている。外面は丁寧なノミ加工によって整形されている。内面は研磨仕上げによる。6は鍔付の容器の破片で、復原形は円筒状を呈すると思われる。復原口径13.4cm（内径12.4cm）、現存器高5.0cmである。器壁の厚さは0.8cmを測る。内外面ともノミ削りによる整形であるが、口縁部内面には研磨痕が認められる。外面にススの付着がみられるが、破砕面、内面の一部にも存在することから、製品が壊れた後のもので、直接用途を示すものではない。7は中央部に長方形の孔を有する底部の破片であるが、甑としての用途が推察される。底部の復原径は22.0cmを測る。底部中央の孔は1辺が4～5cm程の長方形で、ノミ削りによってあけられたものである。孔に沿って、内外面ともに削り出しが行なわれており、底部の厚さは0.4cm程に仕上げられている。胴部の外面を除いて、他の部分はノミ削りの後、丁寧な研磨が施されている。上で述べた4の石鍋は、底部の壁厚が薄く、7と同様な孔をもった製品である可能性がある。

(2)　滑石製品（第52図）

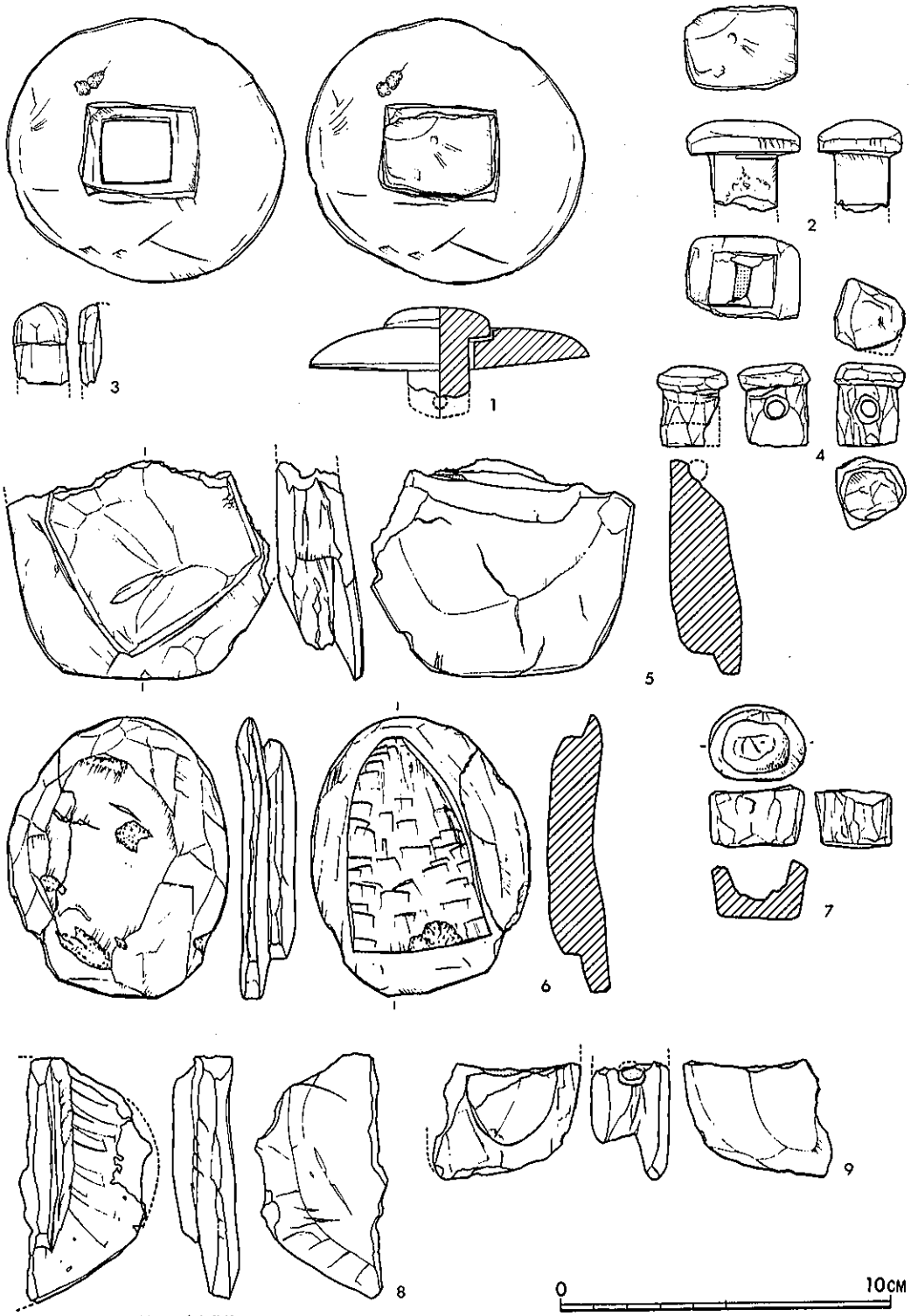
石鍋と同じく3次の調査で検出した。滑石製石鍋の破片を再利用したもので、後章で述べる錘、紡錘車等とともに、蓋5点、つまみ3点、不明石器1点が出土した。

1は不整円形の蓋で、2のつまみとセットをなす。1の表裏面はノミ削りの後、丁寧な研磨によって仕上げられている。中央部には、つまみ取り付け用の長方形を呈する孔と溝が、ノミ削りによって作出されている。2のつまみは、上面観が長方形、側面観がT字状を呈するものであるが、つまみの下端は折損している。全体はノミ削りによる整形を受け、上面のみ、ゆるやかな弧状を描くような研磨仕上げが施されている。蓋の孔に組み込まれる方柱部には、つまみを蓋に固定するための細孔が穿たれ、その中にピン状の楔が入れられたらしい。本品にも錆化した鉄片が孔の中に付着したまま残存している。3はつまみの欠損品であり、その大半を欠いている。ノミ加工による整形である。5は不整な長方形の蓋であるが、略半分を欠損している。蓋裏面の中央部はゆるやかな凹をもち、つまみの表面はススが付着していることより、それぞれ、粜材の石鍋の内器面、外器面の部分に相当する。整形はノミの粗削りによるものであ



第51図　石鍋実測図

3　滑石製容器



第52図　滑石製品実測図

るが、裏面は部分的な研磨仕上げである。長方形を呈すると思われるつまみには、側方から孔が穿たれており、その中に銹化した小さな鉄片が残っている。4は2、3と同じつまみである。全体はノミによる削り整形であるが、上面部に研磨の痕がみられる。組み込み部には、蓋に固定するための孔が両側から穿たれているが、このような鉄片は残っていない。側面部の孔より上の部分にはススが付着している。6は上面観が楕円形を呈する蓋である。しかし、4、9にみられるようなつまみ部の孔は存在しない。つまみの形は三角形をなしている。裏面の中央部は僅かに凹む。整形は全体にノミ削りによるものであるが、特につまみの表面にノミ痕が著しい。裏面の研磨は部分的で、全体に及んでいない。7は用途不明の石製品である。上面観が楕円形を示し、底は平底である。中央にはノミ削りの穴があけられているが、その加工は入念なものではない。器高1.9cm、長さ2.9cm、巾2.3cmを数える小形品である。研磨の痕跡は認められない。8は不整な長方形を呈する蓋の半欠品である。本品は略大半部を失うため、つまみに孔の存在したか否かは不明である。ノミ削りによる整形加工によるもので、裏面の一部には研磨仕上げが施されている。9も4と同様の長方形を呈する蓋の半欠品である。菱形を呈するつまみの側方からは5と同じく、孔が穿たれ、銹化した鉄片も付着したままである。つまみの上面と蓋の表面はノミ削りの後、研磨が施されているが、つまみの側面部分はそのままである。また、蓋の裏面にも研磨仕上げの痕が観察され、中央部は素材である石鍋内器面の孤状の凹みが残されたままである。

以上の諸点を分析してみると、石鍋の破片を利用した蓋には二つの種類が識別されよう。一つは1のようなつまみと蓋が別個に用意され、両者を組み合わせて使用するもので、2、3、4はそれらのつまみの例である。もう一つは、5、6、8、9のようなくくりつけのつまみをもつものである。後者の特徴は、つまみ部に孔を穿ち、そこれ針金状の金属を通し、つり下げることができるような構造をとることである。6は孔を有していないが、他の資料との用途の峻別は明確でない。第二の特徴として素材の利用の仕方に共通点が認められることがあげられる。つまり，4で観察されたように、素材の石鍋の破片は、その表面が製品である蓋の上面（つまみの上面部）に、その裏面が蓋の裏面に相応する位置で加工されるのである。整作の順序は、ノミ削りによって6のような形に整えられた後、孔を穿ち、そして、蓋の裏面は身に嵌くための安定性をもたせるため平坦に研磨され、蓋の表面、つまみの上面が研磨されて、仕上げられるというものである。

ところで、これらの蓋の用途（身の種類）については明確でないが、ススの付着等が認められないところから、火を用いる用器の蓋として用いられた可能性は小さい。この点については、つり下げ用の金属製の把手をもつことの意味付けが、何らかの示唆を与えてくれるかもしれない。

（小　畑）

第1表 土器観察一覧表

器種	Fig	番号	調査年次	遺構、グリッド	口径	器高	調整手法の特徴	胎土	色調	備考
古墳時代土師器										
高杯	17	1	3次	E－8			脚裾部内面ヨコナデ	砂粒多	淡赤褐色	3ケ所透孔 脚径11.6cm
		2		F－4			外面縦方向のハケメ 内面上から下へのヘラケズリ	砂粒少	淡赤褐色	脚径10.7cm
		3		B－8			外面縦方向のハケメ 杯内面渦巻状のハケメ	砂粒多	淡赤褐色	器表磨耗
		4		G－9			内面ユビナデ、外面不明	精良	淡赤褐色	
		5		C－5			杯内面斜方向のハケメ、脚内面縦方向ナデのち斜方向のハケメ脚内面ナデ	砂粒多	淡赤褐色	
		6		H－12			脚裾内斜方向のハケメ、 脚裾外面ヨコナデ	精良	淡赤褐色	
小壺		7		H－3			内外面ナデ	砂粒多	淡灰赤色	胴部最大径約8.8cm
タコ壺		8		C－4	(6.2)		内外ナデ 内面粗いナデ	砂粒少	黄褐色	
		9		C－8		(9.2)	口縁外面ヨコナデ 他ナデ	砂粒少	黄褐色	
4号住居址 須恵器										
高台付杯	18	1	2次	4号住居址			内底ナデ 外底不調整	精良	青灰色	内底に竹管状のもの(径7.5mm)で刺突痕
		2			17.0	5.4		精良	灰色	
		3			16.7	5.1		精良	淡灰褐色	ロクロ時糸廻り
		4			16.5	5.6	内底ナデ、外底高台貼付前に回転ヘラケズリ	砂粒少	灰褐色	高台の貼付中心ずれるロクロ時糸廻り
		5			15.1	5.2	内底ナデ 外底未調整?	砂粒少	淡青灰色	
		6			14.6	5.0	内底ナデ 外底不明	精良	青灰色	
		7			17.5	6.5	内外底ナデ	精良	灰色	
		8			17.4	5.2	内底ヘラナデ 外底ナデ	砂粒少	灰褐色	
		9			11.2	4.0	内底ナデ	砂粒多	青灰色	
		10			13.4	3.4	内外底ナデ	精良	青灰色	外底板状痕?
		11			12.5	3.7	内底ナデ 外底不明	精良	灰白色	
杯		12			13.2	3.7	内底ナデ 外底未調整	砂粒少	青灰色	重ね焼きの痕
		13			12.8	3.8	内外底ナデ	砂粒多	青灰色	
		14			13.8	3.5	内底ナデ	砂粒少	灰褐色	板状痕 器表磨耗
		15			14.2	3.4	内外底ナデ	砂粒少	青灰色	板状痕 重ね焼きの痕
皿		16			15.6	2.2		精良	淡青灰色	
		17			18.2	2.7		砂粒少	暗灰色	焼きゆがみ有り
		18			17.8			精良	青灰色	
		19			18.5	1.9	内外底ナデ	精良	淡灰色	
蓋	19	20			13.4	1.5	内底ナデ 外底未調整	精良	淡青灰色	
		21			14.4		内外底ナデ	砂粒少	淡青灰色	

器種	Fig	番号	調査単次	遺構・グリッド	口径	器高	調整手法の特徴	胎土	色調	備考
壺	19	22	2次	4号住居址	15.1	1.5	内外底ナデ	砂粒少	青灰色	
		23			15.4	1.8 (2.4)	内底ナデ 外底未調整	砂粒多	青灰色	
		24			14.4	1.5		砂粒少	青灰色	
		25			12.8	1.9 (2.3)	内外底ナデ	砂粒少	青灰色	
		26			15.0	2.1 (2.7)		精良	青灰色	「Ⅰ—3、4層」と接合
		27			15.2	2.0		精良	淡青灰色	
		28			14.6	1.7 (2.6)	内底ナデ 外底未調整	精良	青灰色	板状痕
		29			14.4	1.8	内外底ナデ	精良	青灰色	「Ⅰ—3、2層」と接合
		30			18.0	1.6 (2.2)		精良	青灰色	
		31			17.4	1.8	内底ナデ 外底未調整	精良	青灰色	「Ⅰ—3」「F—2、2層」と接合
		32			19.0	1.5		砂粒少	青灰色	
		33					内外底ナデ	砂粒少	青灰色	重ね焼痕口縁 内面に砂粒付着
		34			17.0	2.6 (3.4)		砂粒少	青灰色	
		35			18.0	1.9 (2.8)		精良	灰色	
		36			13.1	1.0	外底未調整	砂粒多	青灰色	
		37			17.7	0.8 (1.4)	内底ナデ 外底未調整	砂粒少	淡青灰色	
4号住居址　土師器										
杯	19	38	2次	4号住居址	12.9		体部下半回転ヘラケズリ 体部内外回転ヘラミガキ	砂粒少	暗褐色	ロクロ時計廻り
		39			14.0		不明	精良	明褐色	器表磨耗
		40			13.2	3.6	体部下位，外底回転ヘラケズリ	精良	淡茶褐色	ロクロ時計廻り
高台付盤		41			25.0	3.0	外底回転ヘラケズリ	砂粒多	明褐色	ロクロ時計廻り 器表摩耗
		42			27.0	3.2	外底回転ヘラケズリ、体部内面回転ヘラミガキ、内底ヘラミガキ	精良	茶褐色	
壺		43			20.0	1.1	内外ていねいな回転ヘラミガキ	精良	明茶褐色	
須恵器										
高台付杯	20	1	1次	不明	12.6	4.0	内底ナデ？ 体部外面下半回転ヘラケズリ	黒色粒子多	淡灰色	ロクロ時計廻り 板状痕
		2		C—12 1号住居址	14.6	4.35	内底ナデ 外底未調整	砂粒少	灰色	口縁部焼きゆがみ一部
		3		E—9	12.0	4.3	内外底ナデ	砂粒多	内灰褐色 外淡灰色	
		4		C—16 C—15	12.4	4.2	内底ナデ 外底ナデ（？）	砂粒少	内暗灰褐色 外黒色	
		5	2次	H—3	12.4	4.0	内外底ナデ	精良	淡灰色	
		6		E—3、E—01、E—02	12.9	4.15	内底ナデ 外底未調整	精良	灰色	
		7	1次	D—17	13.0	4.0	内外底ナデ	砂粒少	青灰色	
		8		D—12	12.9	3.9	内外底ナデ	砂粒多	灰色	

土器観察一覧表

器種	Fig	番号	調査年次	遺構・グリッド	口径	器高	調整手法の特徴	胎土	色調	備考
高台付杯	20	9	2次	F—3	12.9	3.3	内底調整不明 外底ナデ	砂粒多	暗青灰色	一部焼きゆがみ
		10	1次	D—13、E—13	14.1	3.3	内底ナデ 外底未調整	砂粒少	灰色	
		11		D—12	14.0	4.15	内外底ナデ	精良	内灰色 外灰色	光沢あり
		12		D—13	13.2	3.75	内外底ナデ？	精良	青灰色	ロクロ方向 時計廻り
		13	2次	E—01	14.0	3.6	内外底ナデ	砂粒多	暗灰色	ロクロ方向 時計廻り？
		14		不明	14.75	4.3		砂粒少	灰色	
		15	1次	C—12	13.5	3.9		砂粒多	灰褐色	
		16		E—11	13.15	3.4	内底ナデ 外底ヘラヨコナデ	精良	灰色	
		17		C—17	12.4	4.6	内外底ナデ	精良	淡灰色	
		18		E—11	11.55	4.3	内底ナデ 外底未調整	砂粒多	灰色	
		19		C—17	13.5	4.45		精良	灰白色	
		20		D—8	14.3	5.4	内外底ナデ	砂粒多	内灰色 外黒灰色	
		21	2次	H—3	11.6	3.7		砂粒少	青灰色	ロクロ方向時計廻り「？」 高台端部に板状痕
		22		C—？	12.6	4.85		砂粒少	淡灰色	板状痕
		23	1次	C—13	13.35	6.1		砂粒多	灰白色	スス付着著しい
	21	24	2次	I—01	12.3	4.1	内外底ナデ	精良	淡青灰色	高台貼付けの際の一部粘土はみ出し
		25			14.7	5.0	内外底ナデ 外底に指頭痕	精良	内青灰色 外暗灰色	
		26	2次	E—01	15.6	5.6	内底ナデ 外底ナデ？	精良	内明灰褐色 外灰色	
		27		W？—？	15.1	4.75	外底ナデ	砂粒多	灰色	器表摩耗
		28	2次	K—04	14.8	5.05		精良	淡灰色	
		29	1次	D—9	17.0	6.5	内外底ナデ	砂粒多	灰白色	外スス付着
		30		C—13	17.8	6.1	内底ナデ 外底未調整	砂粒少	灰色	外、黒灰色
		31	2次	K—05、I—01、 J—01			内外底ナデ	砂粒多	黒灰色	
		32		F—05	18.15	8.3	内底ナデ	砂粒少	灰白色	
杯		33	2次	4号住居址	12.6	4.2	内外底ナデ	砂粒少	青灰色	外面火膨
		34	1次	F—8	13.6	3.9		精良	淡灰色	器表摩耗
		35		F—16	14.6	4.2	内底ナデ	砂粒少	灰色	外底板状痕
		36		B—15	13.4	3.3	内外底ナデ	精良	灰白色	重ね焼き痕
		37	2次	I—3	13.8	4.0		精良	灰色	口縁にスス付着 灯火器か
		38	1次	E—16、17	14.0	4.0		砂粒少	暗灰色	
		39		C—15	12.8	4.0	内底ナデ 外底未調整	砂粒少	灰色	板状痕
		40	2次	J—03	13.4	3.4	内外底ナデ	精良	灰白色	

器種	Fig	番号	調査年次	遺構・グリッド	口径	器高	調整手法の特徴	胎土	色調	備考
杯	21	41	1次	2区	13.2	3.6	内外底未調整	精良	暗灰色	
		42			14.0	4.3	内外底ナデ	砂粒少	淡青灰色	
		43	1次	D—16	12.6	3.4		砂粒少	青灰色	ロクロ方向時計廻り？
	22	44	2次	L—05	13.7	3.8	内外底未調整	精良	灰色	
		45	1次	D—8	13.8	3.7	内底ナデ	精良	灰色	
		46	2次	J？—1	13.5	3.3	内外底ナデ	精良	灰色	
		47		I—1	15.4	3.8	内底ナデ 外底ヘラナデ	精良	灰色	
皿		48	2次	K—02、3	10.5	2.2	内外底ナデ	精良	赤茶褐色	外底に火襷
		49	1次	F—16	14.5	1.7	内外底未調整	砂粒少	青灰色	
		50		D—11	15.4	1.9	内外面ナデ	砂粒少	灰白色	
		51		D—16	15.2	2.5	内外底ナデ	精良	暗灰色	
		52	2次	E—01	14.9	1.8	内外底未調整	砂粒少	青灰色	
		53	1次	E—12、2区	15.8	1.8	内外底ナデ	精良	灰色	
		54		C—12	16.6	2.4	内外底未調整	精良	灰褐色	
		55		F—12	17.5		内底未調整 外底ナデ	精良	淡青灰色	内外に火襷
		56		D—9	17.0	2.2	内底ナデ 外底未調整	精良	灰色	
		57		D—12	17.2	1.9	外底未調整	砂粒少	灰色	器表磨耗
		58		C—16	18.4	1.7	内底ナデ 外底未調整	砂粒少	灰色	口縁内外にスス付着、灯火器か？
		59		E—13	18.6	2.6		砂粒少	灰褐色	
高杯		60	2次	J—3	20.6		内外面ヨコナデ	精良	暗青灰色	
		61	1次	C—13	22.2			精良	青灰色	
壺	23	62	1次	B—14	17.6	1.3	内外面ヨコナデ	精良	外面口縁灰色、内面淡赤灰色	
		63		E—11	17.3		内外底ナデ	砂粒多	内黒灰色 外灰色	
		64		C—7	15.4	1.5	内底ナデ 外底未調整	砂粒多	灰色	内面少々黒味がかる
		65		C—13、1号住周辺	16.2	1.6	内外面ヨコナデ	砂粒少	灰色	
		66		B—15	16.8	1.9	内外底ナデ	精良	灰色	ロクロ方向時計廻り
		67		C—8	17.2	1.6	内底ナデ 外底未調整	精良	青灰色	口縁内…凹線風
		68		C—4	15.9		内外底ナデ	砂粒多	灰色	
		69		D—12	14.5			砂粒少	灰色	
		70		D—17	15.3	1.7 (2.2)	内底ナデ 外底未調整	砂粒多	灰色	
		71		2区	15.2	1.0		砂粒少	灰色	
		72		E—11	14.6	2.2 (2.9)	内外底ナデ	砂粒多	青灰色	ロクロ方向時計廻り

土器観察一覧表

器種	Fig	番号	調査年次	遺構・グリッド	口径	器高	調整手法の特徴	胎土	色調	備考
壺	23	73	1次	E—13、C—4	15.8	2.5	内底ナデ、指押さえ 外底ナデ	精良	明青灰色	
		74	2次	E—03	14.0		内底ナデ	砂粒少	灰色	板状痕
		75	1次	C—17	14.1	1.2	内底ナデ 外底未調整	砂粒多	暗青灰色	
		76		D—12	14.6	1.8	内底ナデ	砂粒多	灰色	
		77	2次	H—3	13.4	1.4	内底ナデ 外底ヨコナデ	砂粒少	灰色	
		78	1次	C—15	13.5	1.3	内外底ナデ	砂粒少	内暗灰色 外明青灰色	
		79		C—8 D—9	13.5	2.2	内底ナデ 外底未調整	精良	暗灰色	焼きゆがみ一部有り
		80		F—12	12.4	1.4	内外底ナデ	砂粒多	灰色	
		81	2次	H—3	12.9	1.2	内底ナデ 外底未調整	砂粒少	灰色	
		82	1次	F—17	12.4	1.7		砂粒多	灰色	
		83		E—16、17	17.3	1.0		砂粒少	灰色	
		84		E—12	19.5	0.8	内底ナデ	砂粒少	灰色	外底凹凸少なく滑めらか
		85	2次	G—05	18.6	1.9		砂粒少	内青灰色 外灰色	ロクロ時計廻り
		86		L—02	17.9	2.6	内外底ナデ	砂粒多	内淡青灰色 外灰色	
		87	1次	F—16	13.6	2.7	内底ナデ 外底回転ヘラケズリ	砂粒多	内黒灰色 外黒色	ロクロ時計廻り 盛蓋
		88		K群	13.6	2.4	内底ナデ 外底回転ヘラケズリ	砂粒少	灰色	ロクロ時計廻り 盛蓋
壺	24	89	2次		12.46		全面ヨコナデ	砂粒多	灰色	
甕		90		G—1	20.6		不明	精良	黒灰色	沼裏廃棄
		91		H—04	19.3		頸部外面斜方向のハケメ 他ヨコナデ	精良	灰色	
		92	1次	F—8、E—10	19.2		全面ヨコナデ	精良	内黒灰色 外灰色	
		93	2次	L—04	19.3		口頸部内外面ヨコナデ 肩部外面格子目状叩き目内面同心円状叩き目	精良	黒灰色	
		94		I—1 I—2	?		肩部外面叩き目、内面ナデ消し頸部内外ヨコナデ	精良	青灰色	
壺		95	1次	D—11	8.6	6.3	胴部外面下半ロクロ回転ヘラケズリ、外底ヘラ切り、内底ナデ、他ヨコナデ	精良	内淡茶褐色 外暗茶灰褐色	ロクロ時計廻り 肩部最大径10.8cm
		96	2次	E—01	12.4		全面ヨコナデ	精良	灰色	
		97	1次	C—12	11.1			精良	黒灰色	
		98	2次	G—05	10.3			砂粒多	黒灰色	
		99			9.6			精良	青灰色	
		100	1次	C—15	10.2			精良	灰黒色	
	25	101	2次	K—2			体部下半ヘラケズリ、底部内外ナデ、体部上半及び内面ヨコナデ	精良	黒灰色	
		102		H—2、H—3			外面中位以下丁寧なヘラケズリ、外面上位および内面ヨコナデ	精良	黒灰色	ロクロ逆時計廻り 胴部中央に最大径14.2cm
		103	1次	C—5			体部外面ヘラケズリ 体部内面ヨコナデ	精良	黒灰色	ロクロ時計廻り
甕		104	2次	L—05	19.1		外面口縁～体部上半及び内面ヨコナデ 体部中位下ヘラケズリ	精良	暗青灰色	ロクロ時計廻り

器種	Fig	番号	調査順次	遺構・グリッド	口径	器高	調整手法の特徴	胎土	色調	備考
甕	26	105	1次	E—16、17	21.1		全面ヨコナデ	砂粒多	内灰白色 外灰色	
甕		106					内面および外面上位ヨコナデ 下位回転ヘラケズリ、耳部ナデ	精良	灰色	双耳壺
甕	20	107	2次	K—03			周部内外面ナデ、高台部ヨコナデ 体部内外面ヘラケズリ	砂粒多	灰白色	高台径11cm
甕		108		I—02、2			全面ヨコナデ	砂粒多	灰色	外面胴部中～下半黒釉状の自然釉
甕		109	1次	F—12			体部および高台部ヨコナデ 内底ナデ	精良	灰白色	
甕		110		E—16、17			体部内外ヨコナデ、内底ナデ 外底回転ヘラケズリ	精良	灰青色	
甕		111	2次	J—2			体部外面ヨコナデ、内底ナデ 外底部ヘラケズリ	精良	灰色	
甕		112		L—1			内面および高台部ヨコナデ 外底部糸切り離し痕	精良	灰色	
甕		113		L—2			体部外面および高台部ヨコナデ 内面ナデ	精良		体部外面一部に黒釉状の自然釉
甕		114	1次	R—12 B—12			体部内面及び高台部ヨコナデ 体部外面回転ヘラケズリ、内底ナデ	精良	内乳灰色 外灰色	
甕	27	115	1次	E—15			頸部中位下外面平行叩き目、 内面円弧状の叩き目、頸部内外ヨコナデ、肩部上方ナデ	砂粒多	灰色	体部最大径約30cm
甕		116	2次	L—03、3　L—1、 I—01、J—02			頸部内外ヨコナデ、周部以下 外面平行叩き、内面同心円状の叩き、頸部ヨコナデ	砂粒多	内灰色 外黒灰色	胴部最大径約23cm
甕		117	1次	F—7	42.9		外面頸部下半～周部上半叩き目のち軽くナデ、周部内面上部当て具痕	精良	内淡褐色 外淡灰色	頸部黒褐色で光沢有り
壺	28	118	3次	F—11			外底および体部の一部ナデ 他はヨコナデ	精良	灰黒色	頸部2条体部1条の沈線体部下半最大径8.6cm
壺		119		D—9			周部外面下方格子目状叩き目 頸部～周部上方ヨコナデ、他はナデ			
壺		120		G—9			内外底ナデ、体部ヨコナデ	精良	灰白色	
壺		121		G—10			口頸部および内面ヨコナデ、 外面上部カキ目、体部下半ヘラケズリ	砂粒多	淡い小豆色	頸部内面に粘土紐巻き上げ痕
壺		122		G—6			外面格子目の叩きで一部消しナデ消し、内面同じ円状内十字形文叩きで一部ナデ消し、耳部ナデ	精良	灰色	耳状突起つき
壺		123		E—12			全面ヨコナデ	精良	灰色	
壺	29	124		B—12	15.5		口頸部ヨコナデ、周部以下外面斜方向の叩き、内面円弧状の叩きのちナデ消す	精良	灰白色	
壺		125		B—5	20.3		口頸部ヨコナデ、周部外面格子目の叩き、内面円弧状の叩き	砂粒多	外灰黒色 内灰色	
壺		126		E—8	19.4		口頸部ヨコナデ、周部以下外面格子目の叩き、内面ナデ	砂粒多	灰色	
壺		127		E—11、E—12、G—11、 G—9、G—10、D—10			頸部ヨコナデ、周部下外格子目叩き、内面同心円状の叩きのちナデ消す	砂粒多	灰色	
土師器										
高台付椀	30	1	1次	B—17	12.5	3.6	体部内外と内底部回転ヘラミガキ、外底ヘラケズリ	精良	赤褐色	内底ラセン状暗文 体部内面斜放射状暗文
高台付椀		2	2次	N—02	14.2	5.4	体部内面回転ヘラミガキ 外面体部下半回転ヘラケズリ	砂粒少	淡茶褐色	ロクロ時計廻り
高台付椀		3	1次	E—15	14.2	6.8	内外底ナデ	精良	暗茶褐色	体外、外底に「井」字形のヘラ記号
高台付椀		4	2次	J—05	15.4	6.0		精良	明褐色	
高台付椀		5		G—04	15.3	6.7	内底未調整 外底ナデ	精良	茶褐色	
高台付椀		6		L—05	16.5	7.0	外底ナデ	精良	白褐色	体部外面の両側に3本づつ沈線を入れたヘラ記号
高台付椀		7		J—01	17.6	6.4	内外底ナデ	精良	茶褐色	
高台付椀		8	1次	C—11	16.0	8.2	内底ナデ 外底不明	精良	赤褐色	

土器観察一覧表

器種	Fig	番号	編年	遺構・グリッド	口径	器高	調整手法の特徴	胎土	色調	備考
高台付椀	30	9	2次	I—3	15.6	6.8	内底ナデ	精良	茶褐色	外底板状痕
		10		F—3	14.0	5.0		精良	黄褐色	
		11		H—2	15.8	5.4	内底ナデ	精良	茶褐色	外底板状痕
		12			16.2	6.5	内底未調整 外底ナデ	精良	黄褐色	
		13		G—1			内外底ナデ	精良	灰褐色	壺底部かも
		14		I—2			内底ナデ 外底未調整	精良	灰褐色	壺底部かも
	31	15	3次	G—7	12.6	5.1	内底ナデ 外底未調整	精良	茶褐色	外底板状痕
		16		E—10	12.6	4.3	内外底未調整	精良	茶褐色	
		17		I—11	13.0	4.7	内底ナデ	精良	茶褐色	
		18		E—4	14.1	6.2		精良	茶褐色	
		19		E—12 F—10	13.0	3.5		精良	赤褐色	ロクロ方向時計廻り？
		20		A—13	12.8	4.1		砂粒少	淡灰褐色	
		21		G—4	12.4	4.3		砂粒多	淡灰褐色	外底板状痕
		22		C—10	12.1	4.0		精良	淡灰褐色	外底板状痕
		23		K—11	13.2	4.7	内底ナデ、外底不調整	精良	黄白色	
		24		D—12	9.7	3.7	内外底ナデ	精良	淡黄褐色	
		25		F—12	11.6	4.8	内底ナデ、外底未調整	砂粒少	淡黄褐色	
		26		C—10	11.9	5.0	内面ヘラ調整、外底ナデ	精良	赤褐色	内底、口縁内外スス付着灯火器か？
		27		C—9	12.8	5.0	内面ていねいにヘラで平滑化	精良	淡黄褐色	外底板状痕
		28		A—10	12.8	5.4	外底未調整	精良	淡黄褐色	
		29		H—11	15.5		内底未調整、外底ナデ	砂粒少	黄褐色	ロクロ方向時計廻り？
		30		G—10	16.0	6.7	内外ていねいなヘラミガキ	精良	淡黄灰色	口縁内面に沈線
		31		C—8	16.0	6.4	内面横方向のヘラミガキ 外面一部ヘラミガキ痕	精良	茶褐色	
		32		E—11			外底未調整	精良	赤褐色	
		33		D—10 C—5			外面下半指押え 内底ナデ	精良	淡灰黄褐色	外底板状痕
		34		D—6			内外底部ナデ	精良	赤褐色	
		35		F—10				精良	濃灰褐色	
		36		F—4			外底ナデ	精良	乳灰色	
		37		F—7			外底未調整	精良	黄赤褐色	
杯	32	38	1次	E—16、17	14.8		外底ていねいなヘラケズリ	精良	内明黄褐色 外明褐色	
		39		C—15	13.0	3.6	内面回転ヘラミガキ、 外底ないし体部外面下半を回転ヘラケズリ後、回転ヘラミガキ	砂粒多	茶褐色	ロクロ方向時計廻り
		40		F—8	13.5	3.5		精良	内明褐色 外黄褐色	ロクロ方向時計廻り 外底ヘラ記号有り

器種	Fig	番号	調査単次	遺構・グリッド	口径	器高	調整手法の特徴	胎土	色調	備考
杯	32	41	1次	E—17	14.6	3.4	体部外面下半¼以下回転ヘラケズリ、内底をナデ後、回転ヘラミガキ	精良	明褐色	ロクロ時計廻り
		42		D—10	14.6	3.3	体部外面¼以下回転ヘラケズリ、内底ナデその後、内外回転ヘラミガキ	砂粒多	赤褐色	ロクロ時計廻り
		43	2次	H—1、I—1	15.0	3.5	外底回転ヘラケズリ後、内外回転ヘラミガキ	精良	赤褐色	ロクロ時計廻り
		44		I—01	16.1	3.8	体部外面下半½以下回転ヘラケズリ、後、内外回転ヘラミガキ	砂粒少	赤褐色	ロクロ時計廻り
		45		H—2	13.6	3.6	内底ナデ 外底未調整	精良	赤褐色	ロクロ時計廻り 板状痕
		46		H—1	13.8	4.0		砂粒少	黄褐色	
		47	1次	C—15	13.2	3.4		砂粒少	茶褐色	ロクロ時計廻り 内底端に沈線
		48		D—8	12.0	4.4	内底一部ナデ、外底ナデ 外面にハケメ状擦痕	精良	内暗茶褐色 外明褐色	外面にハケメ状擦痕をもつ
		49	2次	H—3	12.2	3.7	内底ナデ、外底未調整	砂粒少	茶褐色 外底黄褐色	
		50	1次	E—15	13.2	4.0	外底ナデ	砂粒多	明褐色	
		51		D—11	14.1	4.3	外底未調整	精良	明褐色	ロクロ時計廻り
		52	2次	I—3	13.0	4.6	内底ナデ？	精良	茶褐色	
		53		I—2	13.1	4.0	内底ナデ	精良	茶褐色 (口縁一部) (黄褐色)	
		54	1次	F—5	12.8	4.0	内底ナデ、外底未調整	精良	黄褐色	ロクロ時計廻り
		55	2次	H—2	13.2	4.0	内底ナデ、外底ナデ	精良	淡茶褐色	板状痕
		56		H—3	13.3	4.1	内底ナデ、外底未調整	砂粒少	淡茶褐色	ロクロ時計廻り 内底指頭痕残る
		57			12.5	4.1				
		58			13.2	5.6				
		59	1次	L—5	13.5	4.4	内底ナデ	砂粒多	茶褐色	
		60			14.2	3.4	内外底ナデ	精良	淡黄褐色	
		61	2次	L—3、F—1	15.4	4.8	外底未調整	砂粒少	内暗黄褐色 外暗茶褐色	
		62			18.3	4.5	体部外面下半回転ヘラケズリ後内外回転ヘラミガキ	砂粒少	内赤褐色 外茶褐色	ロクロ時計廻り
	33	63	1次	F—15	11.7	4.0	内底ナデ 外底未調整	砂粒多	赤褐色	
		64	2次	H—3	12.4	3.9	内底ナデ 外底未調整？	砂粒少	内明茶褐色 外黄褐色	ロクロ時計廻り 板状痕
		65			12.6	4.5	内底ナデ、指頭痕残る 外底ごく一部ナデ	精良	茶褐色	ロクロ時計廻り？
		66	2次	K—02	12.4	3.7	内底ナデ 外底未調整	精良	明褐色	ロクロ時計廻り
		67	1次	F—15	12.8	3.8	内外底ナデ	砂粒少	白褐色	
		68			12.8	4.4				
		69			13.0	2.9				
		70	2次	I—0、2	13.4	3.4	内底一部ナデ 外底ナデ	精良		ロクロ時計廻り？ ヘラ切り痕明瞭
		71		J—1、2	13.2	3.2	内底ナデ 外底未調整	精良	明茶褐色	外底にヘラ記号
		72	1次	0群	13.4	4.1	内外底ナデ	精良	茶褐色	板状痕？

土器観察一覧表

器種	Fig	番号	調査年次	遺構・グリッド	口径	器高	調整手法の特徴	胎土	色調	備考
杯	33	73			14.8	2.9	外底ナデ	精良	内赤褐色 外暗灰褐色	
		74	2次	G−0	12.2	3.6	内底ナデ	精良	淡黄褐色	ロクロ時計廻り？
		75		K−1	12.2	3.2	外底未調整 内底ナデ	精良	赤褐色	
		76	1次	E−16	12.8	3.4		精良	黄褐色 (内面一部) (黒褐色)	外底板状痕 ヘラ記号有り
		77	2次	E−2、E−3	13.0	4.2	内外底ナデ	精良	明褐色	外底器表磨耗
		78		L−05	13.0	4.2	内外底ナデ 内底指頭痕残る	精良	淡褐色	ロクロ時計廻り？
		79			13.3	3.8				
		80			13.6	3.7	内底ナデ、外底未調整		淡茶褐色	ロクロ時計廻り？
		81	2次	L−3	12.2	2.4		精良	淡赤褐色	
		82	1次	F−8	12.7	2.8	内底ナデ 外底一部ナデ	精良	内面黒褐色 外面桃褐色	口縁内外一部スス付着、灯火器か？
		83		C−15	14.0	3.4	内底ナデ 外底未調整	精良	明褐色	ロクロ時計廻り
		84		D−10	11.8	3.6	内底ナデ 外底一部ナデ	精良	明褐色	
		85	2次	E−2	13.4	3.5	内外底ナデ 内底指頭痕残る	精良	茶褐色	ロクロ時計廻り
		86	1次	F−15	12.0	3.7	内底ナデ 外底未調整（一部ナデ）	精良	内淡黄褐色 外淡茶褐色	板状痕
		87	2次	G−04	12.5	4.0	外底一部ナデ	精良	赤褐色	ロクロ時計廻り 内底磨耗
		88		B−15	12.8			精良	茶褐色	
		89	1次	F−15群	13.8	3.1	内外底ナデ	精良	暗黄褐色	外底やや磨耗
		90		C−15	15.8	3.9	内底ナデ 外底未調整	精良	茶褐色	ロクロ時計廻り
		91			15.9	3.75				
	34	92	3次	A−8焼土 A−9	10.0	3.2?	内底ナデ	精良	黄白色	
		93		D−10	11.0	3.2	外底未調整	精良	黄灰色	
		94		F−8	12.4	3.25	内外底未調整	精良	淡茶褐色	
		95		C−8	12.3	3.75	内底ナデ 外底未調整	細砂粒	淡褐色	内面一部と外底にスス状のもの付着
		96		C−9	11.8	3.35	内底ナデ？ 外底未調整	精良	淡茶褐色	ロクロ時計廻り？
		97		B−6	12.05	2.55	内底ナデ	砂粒少	淡赤黄灰色	
		98		A−7	12.2	2.85	内底ナデ 外底一部ナデ後板目状痕	精良	淡灰褐色 底一部黒灰色	板状痕
		99		D−9	11.2	3.0	内外底ナデ	精良	淡黄灰色	
		100		B−9	11.0	2.2	内底指押えのちナデ 外底未調整	石英粒 金雲母含む	淡黄褐色	板状痕
		101		J−11	11.7	2.4	内底ナデ	砂粒多	淡黄白色	板状痕
		102		A−6	10.8	2.5	内底ナデ 外底未調整	砂粒多	淡赤褐色	
		103		E−12	10.9	1.95	内底ナデ	精良	淡黄褐色	筵状圧痕
		104		E−12	10.8	2.1	内底ナデ（指押え）	精良	内茶褐色 外淡茶褐色	ロクロ時計廻り 筵状圧痕

器種	Fig	番号	調査年次	遺構・グリッド	口径	器高	調整手法の特徴	胎土	色調	備考
杯	34	105	3次	B—7	10.9	2.5	内底ナデ	精良	淡赤褐色	板状痕 外底にヘラ記号
		106		C—5	11.5	2.8		砂粒少	淡黄灰色	板状痕
		107			11.4	2.1	内外底未調整	精良	淡黄褐色	
		108		G—8	11.2	2.25	内底ナデ 外底ナデ？	精良	淡茶褐色	板状痕
		109		A—7	11.3	2.45	内底ナデ	精良 （金雲母含む）	淡赤褐色	板状痕
		110		E—8	11.1	2.65	内底ナデ後ヘラ調整 外底未調整	精良	内淡黄褐色 外灰褐色	ロクロ時計廻り
		111		G—11	10.55	2.1	内外底ナデ	精良 （石英粒含む）	淡黄褐色	板状痕
		112		E—10	10.85	2.0	内底ナデ	精良	淡赤褐色	板状痕
		113		A—6	10.7	2.4	外底ナデ？	精良	茶褐色	
		114		F—11	10.6	1.75	内底ナデ	精良	淡黄色	板状痕
		115		E—10	10.7	1.5	内底ナデ、外底未調整	精良	淡乳灰色	
		116		F—11	10.5	1.65		精良	淡黄褐色	ロクロ逆時計廻り
		117		G—7	10.7	2.3	内底ナデ	精良 （金雲母含む）	淡褐色 内淡赤褐色	外底板状圧痕
		118		F—12 F—10	10.7	2.3	内底不明 外底ナデ	精良	内淡赤黄褐色 外淡灰褐色	
		119		D—9 D—10	10.6	2.4	内底ナデ 外底一部ナデ	精良	淡黄褐色 一部明褐色	
		120		F—11	10.6	2.4	内底ナデ	精良	淡黄褐色	板状痕
		121		G—5	9.2	1.8	内底ナデ 外底一部ナデ	精良	淡黄褐色 一部暗黄褐色	
		122		F—12	9.7	1.5	内底ナデ 外底未調整	精良	内淡茶褐色 外黄白色	
		123		E—11			内底ナデ	砂粒多	内赤褐色 外黄褐色	底径6.3cm 板状痕
杯	35	124	2次	J—3	12.6	3.9	内底ナデ	精良	茶褐色	回転糸切り底
		125		K—01			内底未調整	精良	茶褐色	回転糸切り底
		126		I—05				砂粒少	茶褐色	回転糸切り底
		127		K—01				砂粒多	茶褐色	回転糸切り底
		128		J—04				砂粒少	淡茶褐色	回転糸切り底
		129		H—04 G—03				砂粒少	茶褐色	回転糸切り底
		130		G—04				砂粒少	茶褐色	外底板状痕 回転糸切り底
		131	3次	B—11				砂粒少	茶褐色	回転糸切り底
鉢	36	132	2次	E—3	22.1	2.2	体部内外回転ノラミガキ 底部内外ナデ後回転ヘラミガキ	精良	明黄褐色	
		133		I—01	19.6	1.9	外底外回転ヘラケズリ 体部内外回転ヘラミガキ 内底ナデ後ヘラミガキ	精良	茶褐色	ロクロ時計廻り
		134		F—2	19.2	2.9	底部内外ナデ	砂粒多	明褐色	ロクロ時計廻り
		135		J—01	15.9	2.2	外底部と体部上半私回転ヘラケズリ　体部内外回転ヘラミガキ内底ヘラミガキ	精良	明茶褐色	ロクロ時計廻り
		136		F—2	17.2	1.2	底部内外ナデ	精良	茶褐色	

土器観察一覧表

器種	Fig	番号	調査年次	遺構・グリッド	口径	器高	調整手法の特徴	胎土	色調	備考
壺	36	137	2次	K—03	14.4	1.0	外底未調整 内底不明	精良	明褐色	内面器表磨耗
皿		138	1次	E—9	13.4	2.2	内外底未調整	精良	茶褐色	ロクロ時計廻り
		139		D—8	13.2	1.7	内底ナデ 外底未調整	精良	茶褐色	
		140		C—6	13.2	1.8	内外底未調整	砂粒少	茶褐色	
		141	2次	F—2	12.8	1.3	内外底ナデ	精良	淡茶褐色	
		142	1次	F—15 F—15群	13.6	1.7?	内底未調整 外底ナデ	精良	明褐色	
		143	2次	E—1	15.2	1.7	内底ナデ 外底未調整	精良	黄褐色	
		144		J—05	14.7	2.2	内底ナデ	精良	淡灰褐色	板状底
		145	1次	C—15	14.9	1.6	内底ナデ 外底未調整	精良	赤褐色	
		146	2次	L—05	14.8	2.0	外底回転ヘラケズリ	精良	黄褐色	ロクロ方向右回り 口縁内外にススッ、灯明皿か
		147	1次	B—15	14.9	1.3	内外底ナデ	精良	明褐色	底部端磨耗
		148	2次	I—01	16.6	1.9	体部下半、外底回転ヘラケズリ　体部内面、内底回転ヘラミガキ	精良	茶褐色	ロクロ時計廻り
		140	1次	D—15	16.0	1.8	内面粗い回転ヘラミガキ 外体下半、外底回転ヘラケズリ後回転ヘラミガキ?	精良	茶褐色	
		150	1次	D—15	16.0	1.9	内底ナデ? 外底未調整	精良	明褐色	底部端磨耗
		151	2次	I—03	15.6		内底未調整 外底ナデ	精良	暗茶褐色	
		152			14.4	1.9	内底不明 外底ナデ	精良	明褐色	器表磨耗
		153	2次	H—03	15.2	1.8	内底ナデ 外底未調整	精良	淡褐色	ロクロ時計廻り
		154	1次	B—15	17.2	1.6	外底ナデ、内底不明	精良	明褐色	
		155	2次	J—3	16.8	1.8	内底不明 外底未調整	砂粒多	明褐色	器表磨耗
		156	1次	O—8	16.2	1.6	内面回転ヘラミガキ 外体下半½と外底粗い回転ヘラケズリ	精良	茶褐色	ロクロ時計廻り 器表磨耗
		157	2次	J—01	16.8	1.7		砂粒少	赤褐色	
		158	1次	K群	18.0	2.1	内外面、内底回転ヘラミガキ 外底回転ヘラケズリ	精良	明褐色	ロクロ時計廻り
		159	2次	I—01	16.9		内外面回転ヘラミガキ 外底回転ヘラケズリ	砂粒少	明褐色	
		160		I—01	17.8	2.0	内底ナデ、内体粗い回転ヘラミガキ、外底回転ヘラケズリ	砂粒多	明褐色	
		161		F—3	18.3	2.3	内底不明 外底ナデ	砂粒多	明褐色	器表磨耗
		162	1次	D—8	19.4	1.7	内底ナデ? 外底不明	砂粒多	黄褐色	器表磨耗
托	37	163	3次	G—4	10.5	2.2	内外底ナデ	精良	淡茶褐色	
		164		F—12	11.4	2.4		精良	黄褐色	
		165		D—10	10.9	1.9	内底ナデ 外底未調整	精良	淡赤褐色	ロクロ時計廻り
		166		G—8	11.2	2.1	内底ナデ	精良	淡黄褐色	ロクロ時計廻り? 板状底
		167		A—7	12.0	1.8		精良	黄白色	外底と高台端部に板状底
		168		G—12	11.8	2.5		砂粒少	赤褐色	ロクロ時計廻り?

器種	Fig	番号	調査年次	遺構・グリッド	口径	器高	調整手法の特徴	胎土	色調	備考
坩	37	169	3次	F—5	11.7	2.2	内底ナデ	精良	赤褐色	
		170		B—8	12.9	2.9	内外底ナデ	砂粒少 金雲母含	赤褐色	
		171		G—5	14.0	2.6		精良	淡黄灰色	
		172		G—8	11.5	2.1	内底ナデ	精良	淡黄褐色	ロクロ時糸切り？ 板状痕
		173		G—5	11.4	2.0	内外底ナデ？	砂粒少	赤褐色	
		174		F—12	11.6	2.3	内底ナデ 外底未調整	精良	赤褐色	
		175		F—12	11.1	2.7		精良	茶褐色	
		176		J—11 J—12	12.2	2.5	内外底ナデ	精良	淡茶褐色	
		177		E—11	12.2	2.9	内底ナデ 外底未調整	精良	茶褐色	
		178		G—8	11.6	2.6	内底未調整	砂粒少	淡黄褐色	器表磨耗
		179		E—5	12.7	2.8	内底ナデ	砂粒少 金雲母含	淡茶褐色	板状痕
		180		A—13	13.9	2.6	内外底未調整	精良 金雲母含	明茶褐色	
		181		B—7	11.5	2.2	内底未調整 外底ナデ	精良	暗黄褐色	ロクロ方向時計廻り 内底水挽き痕明瞭
		182		C—4	11.2		内底ナデ 外底未調整	精良	明黄褐色	
		183		E—12	11.6	2.4		精良	暗茶褐色	
		184			11.9	2.6	内外底ナデ	精良	黄赤褐色	
		185		C—5	12.0		内底ナデ	砂粒含	黄灰色	ロクロ方向時計廻り 板状痕
		186		B—8	12.5	2.6		精良	淡茶褐色	板状痕
甕	38	187	1次	D—11	24.7		口縁ヨコナデ 内ヘラケズリ、外ハケ目	砂粒多	淡黄褐色	
		188	2次	E—4	24.4		体部外面と口縁部内面ハケメ 体部内面ヘラケズリ	砂粒多 金雲母含	黄褐色	外面スス付着
		189		E—4	25.2			砂粒多 金雲母含	黄褐色	
		190	1次	E—9	34.2		内面ヘラケズリ 外面ハケメ 口縁ヨコナデ	砂粒多	淡赤褐色	外面スス付着
		191		B群	38.6			砂粒少 金雲母含	茶褐色	内外面スス付着
		192		D—12	23.6		内面ヘラケズリ、外面と口縁内面ハケメ	砂粒多	黄褐色	内外面スス付着 器表磨耗
	39	193		R群	26.4		内面ヘラケズリ 外面と口縁内面ハケメ	砂粒多	赤褐色	外面スス付着
		194		F—8	29.9		内面ヘラケズリ	砂粒少	黄褐色	
		195		D—15	25.4		外面と口縁内面ハケメ	砂粒多	赤褐色	
		196	2次	F—2	19.8		内面ヘラケズリ 外面ハケメ、口縁部ヨコナデ	砂粒多	明赤褐色	
		197	1次	A群	20.4		内面ヘラケズリ 外面と口縁内面ハケメ	砂粒少	赤褐色	外面二次焼成痕有り
		198		F—16	19.0		外面と口縁内面ハケメ 内面ヘラケズリ後ナデ	砂粒少	黄褐色	外面二次焼成痕あり、橙褐色に変色内外にスス付着
		199		Q群	18.1		内外ヘラナデ 口縁部ヨコナデ	砂粒少	黄褐色	内外面スス付着
		200	2次	L—3	20.3		内面ヘラケズリ、外面ハケメ 口縁内外ヨコナデ	砂粒少 金雲母含	黄褐色	

土器観察一覧表

器種	Fig	番号	調査年次	遺構・グリッド	口径	器高	調整手法の特徴	胎土	色調	備考
甕	39	201	1次	C—12　1号住址周	16.0		内面ヘラケズリ、外面ハケメ 口縁内外ヨコナデ	砂粒少	黄褐色	内面スス付着
	40	202		F—17	21.4		内面ヘラケズリ 外面と口縁内面ハケメ	砂粒少 金雲母含	灰褐色	外面スス付着
		203		F—12	23.4			砂粒少	黄茶褐色	口縁内外面スス付着
		204		D—16	21.3		内面ヘラヘラケズリ、外面ハケメ 口縁部ヨコナデ	砂粒多	黄褐色	外面スス付着
		205		F—9	24.4		内面ヘラケズリ 外面と口縁内面ハケメ	砂粒多 金雲母含	暗黄褐色	内外面スス付着
		206		E—16	22.2			砂粒少	暗黄褐色	内外面スス付着
		207		Q群	22.0			砂粒少	黄褐色	
		208		E—14	18.8			砂粒少	橙褐色	内外面スス付着
		209		F—17	18.5			砂粒少	黄褐色	
		210		F—9	19.7			砂粒多	橙褐色	器表摩耗
		211		E—3	17.8			砂粒少 金雲母含	黄褐色	外面、口縁内部スス付着
		212	2次	L—2	12.0		内外ヨコナデ後ナデ	精良	黄褐色	外面スス付着
	41	213		E—3	13.5	11.6	内面ヘラケズリ 外面ハケメ、把手はナデ	砂粒多	黄褐色	外面スス付着 把手が付く
		214	1次	B—14 D—11	15.0		内面ナデ 外面粗いヘラナデ	砂粒少	黄褐色	外面スス付着
		215		B群	19.3		内外ヨコナデ	精良	淡茶褐色	口縁外面に沈線 鉢かも
		216		R群	20.2			砂粒少	茶褐色	鉢かも
鉢		217		D—14、 C—15、D—15	24.4		内外ヨコナデ、内底ナデ、 体部下半と外底回転ヘラケズリ	砂粒多	赤褐色	ロクロ時計廻り
甕		218		D群	17.8		内面ヘラナデ 外面ナデ	砂粒少	暗褐色	外面スス付着
		219		D群、D—8、E—8	20.4			砂粒少	暗褐色	指頭痕有り
		220		E—8	18.8		内面ヘラケズリ、口縁内部ハケメ、 外面ハケメ	砂粒多	灰褐色	内面スス付着
		221			22.0		内面ヘラケズリ 外面ヘラナデ	砂粒少	赤褐色	
	42	222	3次		34.6		内面ナデ 外面上半縦方向のハケメ、中位以下は叩き	砂粒多	外黒色 内黄褐色	外面下半スス付着
		223		E—8	24.0		内面下から上へのナデまたはヘラケズリ	砂粒多 石英粒多	黄褐色	口縁内部スス付着
		224		A—11	11.5		内外ナデ 口縁部ヨコナデ	精良	灰褐色	口縁内部から外面にかけてスス付着
		225		D—6	25.6		内外ハケメ 口縁部ヨコナデ	砂粒多 金雲母含	暗黄褐色	外面スス付着
		226		A—13	25.8		内外ハケメ	砂粒多	暗褐色	
		227		D—11	20.0		内外ハケメ 口縁部ヨコナデ	砂粒多	黒灰色	
鉢		228		F—12	20.2		内外ヨコナデ	砂粒少	黄褐色	外面器表摩耗
黒色土器　A　（内黒土器）										
高台付椀	43	1	1次	E—16、17	12.3	4.8	内面ヘラミガキ 外面体部下半弱と外底回転ヘラケズリ	精良	内黒色 外淡赤褐色	ロクロ時計廻り
		2	2次	E—05	15.9	5.0	内面ヘラミガキ、外面雑なヘラミガキ	精良	内黒色 外赤褐色	焼きゆがみ著い
		3	1次	C—6、C群	16.2		内面ヘラミガキ、外底ナデ	精良	内黒色 外黄褐色	ロクロ時計廻り？

器種	Fig	番号	調査年次	遺構・グリッド	口径	器高	調整手法の特徴	胎土	色調	備考
高台付椀	43	4	2次	L—2	18.0	6.5	内体横ヘラミガキ、内底ヘラミガキ、外体下半弱雑な回転ヘラケズリ	砂粒多	内黒色 外暗褐色	ロクロ時計廻り 口縁外面炭素吸着
		5		F—04	16.2	6.3	内体回転ヘラミガキ、内底ヘラミガキ、外体ヨコナデ	精良	内黒色 外黄褐色	口縁外面炭素吸着 板状痕
		6		G—031層	14.7	6.7	内体横ヘラミガキ、内底ヘラミガキ、外底ナデ、外体ヨコナデ	精良	内黒色 外暗茶褐色	ロクロ時計廻り 口縁外面一部炭素吸着
		7	1次	F—15層 E—16、17	16.7	6.5	外体下半弱回転ヘラケズリ 内体回転ヘラミガキ、内底ヘラミガキ	精良	内黒色 外淡黄灰色	
		8		F—15層	14.5	5.8	内面ヘラミガキ、外体下半弱回転ヘラケズリ	砂粒少	内黒色 外赤褐色	
高台付椀		9	2次	K—05			内体横ヘラミガキ、内底ヘラミガキ 外体ヨコナデ、外底ナデ	精良	内黒色 外淡黄灰色	板状痕
		10		K—04			内体横ヘラミガキ、内底ナデ 後ヘラミガキ、外体ヨコナデ、外底ナデ	精良	内黒色 外淡黄褐色	
		11	1次	E—6			内底ヘラミガキ	精良	内黒色 外淡赤褐色	板状痕
		12		C層			内体横ヘラミガキ、内底ヘラミガキ、外体ヨコナデ、外底未調整	砂粒少	内黒色 外淡赤褐色	板状痕
甕		13	2次	K—04	14.6	11.7	内体横ヘラミガキ、内底ヘラミガキ、外体ヨコナデ、外底ヘラナデ	精良	内黒色 外暗茶褐色	
		14	3次	B—9	13.4		内体横ヘラミガキ、外体ヨコナデ、外体下半ナデ	砂粒少	内乳灰色 外黒灰色	外面一面にススが内面炭素吸着不充分
高台付椀	44	15		B—12	15.5	5.9	内体横ヘラミガキ、内底ヘラミガキ、外面ヨコナデ	精良	内黒色 外赤褐色	内面、口縁部外面一部炭素吸着
		16		F—7	15.6	5.8	内体横方向ヘラミガキ、内底ヘラミガキ、外体ヨコナデ	砂粒少	内黒色 外淡黄灰色	
		17		D—11 D—12	15.5	6.3	内体横ヘラミガキ、内底ヘラミガキ、外底ナデ、外体ヨコナデ	砂粒少	内黒色 外淡黄灰色	
		18		A—8	14.2	6.0	外体ヨコナデ、内体横ヘラミガキ、内底ヘラミガキ	砂粒少	内黒色 外黄褐色	口縁外の一部炭素吸着
		19		A—9	14.5	6.4	内体部上位横ヘラミガキ、内体下半位ヘラミガキ、外体ヨコナデ	砂粒少	内黒色 外乳灰褐色	口縁外にも炭素吸着
		20		B—12	16.0	6.6	内体横ヘラミガキ、内底ヘラミガキ、外体ヨコナデ	砂粒多	内黒色 外淡赤褐色	
		21		E—10 E—11	15.4	6.0	内面口縁直下以下横ヘラミガキ 内底一定方向ヘラミガキ 外体ヨコナデ、外底ナデ	精良	内黒色 外淡黄褐色	焼成後内面に大きく十字のヘラ記号、外体一部炭素吸外体着
		22		G—9	15.5	4.7	内上位横ヘラミガキ内中斜ヘラミガキ、内底不特定方向のヘラミガキ、外ヨコナデ、外底ナデ	精良	内黒色 外淡黄褐色	
		23		E—10 E—9	14.8	5.2	内体横ヘラミガキ、内底一定方向のヘラミガキ、外体ヨコナデ外底ナデ	砂粒少	内黒色 外淡黄灰色	
		24			14.5	5.5	内体横ヘラミガキ、内底不特定方向の雑なヘラミガキ、外ヨコナデ、外下半ナデ	精良	内黒色 外赤褐色	
		25		H—11	15.1	6.0	内ヘラ当て痕後横ヘラミガキ内底ヘラミガキ、外ヨコナデ、後下半はナデ	精良	内黒灰色 外淡黄灰色	板状痕
		26		H—6 G—6	14.5	6.0	内丁寧な横ヘラミガキ、内底ヘラミガキ、外下半¾、外底回転ヘラケズリ	精良	内淡黄灰色 外淡黄灰色	内面炭素吸着不充分ロクロ時計廻り
		27		K—11	15.0		内横ヘラミガキ、内底一定方向のヘラミガキ、外体ヨコナデ	精良	内黒灰色 外黄褐色	内体中部炭素吸着不充分
		28		E—12	15.0		内上半横ヘラミガキ、下半から内底斜ヘラミガキ、外ヨコナデ	精良	内黒色 外赤褐色	外面一部炭素吸着
		29		A—9	16.7	6.2	内底ヘラミガキ、内体横ヘラミガキ、外底ナデ、外体雑なヘラミガキ	精良	内黒灰色 外明黄褐色	器表磨耗
		30			16.4		内横ヘラミガキ、内底不特定方向のヘラミガキ、外体横ヘラミガキ	精良	内黒色 外淡黄褐色	
	45	31		E—5、E—7、F—5	15.6	5.6	内雑な横ヘラミガキ、外上半ヨコナデ、下半回転ヘラケズリ	精良	内黒色 外黄赤褐色	ロクロ時計廻り 器表磨耗
		32		E—12	14.5	5.9	内体横ヘラミガキ 外ヨコナデ 内底ヘラミガキ	精良	内黒色 外黄褐色	
		33		B—7	15.9	6.5	内横ヘラミガキ 内底一定方向ヘラミガキ	砂粒少 雲母片含	内黒色 外淡赤褐色	内面中部炭素吸着不充分 外面沈線、板状痕
		34		E—8	15.4	4.9	内外横ヘラミガキ 内底ヘラミガキ 外底ナデ	精良	内黒色 外赤褐色	口縁直下焼成後穿孔一ケ所（径0.3cm） 内、口縁外面一部炭素吸着

土器観察一覧表

器種	Fig	番号	調査年次	遺構・グリッド	口径	器高	調整手法の特徴	胎土	色調	備考
黒色土器B										
高台付椀	45	35	3次	D—7 F—7	15.7		内外ヘラミガキ	精良	内外黒色	器表磨耗
		36		E—10	15.5	6.0	外体下半回転ヘラケズリの後外底部を除いて内外ヘラミガキ	砂粒少	内外黒色 内外下半時茶褐色	ロクロ時計廻り
		37		D—11 D—10	15.2	6.6	外体下半を回転ヘラケズリの後　内外を横ヘラミガキ 外底回転ヘラケズリ	砂粒少	内外黒色	ロクロ時計廻り
		38		A—13	16.4	6.4	内外横ヘラミガキ 内底一定方向のヘラミガキ	精良	内外黒色	
		39		C—8 E—6	17.4	8.2	内外横ヘラミガキ、外体下半⅓回転ヘラケズリ後横ヘラミガキ、内底ヘラミガキ、外底回転ヘラケズリ	精良	内外黒色 外⅓赤褐色	ロクロ方向時計廻り 外面の⅓は炭素吸着不充分
		40		J—12	16.8		体部内外、横ヘラミガキ 内底不特定方向または一定方向のヘラミガキ	精良	内外黒色	口縁内面沈線有り
		41		C—11 D—11	14.0			精良	内外黒色	
		42		G—12	11.4	4.3		精良	内外黒色	板状痕
		43		A—4	11.9	5.7		精良	内外黒色	口縁内側沈線
貝塚出土土器										
土師器 高台付椀	46	1	3次	K—11、第1貝塚2層 K—12、第1貝塚3層	11.6	3.8	内底未調整 外底ナデ	精良	淡赤褐色	板状痕
土師器 杯		2		K—12、第1貝塚4層	11.8	2.8		砂粒少	黄褐色	ロクロ時計廻り 口縁から体部にかけて⅓赤褐色に変色
土師器 高台付椀		3		K—11、第1貝塚4層	11.4	3.7	内底ナデ	精良	灰黄色	一部スス付着
		4		K—12、第1貝塚4層				精良	乳灰白色	板状痕
		5		K—11、第1貝塚4層				精良	乳灰白色	板状痕
土師器 杯		6		第1貝塚9層	10.3	2.5		精良	淡灰褐色	
黒色土器A 高台付椀		7		K—11第1貝塚4層	15.0	5.5	内面ヘラミガキ	精良	内黒色 外赤褐色	
土師器 甕		8		K—11、第1貝塚4層	17.5		内外ヨコナデ	砂粒多	黒褐色	外面スス付着 製塩土器Ⅰ類か
土師器 鉢		9		第1貝塚10層 4層	16.9		内外ナデ	精良	淡褐色	
土師器 甕		10		K—11、第1貝塚4層	17.0		内面ヘラケズリ 外面ヨコナデ	精良	灰黄褐色	外面一部スス付着
黒色土器A 高台付椀		11		L—13、第3貝塚5層	15.4	6.3	内面ヘラミガキ 外面体部⅓回転ヘラケズリ	砂粒少	内黒色 外淡黄褐色	ロクロ時計廻り 内、口端外炭素吸着 口端外沈線2本有り
土師器 杯		12		L—13、第3貝塚1層	11.4	1.7	外底ナデ?	砂粒少	乳灰色	
墨書土器										
須恵器 蓋	47	1	1次	C—12	19.4	1.4	内外底ナデ	精良	淡灰色	天井部外面に墨書
土師器 杯		2		表採			内底未調整 外底ナデ	精良	茶褐色	外底部に墨書
須恵器 皿		3		C—8	17.3	2.3	内外底未調整	精良	淡灰色	外底部に墨書 ロクロ時計廻り
土師器 皿		4	2次	F—01、1	13.7	1.43	内外未調整	精良	茶褐色	体部外面に墨書
土師器 杯		5	3次	C—12			内底ナデ 体部内外ヨコナデ	精良	白褐色	体部外面に墨書字体不明
		6		C—12				精良	灰白色	同一文字同一個体の可能性あり
		7		C—12				精良	灰白色	6は板状痕をもつ

第5章　調査の記録―遺物Ⅱ(生産用具)――

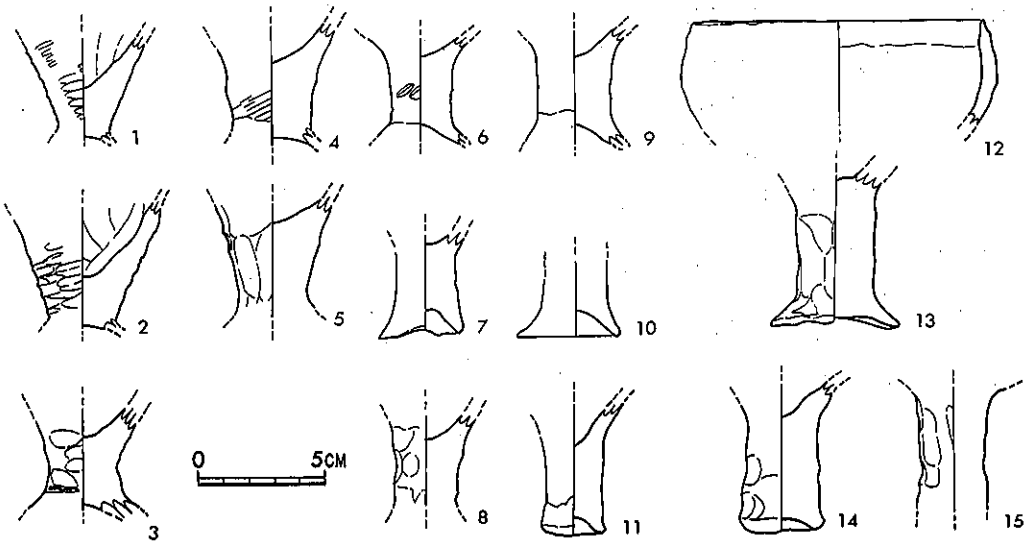
1　製塩土器

志可の海人は藻刈り塩焼き暇なみ髪すきの小節取りも見なくに（巻3　278）
志珂の白水郎の塩焼く煙風をいたみ立ちはのぼらず山にたなびく（巻7　1246）
志賀の白水郎の塩焼衣なれぬれど戀とふものは忘れかねつも（巻11　2622）
志珂の海人の火気焼き立てて焼く塩の辛き戀をも吾はするかも（巻11　2742）
志賀の海人の一日もおちず焼く塩の辛き戀をも吾はするかも（巻15　3652）

上は、志賀の海人の塩焼く情景を詠んだ万葉集の歌である。また、延喜式には、塩園の1つに筑前国が挙げられており、8～10世紀に博多湾周辺で製塩が行なわれていたことは推測できていた。本遺跡は、志賀の海人達の塩焼きの場であり、以下に述べる製塩土器は彼らの塩焼く道具である。多量の製塩土器の出土は、本遺跡の性格を特徴づける一つであるが、器壁が剝離、小片化しているものが多く、全形を知り得る資料は少ない。製塩土器には、叩き目を有する土師質の甕形土器（Ⅰ類）と、内面に布目痕をもつ円筒形土器（Ⅱ類）がある。第3次調査においては、混入の1点を除いてⅡ類土器は出土しておらず、さらに古墳時代の製塩土器が少量、出土している。これらの土器の説明と製塩土器たる理由を述べる。

(1)　古墳時代の製塩土器（第52図1～15）

15点を図示した。ほとんどが脚部のみの資料で体部を欠き全形を知り得ないが、12が椀部となる可能性がある。口径11.4cmで器壁は薄く、口縁部がやや内傾気味に立ち上る浅い椀形をなす。外面は指先で雑に整形され、内面は丁寧なナデ調整がなされており、口縁端部は薄く作り離されたままである。1～10、13、15は、裾部がラッパ状に開いた底径4cm脚部径2.5～3cm前後の脚合で、粘土を接合し指で延ばして形を整えている。椀部は比較的急に立ち上る。Ⅰ、脚台部から椀部がそのまま立ち上るもの（1～3）、Ⅱ、脚台部が若干のびたもの（4～10）、Ⅲ、脚台部が細長く棒状にのびたもの（13、15）に分けられる。Ⅲは、粘土塊を片手の中で握るようにして延ばしたものである。1～4、6は粗い平行叩き目を施し、5、8、13～15は指ナデによって雑に仕上げている。いずれも胎土には多くの砂粒を含み、色調は黄褐色を基本とするが桃褐色、灰白色等、製塩土器特有の変色をなすものがある。また二次焼成痕が顕著で、特に内底部に器壁の荒れ、剝離がみられるものが多い。これらの土器は明らかに混入したもので、出土状況からは製塩土器と断定し得ないが、Ⅰ類は、福岡市西区今宿今山下遺跡で出土した、4世紀代の倒坏形脚台をもつ製塩土器[註①]に続く型式であり、またⅢ類は、12の椀



第53図　製塩土器実測図

部とともに、熊本県宇土半島、天草地方を中心に分布する6世紀代の天草式製塩土器に近似している。従って、Ⅰ→Ⅱ→Ⅲという変遷が考えられ、明確な根拠を欠くが、Ⅰ類を5世紀代、Ⅱ、Ⅲ類を6世紀代に比定しておきたい。11と14は6ラッパ状に開く裾部をもたないもので、その位置付けは現在のところ不明である。

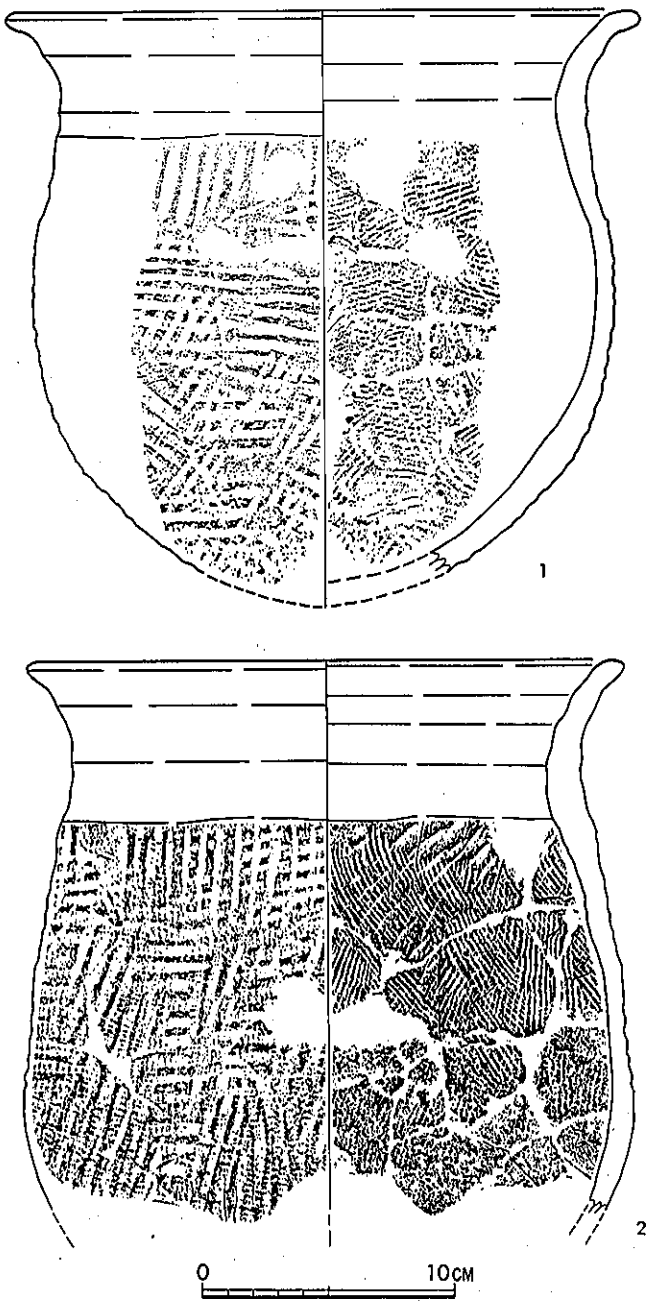
(2) 製塩土器Ⅰ類（第53～57図1～22）

1～12は第1次調査、13～22は第3次調査出土分で、それぞれ大小がある。図示しなかったが底部のみの資料では丸底である。

1～5は、口径25cm前後を測る大型の甕で、器高は不明であるが、1では24cm程度。口縁部は、内外とも強いヨコナデによって稜をもち、端部を丸くおさめる。口縁部を大きく外反させ、厚く短く立ち上るもの（5）もある。頸部は、ややすぼみ、肥厚して胴部に続く。胴部は若干丸味をもつが、5は肩部を有し、胴部がまったく張らない製品である。胴部内外の器壁は、強い叩き締めを行なっている。外面は、木目に直交する粗い平行刻み目を印した叩き板による、横位または縦位方向の叩きである。[註⑥]頸部直下4～5cmの部分に横位方向、それ以下に縦位方向の叩きがみられることが多い。内面には、円弧状の平行刻みを印した当て具痕が残っている。叩き板，当て具とともに刻みの幅には大小があり、また、少量であるが木目に平行する平行刻みの叩き板によるものもある。器壁は7～13cmと厚く、胎土には砂粒を多量に含み、焼成は堅緻である。色調は、暗黄褐色、茶褐色を基調とするが、外面胴部下半は、二次焼

成を受け赤褐色化しているものが多く、肌あれ、磨耗が著しい。ススが付着している例もある。頸部以下の内面には器壁の剝離現象がみられる。二Ⅲ三Ⅲに剝離しているものもあり、5は特に激しい例である。一般に剝離は胴部下半に著しい。また口縁部付近に比べ、胴部下半の破片は小片、細片化の傾向が強く、ほとんどの資料が底部を欠く。

6～12は、口径17cm前後の小型の甕である。6、7では器高17cm程になろう。口縁部がほぼ直口するもの（6～8）と、厚く大きく外反するもの（9～12）があり、前者には胴部が膨みをもむ製品が多い。口縁部には強いヨコナデによって内外に稜が入る。胴部内面は、木目に直交する粗い平行刻みを印した叩き板によるほぼ縦位方向の叩き目を施す。1～5のような、横位方向の叩き目はみられず、この差は、器形の大小による土器製作技法の違いによるものかも知れない。叩き板の刻み目は、1～5に比べやや細かいものが多く、また、格子目状に近い叩きもある（9）。器壁は、厚いもの（6、9、10）と、比較的薄いもの（7、11、

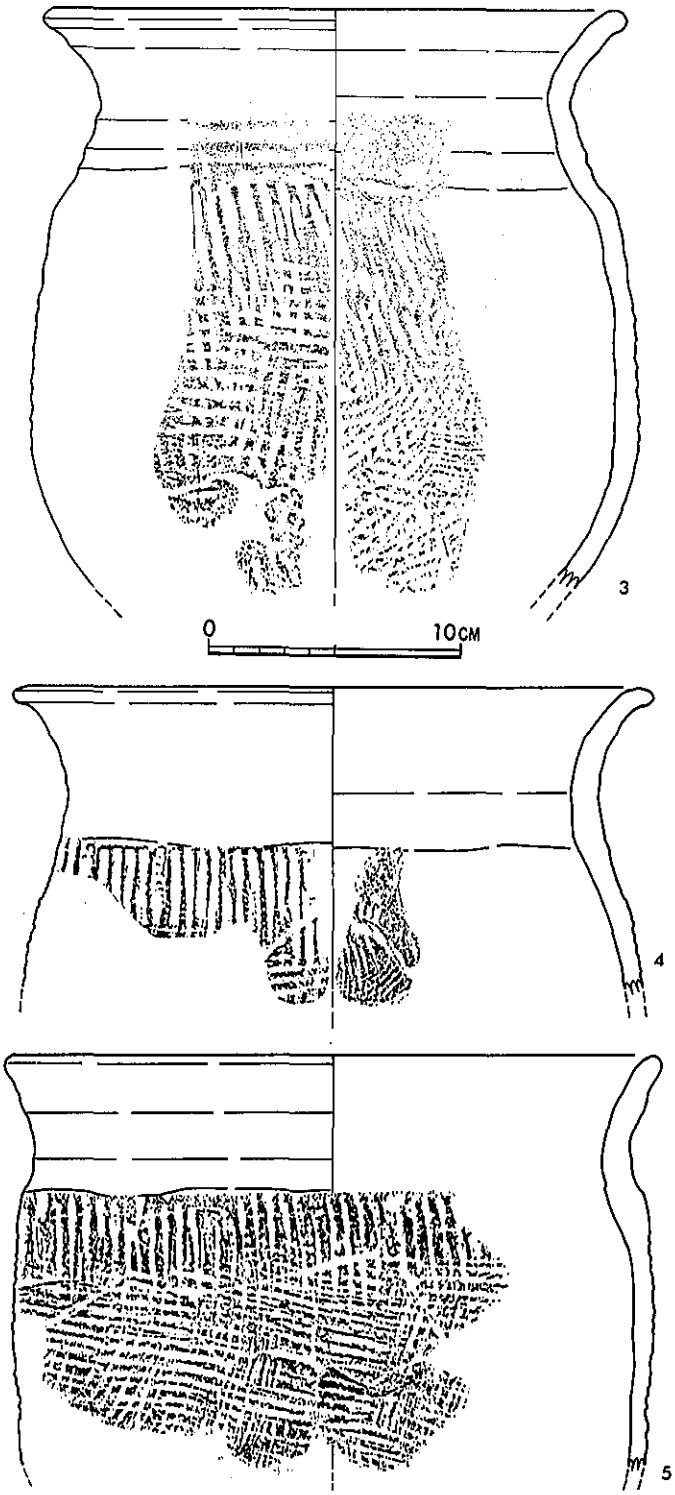


第54図　製塩土器Ⅰ類実測図Ⅰ

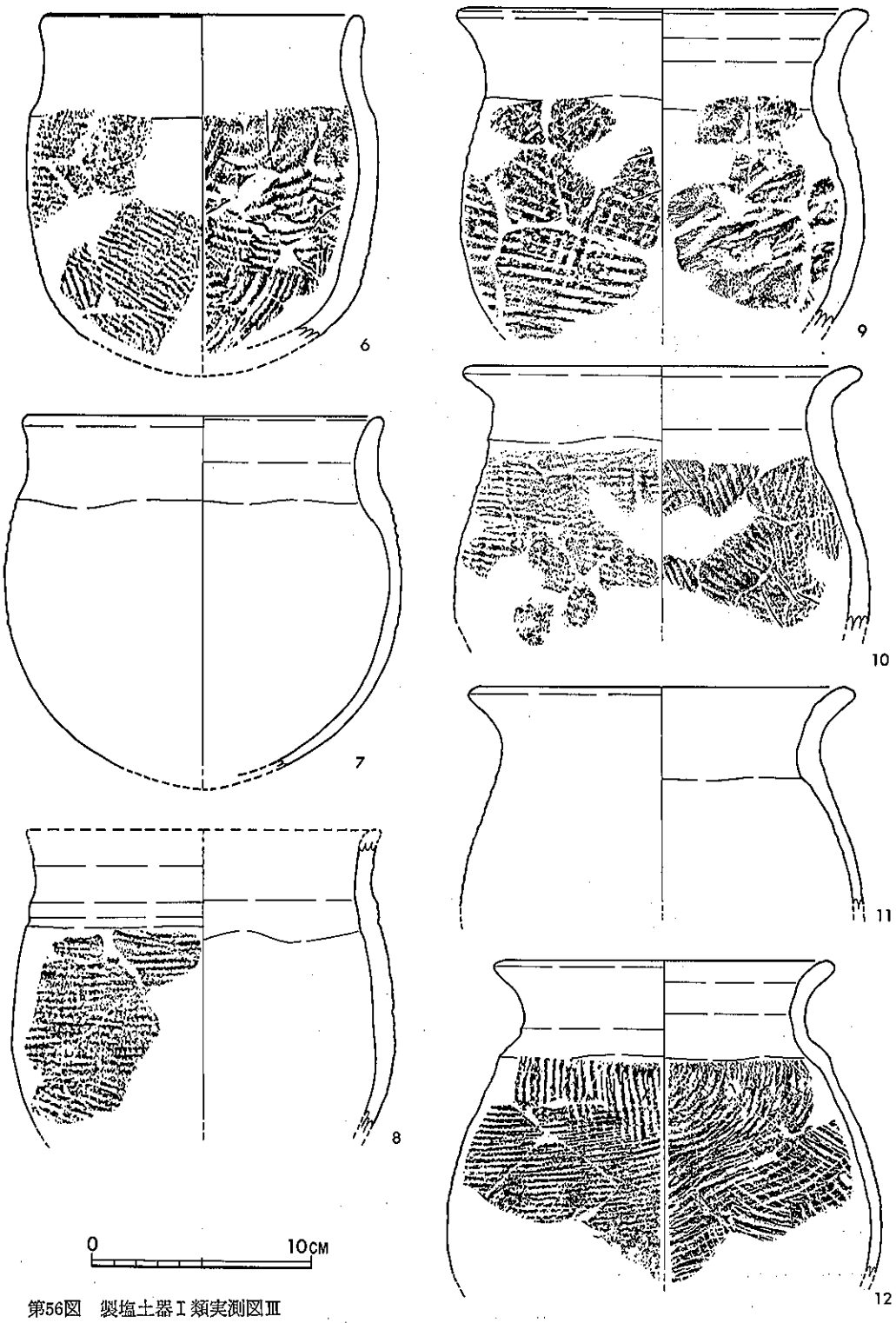
12）があり、胎土、焼成、色調、二次焼成痕、器壁の剝離現象の特徴は、1～5と共通する。6では、外面の底部近くに、輪状にススが付着しており、10は口縁部内側にススが付着している。

13～17は、口径25cm前後を計り、口縁部を強く外反させ、胴部のあまり張らない大型の甕である。1～5と比べ、口径、成形技法、口縁部の形態、胎土、焼成等にあまり変化がみられない。叩きがより強く、その痕跡の凹凸が激しくなっていることや、14で内面、15では内外面の叩きをナデ消していることなどに若干の違いが認められる程度である。17は器壁が薄い製品である。

18～22は、口径17cm前後の小型の甕で、胴部に丸味をもつ製品（18、19、21）と、肩部を有し、胴部が張らない製品（20、22）がある。口縁部は強く外反するものが多いが、21はほぼ直口のものであろう。全形が推測できる21では、6～12に比べ器高が底く、球形に近くなっている。その他の特徴は、6～12とほぼ同様である。叩きは強く、凹凸が激しくなっている。また、黒褐色など暗い色調をなすもの



第55図　製塩土器Ⅰ類実測図Ⅱ



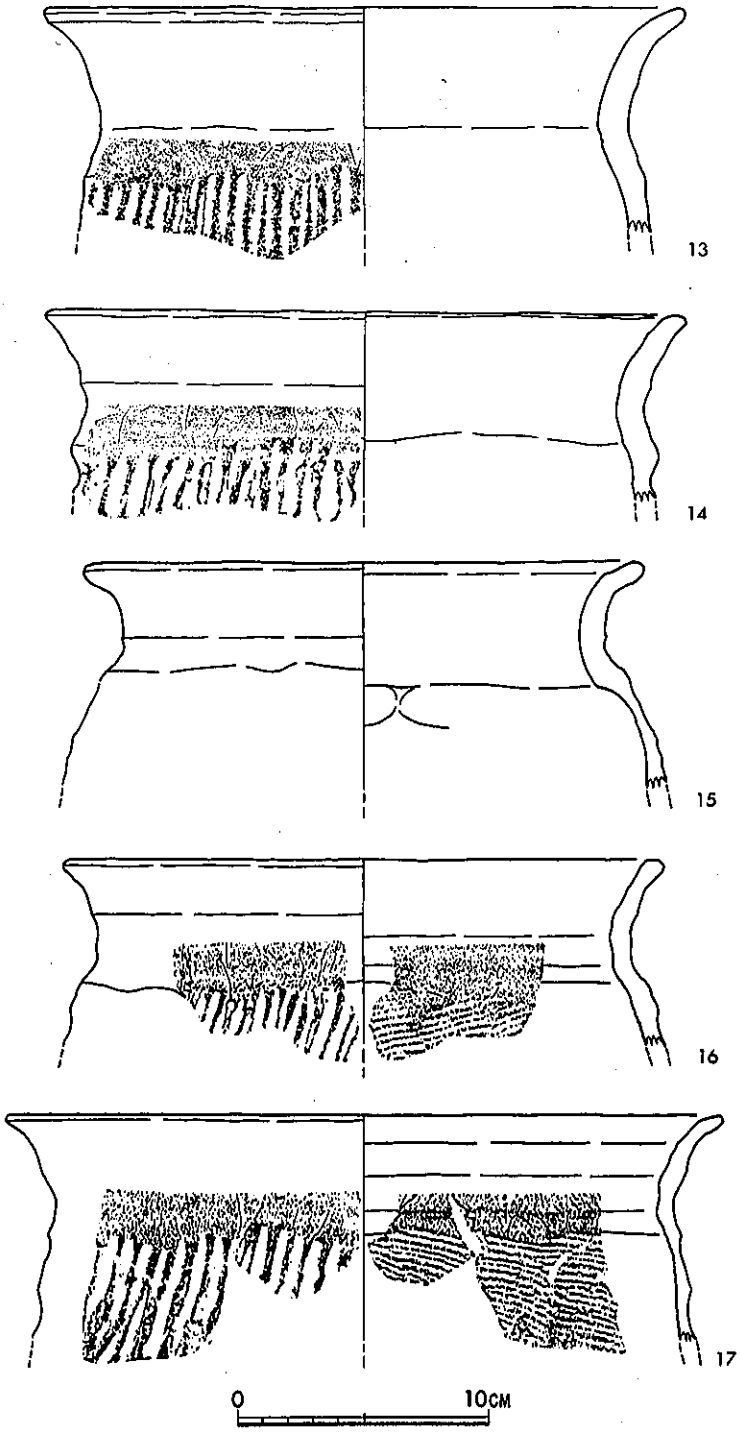
第56図　製塩土器Ⅰ類実測図Ⅲ

が多い。22は胴部内面に平行刻みの当て具痕を残し、外面は最終的に縦方向のハケメによって仕上げている特異な土器である。

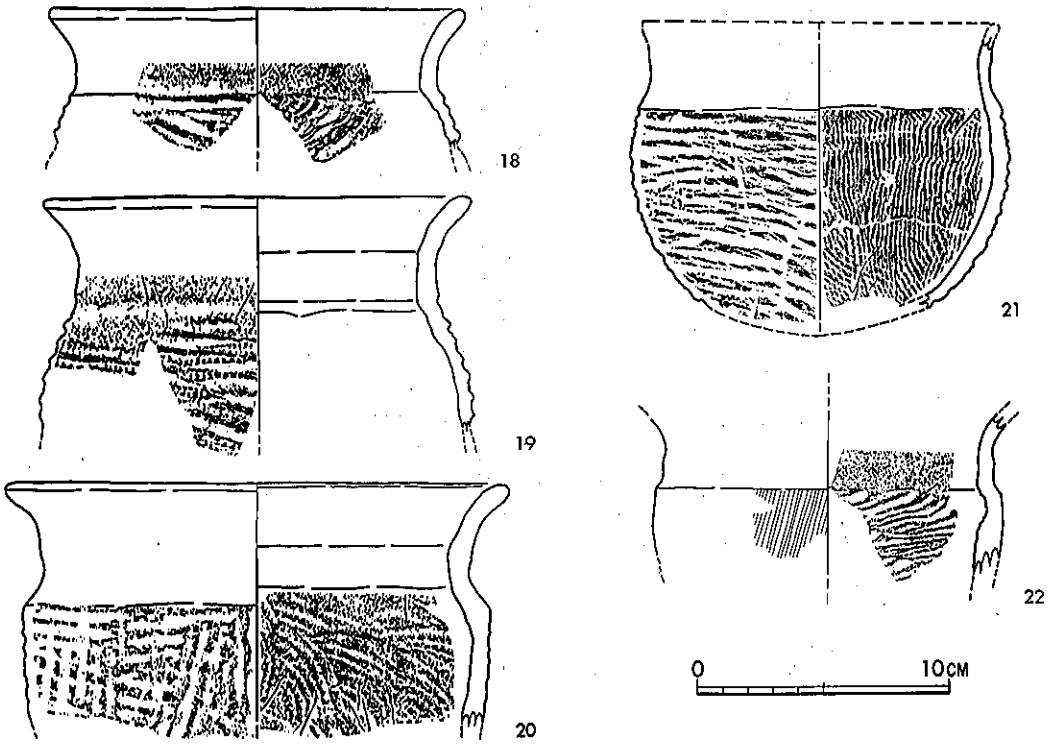
(3) 製塩土器Ⅱ類

（第58図、1～28）

Ⅱ類土器は、内面に布目痕をもつ。いずれも小破片で全形を知り得るものはないが、口径は10～12cm前後に復原できる。下関市筏石遺跡[注④]や、太宰府市市の上遺跡[注⑥]では完形に近いものが出土しており、器高25～35cm程の細長い円筒形をなす。外面は指押えにより整形しており、凹凸が激しく器壁の厚さは一様でないが、まれに丁寧にナデたもの（1）もある。底部（24～28）は尖底に近い小さな丸底である。口縁部は、ほぼ直口か、わずかに内彎気味で、端部の外面を指やへらで斜めに切り落す（1～11・14）か、または指で粘土をのばしただけ（12・13・15・18）の雑なつくりである。口縁部内面直下



第57図　製塩土器Ⅰ類実測図Ⅳ



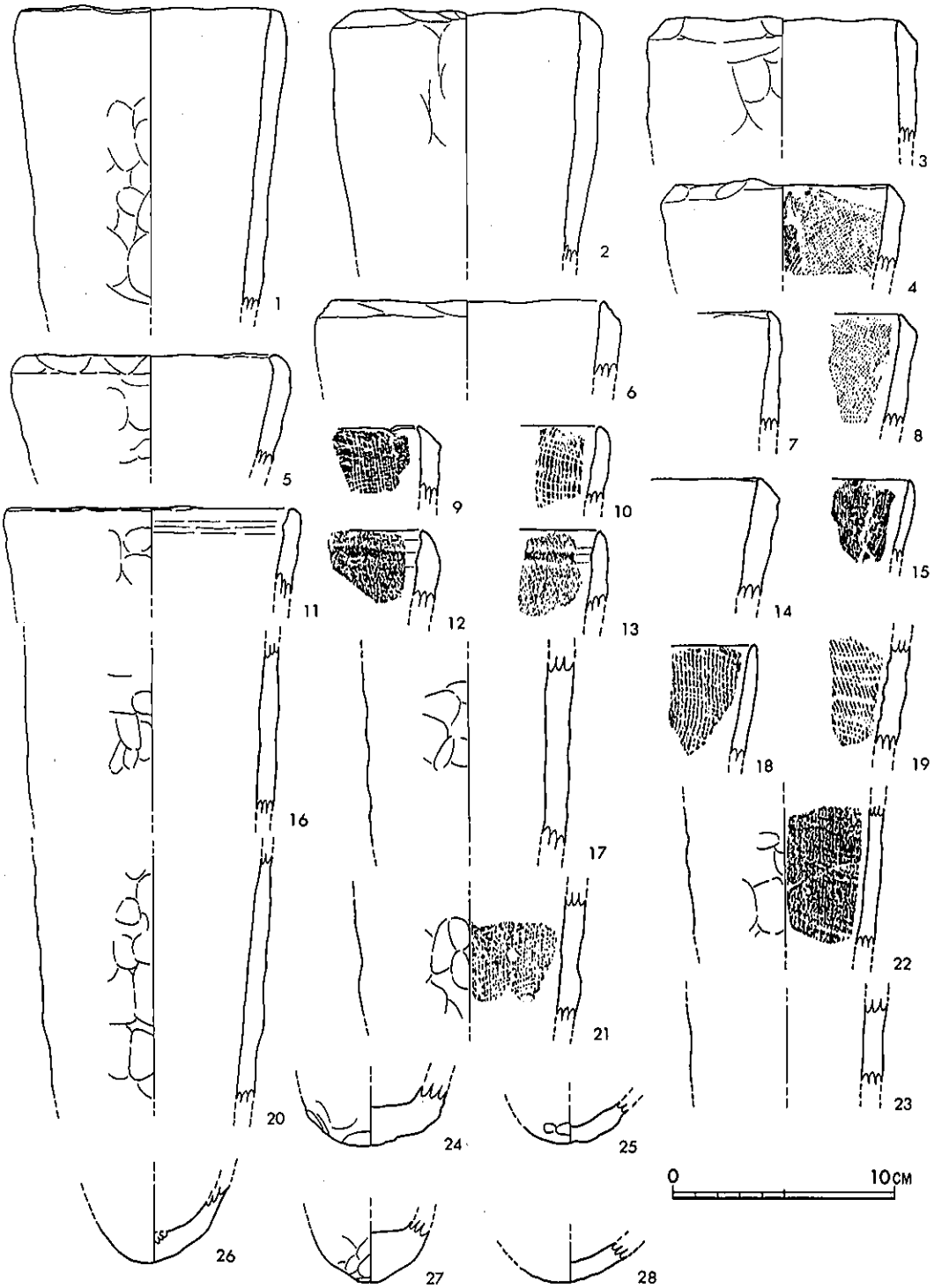
第58図　製塩土器Ⅰ類実測図Ⅴ

に幅3～6㎜の凸帯をもつ例（11～13）があり、凸帯の表面にも布目痕が残っている。布目は非常に織の細かいものから粗いものまでさまざまで、2種類以上の布目をもつもの（4）や、布の縫い目がみられるもの（15）もある。胎土は、水ごした精良な粘土を用いているものが多いが、砂粒を極めて多く混入しているものや、金雲母片を含むものもある。焼成は良好で、黄褐色、明褐色、灰褐色等を呈するが、部分的に二次的加熱を受け赤色化したり、桃白色、赤紫色等の変色をしている破片が多い。また、内面の器壁が剥離したり布目痕が磨耗している例もかなり認められる。また図示しなかったが、口径12㎝破片がわずかながらみられ、蓋の可能性があるが、小破片では円筒形のものと区別ができない。

Ⅱ類土器は、「型」に粘土を貼り付けて成形したと考えられ、口縁端部外面が斜めに尖っているのは余分の粘土をへらまたは指で切り落したためである。口縁部内面の凸帯は、粘土を貼り付ける際の目安として、型自体に溝を彫り込んだことによるのであろう。すなわち、Ⅱ類は容量の一定化を図るために型作りをしたと考える。

第3章　で述べたように、Ⅰ類土器は多数の破片がブロック状をなし、莫大な量の炭、灰を伴って廃棄されており、大量の燃料を消費し、消耗品的に使用されたことがわかる。Ⅰ類土器を除いて、須恵器、土師器等、日常容器類のセットはすべてそろっており，またⅠ類土器が長

1　製塩土器



第59図　製塩土器II類実測図

崎県串島遺跡、福岡市長浜砂丘、下関市筏石遺跡等の8、9世紀代を中心とした北部九州の海岸遺跡に広く分布していることから、海に関連する特殊な用途に使用されたと考えられる。器壁の剝離、細片化は、器壁に浸み込んだ鹹水からさまざまな化合物が析出し結晶化する際の膨張エネルギーによるもので、土器の損耗を高める原因になり、桃白色、赤紫色等の変色とともに、製塩土器特有の現象である。以上のことから、Ⅰ類土器は鹹水煎熬用の製塩土器と言える。[註③]器壁を強く叩き締めているのは、器壁の剝離と土器の損耗を減ずるための効果があり、胴部下半の破片に剝離や細片化が著しいのは、濃い鹹水と強い火熱の影響によるものであろう。製塩炉は検出されなかったが、底部近くに輪状にススが付着している。などから、Ⅰ類土器の下部から加熱する構造が推定され、器壁全面で火を受ける古墳時代の製塩土器との間に変化がみられる。

Ⅱ類土器は、長崎県串島遺跡から瀬戸内地方にかけて、海岸遺跡に広く分布しており、そのうち下関市周辺の資料は、小野忠熙氏により「六連島式土器」とされていたものである。[註④] 二次的加熱痕や変色、器壁の剝離等がみられ、製塩に伴う何らかの工程に関与したことは明らかであるが、煮沸に不適な器形であり、また鹹水煎熬用のⅠ類土器と共に出土していることから、Ⅰ類土器とは異なった機能が考えられる。最近、観世音寺、市の上遺跡、千潟遺跡、仲島遺跡、筑後国府跡、竹戸遺跡、多々良込田遺跡、勝円B遺跡、幸寺遺跡等、北部九州の内陸地遺跡での出土例が増加しており、さらに平城京や長岡京からも出土している[註⑦]。したがって、Ⅱ類土器は塩運搬容器であり、その塩の製品は固型の焼塩化されたものであったと考えられる。これらの内陸部遺跡は、寺院、官衙等の公的機関の性格が強く、Ⅱ類土器にみられる容量一定化の意図と合わせて、塩の貢納と深く関係した土器と言える。その時期は、8世紀後半から9世紀前半を中心としており、ほぼ律令体制期の前半にあたる。以上のように、本遺跡では8世紀後半から9世紀前半の時期に、鹹水煎熬用のⅠ類土器と、塩運搬ないし固型塩作製用のⅡ類土器が確認でき、両者の間には明らかな機能の分化がみられる。しかし、10世紀代（第3次調査）になるとⅡ類土器がなくなる。これは、塩の精製、運搬あるいは貢納方法の変化によるものかと思われる。　（市　橋）

註①　浜田昌治「今山遺跡第5．6地点発掘調査を終えて」『福岡考古懇話会々報』第10号　1979年

註②　近藤義郎「天草式製塩土器」『日本塩業の研究』第15集　1974年

註③　叩き締め技法については、横山浩一「須恵器の叩き目」『史淵』第117号　1980年によった。

註④　小野忠熙「筏石遺跡」『山口県文化財概要』第4集　山口県教育委員会　1961年

註⑤　副島邦弘氏に御教示いただいた。

註⑥　近藤義郎「師楽式遺跡における古代塩生産の立証」『歴史学研究』223　1958年

註⑦　森田勉、柳沢一男、舟山良一各氏に御教示いただいた。

2 漁撈具

漁撈具は前節で述べた製塩土器と共に本遺跡を最も特徴づける遺物であり、その出土量も極めて多い。漁撈具とした遺物には、大別して、直接的にその生産活動に必要な道具類と、その活動によって、入手した魚類の処理に使用されたものの二種類に分類できる。直接的な道具類としては、網あるいは釣のおもりとしての錘の類、釣漁に使用する鉄製釣針、ヤス、銛としての刺突具、藻刈り用としての鉄製鎌等がある。間接的な処理具としては、魚類の解体、処理の庖丁として使用されたと考える刀子類がある。

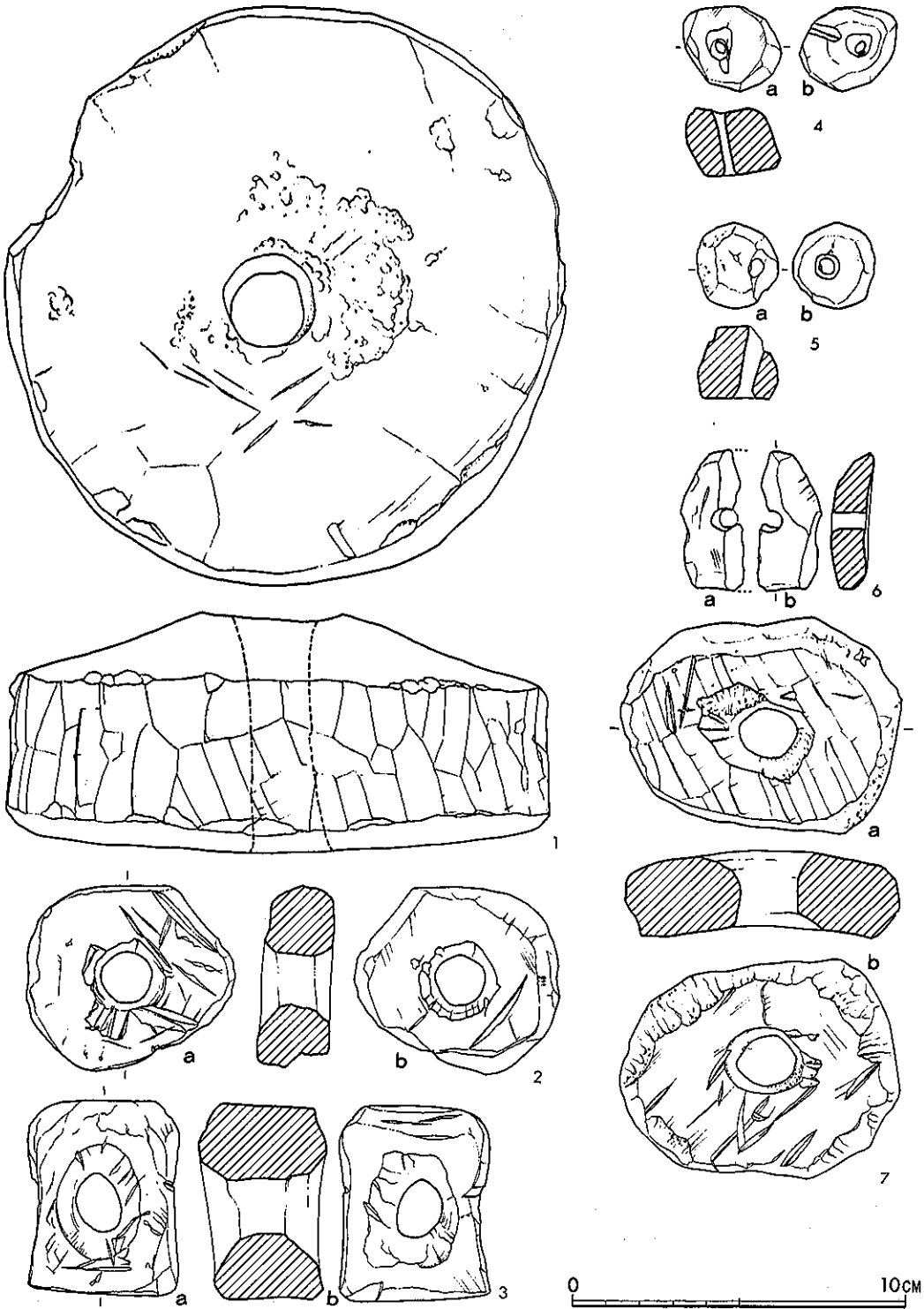
(1) 錘

錘には、大きくは 沈子（錨）、漁網錘、釣り用の錘の三種類に分類できる。ただし、漁網錘と釣用の錘と、その区別が困難であることから、一応、すべてを錘としてとらえ、後にその使用目的の逆いの分類を試みることにする。錘はその使用素材が非常に明確である。錘の素材を分類すると次の三種類がある。①石（滑石）製、②土製、③鉛製がそれで、以下、その順番に説明を加える。

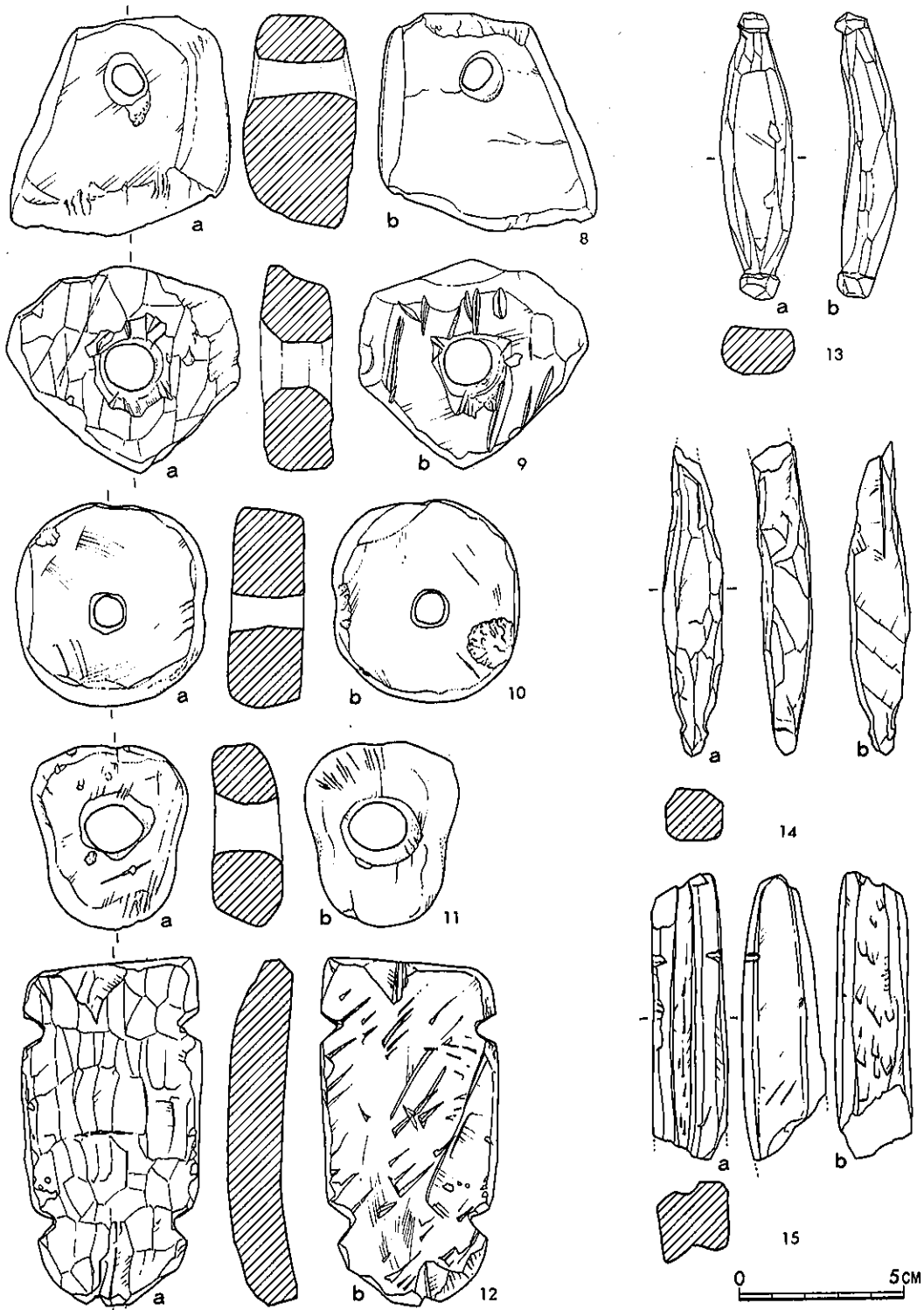
① 石（滑石製）錘（第60～62図）

石錘はすべてが滑石製品である。その形状から、Ⅰ類、有孔石錘、Ⅱ類、有溝（刻）石錘、Ⅲ類、紐かけの削り出し部を有するものの３類に分類できる。さらにⅠ類では、沈子としての大型品（a）、扁平な板状のもの（b）、球状のもの、Ⅱ類では、有溝のみのもの（a）、刻目のもの（b）、球形で孔と溝を併用するもの（c）に細分できる。

第60図１はⅠ類aに分類できるものである。平面形は直径16.8cm～17.5cmのほぼ円形で中央部に向って厚みを増し断面形は紡錘形をなすが周縁部は面とりがしてある。厚7.1cm。中央部に直径2.6cmの孔を穿っている。重量は2.135kg、全体に作りが丁寧で加工痕が明瞭に残っているが、稜線は使用によって磨滅している。３次調査E－12区出土である。第60図２、３、６、７、第61図８～11はⅠ類bに分類できるのである。平面形は一定しておらず円～矩形までまちまちである。２は長径6.2cm、短径5.5cmの楕円形をしたもので、厚さ2.2cm、中央部に径1.5cmの孔を穿っている。重さ115g、周縁部bは使用による磨滅が著しいが、a面にはのみによる加工痕が明瞭である。３次調査K－13区出土。３は長さ5.8cm、幅4.3cmの長方形をしたもので、厚さ3.9cm、中央部に径1.9×1.3cmの楕円形の孔を穿っている。重さ162g、本資料は石鍋把手の再利用品であることは、再加工の加工痕、４面に付着しているススから容易に判断できる。また、孔内面にも後の紐すずれがあるにもかかわらずススが付着している。このことは、この孔が再利用される以前、石鍋の段階から穿たれていたとみられる。ススの付着状態からみれば漁網錘等の使用は考え難い。周縁部は使用による磨滅が著しい。６は破片で全形を知り得ない。中央



第60図　石錘実測図Ⅰ



第61図　石錘実測図II

部と思える部分に径0.5cmの孔を穿つ。重さ10g と、他より著しく小さい、断面は弯曲する。3次調査Ⅰ—11区出土。

7は長径8.4cm、短径6.4cmの楕円形をしたもので、厚さ2.3cm断面はやや弯曲している。中央部に径1.7cmの孔を穿つ、重さ210g。周縁部は使用によって著しく磨滅している。a、b面共にノミによる製作痕が明瞭に残る。なお、a面にはススが付着しており、石鍋の再利用品であることがわかる。3次調査C—3区出土。8は長さ6.6×6.6cmの台形状をなし、厚さ3.4cmで、片側に寄って径0.9cmの孔を穿つ。重さ230g、周縁部の磨滅は前者同様である。3次調査出土。9は長径6.3cm、短径6.1cmの矩形なす。厚さ2.2cm、重さ142g、中央部に径1.3cmの孔を穿っている。a、b面にノミによる製作痕が残り、a面にはススが付着していて、これも石鍋の再利用品であることがわかる。3次調査A—13区出土。10は長径6.1cm、短径5.7cmの円に近い隅丸方形を呈する。厚さ2.3cm、中央部に径0.8cmの孔を穿つ。重さ160g、a、b面共に平坦によく研磨され、周縁部は磨滅する。他の錘と若干異り、製作が丁寧である。一見、紡錘車とも見えるが、周縁部の磨滅は他と一致している。紡錘車の再利用か。3次調査D—8区出土。11は長径5.6cm、短径4cmの台形状をなし中央部に径1.3cmの孔を穿つ。全体に著しく磨滅していて丸味をもっている。重さ80g、3次調査G—8区出土。

第60図4、5はⅠ類Cに分類できるもので、小型品である。4は2.8×2.5cmの楕円形で、厚さ2cm、やや片寄って経0.3cmの孔を穿つ。全体につくりがいびつである。稜線は使用のため磨滅する。重さ21g、3次調査E—11区出土。5は2.6×2.4cmのほぼ円形で厚さ2.1cm、重さ16g片寄って径0.4cmの孔が斜方向に穿たれる。a面にススが付着し、石鍋の再利用品である。使用による磨滅は認めない。3次調査B—12区出土。

第61図15、第62図16はⅡ類aに分類できるものである。15は長さ8.6cm、幅2.2cm、厚さ2.5cmの棒状のもので、一部欠損する。溝は本来は一周して刻み込まれたものと考えられる。全体に使用による磨滅が著しい。重さ67.5g、3次調査D—12区出土。16は長さ8.7cm、幅2.2cmの紡錘形をなし、厚さ2.3cm、a面の長軸に一条と、それに交叉する。他の3面に溝を刻む。全体に製作痕が明瞭で使用による磨滅は認められない。重さ69g、3次調査F—11区出土。

第61図はⅡ類bに分類できるものである。長さ10.5cm、幅5.5cmの長方形で厚さ1.5cmの板状のもので、やや弯曲する。長軸の側辺2ケ所の1対と短軸の1対に刻みが入れられ紐かけとしている。全体にノミの製作痕が明瞭である。a面にはススがわずかに付着しており、石鍋の再利用品である。使用による磨滅は認められない。重さ185g、3次調査出土。

第62図17はⅡ類cに分類できるものである。球形の体部に台座と紐結びの鈕とつけたもので、全体に丁寧なつくりであるが、素材である滑石に気泡が多いため外見上は良くない。球形の体部は直径4.6cmの円形で、厚さ3.7cmで、縦に12条の等間隔に刻まれた溝がある。台座は直径2.5cmの同形で、高さは0.5cmである。鈕は1.2cmの方形で体部との境に径0.3cmの孔を穿つ。

孔は紐ずれが著しい。重さ105g。

第61図13、14はⅢ類に分類できるものである。13は長さ8.7cm、幅2.2cm、厚さ2.1cmの棒状のもので両端部に紐くくりの刻り出し部がある。わずかに弯曲し、それからみて石鍋の再利用品であることがわかる。全体に製作痕が明瞭である。重さ45g、3次調査G—11出土。14は長さ6.5cm、幅1.9cm、厚さ1.5cmの棒状のもので、一端に紐くくりの削り出し部があるが、一方には、つくり出されておらず未製品である。製作痕が明瞭に残り、一面にススが付着しており、これも石鍋の再利用品である。重さ38g。

第62図18は石錘未製品と思われる石鍋再利用品である。長さ5.4cm、幅2.5cm、厚さ1.6cm、重さ37gで一面にススの付着がある。3次調査Ⅰ—12区出土。この他に未製品1点、重さ36gとⅠ類bに分類できる1点、重さ99gがある。

以上が海の中道遺跡出土の、石錘である。すべてが滑石製品で3次調査の出土である。石鍋の再利用品も多い。すべてが量的には土錘等に比較し非常に少なく、本遺跡の主体を占めるものではない。

② **土錘**（第62、63図）

土錘の種類は多様で、その量は多く、錘の主体を占める。土錘の形状からⅠ類、管状土錘、Ⅱ類、球状土錘、Ⅲ類、有孔土錘、Ⅳ類、有溝土錘の4種に大別できる。

Ⅰ類の管状土錘では、筒形（a）半紡錘形（b）紡錘形（c）細身の紡錘形（d）有溝を併用するもの（e）の5種に細分できる。さらにaでは大（1）中（2）小（3）極細（4）の4種に、bでは同様に大（1）中（2）小（3）の3種に、cでは大（1）中（2）小（3）極小（4）の4種に、dでは中細（1）極細（2）の2種に区別することが可能である。

Ⅱ類の球状土錘では、球形のもの（a）と球形に溝を併用するもの（b）に細別できる。さらにaでは大（1）、中（2）、小（3）の3種に、bでは中（1）小（2）に区別することが可能である。

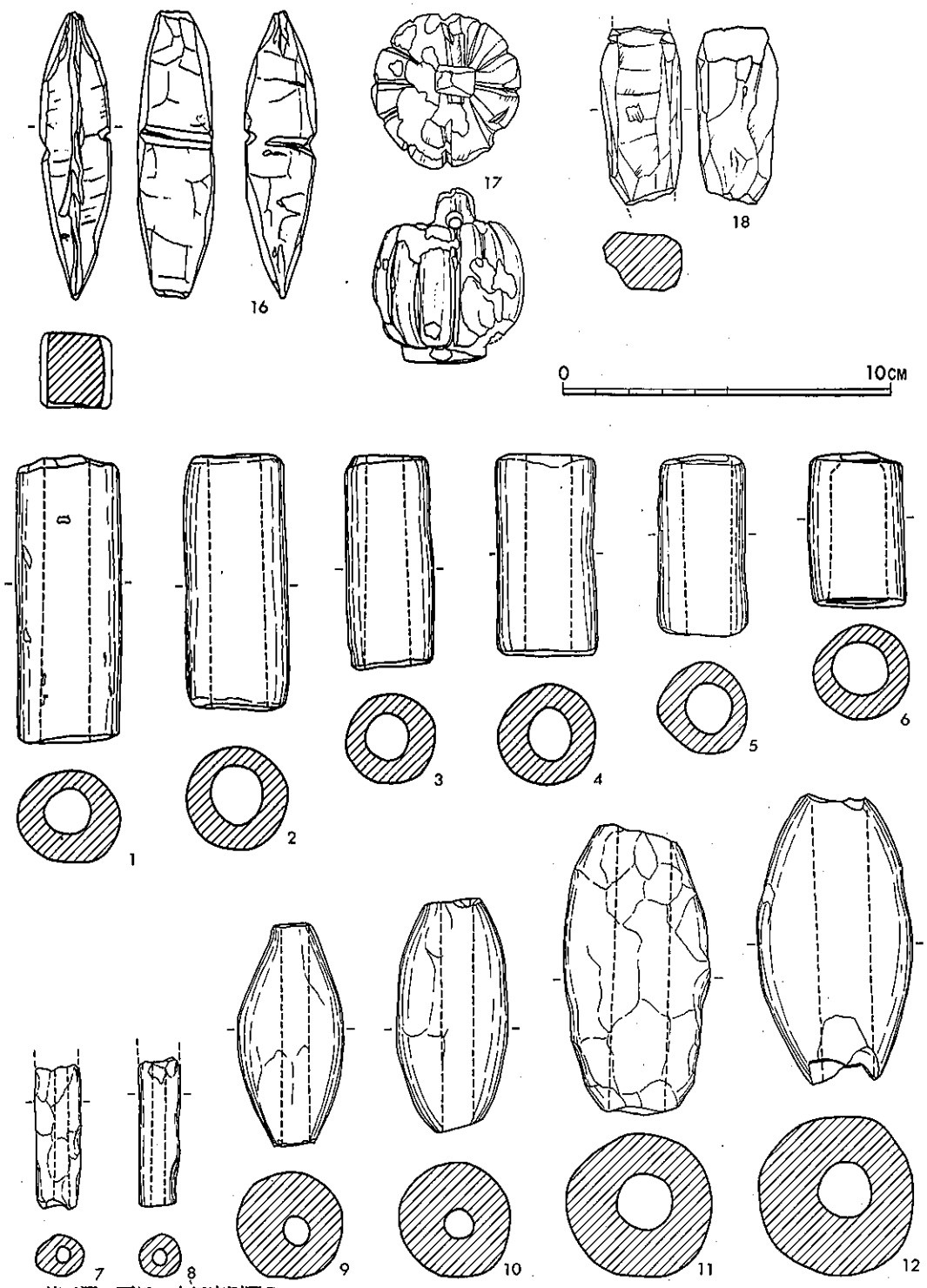
Ⅳ類では大（1）小（2）に分けることが可能である。

Ⅰ類a—1（第62図1、2）

すべてが3次調査の出土で計測可能なもの22点がある。形状は竹輪状をしたもので、全て使用による磨滅が著しい。破損し、計測不能なものも多い。長さは8.7cm～7.2cmで、平均7.6＋αcm、径は3.6cm～2.6cmで、平均2.85＋αcm、孔径1.8～1.2cmで、平均1.5cm、重さは102g～59gで、平均68.9g＋αである。

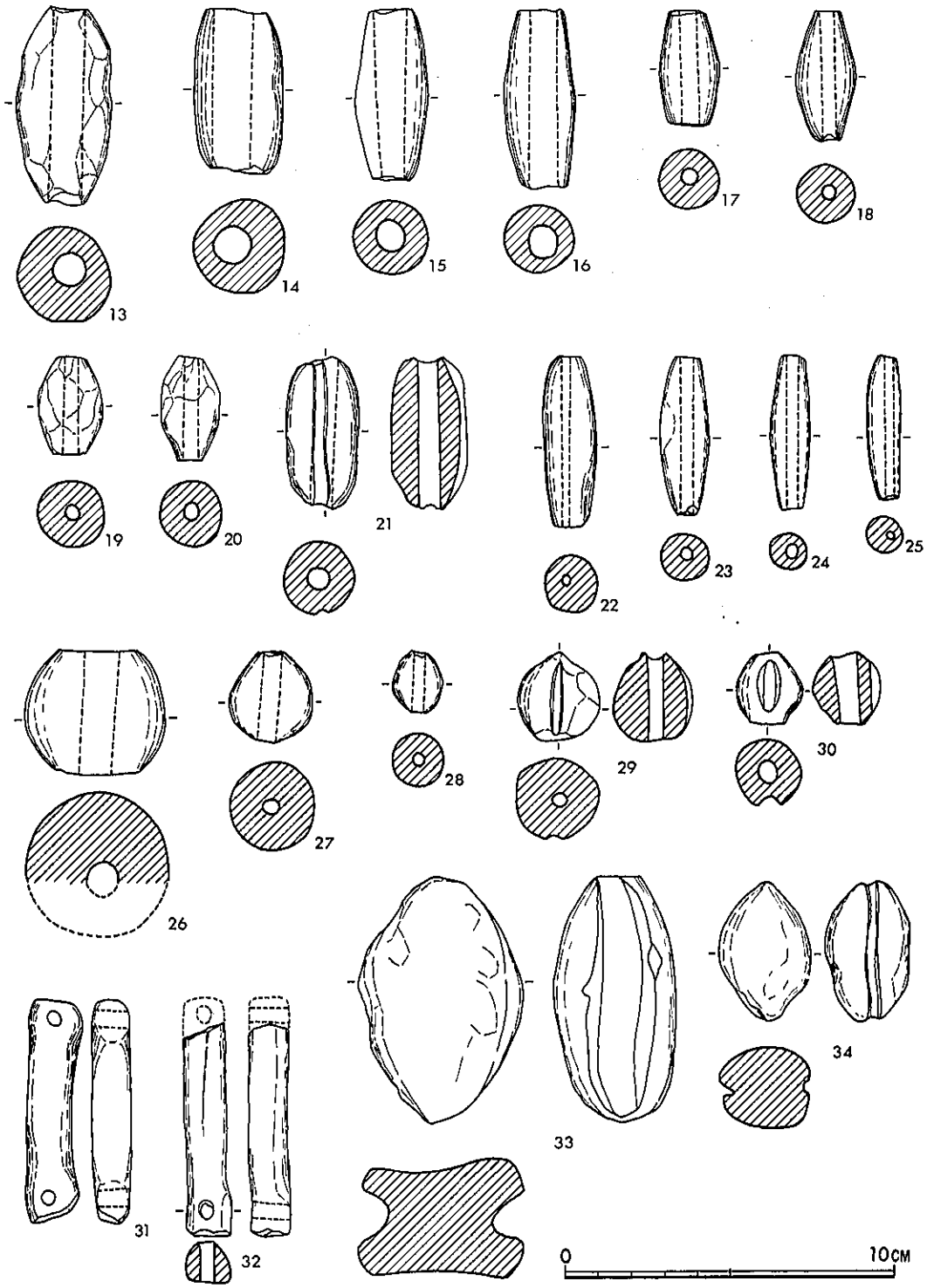
Ⅰ類a—2（第62図3、4）

すべてが3次調査の出土で、計測可能なもの13点がある。形状はⅠ類a—1と同様であるが長さが若干短かくなる。全て使用による磨滅が著しい。破損し計測不可能なものが多い。長さは6.9cm～6.0cmで、平均6.4cm、径は3.6cm～2.6cmで、平均2.95cm＋α、孔径は2.1cm～1.3cm



第62図　石錘　土錘実測図Ⅰ

2 漁 撈 具



第63図　土錘実測図II

で、平均1.53cm、重さは74g～41gで、平均51g＋αである。

Ⅰ類a－3（第62図5、6）

すべて3次調査の出土、形状は前二者と同様で、長さが前者より若干短かくなる。計測可能なもの10点がある。すべて使用による磨滅が著しい。計測不可能なものが多い。長さ5.7cm～4.6cmで、平均5.34cm、径は3.15cm～2.3cmで、平均2.88cm、孔径は1.7cm～1.2cmで、平均1.52cm、重さは68g～32gで、平均40.9gである。

Ⅰ類a－4（第62図7、8）

2、3次調査で各1点がある。完形でなく長さは現存で4.4cmであるが、8cm前後になる細長いものであろう。径は平均1.4cm、孔径は平均で0.475cm、重さは平均8.8g＋αである。

Ⅰ類b－1（第62図11、12）

3次調査の出土品が主で若干1、2次調査の出土品が混じる。計測可能なもの93点がある。形状はⅠ類aに対し、丸味をもち、紡錘形をなすが、次に説明するⅠ類cと比較し粗雑なつくりである。使用による磨滅が著しい。破損し計測不可能なものも多い。長さ9.5cm～6.5cmで、平均7.3cm、径4.7cm～2.4cmで、平均3.85cm、孔径2.6cm～0.9cmで、平均1.7cm、重さ170g～68gで、平均115.3gである。

Ⅰ類b－2（第62図9、10）

3次調査出土品が主体を占める。形状は前者と変わらないが、一まわり小型になる。計測可能なもの107点がある。全て使用による磨滅が著しい。破損し計測不可能なものも多い。長さ7.7cm～4.8cmで、平均6.326＋αcm、径4.4cm～2.7cmで、平均3.46＋αcm、孔径2.2cm～0.8cmで、平均1.51cm、重さ119g～42gで、平均64.3＋αgである。

Ⅰ類b－3（第63図13、14）

さらに小型化するもので、1～3次調査で出土したものである。形状が若干異なるものがあるが、今回は一括しておく。計測可能なもの114点がある。全て使用による磨滅が著しい。破損し計測不可能なものも多い。長さ6.5cm～4.0cmで、平均5.232＋αcm、径3.8cm～2.1cmで、平均2.958＋αcm、孔径1.8cm～0.5cmで、平均1.212＋αcm、重さ69g～11gで、平均41.728＋αgである。

Ⅰ類c－1（第63図15、16）

Ⅰ類bよりも中央部がふくらみ紡錘形になり、つくりが丁寧なもので、Ⅰ類bに比較し小型である。計測可能なもの20点がある。長さ7.5cm～5.2cmで、平均6.22＋αcm、径3.2cm～2.2cmで、平均2.535cm、孔径1.0～0.4cmで、平均0.725cm、重さ65g～25gで、平均41.65gである。

Ⅰ類c－2

前者に比較しやや小型である。計測可能なもの13点がある。使用による磨滅が著しい。2次

調査出土例が多い。長さ5.5cm～4.5cmで、平均4.88＋αcm、径2.55cm～1.6cmで、平均2.154cm、孔径1.0cm～0.4cmで、平均0.692cm、重さ28.2g～13.0gで、平均20.492＋αgである。

Ⅰ類c－3（第63図17、18）

さらに小型化するもので、計測可能なもの16点がある。2次調査出土例が主体を占める。長さ5.9cm～3.5cmで、平均4.228＋αcm、径2.0cm～1.6cmで、平均1.75cm、孔径0.7cm～0.3cmで、平均0.469cm、重さ18.5g～7gで、平均11.394＋αgである。

Ⅰ類c－4（第63図19、20）

さらに小型化し、球形に近くなるものである。わずかに3点がある。釣用の錘と考えることもできる。長さ3.1cm～3.0cmで、平均3.03cm、径1.9cm、孔径0.5cm～0.4cmで、平均0.46cm、重さ平均9.56＋αgである。

Ⅰ類d－1（第63図22、23）

Ⅰ類a～c類に比較し、使用される粘土が良質である。細身の小型品である。計測できるもの10点がある。長さ5.35cm～4.6cmで、平均4.395＋αcm、径1.65cm～1.25cmで、平均1.445cm、孔径0.5cm～0.25cmで、平均0.385cm、重さ11.6g～7.1g、平均8.04＋αgである。

Ⅰ類d－2（63図24、25）

Ⅰ類d－1に比較し、さらに細身になるもので、計測できるもの12点がある。長さ5.6cm～3.65cmで、平均3.975＋αcm、径1.65cm～1.0cmで、平均1.158＋αcm、孔径0.5cm～0.2cmで、平均0.336cm、重さ11.5g～4.0gで、平均4.833＋αgである。

Ⅰ類e（第63図21）

わずか1点の出土である。小型品で形状はⅠ類bと同じであるが長辺の一辺に溝を刻み込む。長さ4.6cm、径1.85cm、孔径0.9cm、重さ24.7gである。

Ⅱ類a－1（第63図26）

Ⅱ類の錘はⅠ類に比較し、極めてその数は少ない。a－1類は2点あるが、いずれも半分のみが存在する。ほぼ円形で、長さ平均3.85cm、径平均4.1＋αcm、孔径平均1.1＋αcm、重さ39g＋αである。

Ⅱ類a－2（第63図27）

形状は前者と同じで、小型化したもので、計測できるもの6点がある。長さ2.5cm～2.0cm、平均2.325cm、径2.55cm～2.1cmで、平均2.35cmの、ほぼ球形である。孔径0.6cm～0.4cmで、平均0.5cm、重さ14.9g～10.2gで、平均12.5＋αgである。

Ⅱ類a－3（第63図28）

さらに小型化するもので、6点があり、すべて3次調査で出土している。長さ2.4cm～1.8cm、平均2.15cm、径2.05cm～1.6cmで、平均1.875cm、孔径0.5cm～0.4cmで、平均0.45cm、重さ9.0g～3.6gで、平均6.58gである。

Ⅱ類b—1（第63図29）

Ⅱ類a—2とほぼ同形同大で、1辺に溝を有するものである。3次調査で4点出土してある。長さ2.65cm～2.05cmで、平均2.38cm、径2.75cm～2.4cmで、平均2.525cm、孔径0.6cm～0.4cmで、平均0.525cm、重さ13.9g～10.5gで、平均12.5gである。

Ⅱ類b—2（第63図30）

3次調査で1点出土している。長さ2.1cm、径2.0cm、孔径1.1cm、重さ8.1gである。

Ⅲ類（第63図31、32）

1、3次調査で各1点の出土がある。棒状の両端に孔を穿つもので、長さ6.8cm、径1.2cm、孔径0.5cm、重さ14.7gと長さ6.4＋αcm、径1.25cm、孔径0.555cm、重さ13.9gである。

Ⅳ類a—1（第63図33）

滑車形をした土錘で、3次調査で1点の出土がある。両側に溝を有する。長さ7.3cm、幅5.1cm、厚さ3.6cm、重さ108gである。

Ⅳ類a—2（第63図34）

前者と同形で小型化したものである。3次調査で2点の出土がある。長さ4.25cm、幅2.8cm、厚さ2.5cm、重さ21gと長さ4.75cm、幅2.8cm、厚さ2.7cm、重さ35.5gである。

③　鉛錘（第64図）

鉛製品は2、3次調査において31点出土した。いずれも錘およびその原材と考えられる。Ⅰ類　原材、Ⅱ類　棒状錘、Ⅲ類　板状錘に大別できる。

Ⅰ類（64図1～4）

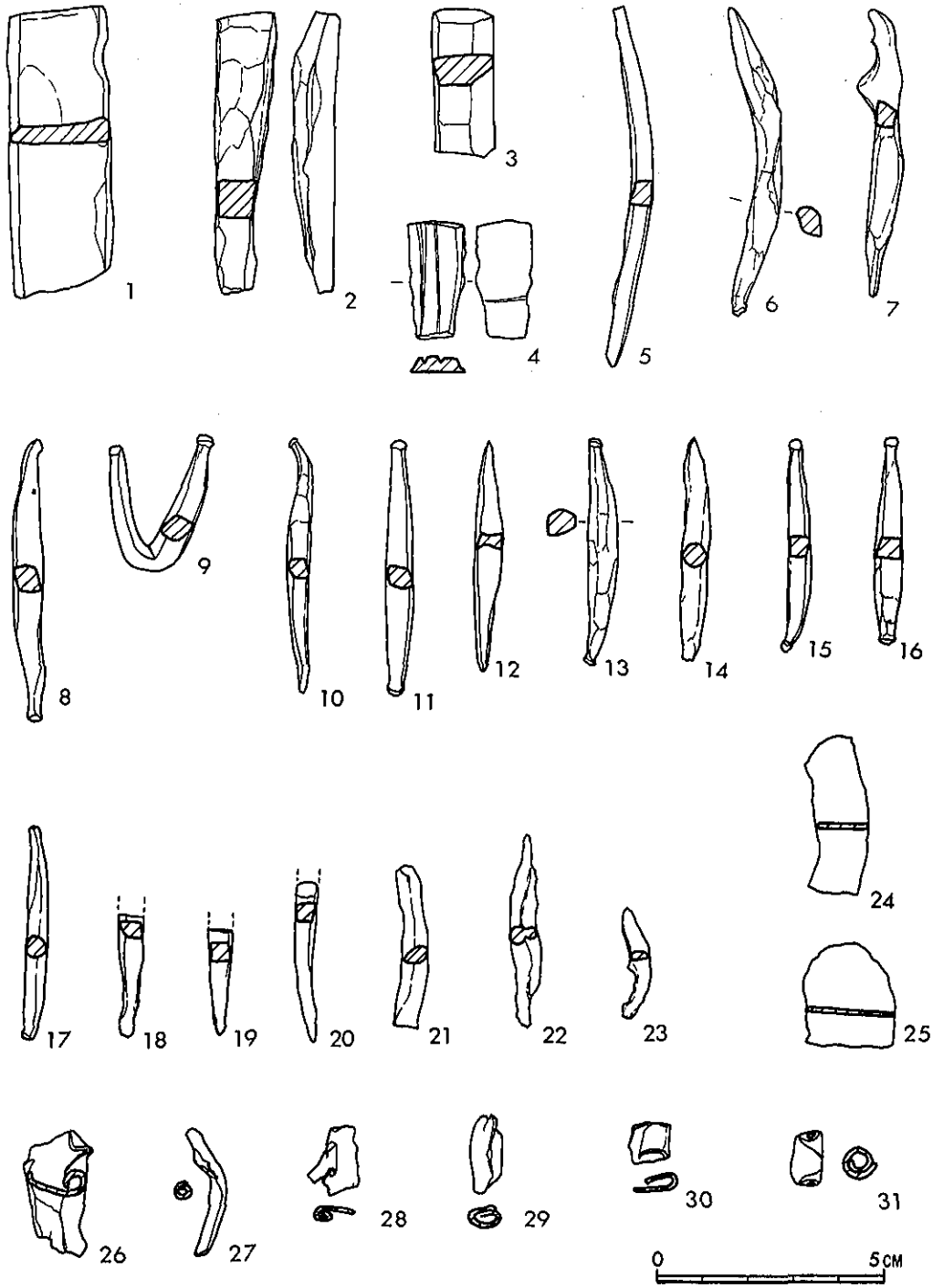
4点が出土している。1は長さ6.3cm、幅2.2cm、厚さ0.6cmの長方形の板状をなし、重さ48.7g。2は長さ6.2cm、幅1.3cm、厚さ0.9cmで重さ40.8gを計る。1を半切したような板状のものである。3は長さ3.3cm、幅1.4cm、厚さ0.3cmの長方形の板状をなす。重さ26.5g。4は長さ2.5cm、幅1.2cm、厚さ0・3cm、重さ9.5g。長軸の一辺に切断の痕跡を示し、それに平行して2本の切断途中の傷がある。また裏面にもそれと直交する切断途中の傷1本がある。1～4はいずれも、錘製作のための原材と考えられ、4に残る切断痕がこのことを示している。

Ⅱ類（第64図5～23）

形は棒状になるものである。紐くくり部を付したもの（a）と紐くくり部のないもの（b）、その他（c）に分類できる。

aは8、9、11、13、15～20の9点がある。両端部が細くなり、端部にコブをつくり出し、紐がはずれないようにしたものである。現在、使用されている投網に使用されている鉛製の錘との類似が指摘できる。現在使用の鉛錘は鋳造されたものであるが、本資料は鋳造したものでなく、先の原材から分割して削りを加えて作ったものである。長さ6.2cm～4.6cm、幅0.7cm～0.4cm、厚さ0.55cm～0.4cm、重さ12.5g～6.4gのものがある。

2 漁 撈 具



第64図　鉛錘実測図

bは5～7、10、12、14、20の7点がある。両端部は細かくなるのは前者と同様であるが、紐くくりのための特別の配慮はない。長さ8.0～4.9cm、幅1.1cm～0.5cm、厚さ0.7cm～0.4cm、重さ14.6g～4.0gのものがある。長いものから短かいものまで変化が大きい。

cは21～22の3点がある。一応、錘として取扱ったが、錘とは考えがたいものである。

また、他の製品とみることも不可能である。溶けたものが固った状態で、次に説明する板状錘の原材料とみることも可能である。

以上、棒状鉛錘について説明したが、いずれも形状的には大きな差異はないが、長さや重さに一定のまとまりはない。断面的に違いがあり、円形と方形がある。この違いは注目すべきで、断面円形のもの（13、14、17）は2次調査のみに出土し、断面方形のものは3次調査出土のものが主体を占める。この違いは時間差として把握することができそうである。

Ⅲ類（第64図24～31）

板状鉛錘である。未使用ないしは素材の鉛板（a）（24、25）と使用された板状鉛錘（b）（26～31）の2種に細分できる。

aは2点ある。24は長さ3.4cm、幅1.5cm、厚さ0.1cmの変形の長方形鉛板で重さ3.4g、25は長さ2.3cm、幅2.0cm、厚さ0.1cmの変形の方形鉛板で重さ3.1gである。

bは6点ある。26は長方形鉛板の長軸の両端をわずかに巻きこんでいる。27は前者同様に長方形鉛板の長軸にそって巻きこんだもので、使用時の状態を良く残している。断面は円形を示す。28は方形鉛板の一端を巻いたものである。29は長方形鉛板の短軸にそって巻きこんだもので、27同様に使用時の状態を良く残している。断面形は楕円形を示す。30は長方形鉛板の短軸にそって折りまげたもの。31は長方形鉛板の短軸にそって巻きこんだもので、使用時の状態を最も良く残している。断面は円形を示す。

これら板状鉛錘は現在でも釣用として多用される。これは潮流等による小さな重さの変動を調整するためのものである。

以上、石錘、土錘、鉛錘について説明を加えた。以下、各錘の計測の一覧表を提示しておく。

（山　崎）

第2表 土錘・鉛錘一覧表

土錘 I類 a－1

番	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)	番	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)
1	C－4区－3①	3	8.7	3.3	1.5	100	12	E－11区①	3	7.3	3.4	1.6	59
2	E－9区④	3	7.2	3.0	1.5	79	13	H－11区－3③	3	7.4	2.9	1.4	70
3	C－4区－3②	3	8.7	3.3	1.3	85	14	H－11区－3⑤	3	7.2	3.0	1.6	69
4	E－7区－2⑧	3	8.1	2.9	1.3	59	15	D－9区－3⑨	3	7.8	2.7	1.4	42＋α
5	B－12区－3	3	7.2	3.6	1.8	80	16	上部包含層焼上 H－4区	3	7.3	3.0	1.2	68
6	G－6区－2	3	7.8	3.0	1.6	73	17	第一貝塚 section 9	3	7.3	3.4	1.4	97
7	層上 A－7区－3①	3	8.7	2.6	1.5	59	18	第一貝塚 K－12区－3	3	8.2	3.25	1.7	42＋α
8	D－6区－3⑥	3	6.8	3.0	1.4	70	19	第一貝塚 section 10	3	7.1	3.2	1.7	79
9	I－11区－2	3	7.2	2.7	1.6	59	20	第一貝塚 K－11区－3	3	6.9	2.9	1.2	71
10	A－4区－3②	3	8.5	3.4	1.4	102	21	C－8区－2⑦	3	7.0	3.05＋α	1.3＋α	33＋α
11	G－4区－1①	3	7.4	3.1	1.7	65	22	D－5区－3②	3	7.0＋α	3.55	1.8	55＋α
						平均				7.6＋α	2.85＋α	1.5	68.9＋α

土錘 I類 a－2

番	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)	番	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)
1	C－8区－2⑥	3	6.6	2.6	1.3	43	8	F－9区－2②	3	6.3	3.0	1.3	50
2	C－8区－2③	3	6.5	2.7	1.3	45	9	D－7区－2④	3	6.1	2.9	1.6	59
3	B－5区－3①	3	6.6	2.6	1.7	41	10	C－10区－3①	3	6.6	2.7	1.4	51
4	D－10区－2②	3	6.9	2.9	1.3	52	11	I－12区－2③	3	6.3	2.7	1.4	42
5	G－4区－2	3	6.3	3.1	1.5	58	12		3	6.0	3.6	2.1 1.9	73
6	D－8区－1⑥	3	6.1	3.1	1.6	42	13	G－4区－2	3	6.8	3.1＋α	1.6＋α	35＋α
7	E－10区－3③	3	6.3	3.4	1.8	74							
						平均				6.4	2.95＋α	1.53＋α	51＋α

土錘 I類 a－3

番	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)	番	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)
1	F－10区－2④	3	5.5	2.7	1.5	39	6	I－11区－2③	3	5.2	3.1	1.6	40
2	I－12区－2⑥	3	5.6	3.0	1.5	54	7	I－12区－3⑦	3	4.6	2.0	1.7	35
3	G－8区－3	3	5.3	3.1	1.4	48	8	D－5区－3⑥	3	5.4	2.3	1.2	32
4	I－11区－2⑤	3	5.5	3.0	1.7	52	9	第3貝塚 L－13区－6	3	5.6	3.15	1.5	68
5	G－10区－1①	3	5.2	2.7	1.6	38	10	D－5区－3⑤	3	5.7	2.9	1.5	34
						平均				5.35	2.88	1.52	40.9

土錘 I類 a－4

番	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)	番	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)
1	G－9区－2⑤	3	4.4＋α	1.5	0.5	8.7＋α	2	I－02区②	2	4.4＋α	1.3	0.45	8.9＋α
						平均				4.4＋α	1.4	0.475	8.8＋α

土錘 Ⅰ類 b—1

No.	区　層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)	No.	区　層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)
1	F—11—3	3	7.8	3.55	1.9	68	35	G—11—3	3	6.3+α	4.0	2.0	70+α
2	G—5 上部包含層	3	8.8	4.55	2.0	170	36	D—4—3	3	7.3	3.7	1.9	84
3	N—12—2 第2貝塚	3	6.55	3.8	2.6	90	37	F—11—3	3	8.1+α	3.6	1.9	99+α
4	H—3	3	6.7	4.1+α	1.7+α	65+α	38	E—7—2	3	7.2+α	3.5	1.5	80+α
5	L—13 5 第3貝塚	3	6.8	3.75	1.25	100	39	D—8—3	3	8.1+α	3.5	1.3	92+α
6	I—11—1	3	8.6	4.5	2.3	170	40	K—11—1	3	7.8	3.5	1.8	88
7	G—8—3	3	8.8	4.0	1.5	115	41	F—12—3	3	8.0+α	3.4	1.85	80+α
8	E—12 表1	3	7.2	4.1	1.9	110	42	F—12—3	3	7.5	4.05	2.0	90
9	E—7—2	3	7.6	4.3	2.0	115	43	A—4—3	3	7.8	3.6	1.5	82
10	A—10—1	3	6.9	4.2	1.6	130	44	G—8—3	3	8.0	3.6	2.0	82
11	F—10—1	3	7.4	4.4	1.9	135	45	F—12—3	3	7.2	3.7	1.9	79
12	F—12—3	3	8.6	3.7	1.9	110	46	C—8—1	3	7.05+α	3.6	1.9	82+α
13	B—9—2	3	7.7	3.9	1.7	98	47	D—11—1	3	7.85	4.05	1.2	130
14	D—7—1 上面	3	7.7+α	4.25	1.8	100+α	48	G—11—3	3	7.5+α	4.3	2.2	105+α
15	H—11—3	3	9.4	3.7	1.95	105	49	G—8—3	3	7.4	3.0	2.2	110
16	B—7—2	3	7.4+α	3.7	1.5	95+α	50	H—12—3	3	7.0	4.3	1.9	115
17	G—3		7.2	3.8	1.3	90	51	G—4	3	7.6	4.0	1.8	120
18	G—8—3	3	7.1+α	3.5	1.6	85	52	C—7—2	3	8.4	3.5	1.3	90
19	J—03		7.0	3.6	1.3 0.9	100	53	B—11—3	3	6.95	3.65	1.3	85
20	B—11—1		7.8	3.6	1.35	100	54	G—11—1	3	8.0+α	4.0	1.9	110+α
21	F—11—1	3	7.2	3.6	1.6	90	55	C—10—2 試掘	3	8.3	4.7	1.2	159
22	E—11	3	7.35	3.95	1.9	85	56	C—6—2	3	7.6+α	4.1	1.2	159+α
23	A—10—1	3	7.0+α	3.6	1.4	79	57	H—11—3	3	9.5	3.5	1.1	105
24	A—12—0		7.0+α	3.5+α	?	40+α	58	A—12—1	3	7.4+α	4.4	1.7+α	99+α
25	F—11—3	3	7.5+α	4.2	2.1	120+α	59	E—6—3	3	6.2+α	3.7	1.9	68+α
26	UN 3のみ		8.55	3.85	1.3	135	60	第1貝塚3	3	9.1+α	4.1	1.6	111+α
27	E—12—1	3	7.1+α	4.1	2.2	105+α	61	F—7—2	3	7.2+α	4.5	2.2	121+α
28	D—8—2	3	6.5	4.2	1.9	95	62	G—8—3	3	8.8+α	3.8	1.6	125+α
29	E—10—3	3	7.4	3.7	1.7	90	63	B—11—1	3	7.6+α	4.1	1.6	122+α
30	G—11—3	3	6.8	3.75+α	2.1	90+α	64	試掘溝	3	6.7+α	3.6	1.6	85+α
31	A—8—1	3	5.25+α	3.2+α	1.55	45+α	65	E—12—1	3	7.0+α	4.0	1.6	100+α
32	F—11 表1	3	8.2	3.8	1.8	100	66	A—9—1	3	7.1+α	3.9	1.7	89+α
33	G—5—2		7.6	3.6	1.4	84	67	C—9—1	3	7.3+α	4.1	1.9	101+α
34	D—7—3	3	7.5	2.4	1.5	74	68	F—10—3	3	7.5	4.0	2.0	101

2 漁 撈 具

番	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)	番	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)
69	F—12—3	3	7.5+α	3.6	1.9	80+α	82	F—12—3	3	7.7+α	4.3	1.9	110+α
70	F—11裏1	3	6.9	3.8	1.6	91	83	G—8	3	7.3+α	3.5	1.6	80+α
71	D—7—2	3	7.0+α	3.4	1.4	58+α	84	A—8—2	3	6.7+α	3.4	1.6	71+α
72	D—10—3	3	7.8	3.9	2.0	88	85	F—4—2	3	6.4+α	3.7	1.5	70+α
73	E—6—3	3	6.6+α	3.5	1.6	69+α	86	J—12—1	3	6.5+α	4.0	2.1 1.7	70+α
74	G—5 上部包含層	3	8.0	4.5	1.8	148	87	C—8—3	3	4.0+α	3.7	1.7	45+α
75	C—9—3	3	8.2+α	3.4	1.7	70+α	88	E—5—3	3	5.2+α	3.5	1.5	39+α
76	E—6—3	3	6.9	3.5	1.2	91	89	E—9—3	3	4.9+α	3.9+α	1.6	55+α
77	G—9—2	3	7.4+α	3.5	1.3	72+α	90	UN 3次		3.7+α	3.7+α	1.4	42+α
78	C—5—3	3	7.3+α	3.6	1.6	81+α	91	D—10—3	3	5.4+α	4.0+α	1.5	59+α
79	E—12—3	3	8.4+α	3.9+α	1.6	84+α	92	D—7—3	3	4.1+α	3.3+α	1.7	35+α
80	F—12—3	3	7.6+α	3.9	1.8	92+α	93	G—11	3	8.85	4.7	1.65	170
81	G—9—2 層上面	3	6.1+α	4.1+α	1.8+α	50+α	平	均		7.3+α	3.85+α	1.7+α	115.3+α

I類 b—2

番	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)	番	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)
1	E—8—3	3	5.9	4.4	1.6	119	20	H—11—3	3	6.4	4.1	2.0	101
2	D—11—1	3	5.9	4.0	1.7	85	21	F—11—3	3	5.9	4.2	1.5	98
3	E—11	3	5.7	3.6	1.6	71	22	C—4—3	3	6.0	4.0	1.5	109
4	D—6—3		5.9	3.7	1.7	70	23	D—10—1	3	4.9+α	4.1+α	1.3	53+α
5	I—12—2	3	5.9+α	3.4	1.6	59+α	24	C—5—3	3	5.9+α	3.7	2.9	71+α
6	D—7—3	3	6.0+α	3.9	1.4	90+α	25	C—10—2	3	6.2+α	3.1	1.0	59+α
7	F—5—2	3	5.4+α	3.4	1.5	59+α	26	1層上面	3	5.8+α	3.4	1.5	60+α
8		3	6.0	3.8	1.8	83	27	A—11—2	3	6.4	3.6	1.55	88
9	C—10—2 試掘部	3	6.3	3.6	1.2	90	28	B—6—3	3	5.6+α	3.5	1.50	56+α
10	F—2		7.7+α	4.0	1.3	98+α	29	C—8—2	3	6.7	2.9	1.5	49
11	C—6—3	3	5.8+α	3.8	1.9	73+α	30	A—11—2	3	7.2+α	3.5	1.05	53+α
12	D—5—2	3	5.2+α	3.6	長2.2 短1.7	72	31	E—7—1	3	6.4+α	3.4	1.3	53+α
13	A—8—2	3	6.0	3.6	1.2	80	32	F—11—3	3	6.2	3.9	1.82	80
14	F—11—3	3	6.5	3.9	2.0	90	33	G—6—2	3	6.8	3.3	1.75	50
15	I—11—2	3	5.6+α	3.7	1.7	73+α	34	H—2		7.1	3.4	0.9	80
16	G—9—1	3	5.9+α	3.8	1.7	81+α	35	I—11—1	3	6.7	3.4	1.5+α	45+α
17	UN 1次		4.8	3.6	1.2	69	36	C—10—2	3	7.0	3.3	1.55	62
18	F—7—2	3	5.3	3.8	1.9	68	37	L—2		6.3	3.5	1.05	63
19	J—11—2	3	5.3+α	3.7	1.7	58+α	38	D—5—3	3	6.9	3.4	1.35	74

No	区　層	次	長(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重(g)	No	区　層	次	長(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重(g)
39	F—12—1	3	6.6	2.9	1.65	58	74	G—3—2	3	6.1+α	3.6	1.9	68+α
40	E—11—3	3	6.7	2.9	1.1	40	75	第1貝塚2	3	7.0+α	3.5	1.7+α	48+α
41	F—12—3	3	6.6	3.6	1.9	71	76	I—11—2	3	6.7	3.7	1.85	79
42	I—12—2	3	6.8	3.5	0.8	75	77	E—10—3	3	6.5	3.9	1.8	80
43	E—6—3	3	6.2	3.3	1.6	68	78	C—8—2	3	6.6+α	3.3	1.4	52+α
44	J—12—2	3	6.8	3.2	1.75	62	79	A—13	3	5.0+α	3.4	1.5	41+α
45	A—10—3	3	7.0	3.2+α	1.5+α	39+α	80	A—9—1	3	6.9	3.4	1.25	61
46	A—11—2	3	7.2	3.3	1.25	60	81	J—12—2	3	7.0+α	3.5	1.6	54+α
47	J—3		6.6	3.4	1.0	63	82	F—10—2	3	6.5+α	3.3	1.6	52+α
48	F—6—3	3	5.6	3.6	1.8	52	83	E—4—3	3	6.1+α	3.4	1.7	62+α
49	B—7—2	3	5.0	3.4+α	1.9	47+α	84	D—6—3	3	6.1+α	3.4	1.2	52+α
50	J—11—2	3	6.5	3.3	1.9	62	85	G—3		6.1+α	3.5+α	0.8	54+α
51	E—7—2	3	7.6+α	3.1	1.1	62+α	86	D—8—2	3	6.5	3.1	1.45	67
52	UN		5.6	3.6	1.1	63	87	D—9—2	3	6.0+α	3.4	1.45	48+α
53	G—8—3	3	6.9+α	3.6	2.2	70+α	88	C—11—3	3	7.2+α	3.5	1.25	71+α
54	B—9—2層上	3	6.5+α	3.4	1.2	55+α	89	F—8—2	3	6.3+α	3.7	2.15	73+α
55	A—6—2	3	7.6	3.3	1.4	69	90	B—4—3	3	6.5+α	3.5	1.5	71+α
56	D—6—3	3	5.9+α	3.2	1.25	30+α	91	D—8—3	3	5.4+α	3.0	1.6	41+α
57	UN		6.5	3.5	1.1	72	92	A—13—3	3	5.9+α	3.5	1.9	62+α
58	F—2—2	3	7.2	3.5	1.7	68	93	L—11 第1貝塚 5層	3	5.5+α	3.4	1.7	53+α
59	D—5—3	3	6.2	3.5	1.7	64	94	E—12—3	3	5.7+α	3.1	1.3	32+α
60	B—6	3	6.5+α	3.5	1.05	69	95	D—8—1	3	5.9+α	3.4	1.75	54+α
61	A—10—1	3	4.1+α	3.3+α	1.5	32+α	96	F—4	3	6.1+α	3.9	1.6	69+α
62	F—7—2層上		6.3	3.1	1.9	69	97	D—4—3	3	6.3+α	3.1	2.0	52+α
63	E—8—3	3	5.7	3.4	1.7	53	98	L—13 第1貝塚 8層	3	6.2	3.0	1.35	60
64	D—10—1	3	7.1	3.3	1.4	60	99	F—11表1層	3	5.8+α	3.8	1.65	82+α
65	B—9—2	3	6.6+α	3.6	1.5+α	45+α	100	J—03—2		7.7	3.2	1.0	63
66	B—8 3層上面	3	7.1	3.4	1.6	68	101	K—11 第1貝塚 4層	3	7.7	3.1	1.0	60
67	D—8—3	3	6.1+α	3.4	1.2	54+α	102	I—04		6.8	3.0	1.1	65
68	A—5—3	3	5.6+α	3.4	1.7	49+α	103	F—9—1	3	6.5	2.9	1.0	59
69	I—12—2	3	7.1+α	3.4	1.35	68+α	104	UN		6.7	2.9	1.0	42
70	A—13	3	6.9+α	3.7	1.5	82+α	105	第1貝塚 9. セクション	3	7.7	2.7	1.0	51
71	G—11—2	3	6.6+α	3.5	1.8	62+α	106	H—04		7.0	2.7	1.0	43
72	G—6	3	6.2+α	3.8	1.8	70+α	107	F—2		6.7	3.1	0.9	59
73	D—6—3	3	7.2	3.3	1.45	60		平　均		6.326+α	3.46+α	1.51+α	64.30+α

2 漁 撈 具

I類 b—3

No.	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)	No.	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)
1	K—01—3		5.0+α	3.25	0.8	47	35	G—8—3	3	5.5	2.9	1.7	42
2	L—01—3		5.1+α	3.15	1.3	30	36	E—5	3	4.9	3.0	1.4	48
3	E—7—2	3	5.8	3.0	0.9	45	37	B—5—3	3	6.2+α	3.5	1.1	58+α
4	L—01—3		6.1+α	2.9	0.7	38+α	38	A—7 表土層黄色	3	5.5+α	3.0	1.4	45+α
5	E—9—3	3	5.3	3.0	1.5	40	39	F—8—2	3	5.0+α	3.5	1.4	62+α
6	E—7—2	3	5.2	2.4	0.9	20	40	D—4—3	3	5.4	3.1	1.6	52
7	I—2		5.9	2.8	1.1	43	41	F—6 2層上面	3	6.5	3.7	1.3	43
8	C—5—3	3	4.8	3.0	1.05	50	42	D—11—1	3	6.5	3.0	1.4	59
9	G—11—3	3	5.0	2.6	1.3	39	43	H—12—3	3	5.3	2.8	1.5	39
10	A—13	3	5.5	3.0	1.7	48	44	G—11—3		6.0	3.0	1.3	51
11	D—6—3	3	5.6	2.9	1.3	47	45	A—9—2	3	6.0	3.0	1.4	48
12	G—9—2	3	6.3	3.5	1.0	73	46	I—12—2	3	6.4	2.6	1.2	38
13	G—7—2	3	6.6+α	3.4	1.5	69+α	47	E—6—3	3	5.6	2.8	1.3	48
14	B—8—2	3	5.5	3.0	1.3	55	48			5.2	2.7	1.0	45
15	G—8—3	3	5.6	3.2	1.5	55	49	C—4—3	3	5.0+α	2.6	1.3	30+α
16	F—5—2		5.2	3.0	1.3	54	50	C—7—3	3	5.4	3.1	1.3	51
17	B—6—3	3	5.0	3.0	1.5	49	51	F—6—2	3	5.2+α	3.2	1.7	39+α
18	A—6—3	3	5.5	3.1	1.5	60	52	G—12—3	3	4.7	2.9	1.5	38
19	E—6—3	3	5.7+α	2.7	1.5	40+α	53	F—7—2	3	4.5+α	2.7	1.4	25+α
20	D—10—3	3	5.7	3.2	1.0	51	54	F—8—2	3	5.5+α	2.9	1.2	31+α
21	C—4—3	3	5.8	3.1	1.8	48	55	I—12—2	3	4.9+α	2.8	1.5	39+α
22	H—3 上部包含層	3	5.5	3.0	1.8	49	56	B—7—3	3	5.4+α	3.0	1.4	40+α
23	E—7 2層黒色	3	5.5+α	3.3	1.7	52+α	57	G—8—3	3	4.5+α	2.7	1.5	32+α
24	B—11—2	3	5.5	3.2	1.0	52	58	E—3		5.4	2.9	0.8	49
25	A—6—2	3	5.5	3.3	1.8	52	59	B—9—1	3	5.8+α	3.0	1.3	49
26	B—7—3	3	5.1	3.0	1.5	41	60	E—01—2		4.5+α	3.0	0.9	40+α
27	F—4—2	3	4.5+α	3.1	1.8	44+α	61	K—1		4.5+α	2.9+α	1.1	35+α
28	F—7—2	3	5.5	3.2	1.8	52	62	L—13 第3貝塚 2層	3	4.4+α	3.1+α	1.1	30+α
29	E—4	3	4.5	2.9	1.7	48	63	K—3		5.6	3.0	1.1	53
30		3	6.3	3.0	1.6	43	64	H—2		5.8+α	2.9	1.0	45+α
31	C—7—2	3	4.3	3.2	1.7	44	65	C—5—3	3	4.5+α	3.1	1.6	40+α
32	E—6—3	3	5.5	3.4	1.7	53	66	I—1		5.6+α	3.3	1.1	52+α
33		3	5.5	3.0	1.7	48	67	D—8—2	3	4.7+α	3.0	1.1	48+α
34	F—4	3	5.4+α	3.0	1.7	49+α	68	L—01—3		5.0+α	3.1	1.1	32+α

番	区　層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)
69	D—7 2層上面	3	4.5+α	3.0	1.6	31+α
70	L—01		4.0+α	2.9+α	1.1	28+α
71	C—5—3	2	6.5+α	2.6	0.9	40+α
72	K—02		5.0+α	2.8	0.9	30+α
73	UNのみ		6.1+α	3.2	1.2	43+α
74	E—3		5.0+α	2.4	0.8	25+α
75	H—04		5.2	2.5	1.1	28
76	F—05		5.7+α	3.2	1.1	30+α
77	N—2—3		4.7+α	2.9	1.1	31+α
78			5.0	2.5	0.8	31
79	K—3—3		4.7	2.6+α	0.9	18+α
80	K—3		4.0	2.1	1.0	11
81	H—3		3.6+α	2.9+α	1.0	20+α
82	L—03		5.4	3.05	1.1	40
83	K—02		4.5+α	3.0	1.1	40+α
84	C—2		5.5+α	3.8	1.1	39+α
85	H—04		5.0+α	3.2	1.2	35+α
86	H—2		5.0	2.3	0.9	20
87	J—2—2		5.7+α	3.2	1.2	45+α
88	N—2		4.0+α	2.8+α	0.8	25+α
89	B—9—3	3	6.0+α	3.0+α	1.4+α	30+α
90	G—05		5.7	3.3	1.15	72
91	G—05		6.4	3.1	1.0	50
92	E—02		5.1	2.6	0.9	32
93	住居址		5.5	2.9	0.8	50
94	I—01		5.4+α	3.3	0.8	60+α
95	E—6—3	3	3.7+α	3.8+α	0.9	29+α
96	F—2		5.0	3.7	1.1	72
97	I—05		6.2	3.0	1.3	42+α
98	K—3		6.2	2.8	1.0	45
99	E—03		6.3	2.8	1.0	40
100	G—3		5.2+α	2.5	1.2	29+α
101	J—01		6.1+α	3.0	0.9	45+α
102	UNのみ		5.6+α	2.5+α	0.8+α	22+α
103	H—2		5.6	3.0	0.9	39
104	D—8—1	3	3.3+α	3.0+α	1.1	25+α
105	G—2—2		6.1+α	2.9	0.8	46+α
106	E—01		5.6+α	2.6	0.8	40
107	I—01		5.7	2.7	0.8	41
108	K—2—3		5.8+α	3.0	1.0	39+α
109	E—01—2		6.2	2.7	1.1	42
110	H—04		6.3+α	3.1	1.1	53+α
111	H—2		3.6+α	2.5+α	0.4	21+α
112	K—03		5.1+α	2.4	1.2	20+α
113	I—01		4.3+α	2.5+α	0.8	27+α
114	J—03		2.5+α	2.0+α	0.5	11+α
	平　均		5.232+α	2.958+α	1.212+α	41.728+α

Ⅰ類 c—1

番	区　層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)
1	I—03—2		7.5	2.4	0.4	40
2	J—01		6.3	2.5	0.7	32
3	G—03		6.6	2.5	0.4	40
4	L—13 第3貝塚 2層	3	4.0+α	2.3	1.0	21+α
5	K—04		4.7+α	2.3	0.6	25
6	J—02		5.9+α	2.6	0.4	36
7	K—01		7.2+α	2.5	0.5	48+α
8	L—02		7.0	2.2	0.8	3.8
9	E—2		6.5	2.5	0.4	40
10	I—2		5.2	2.8	0.5	48
11	L—04		6.1	2.8	0.8	32+α
12	J—1—2		5.5	2.9	0.8	40+α
13	H—1		5.6	2.7	0.8	32+α
14	I—05		7.2	3.2	1.0	65
15	I—01		6.0	2.8	0.8	40
16	F—01—2		6.4	2.9	1.0	49

2 漁 撈 具

No.	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)	No.	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)
17	K—02		6.6	3.0	0.9	59	20	G—01		6.6	2.9	1.0	48
18	F—2		6.7	3.1	0.9	59	平 均			6.22+α	2.535	0.725	41.65+α
19	K—01		6.8	2.6	0.8	41							

I類 c—2

No.	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)	No.	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)
1	E—4	3	5.5	2.15	0.9	21	8	E—01	2	5.4	1.7	0.7	13.2
2	H—01	2	5.2	2.2	0.6	24.8	9	L—1—4	2	4.5	2.05	0.5	17.0
3	E—7—1	3	5.2	2.1	0.8	21.4	10	L—01	2	4.6	2.55	0.6	28.2
4	E—3—3	2	5.45+α	2.5	0.7	27.6+α	11	F—02—2	2	4.5	2.0	0.6	14.4
5	L—3	2	4.4+α	1.6	0.4	11.4+α	12	L—3	2	4.6	2.5	0.9	27.7
6	K—2	2	4.55	1.65	0.4	13.0	13	J—3	2	4.7+α	2.7	0.9	24.7
7	G—03—3	2	4.9+α	2.3	1.0	22+α	平 均			4.885+α	2.154	0.692	20.492+α

I類 c—3

No.	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)	No.	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)
1	I—2—2	2	5.9+α	1.8	0.5	13.5+α	10	K—05	2	4.3	1.9	0.6	14.6
2	G—3—2	2	4.9+α	1.8	0.4	12.0	11	I—02—2	2	3.5	1.8	0.5	10.7
3	E—11—3	3	3.55	1.75	0.3	10.3	12	K—1	2	4.0	1.7	0.5	9.5+α
4	E—7—2	3	3.85	1.6	0.5	7.0	13	H—01	2	3.9	1.65	0.5	8.8
5	J—02	2	4.4	1.7	0.3	12.1	14	I—1	2	4.3	1.05	0.2	11.5
6	K—2	2	3.5	1.6	0.5	8.3	15	B—10—2	3	4.9	1.7	0.5	8.5
7	K—1	2	4.4	2.0	0.7	18.5	16	L—2—3	2	4.05+α	1.7	0.4	11.5
8	K—1	2	4.2	1.95	0.6	15.5	平 均			4.228+α	1.75	0.469	11.394+α
9	C—10—1	3	4.0	1.7	0.5	10							

I類 c—4

No.	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)	No.	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)
1	J—1	2	3.0	1.9	0.4	10.2	3	UN		3.0	1.9	0.5	8.3+α
2	I—01	2	3.1	1.9	0.5	10.2	平 均			3.03	1.9	0.4	9.56+α

I類 d—1

No.	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)	No.	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)
1	第1貝塚 セクション 1	3	5.35	1.5	0.4	8.2	7	H—11—3	3	4.0+α	1.4	0.4	7.1
2	A—13	3	4.6	1.3	0.4	7.1	8	I—01	2	3.3+α	1.4	0.3	5.9+α
3	L—2	2	5.2	1.6	0.25	8.1	9	I—2	2	3.8+α	1.55	0.5	9.1+α
4	H—11—2	3	4.5	1.25	0.4	7.8	10	K—12—1	3	3.7+α	1.4	0.4	7.0+α
5	D—9	1	4.7	1.65	0.4	11.6	平 均			4.395+α	1.445	0.385	8.04+α
6	I—02	2	4.8	1.4	0.4	8.5							

Ⅰ類 d—2

No.	区　層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)	No.	区　層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)
1	K—01		5.6	1.0	0.4	5.2	8	I—1		4.3	1.65	0.2	11.5
2	I—3		4.9	1.1	0.3	5.2	9	I—01		4.2	1.1	0.4	5.4
3	F—1		4.7	1.1	0.4	5.0	10	L—05		3.8+α	1.2	0.3	4.3+α
4	E—1		4.6	1.05	0.4	4.5	11	J—05		1.8+α	1.1+α	0.4	2.2+α
5	G—1		3.75	1.1	0.3	4.0	12	I—02—2		2.1+α	1.0+α	0.3 0.2	2.0+α
6	I—3		3.65	1.3	0.2	4.2	平　均			3.975+α	1.1583+α	0.336	4.833+α
7	G—8—3	3	4.3+α	1.2	0.5 0.4	4.5+α							

Ⅰ類 e—1

No.	区　層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)
1	第1貝塚（セクション）10	3	4.6	1.85	0.8 0.9	24.7

Ⅱ類 a—1

No.	区　層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)	No.	区　層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)
1	A—4—3	3	4.0	3.9+α	1.2+α	36+α	2	C—6—3	3	3.7	4.3+α	1.0+α	42+α

Ⅱ類 a—2

No.	区　層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)	No.	区　層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)
1	J—2		2.0+α	2.5+α	0.4	9.0+α	5	I—11—2	3	2.4	2.35	0.5	12.0
2	D—12—1	3	2.0	2.1	0.5	10.2	6	I—03—2		2.75	2.5	0.5	18.0
3			2.3	2.15	0.5	10.5	平　均			2.325+α	2.35+α	0.5	12.5+α
4	A—12	3	2.5	2.55	0.6	14.9							

Ⅱ類 a—3

No.	区　層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (cm)	No.	区　層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)
1	D—11—3	3	1.9	1.6	0.5	3.6	5	E—8—3	3	2.4	2.05	0.4	9.0
2	B—12—3	3	1.8	1.85	0.5	3.8	6	F—10—2	2	2.4	2.0	0.4	8.9
3	A—13	3	2.1	1.95	0.5	7.2	平　均			2.15	1.875	0.45	6.58
4	C—8—3	3	2.3	1.8	0.4	7.0							

Ⅱ類 b—1

No.	区　層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)	No.	区　層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)
1	A—12—1	3	2.65	2.5	0.5 0.4	13.6	4	A—12—1	3	2.05	2.45	0.4	10.5
2	B—12—3	3	2.55	2.75	0.6	13.9	平　均			2.38	2.525	0.522	12.5
3	C—10—2	3	2.3	2.4	0.6	12.0							

Ⅱ類 b—2

No.	区　層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 (g)
1	D—10—2	3	2.1	2.0	1.1	8.1

2 漁 撈 具

Ⅲ類

番	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔 径 (cm)	重 (g)	番	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔 径 (cm)	重 (g)
1	E—15—2		6.8	1.2	0.5 0.5	14.7	2	G—6—2	3	6.4+α	1.25	0.55	13.9

Ⅳ類 a

番	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔 径 (cm)	重 (g)
1	E—9—3	3	7.3	幅 5.1 高 3.6		108

Ⅳ類 b

番	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔 径 (cm)	重 (g)	番	区 層	次	長 (cm)	径 (cm)	孔 径 (cm)	重 (g)
1	B—10—2	3	4.25	幅 2.8 高 2.5		21	2	F—7—2	3	4.75	幅 2.8 高 2.7		35.5

鉛錘計測一覧表

種類	番	区	次	重 (g)	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	形状	結び	種類	番	区	次	重 (g)	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	形状	結び
原材	1	E—11	3	48.7	6.3	2.2	0.6	角		原材	3	F—04	2	26.5	3.3	1.4	0.7	角	
	4	D—8	3	40.8	6.2	1.3	0.9	角			4	B—10	3	9.5	2.5	1.2	0.3	角	
												平 均		31.375	4.575	1.525	0.625		

種類	番	区	次	重 (g)	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	形状	結び	種類	番	区	次	重 (g)	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	形状	結び
棒状錘	5	G—02	2	14.6	8.0	1.0	0.5	角		棒状錘	15	E—01	2	7.3	4.7	0.5	0.4	角	有
	6	F—6	3	12.3	6.8	1.1	0.7	角			16	K—11	3	8.7	4.6	0.6	0.5	角	有
	7	G—1	2	11.1	6.3	1.0	0.5	角			17	I—03	2	6.4	4.7	0.5	0.5	丸	有
	8	C—6	3	12.5	6.2	0.6	0.55	角	有		18	C—6	3	2.8	2.7+α	0.5	0.4	角	有
	9	B—8	3	11.2	5.9	0.7	0.55	角	有		19	D—9	3	3.2	2.0+α	0.4	0.5	角	有
	10	L—02	2	5.8	5.6	0.5	0.4	角			20	I—12	3	3.9	3.5+α	0.5	0.4	角	
	11	K—11 第1.S.M	3	9.0	5.6	0.6	0.5	角	有		21	D—5	3	5.4	3.6	0.7	0.35		
	12	A—11	3	4.0	5.1	0.6	0.35	角			22	H—02	2	3.0	4.2	0.7	0.4		
	13	F—04	2	9.5	5.0	0.6	0.55	丸	有		23	I—1	2	1.1	2.4	0.6	0.2		
	14	I—2	2	8.8	4.0	0.6	0.5	丸				平 均		7.448	4.831	0.7	0.46		

種類	番	区	次	重 (g)	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	形状	結び	種類	番	区	次	重 (g)	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	形状	結び
板状錘	24	I—11	3	3.4	3.4	1.5	0.1	板		板状錘	28	J—05	2	0.8	1.5	1.1	0.3	板巻	
	25	I—12	3	3.1	2.3	2.0	0.1	板			29	K—01	2	2.1	1.7	0.7	0.5	板巻	
	26	L—05	2	5.5	2.8	1.5	0.6	板巻			30	J—05	2	1.4	0.9	0.9	0.4	板巻	
	27	I—02	2	1.0	2.8	0.4	0.4	板巻			31	I—12	3	2.7	1.2	0.7	0.7	板巻	
												平 均		2.5	2.075	1.1	0.3875		

(2)　鉄製釣針

万葉集には、志珂の海人の漁撈活動の一つとして、釣漁に関する歌がある。

志珂の白水郎の釣船の網堀へなくに情に思ひて出でに来にけり（巻7　1245）

志珂の白水郎の釣し燭せる漁火のほかに妹を見むよしもがも（巻12　3170）

志珂の浦に漁する海人家人の待ち戀ふらむに明し釣る魚（巻15　3653）

これらの歌に歌われる釣漁に関して、まさにそれを裏づける遺物として、多量の鉄製釣針と前節で説明した釣り用の錘がある。

鉄製釣針は比較的良好な形態を残すものは数少ないが、釣針の破片と考えるものは200点近くの多量にのぼる。また、発掘調査ではかなりの精度をもって実施したが、遺物自体がきわめて小さいためもあり、その検出において遺漏がかなり多かったと思われ、実際の数はかなりのものであったと考える。第3次調査の貝塚の土壌水洗では、第1～3貝塚より約80点の釣針およびその破片を検出した。

鉄製釣針はその大きさ、形状からⅠ類　長さ5㎝以上の大型釣針、Ⅱ類　5㎝以下の小型釣針、Ⅲ類　釣針を樹皮等でたばねた釣り針で、イカ・タコ用の擬似針と思えるもの、Ⅳ類釣針状に曲げてなく、直線的であるが、逆刺（アグ）があり、釣針未製品と思えるものの4種類に大別できる。

Ⅰ類はさらに形状から2種（a、b）に細別でき、Ⅱ類はアグのある中型品（a）とやや小型のアグのないものに分けられるが、アグのないものではさらに軸部（ドウ）の長いもの（b）と短いもの（c）に分けられる。小型品中にはさらに細分可能なものが多くあるが、完形品が少ないため、ここでは上記の3種に細分しておく。以下、各釣針について説明を加える。

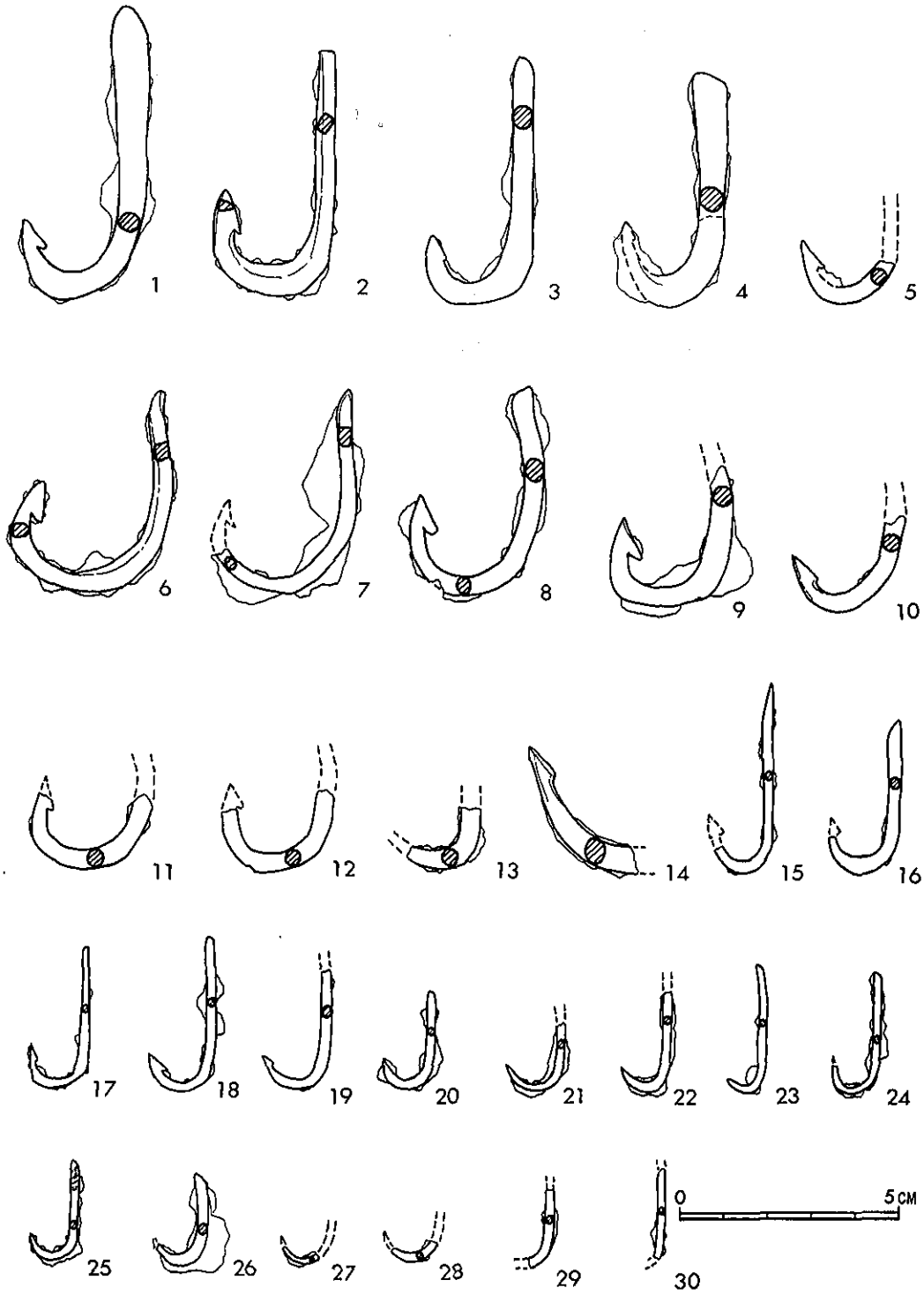
Ⅰ類a（第65図1～5、14）

図示したのは7点である。ドウが直線的にのびる型式のもので、サキマゲが短く、内側にアグをもつ。シリには紐結びのための特別のつくりだしはない。長さ6.7㎝～5.3㎝の大型品である。断面は円形であるが、2の例のように方形をなすものがある。サキマゲ、コシの曲がり方に細部の違いがあり、さらに細分が可能である。5、14はドウを失うがコシ、サキマゲ部の形態からこの類に含めた。14は復原すると他の釣針よりかなり大型になる。

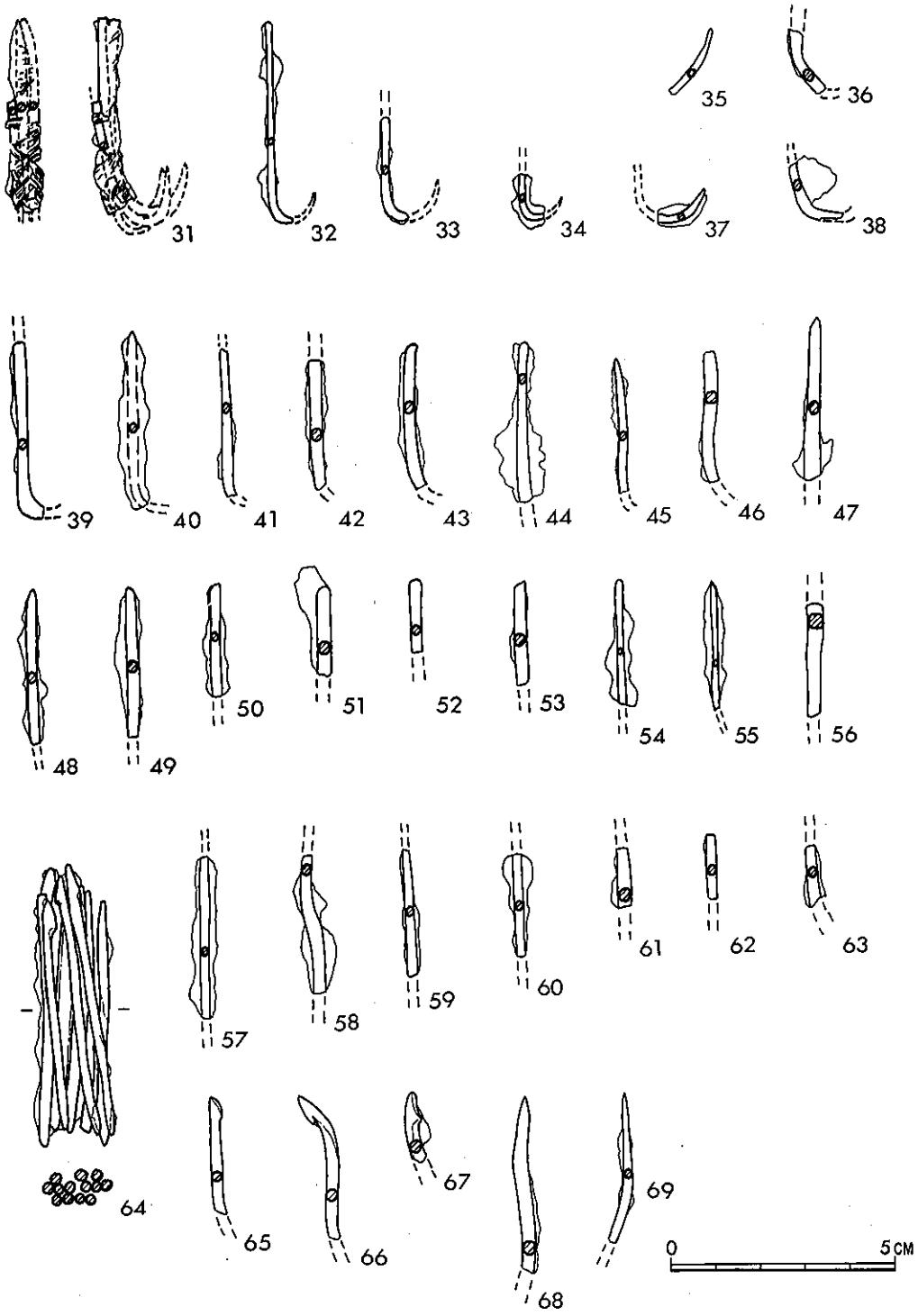
Ⅰ類b（第65図6～12）

aより若干小さくなる。ドウがゆるやかにまがり、シリはやや上方にまがり紐結びの配慮がある。コシ部はゆるやかに弯曲し、サキマゲで強く曲がり、サキは内側にまがりこむ。内側にアグをつけるもので、長さ4.5～4.7㎝前後のものが多い。10～13は他よりやや小型になると考えられるが、完形ではないため明らかにできない。6、7の断面はドウが方形をなすが、他は

2 漁 撈 具



第65図　鉄器実測図Ⅰ（釣針）



第66図　鉄器実測図Ⅱ（釣針）

円形である。aに比較しアグが鋭くやや長い、フトコロが深い特徴がある。

Ⅱ類a（第65図15～19）

Ⅰ類からみてかなりの小型品である。ドウの長さに長短がある。ドウは直線的にのび、シリには紐結びのための特別の配慮はない。サキマゲは短く、内側にアグをつける°長さ34.cm～3.3cm、断面は円形で、径0.2cm前後のものが多い。フトコロは1.2cm前後である。

Ⅱ類b（第65図22、23、24、第66図32、33）

ドウが直線的にのび、コシ部はゆるやかに弯曲し、サキマゲの短いもので、ドウの長さが次のcに比較し極端に長い。アグはない。aに比較し、小型化しているが、この類の中でも大小の区別がありそうである。完形品は少なく、個体による長さの差異が大きい（4.3cm～2.8cm）。フトコロは浅く、0.6～0.8cm前後である。断面形は円形で、径0.15cm前後である。

Ⅱ類c（第65図20、25、26）

形態的にはbと変わらないが、ドウは直線的で短い。26は若干まがっている。コシ部はゆるやかに曲がりサキマゲは短い。シリには紐結びのための特別の配慮はない。長さ2.3cm前後、断面は円形で、径0.15cmで、フトコロは0.9cm前後である。25にはシリ部に紐を結んだ痕跡が明瞭に残っている。

21、27―30、33～37は釣針の各部破片であるが、その大きさや形状からみてⅡ類に相当するものである。

Ⅲ類（第66図31）

わずかⅠ点の出土であるが、イカ、タコ用の擬似針と思える資料である。ドウ、コシ部にかけての破片でサキマゲ部を欠く。現存の長さ4.3cmで径0.2cmの円棒3本を樹皮でたばねたものである。復原すれば、現在使用のイカ、タコ用の針ときわめて良く似ている。

Ⅳ類（第66図64～69）

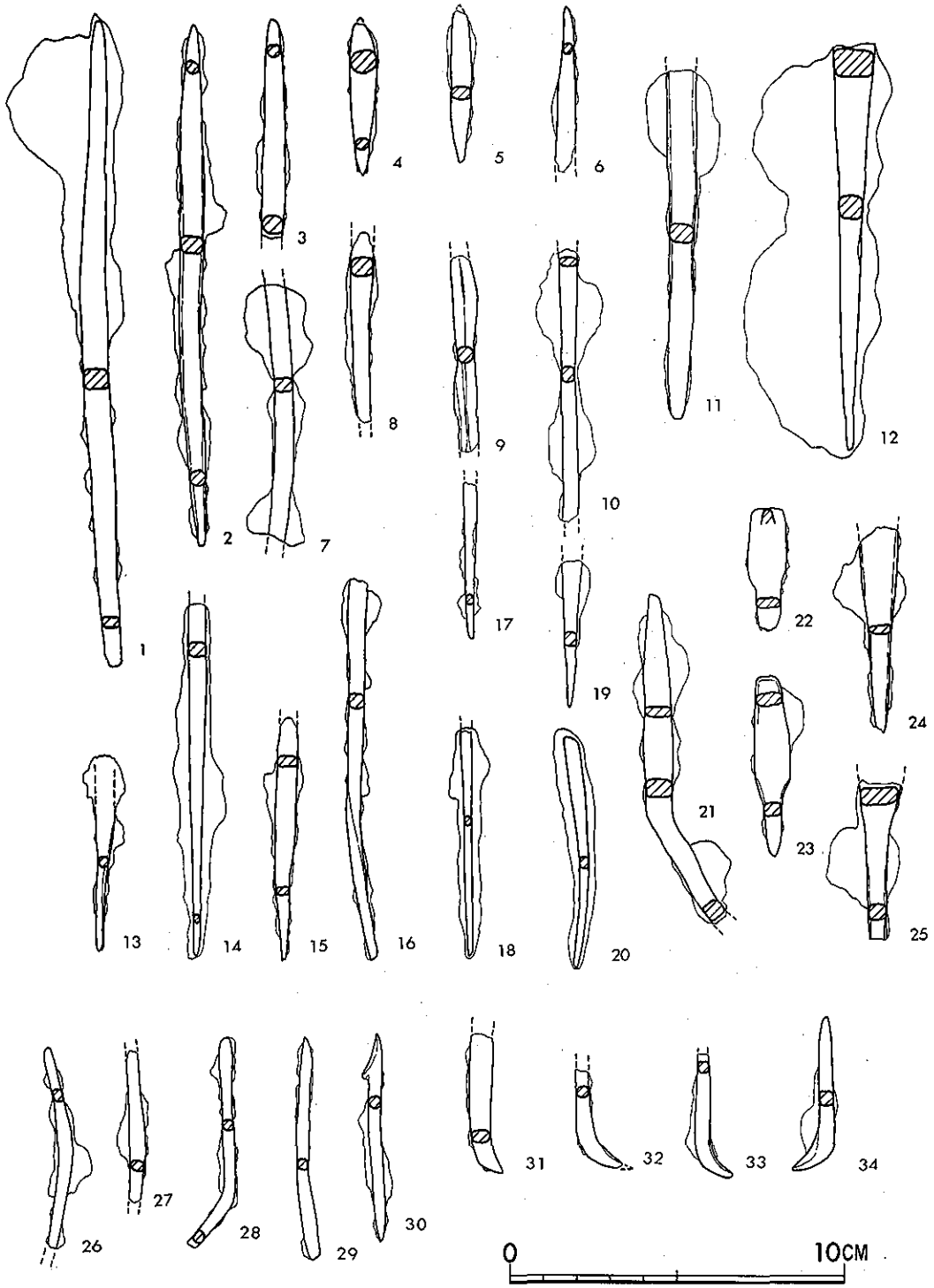
直線的な円棒（径0.2cm、長さ6cm前後）にアグを削り出したもので、釣針未製品と思えるものである。64～67にはアグがあり、これを曲げてつくった釣針はⅡ類aの釣針になる。68、69はアグの存在はない。64は13本まとまったものである。

(3) 刺突具（第67図）

刺突具（ヤス、銛）と考えられるものは数が少ない。それと断定できる明確な資料はない。先端を尖らせた棒状のもの（Ⅰ類）と逆刺をもつもの（Ⅱ類）、その他（Ⅲ類）が存在する。Ⅰ類はさらに、長いもの（a）と短いもの（b）、細身で小型のもの（c）に細分できる。

Ⅰ類a（1、2）

中央部の断面は方形をなし先端部は丸くなり尖るもので、完形品2点がある。1は長さ19.4cmで、中央部は0.6×0.7cmの断面方形をなし、基部はやや扁平になり断面長方形をなす。2は



第67図　鉄器実測図III（刺突具）

長さ15.6cmで、中央部は0.5×0.7cmの断面長方形をなし、両端部は断面円形で尖る。3、6は先端部、8～20、24は基部の破片としての可能性の強いものである。

Ⅰ類b（4、5）

短い尖頭状の鉄器である。断面楕円形で完形に近い2点がある。長さ4.7cm前後で両端部は断面円形で尖っている。

Ⅰ類c（26～29）

径0.4～0.5cmの円、方形の棒状をなし、先端を尖らせたもので、ゆるやかに弯曲するものもあり、数本を束にしたヤス先と考えられるものである。Ⅱ類との関係が考えられるものである。

Ⅱ類（第67図30）

わずか1点の出土である。長さ6.2cm以上で、径0.4cmの断面円形をなし、先端は尖る。やや下ったところに逆刺がある。ヤスと考えられるが、前のⅠ類cと同様の大きさである。共に釣針Ⅰ類の未製品と考えることもできるが、一応、ここでは刺突具としておく。

Ⅲ類（第66図22、23、25、31～34）

その他の刺突具あるいは漁撈具と考えるものである。21は断面長方形で先端は扁平になり尖る。基部の部分は曲っている。22、23、25は茎があり、先端が扁平でノミ状をなすもの、31～34は断面が円形～楕円形で先端部が鳥の口ばし状にまがり、尖るものである。いずれも使用用途は明らかにできない。

(4) 鎌（第68図）

万葉集には志珂の海人の、あるいは周辺で行った漁撈活動の一つとして藻刈に関する歌がある。

志珂の海人は藻刈り塩焼き暇なみ髪すきの小櫛取りも見なくに（巻3　278）

いざ児等香椎の潟に白たへの袖さへぬれて朝菜つみこむ（巻6　957）

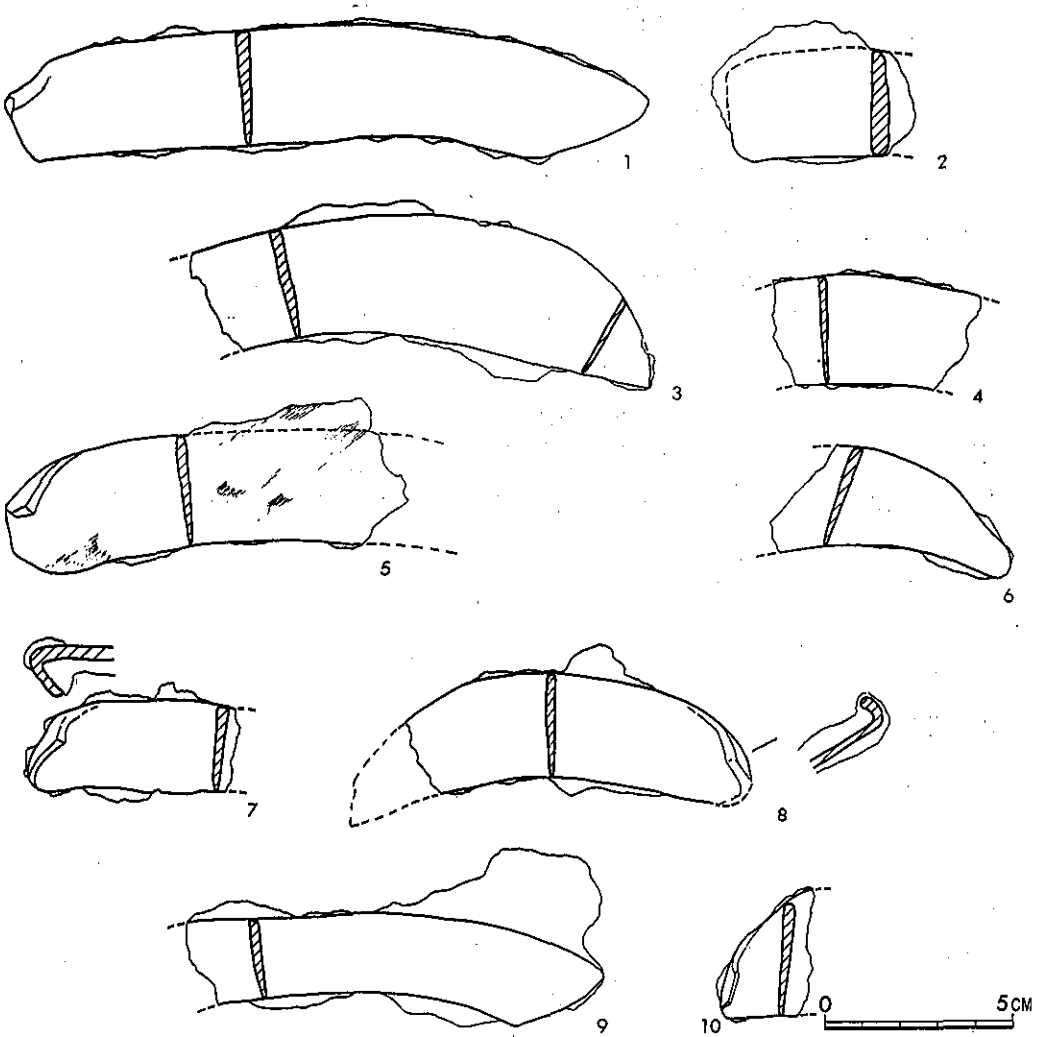
時つ風吹くべくなりぬ香椎潟湖干の浦にも藻刈りてな（巻6　958）

志珂の海人の磯に刈り干す名告藻の名告りてしをいかあひがたき（巻12　3777）

筑紫道の荒磯の玉藻刈るとかも君は久しく待てど来まさぬ（巻12　3206）

藻刈に使用されたと考えられる鉄製の鎌がある。本来、海の中道は砂丘地帯であり、農業には適さず、鎌類は、農具ではなく漁撈具の藻刈り用の道具として使用された可能性が強い。ただし、製塩用の燃料採集にも使用された可能性は否定できない。

鉄鎌は1～3次調査で計10点が出土した。基部を折りまげたものである。先端部が外弯するもの（1、9）と内弯するもの（2、6、8）がある。1は完形で長さ17.1cm、幅3.1cm、2は基部を失う。現存長12.3cm、幅は基部がせまく先端に向って広がる。最大幅3.3cm、3は先

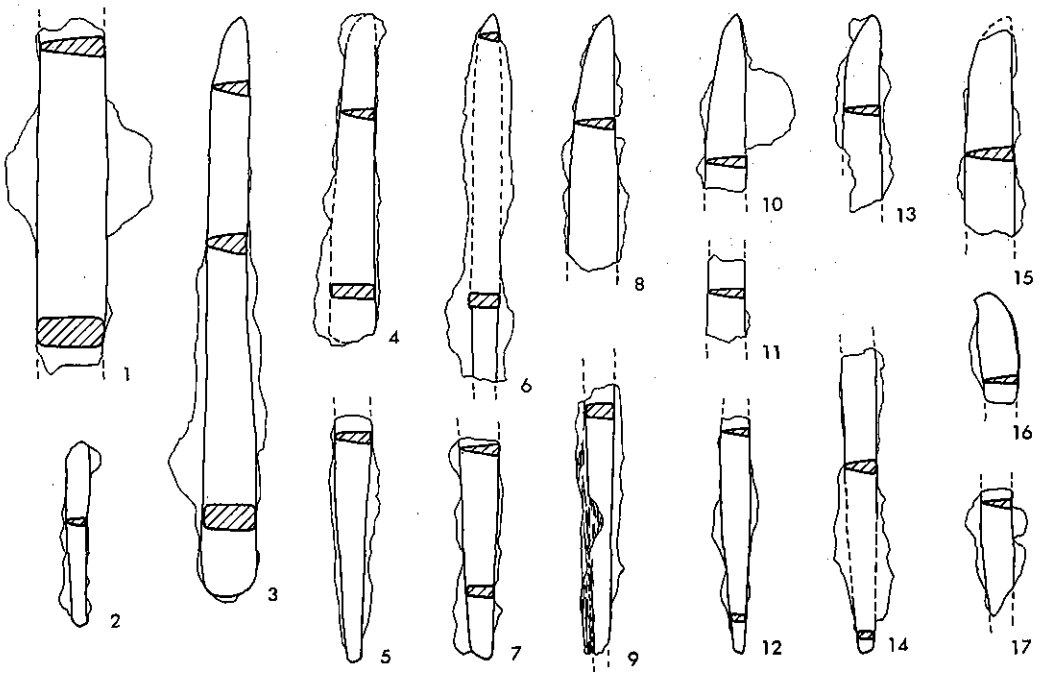


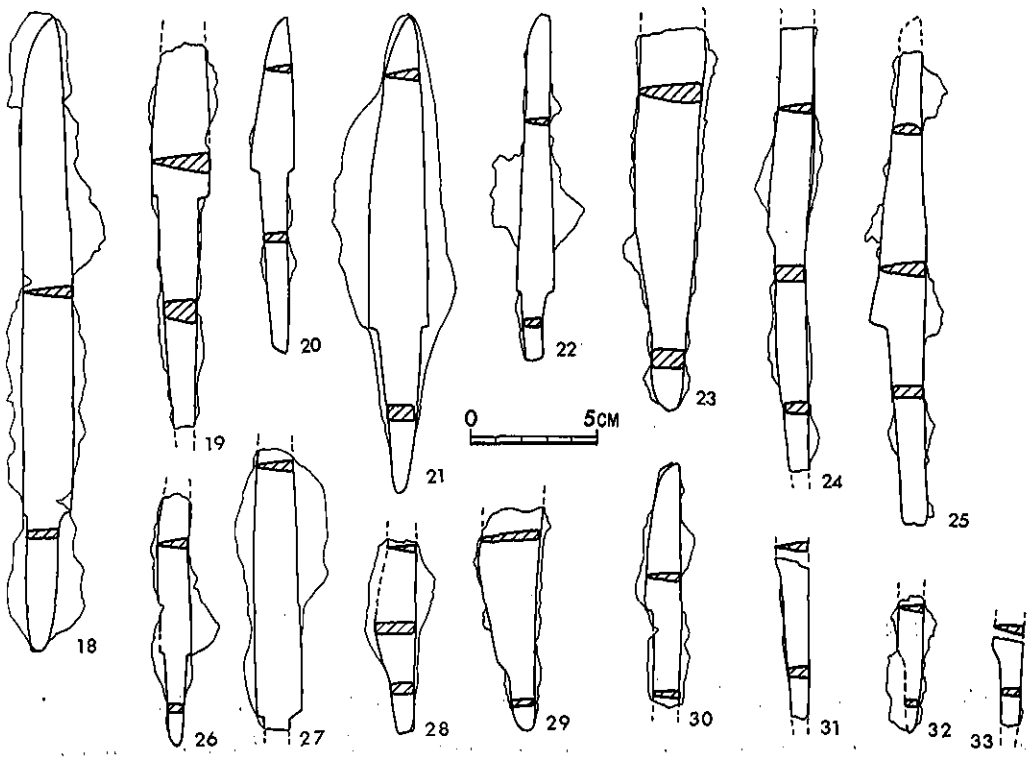
第68図　鉄器実測図Ⅳ（鎌）

端を失う。現存長10.2cm、幅3.1cm。 1と同形同大のものと思われる。 4は基部の破片で現存長4.9cm、幅2.8cm。 5は中央部の破片、 現存長5.5cm、 幅2.9cm。 6は先端部破片で現存長6.4cm、幅2.6cm。は7基部の破片、現存長5.4cm、幅2.4cm。 8は小形品で基部が他とは逆になる。 9は基部を失う。現存長11.1cm、幅2.1cm。10は基部の破片で現存長2.3cm、幅3.3cm。

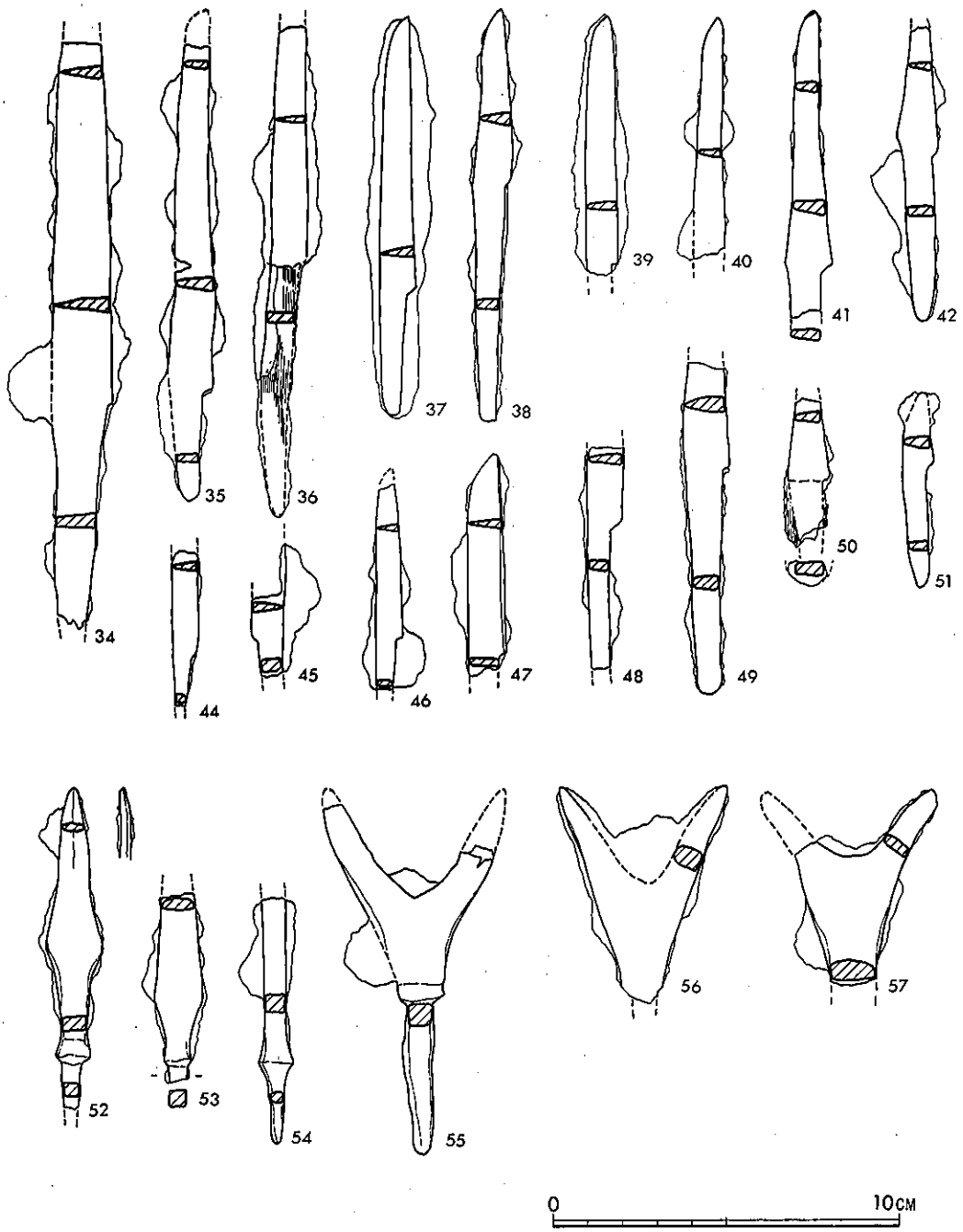
(5)　刀子（第69図、70図34～51）

2 漁 撈 具





第69図鉄器実測図Ⅴ（刀子）



第70図　鉄器実測図Ⅵ（刀子・武器）

1～3次調査を通して50点以上が出土した。先述した多量の漁具類（漁網錘、釣針、ヤス等）に対応してその量が多く、主として魚類の解体、処理に使用されたことがうかがえる。形状、

2 漁 撈 具

大きさは多種多様で関の形状から次の４類に大別できる。Ⅰ類、関がないもの、Ⅱ類、両関のもの、Ⅲ類、刃部側に関がある刃関のもの、Ⅳ類背部側に関がある背関のもの。

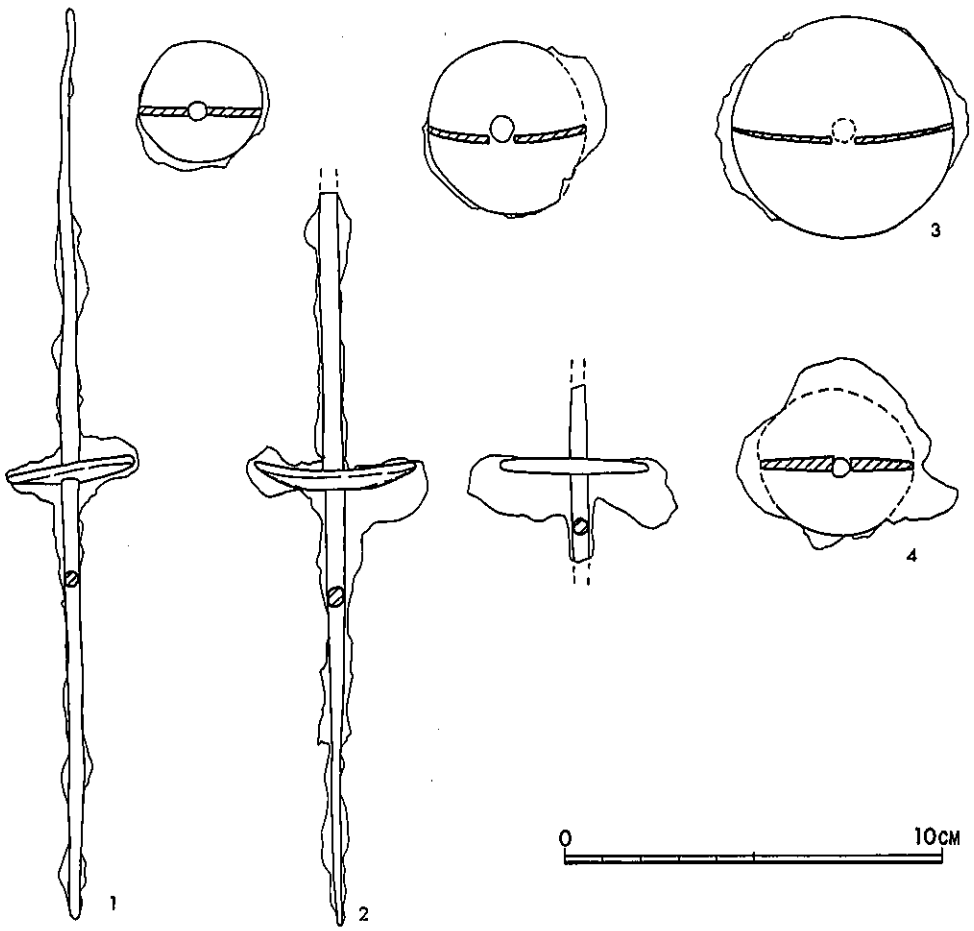
Ⅰ類（第69図、１～９、12、14）

11点以上があり、やや大形のものと小形のものがある。いずれも破片であり、完形は３のみである。

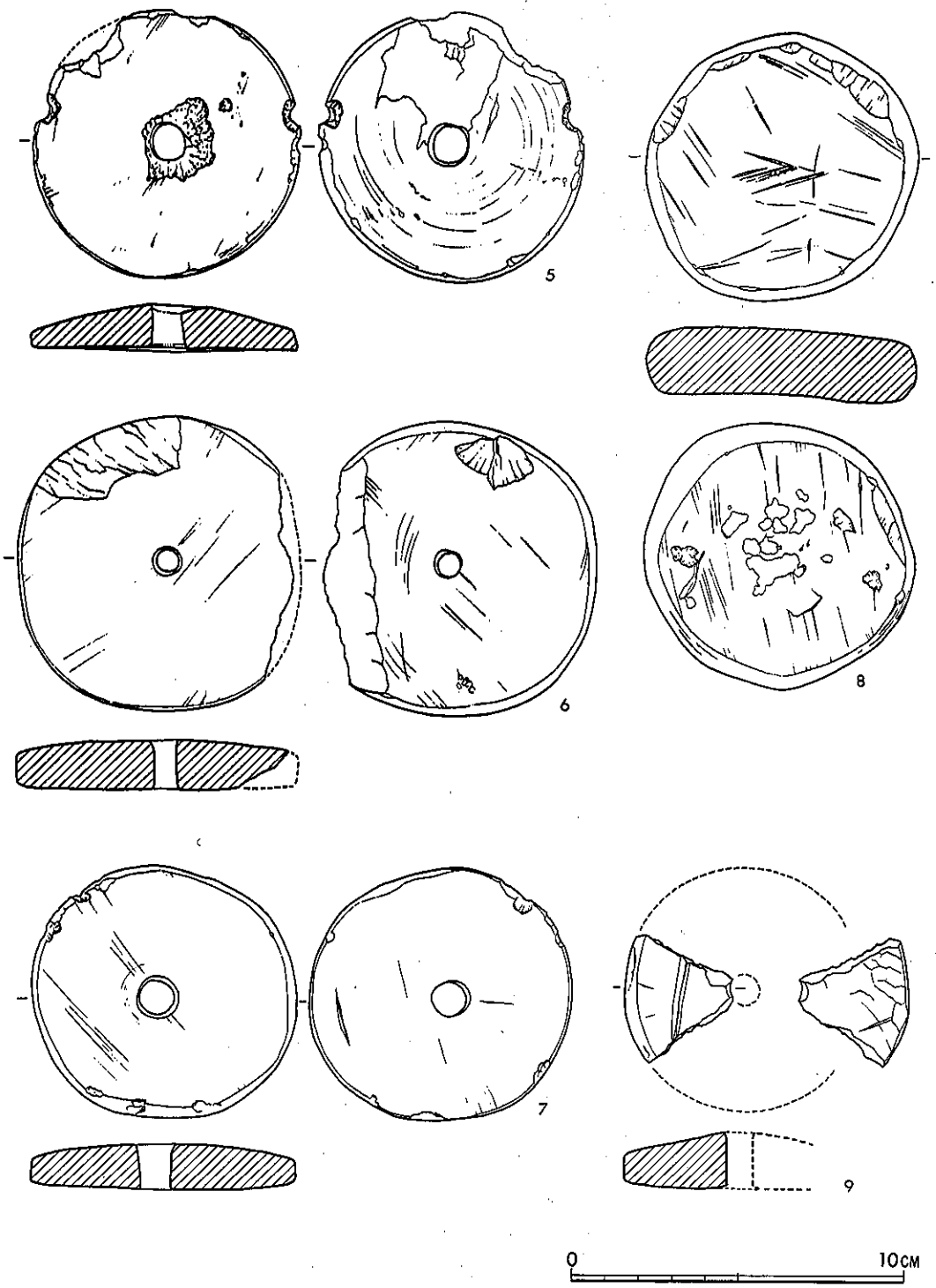
Ⅱ類（第69図、18～22、26、27）

７点以上がある。大小があり、茎の長いものと短いものがある。19のように刃部がメス状になるものがある。

Ⅲ類（第69図、23～25、28～33）



第71図　紡錘車実測図Ⅰ



第72図　紡錘車実測図Ⅱ

9点以上がある。大小があり、いずれも破片である。

Ⅳ類（第70図34～51）

17点以上があり、この類がもっとも多い。大小がある。柄部に木質を残しているものもある。

3　紡錘（第71、72図）

鉄製と石製の二種がある。釣糸、網糸の撚かけに使用されたと考えられる。鉄製品の1点を除いて全て3次調査の出土である。鉄製品4点と石製品4点と未製品1点がある。

1は2次調査4号住居址出土である。ほぼ全形がわかる資料で紡茎は径0.4㎝の断面円形で両端部にむかって細くなる。長さ23・9㎝で紡茎上端の一部を欠く。紡輪は径3.2㎝、厚さ0.25㎝でわずかに弯曲している。2もほぼ全形がわかるが、紡茎の上端部を欠く。紡茎は径0.5㎝の断面円形で両端にむかって細くなる。現存長19.3㎝、紡輪は4.2㎝×4.6㎝でやや楕円形、厚さ0.25㎝、中央に向って弯曲している。3は紡輪のみで径5.8㎝、厚さ0.2㎝で孔は径0.6㎝である。前者同様に中央に向って弯曲している。4は紡茎の一部を残す資料であるが両端を大きく破損している。紡茎は径0.4㎝の断面円形で現存長4.7㎝、紡輪は径4㎝で厚さは中央部が0.4㎝で端は0.2㎝である。前3者と異なり、平らである。5は滑石製の紡輪で一部を欠く。径8.1㎝。一面が平坦で他の面は中央に向ってもりあがる。縁の厚さ0.5㎝、中央部1.3㎝を計る。孔径1.1㎝、平坦面は同心円状に細かな傷がある。重さ108㌘。6は滑石製の紡輪、一部を欠く。一面は平坦で他は中央部がややもりあがる。径8.9㎝×8.5㎝で厚さ1.5㎝、孔径0.7㎝、重さ202㌘。7は滑石製の紡輪。完形品でこれも他同様の形状を示す。径8.0㎝×7.6㎝、厚さ1.4㎝、孔径1.0㎝、重さ139㌘である。8は滑石製の紡輪の未製品で穿孔される前段階のものである。全面、荒い研磨磨を残す。径8㎝、厚さ1.9㎝、重さ254㌘である。9は滑石製紡輪の破片、復原孔径0.9㎝、厚さ1.2㎝である。

4　鉈（第70図52～54）

3点がある。1はほぼ完形で長さ9.3㎝。茎との境に段を有する。茎部は一部欠失する。茎は一辺0.5㎝の断面方形。頭部は長さ8㎝、中央部で広がり最大幅1.6㎝、先端にむかって尖り、先端部はゆるやかに弯曲する。2は破片で先端部を欠失する。形状は1とほぼ同様である。現存長5.4㎝、最大幅1.4㎝、3は先端部を欠く。体部が細長くなるもので、あるいは鏃でないかもしれない。茎部は断面円形、体部は0.5㎝×0.6㎝の長方形で、現存長2.1㎝　（山崎）

第6章　調査の記録——遺物Ⅲ（その他）——

前述した遺物以外に装身具、貨幣、角釘、武器類がある。釘を除いてその数は極めて少い。以下、各遺物について説明を加える。

1　装　身　具（第73図1～5）

かんざし1点、銙帯の巡方1点、不明青銅製品5点がある。かんざしは長さ11cm、先端部をわずかに欠く。中央で折り曲げた単純なもので芯が中空の青銅に金メッキしたものである。径0.2cm。巡方は青銅製品でわずかに欠損部がある。1辺3cmの正方形で、下方に1.8cm×0.5cmの長方形の小孔をあけている。3、4は青銅製の板で使途不明。3は3.6cm×1.8cmの不正長方形、厚さ0.2cm、4は3.4cm、2.4cm、厚さ0.2cmの長方形をなし、端部を折りまげている。5は青銅板をまるめて円錐状にしたもので、他に2例存在する。金メッキを施す。装飾品と考えられるが使途不明。

2　貨　幣（第73図6～11）

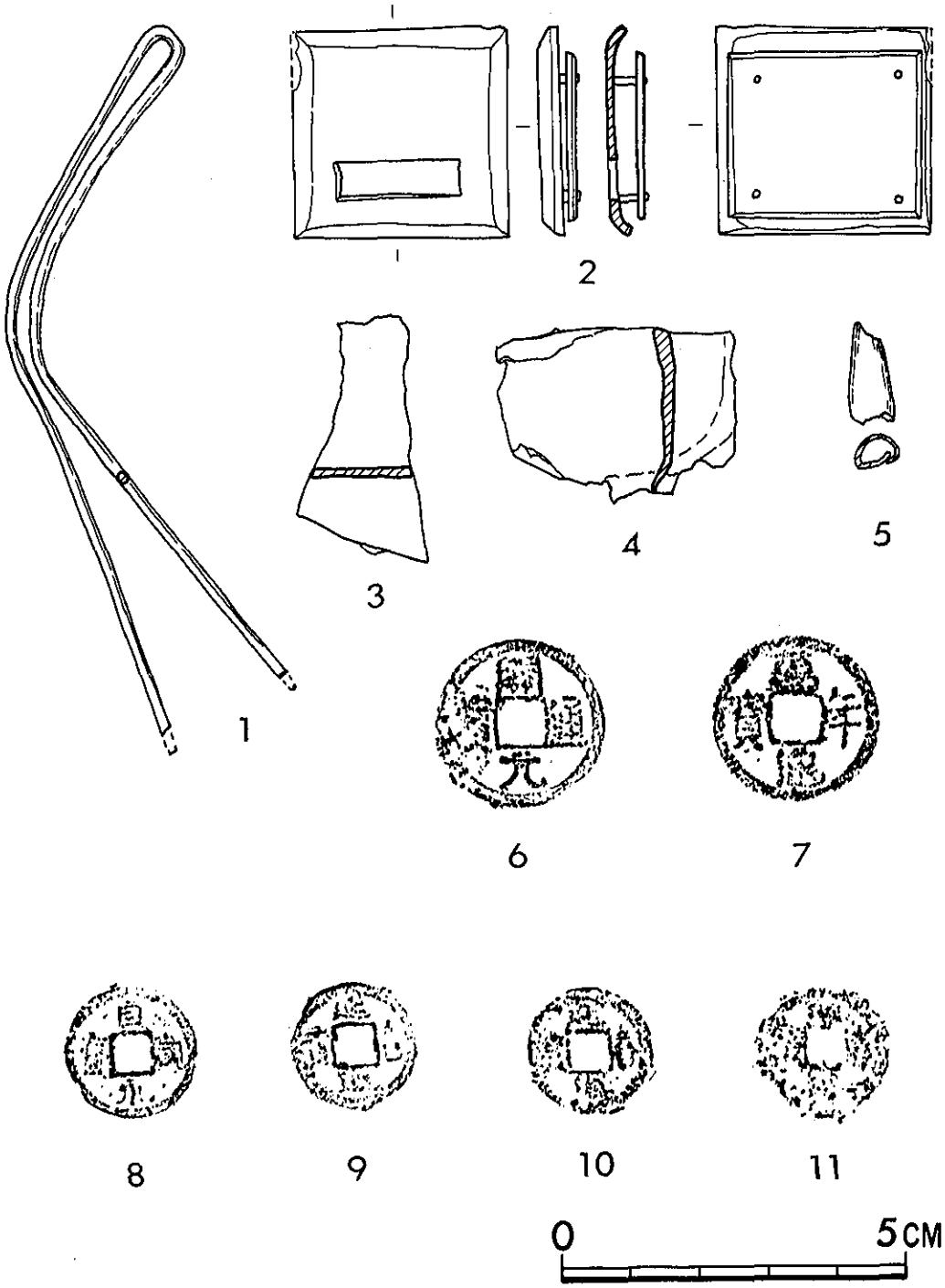
唐の開元通宝（621年）1枚と皇朝十二銭のうち、万年通宝（天平宝字4年—760年）1枚、貞観永宝（貞観12年—870年）1枚、延喜通宝（延喜7年—907年）3枚の計6枚が出土している。開元通宝は径2.4cm、方孔0.6cm。万年通宝は径2.4cm、方孔0.7cm。貞観永宝は径1.9cm、方孔0.5cm。延喜通宝は径1.8cm、方孔0.55cmで3枚とも同形同大。延喜通宝は鉛色をなす。すべて3次調査の出土で、各時期の貨幣が混在するが、延喜通宝が3枚と多く、3次調査区の年代がそれに近いことが推測できる。

3　角　釘（第74図）

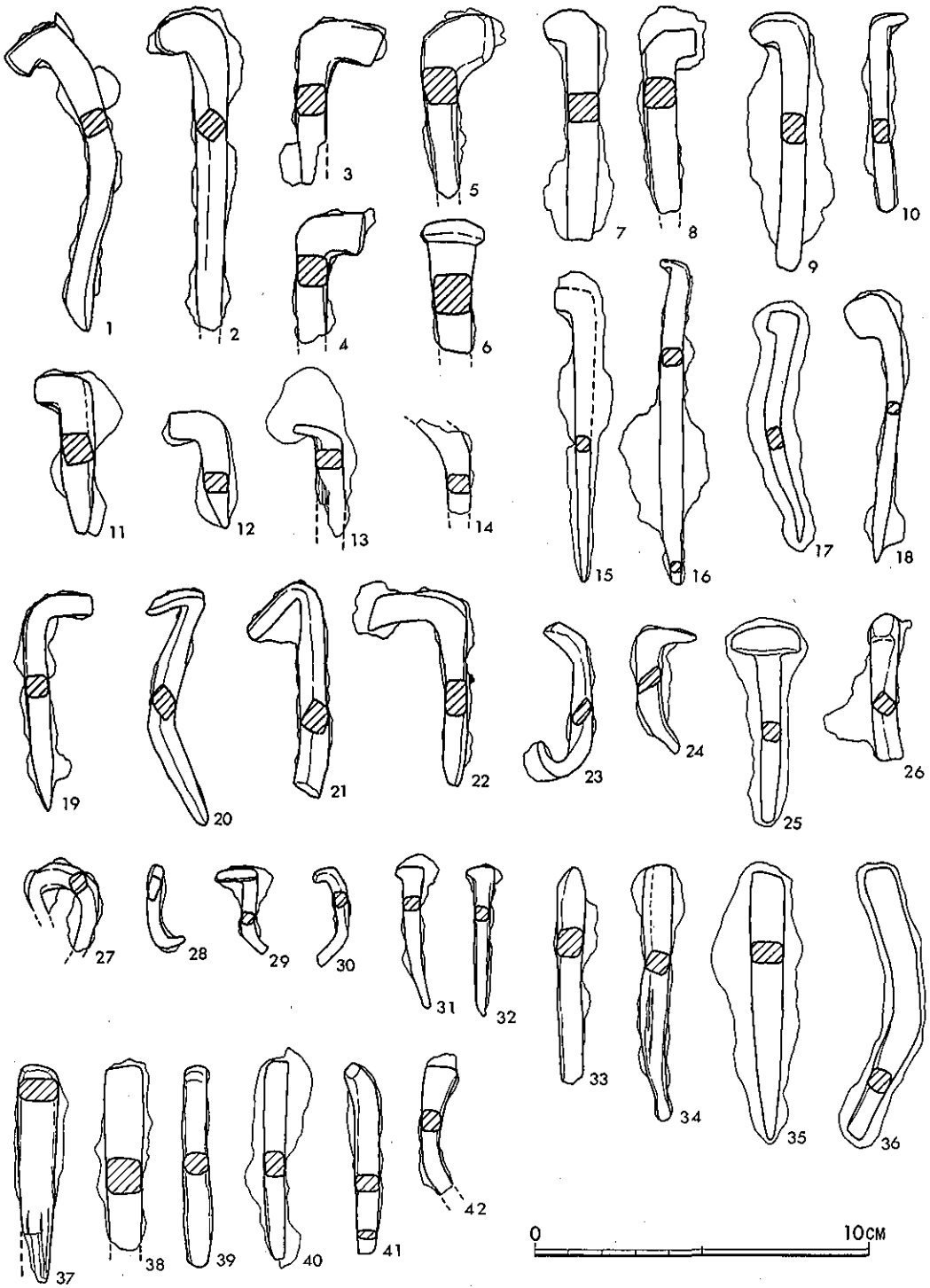
1～3次調査で多量の角釘が出土した。図示したのはそのうちの42点である。形状、長さ，大きさから次の8類に分類可能である。Ⅰ類（1～9）長さ10cm前後で頭部を1cm前後曲げているもの。断面は方形で0.7cmを計る°　Ⅱ類（11、12）長さ5cm前後の短いもので、頭部を1cm前後曲げているもので、断面0.8cm前後の方形のもの。Ⅲ類（10、13～18）Ⅰ類と形状、大きさは類似しているが、Ⅰ類に比較し細身になるもの。断面は0.5cm前後の方へ長方形。Ⅳ類（19～22）長さ5～6cmで、頭部の屈曲部が1.5～3cmと長くなるもので、断面は0.5～1.0cmの方形～長方形をなす。Ⅴ類（23、24）形状はⅣ類に類似するが、小型品である。長さ4cm前後断面は0.8×0.4cmの長方形をなす。Ⅵ類（28～30）出土品中もっとも小型のもので、長さ3cm前後、断面は0.5cm前後の方形。頭部を曲げている。Ⅶ類（31、32）Ⅵ類よりやゝ大きいもので、長さ4.5cm前後、断面0.cm前後の方形、頭部をわずかに曲げる。Ⅷ類（33～42）頭部を曲げてないもので断面は0.5～1.0cmの方形～長方形、長さに若干の違いがある。

これらの角釘は建造物あるいは船釘に使用されたと考えられるものである。

3 角　　釘



第73図　装身具、貨幣実測図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
0
10CM

第74図　角釘実測図

4　武　器（第70図55～57）

武器類は非常に少く、鉄鏃3点があるにすぎない。いずれも雁又の鏃である。4はほぼ全形を保つもので、長さ10cm、5、6は頭部のみで茎を失う。長さ6.2cm、5.6cmのものである。

5　瓦　類

（山　崎）

瓦は、2、3次調査において出土したが、量的には極めて少ない。種類としては、軒平瓦、丸瓦、平瓦がある。軒丸瓦は出土していない。

軒平瓦（第75図1、2）

2次調査で4点出土した。同一型式になると思われる。内区には唐草文をおくが、破片であるため、均正、偏行かは不明。上外区は偏平でやや大粒の珠文で飾り、下外区、脇区はつくらない。外区周縁には圏線の外側に縁を残す。顎は深い段顎で、平瓦凸面に粘土を貼りつけ段を削りだして形成する。凹面には布目、模骨痕がよく残り、先端部は横方向のヘラケズリにより調整している。側面は縦方向のヘラケズリによって調整し、面取りは行なわない。焼成はいずれも堅緻で砂粒を少し含む。灰褐色をなす。

丸・平瓦（第75図3、4）

出土した丸、平瓦には凸面の叩きが細目のものと格子目によるものとがあり、中には2次焼成をうけたものもみられる。

丸瓦は玉縁付丸瓦を6個体検出した。すべて格子目叩きを施している。3はそのうちの1つで、凸面には大きな斜格子目叩きを施し、凹面には粗い布目を残している。玉縁部はナデにより調整し、側面は半截したままとなっている。その他の丸瓦についても側面は半截したままのものが多いが、1点だけ丁寧にヘラケズリ調整を行なうものがある。

平瓦は小片が多く、全体の大きさがわかるものは1点もない。凸面には細目叩き、格子目叩きを施し、4のように叩きをすり消すものもみられる。凹面は布目をよく残しているものが多いが、模骨痕、粘土板あわせ目、粘土紐の痕跡などを残すものはみられない。側面調整については、細目叩きのものはヘラケズリを1回行なうもの（4）、ヘラケズリののちに面取りを行なうものが確認できた。格子目叩きのものについては、側面調整のわかるものはない。

叩き文様（第76図）

叩き交様は、細目文2種類、格子目文5種類に分類できる。

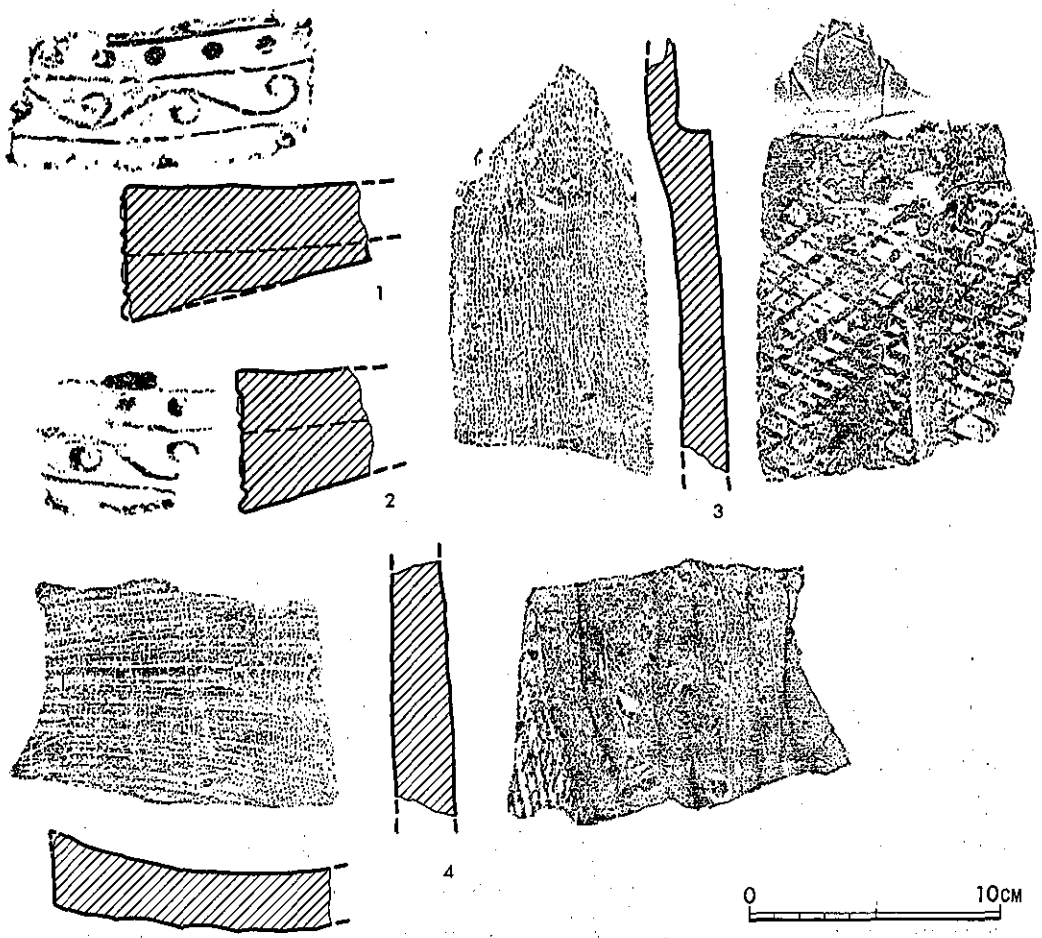
細目文は量的に少ない。大きく、太い細目（1）と細い細目（2～4）とに分類できる。前者は幅2cmに3本の細目を数える。後者は6～7本の細目を数えるものであるが、細目の太さ撚りなどに若干ちがいがみられ、焼成、色調もそれぞれ異なっている。

格子目文は斜格子文が主体を占める。特に5は二重格子状をなすもので、量的に最も多い。6は5×10mmの斜格子文、7は3×4mm～4×5mmの細い斜格子文ですべて丸瓦に施してい

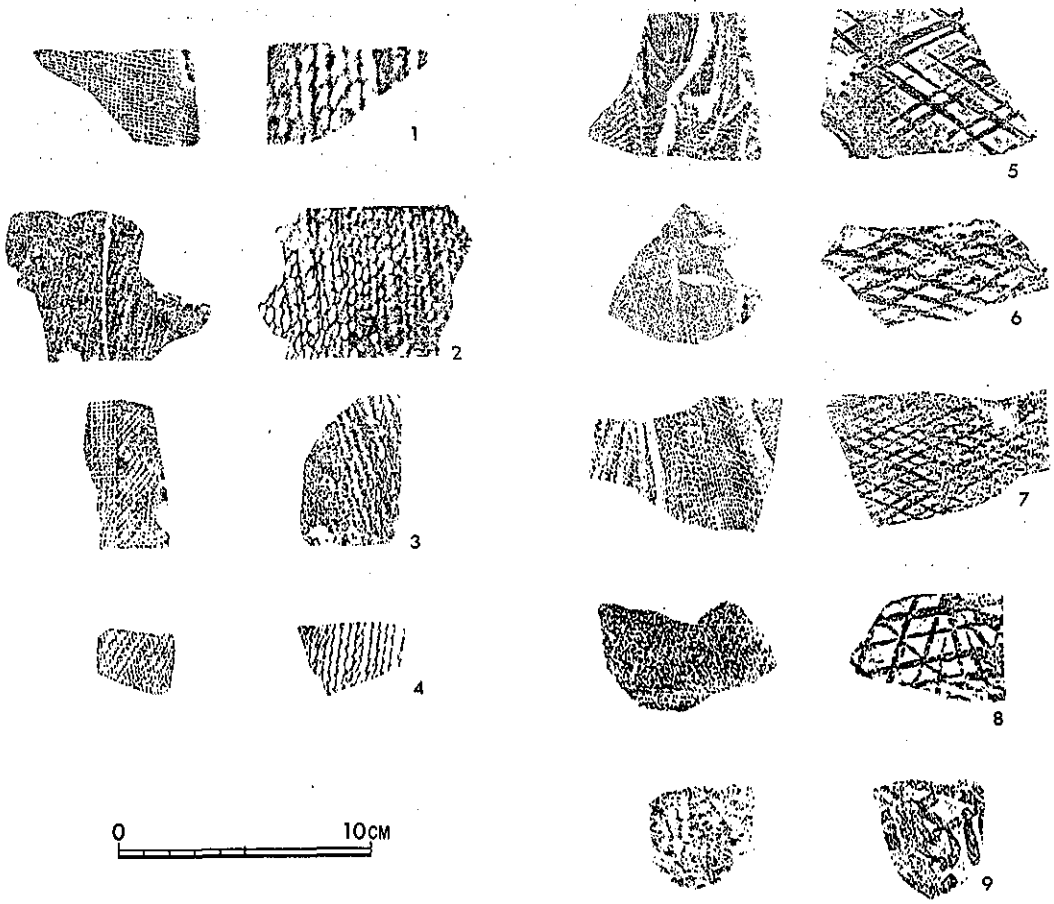
る。8は一辺が7～10㎜の不規則な三～五角形文様となっている。9は小片であるためよくわからないが、10×13㎜の大きな斜格子文に文字様のものを刻んでいる。

瓦の出土量は極めて少なく、他所より持ち込まれたものと考えられるが、参考となるのが2次調査出土軒平瓦である。類例は筑前国分寺、多々良込田遺跡出土の軒平瓦の外区は圏線でおわっており、本遺跡出土軒平瓦とは異なっているが、文様構成および製作技法は極めて近似している。この軒平瓦の年代は、共伴土器より8世紀後半～9世紀前半におくことができるが、この年代観は多々良込田遺跡出土平瓦とも合致している。

また、丸、平瓦については、2次調査出土瓦と3次調査出土瓦とでは凸面の叩き文様を明瞭に異にしている。2次調査では縄目文がほとんどを占め、格子目文は1点みられるのみであるのに対し、3次調査では格子目文のみで縄目文は出土していない。これらの瓦の年代について



第75図　瓦実測図Ⅰ



第76図　瓦実測図Ⅱ

も、それぞれ出土土器の年代観の範囲におけると考えるが、この細目文から格子文への変化が、大宰府の変化とも対応していることは興味深く、大宰府における年代観とも矛盾しない。

第7章　調査の記録 —遺物Ⅳ（自然遺物）—

自然遺物は第1次調査の区周辺の高まりと、第3次調査の第1～3貝塚より多量に検出することができた。特に第1～3貝塚は現地で1㎜メッシュによって水洗したため、その量は多量である。しかし、時間的な関係で詳細は後にゆずり今回は、種の同定ができたものに限り、その種名を提示しておく。

自然遺物としては貝類、魚類、哺乳類等がある。

1　貝　類

貝類は主に第1～3貝塚のもので、以下に示す種を確認した。

1　メカイアワビ　Notohalitois sieboldi (REEVE)
2　オトメガサガイ　Scutus(Auiscutum)sinensis (BLAINVILLE)
3　ウノアシ　Patelloida(Collisellina)saccharina lanx (REEVE)
4　マツバガイ　Cellana nigrolineata (REEVE)
5　ヒメクボガイ　Omphalius nigerrimus (GMELIN)
6　ヘソアキクボガイ　Chlorostoma argyrostoma turbinatum (A.ADAMS)
7　エビスガイ　Tristichotrochus unicum (DUNKER)
8　クマノコガイ　Chlorostoma xanthostigma (A.ADAMS)
9　イシダタミ　Monodonta labio (LINNE)
10　コシダカガンガラ　Omphalius rusticum (GMELIN)
11　クボガイ　Chlorostoma lishkei (TAPPARONE-CANEFRI)
12　オオコシダカガンガラ　Omphalius pfeifferi carpenteri (DUNKER)
13　キサゴ　U.(S)costatom (KIENER)
14　サザエ　Turbo(Batillus)cornutus SOLANDER
15　スガイ　Lunella coronata coreepsis (RÉCLUZ)
16　イシマキガイ　Clithon retropictus (v.MARTENS)
17　オオヘビガイ　Serpulorbis imbricatus (DUNKER)
18　ウミニナ　Batillaria multiformis (LISCHKE)
19　ヘナタリ　Cerithidea(Cerithideopsilla)cingulata (GMELIN)
20　コオロギガイ　Cerithium kebelti (DUNKER)
21　キクスズメガイ　Sobia conica (SCHUMACHER)
22　ツメタガイ　Neverita(Glossaulax)didyma (RÖDING)

23 イボニシ Thais clavigera (KÜSTER)
24 レイシ Thais bronni (DUNKER)
25 バイ Babyronia japonica (REEVE)
26 コナガニシ Fusinus ferrugineus (KURODA et HABE)
27 ナガニシ Fusinus perplexus (A.ADAMS)
28 テングニシ Pugilina(Hemifusus)ternatana (GMELIN)
29 マクラガイ Oliva mustelina LAMARCK
30 コシロガイ Acar plicata (DILLWYN)
31 カリガネエガイ Barbatia(Savignyarca)virescens obtusoides (NYST)
32 サルボウ Anadara(Scapharca)subcrenata (LISCHKE)
33 ハゴロモガイ Anadara(Diluvarca)ticenicosta (NYST)
34 リュウキュウサルボウ Anadara maculosa (R EEVE)
35 サトウガイ Anadara(Scapharca)satowi (DUNKER)
36 タマキガイ Glycymeris vestita (DUNKER)
37 イガイ Mytilus coruscum (GOULD)
38 アコヤガイ Pinctada martensii (DUNKER)
39 イタヤガイ Pecten(Notovola)albicans (SCHRÖTER)
40 ネズミノテ Plicatula simplex (GOULD)
41 ウミギク Spondylus barbatus REEVE
42 イタボガキ Ostrea denselamellosa LISCHKE
43 マガキ Crassostrea gigas (THUNBERG)
44 トマヤガイ Cardita leana DUNKER
45 フミガイ Venericardia(Megacardita)ferruginose (ADAMS et REEVE)
46 キクザル Chama reflexa REEVE
47 ザルガイ Vastricardium burchardi (DUNKER)
48 ハマグリ Meretrix lusoria (RÖDING)
49 チョウセンハマグリ Meretrix lamarckii DESHAYES
50 カガミガイ Dosinia(Phacosoma)japonica (REEVE)
51 オキアサリ Conphina(Macridiscus)veneriformis (LAMARCK)
52 アサリ Tapes(Amygdala)japonica (DESHAYES)
53 イソハマグリ Atactodea striata (GMELIN)
54 シオフキ Mactra veneriformis REEVE
55 ナミノコガイ Latona cuneata (LINNÉ)

56 イソシジミ　Nuttallia olivacea (JAY)
57 マテガイ　Solen strictus (GOULD)
58 オオノガイ　Mya(Arenomya)arenaria(？)oonogai MAKIYAMA
59 ヤマトシジミ　Corbicula(Corbicullina)leana PRIME
60 ヒザラガイ　Liolophura japonica (LISCHKE)
61 レイシガイダマシ　Drupa granulata (DUCLOS)

2　魚　類

第1次調査区、第3次調査第1～3貝塚から多量検出した。同定が未完了で、種類は以後さらに増すことは間違いない。

1 サメの一種　Selachii sp.
2 エイの一種　Batoidei sp.
3 マイワシ　Sardinops melanostieta (HOUTTUYN)
4 ウナギ　Auguilla japonica TEMMINCK & SCHLEGEL
5 サバの一種　Scombridae sp.
6 カツオ　Katsuwonus pelamis (LINNÉ)
7 マアジ　Trachurus trachurus (LINNÉ)
8 クロダイ　Mylio macrocephalus (BASILEWSKY)
9 マダイ　Chrysophrys major TEMMINCK & SCHLEGEL
10 ベラ　Labridae sp.
11 カワハギ　Stephanolepis cirrhifer (TEMMINCK & SCHLEGEL)
12 ヒラメ　Paralichthys olivaceus(TEMMINCK & SCHLEGEL)
13 マハゼ　Acanthogobius flavimanus (TEMMICK & SCHLEGEL)
14 マフグ　Fugu vermiculare porphyreun (TEMMINCK & SCHLEGEL)
15 メバル　Sebastes inermis CVVIER & VALENCIENNES
16 カレイ　Pleuronectidae sp.

3　哺乳類　その他

1 ネズミ　MURIDAE sp.
2 イヌ　CANIDAE sp.
3 イノシシ　Sus scrofa LINNAEUS
4 シカ　Ceruus nippon TEMMINCK
5 クジラ
6 アオウミガメ

第8章　調査の総括

1979年から81年まで、3次にわたって行われた、海の中道遺跡における発掘調査の成果を、ここで総括しておきたい。

遺跡の立地　遺跡は海の中道と称される砂嘴の玄海灘側にあり、砂丘の上に形成された古代の集落の跡である。海の中道の玄海灘側は潮流によって年々削られているので、古代の集落が営まれた当時と現在とでは、地形にかなりの変化が生じている。

遺跡は現在、汀線のすぐそば、砂丘の海側斜面の下に埋没しているけれども、これは集落の状況とは違っている。発掘によって検出された古代の遺物包含層は、現在の地表面とは逆に、内陸に向って傾斜しているので、かつての集落は風当りの強い砂丘の海側斜面を避け、現在その大部分が流失してしまった海ぞいの砂丘の、内陸側斜面に営まれていたものと推定される。内陸側に傾斜する包含層の最も低い部分は、現在の満潮時の海面下に当るので、集落のあった砂丘の内側は潟になっていた可能性が高い。

遺跡の規模と調査範囲　遺跡の海側の部分は、すでにかなりの程度まで流失してしまっているが、残存する部分だけでも、調査前の予想をはるかに上まわる面積を占めている。坪掘り調査によって判明した遺物包含層の広がりは、海ぞいに長さ 400m、内陸に向って幅50m以上に及ぶ。

第1次・第2次の発掘調査はこの包含層の広がりの西端において行った。第3次の発掘調査は、前2回の発掘区からできるだけ離れたところで行うよう計画し、国営公園用地の東端近くで実施した。第1・2次と第3次の発掘区の間には約 200m の隔りがある。前後3次の調査で平面発掘を行った面積の総計は1008㎡であって、遺跡全体から見ればごく一部にすぎない。遺跡の大部分は今もなお砂丘の下に埋れているので、今後もその保存については留意する必要がある。

遺跡の年代　上述した大規模な遺跡は、一時期に形成されたものではない。長年月にわたって、集落が少しずつ移動しながら営まれた、その痕跡の総計である。今回の調査では、遺跡のごく一部を発掘したにすぎないので、集落の形成移動の過程を詳細に追跡することはできなかったが、地点によって遺跡の形成された年代に違いのあることは確認できた。

この古代集落に関係した遺構・遺物のなかで、われわれが発見した最古のものは、第2次発掘区の第4号竪穴住居跡と、その内部から出土した須恵器を主とする一群の土器(第18、19図)である。この一群の土器は大宰府史跡のＳＫ1280、ＳＥ1081の出土土器[1]とほぼ同時期であって、従来の見解に従えば8世紀の後半に属するものである。第1・2次発掘区から出土した土

器は、この第4号竪穴住居跡出土品と同時期のものから、それよりやや時期の降るものにわたっている。

第3次発掘区の出土品は、全体として、前2回の発掘区出土品より、さらに時期の降るものである。須恵質の食器が極端に少なく、代って土師質、特に黒色土器の食器が卓越し、また、緑釉陶器、輸入陶磁器、滑石製石鍋の存在が目立つなど、容器類の材質を点検しただけでも、この地区の出土品が、第1・2次発掘区出土品より時代の降るものであることを推測できるのであるが、さらにこの推測は、第3次発掘区と、第1・2次発掘区の土師器の様式的な比較検討によって確めることができる。

第3次発掘区の包含層が形成された実年代を直接推定する手がかりとしては、ここで発見された6枚の銅銭がある。銅銭中最も新しいのは延喜通宝であるから、第3次発掘区の包含層形成期の下限が、延喜通宝の初鋳された延喜7年（907年）以後にあることは確かである。この推定はさらに、同じ発掘区から出土した新羅焼の瓶（第28図118）によって補強される。この種の瓶は新羅末、高麗初期のものとされている、慶州の雁鴨池から出土しているので、その実年をほぼ知ることができる[2]。本遺跡の第3次発掘区包含層の実年代は、上記した延喜通宝の年代と、新羅焼の瓶の年代を手がかりとして、10世紀代に比定して誤なかろう。

要するに、海の中道遺跡の継続年代は、すくなくとも、8世紀後半から10世紀代にまたがると見られるのである。

もっとも、この砂丘地帯における人間の居住の歴史が、8世紀になってから突如としてはじまるのでないことは、今回の発掘範囲内で散発的に発見された古墳時代の小型丸底土器（第17図7）や製塩土器（第53図）がものがたっている。ただし、これ等の8世紀以前の土器は、いずれも原位置から遊離した状態で発見されており、当時の居住地の正確な位置や規模を知ることはできない。

遺構のあり方　海の中道遺跡でわれわれが検出できた遺構ならびにそれに準じるものとしては、竪穴住居、掘立柱建物、製塩作業の痕跡と見られる焼土層、マウンド状の廃棄物の堆積がある。焼土層の密集している場所や、廃棄物の堆積の多い場所は認められたが、集落内の空間の使い分け方については、明確な法則をつかむことができなかった。

第1・2次発掘区では、竪穴住居、掘立柱居、掘立柱建物の両者が見出されたのに対し、時代の降る第3次発掘区では、竪穴住居がなく、建物は掘立柱建物に限られていた。これは竪穴住居から掘立柱建物への転換という、内陸部の集落跡で見られる大勢と一致する。

第3次発掘区包含層の最も低いところ、おそらく潟の縁辺と思われるところから検出された、低いマウンド状の廃棄物の堆積群は特に重要であると判断したので、精密な分層発掘を行い、土砂はすべて水洗して、魚骨の細片にいたるまで採集した。資料は目下整理中であって詳報できる段階ではないが、季節による資源の利用の仕方の違いが摘出できるのではないかと期

待している。

玄海灘式製塩土器の提唱 今回の発掘調査の、遺物の面における最大の成果は、奈良・平安時代の製塩土器の確認である。

海の中道遺跡から発見された製塩関係の土器には二つの種類がある。その一つは、第5章において第Ⅰ類として分類したもの、すなわち、内外面に叩き目を印する厚手大型の土器であり、いま一つは、第Ⅱ類として分類した内面に布痕を有する小型の土器である。前者の土器は、古くからその存在を知られていながら、性格が明らかでなかったが、今回の調査によって、はじめて製塩土器であると認定されたものである。海の中道遺跡から発見されたこの種の土器には、土器を塩の煎敷に用いた場合に生じる器壁の剝離や、紫紅色への変色が認められ、製塩土器であることは疑いない(3)。同種の土器は福岡県から長崎県にかけての玄海灘に面した地域に分布するので、今後、この種の土器を玄海灘式製塩土器と呼ぶことを提唱したい。

従来、九州では古墳時代後期の天草式製塩土器より新しい製塩土器は知られていなかった。玄海灘式製塩土器の認定により、すくなくとも、九州の一部では、平安時代の前期にいたるまで土器製塩が継続していたことが立証されたわけである。

現在の資料にもとづく限り、玄海灘式製塩土器は、天草式製塩土器と分布の中心を異にするかの如くである。また、天草式が薄手有脚であるのに対し、玄海灘式は厚手丸底である。両者の間には大きなへだたりがあるので、天草式から玄海灘式が自然に生じたとは考え難い。玄海灘式製塩土器の成立には、厚手の土器の方が鹹水の煎敷に有利であるという発想の転換があったはずである。そのような発想の転換が、何時、どこで行われたのであろうか。今後追求しなければならない課題である。

なお、海の中道遺跡から出土する2種の製塩関係土器のうち玄海灘式は、第1・2次発掘区で多数の破片がまとまって出土したのに対し、時代の降る第3次発掘区では少量しか出土しなかった。また、布痕土器も、第1・2次発掘区でかなりの破片が出土しているにもかかわらず、第3次発掘区ではわずかに1片が出土したにすぎない。このように、10世紀代の包含層では製塩関係土器の出土が目立って少なくなるのは、すでにこの頃、九州では土器製塩が全般的な衰退期に入りつつあったからであろうか。これもまた、今後，同種の遺跡の調査によって検討されるべき課題である。

居住者の生業 玄海灘式製塩土器の存在が示すように、海の中道遺跡の住民が製塩を行っていたことは確かであるが、彼等は製塩の専業者ではなかった。彼等は製塩のほか、魚類・貝類・海藻類の採捕から石灰の焼成にいたるまで、この海浜で営み得るあらゆる生業に従事していたようである。製塩土器が他の多くの製塩遺跡に見られるような厚い層状の堆積をなしていないこと、漁撈用具の出土量が非常に多いことから見ると、この遺跡の住民にとって漁撈は、製塩の副業といった程度にとどまらず、生業の重要な部分を占めていたと考えられる。

遺跡からは多数の釣針と網の錘が出土しているので、魚類の捕獲は主として釣漁と網漁によっていたことがわかる。ヤスのような刺突具が少いのは、刺突漁に好適な岩礁が附近に少なかったためであろう。刀子と鎌の出土がかなりの数に上っているが、前者は魚の解体処理具、後者は藻刈りの用具と見れば、これ等もやはり、海浜での生業に必要な用具である。

貝殻の出土量は遺跡の広さにくらべると、さほどではない。おそらく、豊富な魚獲があったので、食料を貝に依存する必要が特になかったのであろう。

注意すべきは、第3次発掘区から焼かれた形跡のある珊瑚の堆積が発見されたことである。これについては、石灰を焼成した際の焼け残りとする以外に適当な解釈を思いつかない。石灰の生産は、おそらく、官衙や寺院の需要に応じたものであろう。

遺跡の性格 海の中道遺跡の一帯は海産物にこそ恵まれてはいるものの、農耕には全く適せず、また、波浪や飛砂の被害を受けやすい環境である。この厳しい環境条件を見ていると、この遺跡が通年の居住地ではなく、製塩や漁撈のための季節的な作業場の跡ではなかったかという疑いがおこってくる。しかし、緑釉陶器、輸入陶磁器、銙帯金具、青銅鐙等々、季節的な仮住いにはふさわしくない物品が数多く出土しているのであるから、やはり、ここが生活の本拠であり、年間を通じての居住地であった可能性の方が強い。ただし、この問題は、現在進行中の魚骨や貝殻の分析が終了するのをまって最終的な判断を下すべきであろう。

海の中道の古代集落は、その厳しい環境条件の故に、かえって閉鎖的であり得ず、外界と交渉を持たなければならなかったであろう。住民は、生業の用具を整えるためにも外界と交渉を持たざるを得なかった。漁撈用具を作るための金属の原材はもちろん、魚網用の繊維、土錘や製塩土器用の粘土のような、通常の農村ならば自給可能な資材をも外界に求めねばならなかったはずである。製塩関係の布痕土器の製作に用いられた布のなかには、細密な綾や羅のような、上流階級にのみ用いられる高級織物がある。もちろん、これは廃品を利用したのであろうが、それを海の中道の住民が入手し得たということは、直接ではないにしても、彼等と上流階級との間に接触の道が通じていたことを意味する。海の中道の集落は、地理的には砂嘴上に孤立しているが、通常の農村よりはかえって外界に向って開かれた集落であったと見なければならない。通常の農村遺跡には見られないような奢侈的な物品や貨幣の出土もそのことを示している。

それにしても、この地の住民は、豊富な海産物の見返りとして、純粋な経済活動のみによって、これ等の物品や貨幣を入手したのであろうか。この点については、発掘期間中から調査関係者の間で問題にされ、海の中道遺跡は大宰府と何等かの公的な関係を持つ遺跡ではないかというような推測がなされてきた。しかしながら、大宰府との関係にも種々の形があり得るであろう。この遺跡の住民が厨戸として大宰府に掌握され、貢納や上番を義務づけられていたような状態から、この地に津の厨のような公的な施設が置かれていたような状態まで、いろいろ

の形が想定されるのである。海の中道の場合はそのいずれに当るのか、これについて、現在のところ、われわれはまだ明確な解答をつかんでいない。また、大宰府の傘下に入ることが、なぜ、豊富な物品の入手をもたらすかについても、具体的な説明を与えることは困難である。今後、類似の海岸遺跡や、また、対蹠的な内陸の農村遺跡との比較を進めるなかで、解決の緒をつかんでゆきたい。 （横 山）

〔註〕

（1） 大宰府関連遺構の文献

（2） 大韓民国文化広報部文化財管理局『雁鴨池発掘調査報告書』1978
なお、この件については西谷正氏の教示を得た。

（3） 製塩土器としての認定に当っては、岡山大学近藤義郎氏から種々の教示を受けた。

第9章　海の中道をめぐる諸問題

1　文献から見た海の中道遺跡

——大宰府主厨司考——

板　楠　和　子

はじめに

「遠朝廷」と称された大宰府は西海道九国二嶋を総管してその任に当ったが、そのための行財政機構はともに中央政府から独立した独自の組織内容を持つものであったことが先学の研究により明らかにされている(注1)。しかしながら残存する大宰府関係史料は、中央組織の一端である西海道各国の代表としての大宰府に関するものが多く、大宰府自体の行財政機能について直接体系的に窺える史料は少ないのである。したがって大宰府組織の解明は断片的な史料を蒐集し、中央の組織との比較対照により復元遡及してゆかねばならない状況にある。この点が古代史上における大宰府の重要性にもかかわらず、具体的な大宰府組織に関する個別研究が進展しにくい要因であると思われる。

幸いにして大宰府史跡の本格的発掘調査の進行により、大宰府政庁はじめ関連遺跡から重要な知見が得られそれらの様相が明らかになりつつある(注2)と同時に、木簡史料の発見により大宰府機構の解明にも今後大きな期待が寄せられるところである。しかしこれに加えて大宰府外縁においても関連遺跡が存在することはすでに周知の通りである。その最たるものは博多津に設置されていた鴻臚館であり、さらに怡土郡内に地名として残る主船司などである(注3)。

これから詳述しようとする主厨司も大宰府政庁内ばかりでなく博多湾周辺に関連の施設や厨戸を有し、さらに隣国の肥前や筑後にも御厨を有していたと思われる。この大宰府主厨司と厨戸について、最も早く論及されたのは竹内理三氏(注4)であり、その後氏の説を踏まえて勝浦令子氏が奈良時代における贄制度の観点から、大宰府厨戸について詳しく触れられた(注5)。今回海の中道遺跡の発見により大宰府主厨司に関して少し考える所があったので、先学の論考によりながらその組織を通覧するとともに、若干の私見を述べて行きたいと思う。

(一)　大宰府主厨司

職掌

奈良時代大宰府の官人構成は『職員令』によると次の通りであり、

主神一人　帥一人　大貳一人　少貳二人　大監一人　少監二人　大典二人　少典二人　大判事一人　少判事一人　大令史一人　少令史一人　大工一人　少工二人　博士一人　陰陽師一人　醫師二人　算師一人　防人正一人　佑一人　令史一人　主船一人　主厨一人　史

生廿人

これらの官人は大宰府政庁やその所管の諸司、諸所、学校などにおいてその任に従った。ここに見える主厨の管轄先は、『類聚三代格』貞観四年（862）九月廿日の官符に

今府庫所レ納雑米　修理官舎器伏并選士衛卒粮厨司染所之使料等三千七百八十餘斛

とあるように「厨司」とも称されたのである。これと同様、主神のそれは「神司」(注6)、醫師（薬師）のそれは「薬司」(注7)と呼ばれている。

さてその職掌であるが、『職員令』主厨の項によると「掌二醸醢醢蒲醤豉鮭等事」と簡単に記すのみである。しかしすでに竹内理三氏(注8)も指摘されたように、主厨司の職掌はこれだけに止まらない。それを端的に示しているのが『類聚三代格』承和七年（840）九月廿三日の太政官謹奏である。これによると弘仁十四年（823）正月大宰府の主厨、主船の二員が廃止され新たに「主城」二員が配置されることになったが、その十八年後の承和七年に至り大宰府から主厨、主船停止以来の弊害が大きいため両官を再置したい旨が上申され、同年九月その要求が太政官より認可されている。この上申の中で大宰府は主厨の職掌について

右製レ令之日　雖置二主厨一　所レ掌之職掌最在二蕃客一　加以供御之備　不レ可二闕乏一

と述べ、主厨停止以来

例貢御贄并諸供具事　觸レ類多レ闕

とその窮状を訴えている。これによって主厨の職掌が大宰府最大の任務である蕃客饗応に呼応するものであり、それと同時に朝廷に対して「例貢御贄」を貢進する責を負っていたことが知られる。

さらに『続日本紀』宝亀十一年（780）八月庚申条によると

筑紫大宰　遠居二辺要一　常警二不虞一兼待二蕃客一　所レ有執掌殊異二諸道一　而官人相替　限以二四年一　送レ故迎レ新　相望二道路一　府國困弊　職此之由　加以　所レ給厨物　其数過レ多　毎守二旧例一充給　或闕二蕃客之備一　於レ事商量　甚不二穏便一　臣等望請　且停二交替料一　兼官人歴任　増為二五年一　然則百姓息レ肩　庖厨無レ乏

とあって、八世紀後半の大宰府圏の困弊が四年の任期による官人の交替が頻繁に行なわれるためであり、しかも交替料として「厨物」を多く与えるため「蕃客之備」にも事欠く有様であることが指摘され、以後官人の任期を五年に延長し、交替料は停止されることになったのである。これによって奈良時代主厨司から大宰官人の交替料として、その所管の食料品類と思われる厨物が支給されていたことが知られる。

このほか『職制律』外膳犯食禁条の割注によると

百官常食以上　皆官厨所レ営　各為二外膳一

と見えるから、中央官衙と同様大宰府諸司に勤務する官人の常食や会食の膳は、主厨司の所管によるものであったと思われる。

以上によって主厨司の職掌は蕃客饗応から朝廷への御贄貢上、官人交替料、大宰府会食および常食に至るまで大宰府において必要とされる食料品の調達、調理、加工、保存にあったことが考えられる。

食料品調達

では主厨司所用の食品類はどのようにして調達されたのであろうか。まず第一に想起されるのは西海道諸国から大宰府に納付された調、庸、中男作物の食品関係である。西海道において前記の品々は『延喜民部式』に「西海道諸国納二大宰府一」と規定されているように、全て大宰府に送付されその一部は京進されたが、大部分は府用に充てられたという。特に大宰府管内から京進される物資で最も朝廷に重視されていたのは「筑紫綿」として聞えた調綿であり、その他の食品や雑物は余り大きな比重を占めていなかったとされている(注9)。したがって西海道の食品貢納物は、後述のように一部を御贄として京進する外は、全て大宰府で消費されていたと考えられる。

いま『延喜主計式』に規定されている西海道諸国の調、庸、中男作物の品目のうち食料品関係を国別に整理すると次のようになる。

品目は海産物、河産物、油、獣肉、米、雑穀、その他と別けられるが、その種類では海河産物が圧倒的に多くを占め、陸産物では五種類の油と庸米の他は種類も量も少く、おそらく量的にも前者が多数を占めていたのであろう。しかも大部分が筑前、筑後、肥前、肥後、豊前、豊後の六国より納付されることになっており、特に海産物についてはこれらの国々の海部を中心として貢納されたのではないかと以前指摘したことがある(注10)。

しかしこの中には蔬菜や菓子、生魚などが含まれておらず、これだけで大宰府所用が全て賄われていたとは考えられない。そこで次に考えられるのが大宰府の物件費とも言うべき府儲料稲三万束の中に含まれていた「厨家雑用」という費目である。すなわち『三代実録』貞観十五年（799）十二月十七日条によると

又府儲料稲三万束　五使粮并水脚賃及厨家雑用　凡百庶事惣在二其中一　諸国所レ備各有二色数一　而或致二違期一　或置未レ進　府中之用　常苦二闕乏一　須割置二田二百町一　名二府儲田一　収二其地子一　以宛二府用一　但租穀同上

とあって厨家雑用その他府用に充てる料稲が管内諸国から徴収されていたのであるが、九世紀後半になると違期や未進が多くなり、府用に事欠く状態となった。そこで筑前国内に府儲料田二百町を割置して、その地子を府用に充てることになったというのである。これは律令租税制の変貌を示すものであり、おそらくこれと平行して調、庸などの未進も顕著化していたと思われるので、九世紀後半以降主厨司の食料調達は、厨家雑用を財源とした交易に由るものと、後述する大宰府厨戸の直接生産に大きく依存するようになったのではないかと思われる。なほ府儲料田二百町のうち厨家雑用に充てられる分は以後「主厨司領田」と称されたようであり、長

第3表　西海道諸国貢上調・庸・中男作物食品関係（○調　×庸　△中男作物
大隅・対馬は食品を貢納しないので省略）

食品名＼国名	筑前	筑後	肥前	肥後	豊前	豊後	日向	薩摩	壱岐
黄蘗皮					△				
黒葛				△	△	△			
胡麻子							△		
小豆									○
大豆									○
小麦									○
米		×	×	×	×	×			
猪鮨					△				
鹿鮨	△				△	△			
鹿脯	△			△		△			
閇弥油			△						
椒椒油		△				△			
荏油	△	△	△	△	△	△			
胡麻油	△	△		△	△	△			
海石榴油	○	△		△	△	△			○
酢年魚		△		△	△	△			
煮塩年魚		△		△		△			
塩漬年魚	△	△		△	△				
押年魚	△	△		△		△			
鮨鮒	○ △	△							
醤鮒	○ △	△							
塩	○×		○	△				○	
海藻	○ △								
雑魚楚割	△	△			○ △				
雑魚腊	×	△		○		△			
蝦腊				△					
堅魚						○ △	○		
鮫楚割				△					
乾鮹				○					
熬海鼠	×		○	○					
鯛腊	△			○					
鳥賊	△				○ △				
耽羅鰒				○		○			
長鰒			○						
腸漬鰒	△		△						
火焼鰒	○×								
鮨鰒	○ △		△						
湖鰒	○×		○×			○×	○×		○
短鰒	○		○			○			
腐耳鰒	○ △								
鞭鰒	○								
蔭鰒	○					○			
葛蜜鰒	○					○			
羽割鰒	○		○			○			
御取鰒	○		○			○			

保六年の文書[注11]にその名が見えている。

以上によって大宰府主厨司の食料調達は、奈良時代においては管内諸国から貢進される調庸中男作物と府儲料稲の中の厨家雑用と、大宰府厨戸の生産によって行なわれたが、九世紀後半になると管内諸国からの貢進物はもはや質量ともに期待できなくなり、以後は主厨司によって筑前国において直営された領田の地子と、厨戸による海産物を中心とした直接生産に大きく依存して行なわれるようになったのではないかと考えられる。

主厨司の構成

従来主厨司の構成については『職員令』に「主厨一人」とあるのみで他に関係史料は見られなかったが、昭和47年大宰府政庁跡より出土した木簡の中に

「……長一人膳……」

と記載されたものが発見され、この内容が中央の宮内省大膳職の構成と類似したものがあることから、大宰府主厨司の組織に関連するものと推定されている[注12]。

すなわち朝廷の会食全般を司どる大膳職の構成は四等官の下に、主醤二人、主菜餅二人、膳部百六十人、使部卅人、直丁二人、駈使丁八十人、雑供戸が配置されるものであり、長官である大夫の職掌は膳部を率いて、「諸国調雑物、造二庶膳羞一、醢、菹、醤、豉、未醤、肴、菜、雑餅、食料」を掌どることであった。これは大宰府主厨司長官の職掌とほとんど同じであり、出土した木簡に見える「膳」は大膳職と同様、主厨司所用の食膳や保存食品を造るために配置されていた膳部の意味ではないかと考えられている。

なほ『職制律』によると膳部が百官の食膳を造るに対して次のような規定があり、

凡外膳　犯二食禁一者　膳部笞五十　穢悪之物　在二食飲中一　及簡択二不浄一者　笞卅　誤者　各減二二等一

もし食経に記されている禁忌いわゆる食い合せの類を犯したり、食物中に汚物を混じたり、不浄の材料を選択した場合、笞刑に処せられることになっていた[注13]。おそらく大宰府においても膳部に対してこの規定が適用されていたのであろう。

この他、主厨司配下の厨戸の長である伴造であったと思われるが、後述の御贄使の中に見える「厨造」である。『職員令』によると朝廷における諸司には、品部である某戸とその伴造である某部が配属され、さらに『延喜宮内式』大齋条によると、この神事に供奉する行列の中に「内膳司膳部伴造一人」とあって、某戸や膳部の管掌者を伴造と称していたことが知られるからである。大宰府から貢上される御贄はこの厨造に付して京進されたのであるが、厨造の職掌はそれだけに停らず、厨戸を率いて大宰府厨物所用全般に奉仕する実際的責任者ではなかったかと考えられる。

さて以上のことから主厨司のおおよその構成は次のように考えられ、

長官――┬――膳部
　　└厨造――厨戸

朝廷の内・大膳などの例から見てこれに使部、直丁、駈使丁などが配置されていた可能性が強い。

(二)　大宰府厨戸

『延喜民部式』大宰府充仕丁条によると、帥以下大宰府官人の仕丁数を記載するばかりでなく、それに続けて

香椎宮守戸一烟　薬園駈使廿人　主船一百九十七人　厨戸三百九十六烟

とあって大宰府に厨戸が四百戸近く設置されていたことがわかる。この大宰府厨戸の性格について竹内理三氏(注14)は、大宰府から朝廷に貢上される御贄を採るための漁夫であろうとされ、平野邦雄氏、勝浦令子氏もこれを踏襲しておられる(注15)。

すでに述べた通り大宰府貢上別貢御贄は主厨司の管轄であり、『類聚三代格』大同四年(809)正月廿六日官符所引の天平神護三年(767)九月三日処分によると「正使一人　厨造一人　書生二人」から成る御贄使一行によって、海上輸送(注16)で京進されていたらしい。『延喜宮内式』によると大宰府貢進年料御贄の品目は鮑加工品が九種と最も多く、これに次いで年魚が三種、鮒、鯛、宍、蒜、雉、腹赤魚が各一種となっており、その品々は主として管内諸国から大宰府に納付される調物と中男作物から割き取られたものと、「厨作」「梁作」と称されるものより成っており、朝廷の正月節会料としてのみ貢進された腹赤魚は別貢として扱われている。いまそれらの内訳と数量を示すと次表の如くであった。

第4表　大宰府貢進年料御贄

税目	調物						中男作物				梁作			厨作			別貢	
品目名	御取鮑	短鮑	薄鮑	陰鮑	羽割鮑	火焼鮑	鮒鮨	鮨鮑	腸漬鮑	甘腐鮑	鮨年魚	煮塩年魚	内子鮨年魚	鯛醤	宍醢	鯊房漬	雉腊	腹赤魚
数量	459斤	518斤	855斤	86斤	39斤	335斤	178斤	108斤	296斤	98斤	223斤	839斤	98斤	4斗8升	2斗3升	1石5斗7升	2輿60籠別3瓶	其数随得
	5裏	12裏	15裏	3裏	1裏	4裏	5缶	3缶	9缶	2缶	6缶	20缶	1缶	2缶	1缶	6缶		

ただしこの品目は十世紀前半の状況を表わしたものであり、『類聚国史』(巻三十三)によると

天長八年四月己丑　停止=大宰府例進鹿尾脯等御贄-

とあり、さらに大宰府政庁出土の八世紀初頭を下らないと目されている木簡(注17)には

「十月廿日　竺志前贄驛□□留多比二生鮑六十具鮹四列都備五十具」（表）

「須志毛+古割耳布-古」（裏）

とあって時代によって贄品目や内容に推移のあったことが窺われる。さらに平城宮出土の木簡には贄札と考えられる次の記載があり

「筑後国生葉郡煮塩年魚　伍斗□　霊亀二年」

「筑後国生葉郡煮塩年魚　肆斗貳升　霊亀三年」

先の品目の中には奈良時代初頭から引き継がれたものも存在することを示している。

さてこの御贄貢上の起源は一般に大化以前に遡るものであり、律令制下においても令の規定には贄に関する条文が無いにもかかわらず、平城宮、藤原宮址から多数の贄貢進付札の木簡が発見され、日本古代を通して継続されていた税制であることが明らかにされている。すなわち勝浦令子氏(注18)によると令制下の贄貢納には(1)贄戸系、と(2)服食系という二つの方式があり、前者は朝廷の日常供御物を貢納するため宮内省大膳式に隷属していた江人、網引、鵜飼、未醤など雑供戸を指した語であり、畿内近国に設置されていた御厨の供御人もこの中に含まれ、彼等のその代償として調、雑徭を免じられていた。これに対して後者は国衙、郡衙が雑徭による集団労働や、正税交易によって調達したものを貢進するものであり、大宰府の贄貢納のうち厨作、梁作は（1）の贄戸系や御厨的な貢納方式を類似するとされた。

まず梁作であるがこれは年魚の加工品を貢納するものであるとし、前述の平城宮址から発見された木簡に見える筑後国生葉郡の煮塩年魚はこの梁作で作られたものであり、その根拠として『筑後国風土記逸文』に見える生葉郡の膳司にまつわる地名説話と、平安中期に発達する大宰府宇野御厨の拠点の一つが生葉郡にあることをあげられた。次に厨作は主厨司配下の厨戸によって作られたものであり、彼等は『延喜式』によると不課戸とされており、その本貫の一つは糟屋郡厨戸郷であったが、この付近は志賀海人の拠点であり、大化前代の糟屋屯倉の存在を考慮すると、畿内の贄戸と同様に古くから贄貢納を行っていた厨戸の拠点であったとされた。さらに『肥前風土記』に土蜘蛛が服属の証として鰒貢納を約した話を伝える松浦郡値嘉郷も、平安時代宇野御厨として発展することから、大宰府の厨戸が分布していたのであろうとされた。

以上大宰府主厨司の御贄貢上と厨戸の関係について見てきたが、この厨戸が博多湾や松浦地方の海人を中心として設置されたことについては同感である。それは次表のごとく筑前、肥前の各郡内には海部や海人に関係深い郷名が六つ見られ、一郷五十戸として計算すると六郷三百戸となり、これに厨戸郷を加えると三百五十戸となり、さらに筑後生葉郡内の河川漁民を一郷分として合計すると四百戸となり、『延喜式』記載の大宰府厨戸三百九十六烟に極めて近い数

字となるからである。おそらく大宰府厨戸の構成はこれと大過ないものであったと考えられる。

第5表　大宰府厨戸の海河漁民

	肥前	筑前						筑後
郡	松浦	怡土	那珂	糟屋			宗像	生葉
郷	値嘉	海部	海部	志珂	阿曇	厨戸	海部	

そのなかでも特に筑前国内の博多湾沿岸に点在する海部は厨戸郷を中心としていわば大宰府膝下の厨家とも言うべき位置を占めており、彼等の職掌は決して御贄貢進に停まるものではなかった考える。というのは先述した大宰府貢進御贄のうち厨作は鯛醤、宍醢、蒜房漬の三種だけであり、その数量も余り多くなく、他の税目から貢進される割合が大きいからである。勿論時代によって贄の品目や数量が変化したことは考慮しておかねばならないが、大宰府厨戸は主厨司所管の職掌遂行のため、当初は調庸や中男作物の食品では調達できない生鮮海産物を中心とした饗応および日常供御、御贄供御などを行っていたが、律令体制の崩壊により調庸物や厨家雑用稲の未進が顕著になるにつれ、これとは反対に厨戸への依存は次第に大きくなり、八世紀後半から十世紀にかけては主厨司食料調達の中心的役割をはたしていたのではないかと考えられる。

㈢　糟屋郡厨戸郷と阿曇氏

律令時代の糟屋郡は今日の郡境と少し異り、郡北の筵内一帯は宗像郡に属していたのであり、糟屋郡の北限は現在の新宮町辺りではないかとされている(注19)。『和名抄』によると糟屋郡は九郷を管する中郡であり、そのうち香椎、志珂、池田、阿曇、柞原、勢門の六郷の比定地については次表のごとくほぼ定っているが、敗梨、大村、厨戸の三郷については考証に足る手懸りもなく不明のままとなっている。

第6表　糟屋郡郷名比定地

郷名＼比定者	(1) 邨岡良弼	(2) 吉田東伍	(3) 井上辰雄	(4) 日野尚志
香椎	香椎村	香椎村、多々羅村	福岡市香椎町	香椎神社付近
志(珂)阿	志賀島	志賀島村	志賀島	宇美・須恵川条里区西部
厨戸	鹿部村(香椎神宮神領)	箱崎（糟屋屯倉跡）	宇美（宇美神社御厨）	久原・浦田・多々羅条里区
大村	膏柳、川原？	膏柳又宇美？	糟屋郡糟屋町？	宇美・須恵川条里区

比定者 / 郷名	(1) 鄰岡良弼	(2) 吉田東伍	(3) 井上辰雄	(4) 日野尚志
池田	塔原、下原、原上、立花口、三代	大川村、仲原村	塔原、下原、原上、立花口、三代	新宮条里区
阿曇	？	和白村、新宮村	粕屋郡和白、新宮	志賀島
柞原	久原村	久原村、山田村	粕屋郡久原	久原・浦田・多々羅条里区
勢門	迫門河内	勢門村、篠原村	粕屋郡勢門	勢門条里区（郡家）
敝梨	富良川？	？	富良川？	宇美・須恵条里区東部

出典　(1)『日本地理志料』　(2)『大日本地名辞書』
(3)「古代の粕屋」（『多々良遺跡調査報告書』所収）
(4)「筑前国那珂・席田・粕屋・御笠四郡における条里」（『佐賀大学教育学部研究論文集』第24集

このうち敝梨郷については「大宰府神社関係文書」(注20)の中に「糟屋敝梨郷極楽寺」という記載を持つ文書があり、ここに見える極楽寺という寺は『大宰管内志』（巻十）糟屋郡極楽寺条所引の「八幡愚童記」によると、同郡宇美村の枝村障子岳という処にありと記されている。これによって敝梨郷は、大宰府や筑前国府に最も近い宇美川流域に編戸されていたことが知られるのである。。

次に大村郷であるが、管見の限りでは直接この郷を比定できる史料は検出していない。ただし糟屋郡内には郡名と同じ郷名を欠いており、大村という名称から推してこの地域が郡内の中心的な位置を占めていたのではないかと考えられる。考古学的調査によれば、多々羅川流域に内橋、多々良込田など郡の政庁的建物と想定される遺跡が発見されており(注21)、この地域に大村郷が比定されるかもしれない。

最後に厨戸郷であるが、池辺弥氏の「郡郷里駅名索引」(注22)によると「厨」字の付く地名は糟屋郡厨戸郷のみであり、朝廷の食料貢納を務めた畿内近国の御厨と同様に、大宰府の御厨であったことによる特別の命名であろう。その比定地については「大宰府厨戸」の頃で述べたように、海産物を主として貢納する厨戸の性格上、志珂郷や阿曇郷と同じく海岸部の海人を中心として編戸されたものと考えられる。

では何故に糟屋郡内に厨戸郷が置かれたのであろうか。この問題を考えるためには志珂郷や阿曇郷の由来が大変重要であると思われる。『筑前国風土記逸文』によると糟屋郡資珂嶋について次のような地名説話を伝えている。

昔者　気長足姫尊幸二於新羅一之時　御船夜時来泊二此嶋一　有下陪従名云二大浜小浜一者上　便勅二小浜一遣二此嶋一　覓レ火得早来　大浜問云　近有レ家耶　小浜答云　此嶋与二打昇浜一近相連接　殆可レ謂二同地一　因曰二近嶋一　今訛謂二之資珂嶋一

ここに登場する大浜小浜という人物は、『応神紀』において海人の総宰となったと伝えられる阿曇連祖大浜宿弥と同一人物と考えられ、海神を祖とするこの一族の西国における根拠地が阿曇郷であったと考えられる。また『延喜神名式』によると「志加海神社三座」が見えているが、この神社は『新抄格勅符抄』によると「阿曇神」と記載され、大同元年（806）住吉神や宗像神と共に神封八戸（注23）が寄せられており、後世まで阿曇氏が神主家を務めるなど、志賀嶋も阿曇氏の強い影響下にあったことが窺われる。

さらに『職員令』によれば内膳司においては他の官司と異なり、長官に相当する「奉膳」が二人配置されており、この職には『続日本紀』神護景雲二年（768）二月条によると

勅　准レ令以二高橋安曇二氏一　任二内膳司一者為二奉膳一　其以二他氏一任レ之者　宜名為レ正

とあって高橋、安曇の両氏から一人ずつ就任するのが原則であった。この両氏は大化前代以来朝廷の食膳に供奉することを職掌として来た家柄であり、両氏配下の部民である膳部、海部の分布によると、高橋氏が東国を中心として勢力を有していたのに対して、阿曇氏は淡路、播磨筑前など西国を中心として勢力を有していたとされている。八世紀後半に至り両氏の間に神事行列の順序をめぐって対立が激化し、『類聚国史』（巻八十七）配流条によると、延暦十年（791）十一月の新嘗に際して高橋を以って行列の先とする旨が決められたが、これを不服とした安曇宿祢継成は職を放棄し、ために隠岐国へ流罪となる事件が起きている。一方高橋氏は朝廷の御饌国と称された志摩国の国守をも世襲的に独占し、安曇氏の勢力を圧倒するようになったとされているが（注24）、『延喜宮内式』によると大嘗神事の行列について高橋朝臣と安曇宿祢が供奉することになっており、内膳司奉膳職の伝統はやはり両氏によって継承されていたことが知られる。このように朝廷の膳職や御厨に、大化前代以来律令制下に至るまで高橋、安曇の両氏が深く関与していたことは注目されねばならない。

さらに糟屋郡内には朝廷の特異な尊崇を集めた香椎廟が建立されており、律令時代大宰府官人参拝は勿論のこと、歴代天皇はその即位に際して報告の儀式を行うなど、『延喜神名式』の外にありながら破格の扱いを受けている。したがって厨戸郷をこの香椎廟の神領とする（注25）説のあったのも肯首できるものがあり、『三代実録』貞観十八年（876）正月廿五日条によると

先レ是貞観十六年大宰府言　香椎廟毎年春秋祭日　志賀嶋白水郎男十人女十人奏二風俗樂一所レ着衣裳　去寶亀十一年　大貳正四位上佐伯宿禰毛人所造也

とあって、香椎廟春秋の祭礼には志賀嶋の海人もこれに奉仕していたことが知られる。

以上のように糟屋郡は大化前代屯倉の設置以来、筑前博多湾沿岸の他の地域に比して朝廷の直轄領や御厨的性格をより強く保持していたのであり、大宰府建設に伴ってその食膳を司どる主厨司厨戸が阿曇氏の本拠地であった同郡内に設置されたのは、決して偶然ではないと思われる。おそらく大化前代以来朝廷の食膳を司る家柄であった阿曇氏の、西海道一円における海人に対する支配力に、大宰府厨物調達を依存するところが大きかったためではなかろうか。した

がって厨戸の伴造であった厨造には、阿曇氏一族から選ばれていた可能性が大きいと言えよう。

(四)　志賀海人と津厨

江戸時代の海中道は白砂青松の景勝地として著名であったが、古代においても『萬葉集』に志賀浦や志賀海人が多く詠われており、玄海灘に広く分布していた海人の中で特異な存在であったことが窺われる。いまそれらの歌を列記してみると、まず巻三「雜歌」には神亀年中(724～728)に大宰少貳であった石川少郎の作として

志可の海人は藻刈り塩焼き暇なみ
　髮梳(けづり)の小櫛取りも見なくに　(278)

があり、巻七雜歌の「羈旅作謌」中には「古集中出」と注記して次の三首があり、

ちはやぶる金の岬を過ぎぬとも
　われは忘れじ志賀の皇神　(1230)
志賀の白水郎(あま)の釣船の綱堪えなくに
　悒(こころ)に思(も)いて出でて来にけり　(1245)
志賀の白水郎の塩焼く煙風をいたみ
　立ちは上らず山に棚引く　(1246)

巻十一「寄ㇾ物陳ㇾ思」の中には次の二首があり

志賀の白水郎の塩焼衣穢(な)れぬれど
　戀とふものは忘れかねつも　(2622)
志賀の海人の火気(けぶり)焼き立てて焼く塩の
　辛き戀をもわれはするかも　(2742)

巻十二「羈旅発思」の中には次の二首があり

志賀の白水郎の釣し燭せる漁火の
　ほのかに妹を見むよしもがな　(3170)
志賀の海人の磯に刈り干す名告(なのり)藻の
　名は告りてしをなにか逢い難き　(3177)

巻十五の「天平八年丙子夏六月　遣㆓使新羅国㆒之時　使人等各悲ㇾ別贈答　及海路之上　慟ㇾ旅陳ㇾ思作歌　并㆓当ㇾ所誦詠古謌㆒」と詞書のあるもののうち、「至㆓筑紫館㆒　遙望㆓本郷㆒　悽愴作歌四首」とある歌の次の三首までが志賀を詠んだものである。

志賀の海人の一日もおちず焼く塩の
　辛き戀をも吾はするかも　(3652)
志賀の浦に漁する海人家人の

待ち戀ふらむに明し釣る魚　(3653)

かしふ江に鶴鳴き渡る志賀の浦に

沖つ白浪立ちし来らしも　(3654)

さらに巻十六「有二由縁一雜謌」の中には、神亀年中対馬に食料を輸送する柁師に差発された宗形部津麻呂に替って、その役を務めた志賀村白水郎荒雄が、その途中海難に遭い死亡するという事件があり、これを悼んで筑前守であった山上憶良が作った歌十首が載せられているが、そこにも

志賀の山いたくな伐りそ荒雄らが

よすかの山と見つつ偲はむ　(3862)

荒雄らが行きにし日より志賀の海人の

大浦田沼(たぬ)はさぶしくもあるか　(3863)

のように志賀を詠み込んだ歌が見えている。

このように志賀の海人を題材とした多数の歌が残されているのは何故であろうか。まずその作者について見てみると、大宰少貳や筑前守として実際に筑前国に赴任し、あるいはまた遣新羅使として博多津にあった筑紫館に逗留した官人達が含まれており、単なる常套の枕詞ではなく実景として志賀浦や志賀海人に接して詠んだ歌も含まれていると考えられる。いま実景描写としての観点から志賀の海人の労働の内容を見てみると、塩焼き、藻刈り、釣が主なるものであり、これらは海の中道遺跡出土の多量の製塩土器、刀子、釣針、魚骨などの遺物群とよく符号する。

一方『三代実録』貞観十一年（869）十二月五日条によると

鴻臚館并津厨等　離居二別處一　无レ備二禦侮一　若有二非常一　難二以応猝一

とあって、大宰府と離れて鴻臚館や津厨などの施設が存在していたことが知られる。竹内理三氏はこの史料から大宰府主厨司は博多津に存在したとの説を[注26]述べられた。これに対し後殿地区から贄および主厨司に関連すると思われる木簡が発見されたことにより、大宰府政庁後殿地区付近に主厨司の存在が推定されるとする考えもある。[注27]。

この問題を解決するために「厨」字がどのような意味に使用されているかを見ておく必要があろう。『和名抄』（巻十居宅）によると厨の訓みは「久利夜」であり、その意味は「庖屋也」とあり、すなわち料理をする所となっている。いま八世紀の文献に見える用例では次のようなものがある。

（1）『雄略紀』二年十月条、宍人部設置由来

我之厨人菟田御戸部　真万田高夫　以二此二人一　賜将加賈　為二宍人部一

（2）『天武紀』朱鳥元年六月庚寅条

名張厨司災之

（3）『出雲風土記』楯縫郡佐香郷条

佐香河内百八十神等集坐　御厨之給而　令レ醸レ酒給之

（4）『萬葉集』（巻十九）　4250番の詞書

便附二大帳使一　以二八月五日一応レ入二京師一　因レ此以二四日一設二国厨之饌一　於二介内蔵伊美吉縄麿館一饌之

（5）『職制律』将雑薬至膳所条割注

御厨進レ膳　従レ造至レ進　皆有二監当官司一

（6）『職制律』外膳犯食禁条割注

百官常食以上　皆官厨所レ營　名為二外膳一

この六例中厨字が前に付くものは厨人、厨司の二例であり、後に付くものは御厨、国厨、官厨の三例ある。前置の厨が料理をする人、司どる所というように後字を修飾するのに対して、後置の厨は料理をする場所を表わし、それが何処に所属するかを前字が説明する。すなわち国は国衙、官は官衙、御は神々と天皇の所属であることを示している。

とすると「津厨」は後者の例に入り、博多津にあった料理所という意味に解釈され、官司として主厨司はやはり大宰府政庁内に設置されていたと考えられる。

では津厨とはどのような施設を指したものであろうか。史料の上から想定される一つは鴻臚館の厨であり、もう一つは大宰府厨戸の厨であろう。前者の場合厨の所在地は鴻臚館の付近に考えられるが、後者の場合厨戸郷のおかれた糟屋郡沿岸部の可能性が強い。海産物を中心に扱った厨戸はその採集、処理、加工の過程上、海岸部に作業場を求めざるを得なかったと考えられる。『萬葉集』に数多く登場する志賀海人は、実は津厨に上番して主厨司所用に奉仕していた厨戸の姿を歌ったものが含まれているのではなかろうか。さらに海の中道遺跡はその立地、出土遺物・遺構、継続年代の上から見ても、主厨司配下の厨戸や津厨の性格と極めて合致する点が多い。この海の中道遺跡こそ大宰府津厨の跡ではなかろうか。

むすび—八世紀における大宰府施設と観世音寺所領—

いま史料の上から知られる八世紀における筑前・筑後地方の大宰府関連施設および観世音寺関係所領を示すと、次の通りである。

筑前は夜須、下座の二郡を除くほぼ全域に筑後は筑後川流域の四郡にその所領、諸施設が存在したことが知られるが、筑前国においてまず注目されるのは、大宰府関連施設と観世音寺関係所領が那珂郡と御笠郡を除いて互いに重複していないことである。しかも那珂郡の場合は他の観世音寺所領水田に比べて面積が極端に少なく、御笠郡は大宰府と観世音寺の所在地であることを考慮すると、両者の建設に当ってその必要とされる諸施設、所領が相互に競合しないように配置されていたのではないかと考えられる。それは特に筑前沿岸部において顕著であり、

第7表　大宰府および観世音寺の所領・諸施設

	郡	郷	所領および諸施設	出典
筑前	怡土	(海部)	(大宰府主船司、怡土城)	
	志麻	加夜	観世音寺焼塩山紙野林	観世音寺資財帳
	早良		観世音寺呉楽偽丁功田8町4反	寛弘二年観世音寺文書
	那珂	(海部)	(大宰府鴻臚館)	
			観世音寺水田3段130歩	観世音寺資財帳
	席田		観世音寺水田8町2反4歩(一切経料田)	貞観十年蜂須賀家文書
	粕屋	(阿曇厨戸)	(大宰府厨戸)	
	宗像	(海部)	(神郡)	
	遠賀	山鹿	観世音寺焼塩山山鹿林東山	観世音寺資財帳
	鞍手	金成(生)	観世音寺封戸50烟	〃
	嘉麻	碓井	観世音寺封戸50烟	〃
	〃		水田6町4段	〃
	穂波		観世音寺水田6町	〃
	上座	把伎	観世音寺薗把伎野49町	〃
	御笠		観世音寺水田40町	和銅二年大東急紀念文庫文書
筑後	三(御)原		観世音寺水田8町	観世音寺資財帳
	生葉	大石	観世音寺封戸50烟	〃
	〃	山北	観世音寺封戸50烟	〃
	〃		観世音寺水田4町	〃
	〃		(大宰府厨戸)	
	竹野		観世音寺水田4町	観世音寺資財帳
	御井		観世音寺薗加歌野	〃

主船司と怡土城の設置された怡土郡、客館の所在地であった那珂郡、香椎廟および厨戸の設置された糟屋郡、大化前代以来海上交通神として朝廷の厚い崇崇を受け、大化後は宗像神を斎く神郡とされていた宗像郡の四郡にのみ、主厨司の厨戸ではないかと考えられる海部が分布しており、観世音寺所領はこの四郡外に広く設定されているのである。さらに沿部について付言すれば、その立地の上から当然漁民の分布していたと思われる志麻郡や遠賀郡は、観世音寺の焼塩山が設置されたために、大宰府の厨戸として奉仕する海部の設置を見なかったのではないかと考えられる。

これら大宰府関連施設の設置された四郡は大化前代以来史上に登場しているが、中でも糟屋郡の性格を強く反映しているのは屯倉としての前身であろう。周知の通り糟屋屯倉の初見は『

継体廿二年十二月紀』であり、朝廷軍による筑紫君磐井の制圧後その子である葛子によって献上されたと伝えられている。その後関係史料は見えないが、京都妙心寺に伝わる鐘銘(注28)に「糟屋郡造舂米連廣国」とあり、この氏名は舂米貢上と関連するものと思われ、同郡内における阿曇連の存在と合わせるとやはり糟屋屯倉に関係あるものと考えられよう。大宰府設置に伴って主厨司配下の厨戸が設置されたのは、大化前代以来糟屋郡の有していた朝廷の御厨的屯倉の性格を引き継いだためではなかろうか。

次に筑後国では筑後川上流豊後国と境を接する生葉郡において大宰府施設と観世音寺領が重複して設置されているのが注目される。この地方は大宰府貢上御贄の中で河川産物である年魚製品を担当していたが、『景行紀』や『風土記逸文』からすると御贄貢納の伝統は大化前代に遡る可能性があり、律令時代にはさらに大宰府や観世音寺の支配を強く受けるようになったと考えられる。しかし平安後期になると観世音寺の支配力は後退したようであり、生葉郡内には「大府贄人」と称する有力者が抬頭しており、これらの勢力を背景とした松永法師は筑後川を隔てて隣接する筑前国上座郡内の把伎野桑垣をめぐって観世音寺と相論を起しその所領の拡大を図っている(注29)。筑後川の流路変化に乗じたその企図は退けられたが、これらの点から見て生葉郡が大宰府の御厨として長期間特異な地位を占めていたことが知られるのである。

（注）

注1　平野邦雄「大宰府の徴税機構」（『律令国家と貴族社会』所収）

注2　鏡山猛『大宰府遺跡』ニュー・サイエンス社（昭・54）

　　倉住靖彦『大宰府』教育社歴史新書（昭・54）

　　藤井　功
　　亀井明徳『西都大宰府』NHKブックス（昭・52）

注3　現福岡市西区大字周船寺

注4　竹内理三「大宰府政所考」（『史淵』71輯）

注5　勝浦令子「律令制下贄貢納の変遷」（『日本歴史』第352号）

注6　『萬葉集』巻五「梅花歌卅二首」の中に「神司荒氏稲布」の作が見える（832）。

注7　『延喜民部式』大宰府仕丁条

注8　前掲書

注9　平野邦雄　前掲書

注10　拙稿「大化前代の豊後」（『國史論叢』第二集）

注11　『平安遺文』第二巻

注12　『大宰府史跡出土木簡概報』㈠（昭・51）

注13　『律令』（日本思想大系3）68頁頭注18

注14　前掲書

注15　前掲書

注16　前述の『三代實録』貞観十五年十二月十七日条、および『類聚三代格』承和七年九月廿三日太政官

謹奏の「主船」の部分による。

注17　『大宰府史跡出土木簡概報』(一)

注18　前掲書

注19　日野尚志「筑前国那珂・席田・粕屋・御笠四郡における条里について」（『佐賀大学教育学部研究論文集』第24集）1976

注20　『福岡縣史資料』第7輯181頁

注21　『多々良込田遺跡・Ⅱ』『福岡市埋蔵文化財調査報告書第53集』1980

注22　池邊　彌『和名類聚抄郷名考證』所収

注23　栗田　寛『神祇志料』では「八十戸」誤のりとしている。

注24　狩野　久「御食国と膳氏」（『古代の日本』5近畿）所収

注25　邨岡良弼『日本地理志料』

注26　前掲書

注27　藤井　功・亀井明徳　前掲書　84頁

注28　狩谷掖斎『古京遺文』

注29　『平安遺文』○1275　筑前国観世音寺三綱解案　○1277　大宰府公文所勘注案

（追記）

本稿を草すに当りまして報告書・文献の入手につき、三島　格、木下尚子の両氏に御足労をおかけしました。ここに記してお礼申し上げます。

（1982．2．13）

2　九州出土の皇朝十二銭

高　倉　洋　彰

九州における皇朝十二銭の出土は、第8表にまとめたように、その点数・遺跡数ともにまだ少ない。しかし、それらの発見あるいは報告された時期が1975年以降に集中しているように、今後の急増が予測されることから、現段階の資料を簡単に整理しておくことにする(1)。

I　出土皇朝十二銭の種類

1982年1月現在、九州の皇朝十二銭は筑前・筑後・肥後三国に分布する16遺跡から出土し、53枚以上を数える。各遺跡からの出土点数・種類は表に示している。

表で明らかなように、九州ではまだ皇朝十二銭の中の九種（和同開珎・万年通宝・神功開宝・隆平永宝・富寿神宝・承和昌宝・貞観永宝・延喜通宝・乾元大宝）の出土にとどまり、長年大宝・饒益神宝・寛平大宝の三種を欠く。その反面、福岡県太宰府市宝満山上宮遺跡からは出土九種中の貞観永宝を除いた八種が集中して出土している。

いまだ出土点数は少ないが、現状でもおおよその出土傾向をうかがうことはできる。すなわち三種が未出土であるように、出土銅銭の種類に片寄りのみられることに気付く。ことに和同開珎から富寿神宝にいたる五種が出土遺跡・点数ともに多くを占めている。その内訳は、点数不明の例を1枚と仮定すれば、和同開珎4遺跡9枚、万年通宝4遺跡5枚、神功開宝4遺跡8枚、隆平永宝3遺跡5枚、富寿神宝5遺跡5枚となる。ところで筑紫野市京町の結浦(むすびがうら)墳墓では蔵骨器の中に7枚の銅銭が埋納されていたが、和同開珎2枚を除いて他の5枚は廃棄されたため種別が不明である。また福岡県筑手郡若宮町・宮田町の汐井掛5号墳墓からは蔵骨器にともなって墓坑内から19枚の銅銭が検出されている。和同開珎5・万年通宝2・神功開宝5の計12枚を除いた残りの7枚は、銅銹や銹着のためその中の1枚が「□□□宝」であることを知りうるにとどまる。この二遺構の不明の銅銭は伴出の例からみて和同開珎・万年通宝・神功開宝のいずれかの可能性が強い。とすれば、遺跡数では富寿神宝がもっとも多いが、出土点数ではその約65%を占める和同開珎・万年通宝・神功開宝に集中しているといえる。ともあれ、こうした出土の点数・遺跡数の流れをみていくと、次第に銅銭が使用されなくなっていく様相を示唆するかのようである。

しかしながら最後の皇朝十二銭である乾元大宝が太宰府市に限られているとはいえ3遺跡から出土し、十一番目にあたる延喜通宝が福岡市海の中道遺跡で3枚も出土している。このことは富寿神宝までの五種の銅銭の多くが墳墓出土であることと関連すると思われる。九州では古代・中世の墳墓に銅銭を埋納した例はほとんど知られておらず(2)、仮りに過半数を占める墳墓出土例を除けば、和同開珎から乾元大宝にいたるまで出土点数・遺跡数にそれほどの開きが

みられなくなる。表をそのままに読めば、皇朝十二銭が次第に使用されなくなっていく様相がうかがえ、墳墓出土例を除けば出土傾向の時期的な相違を見出せなくなる。この、いわば相反する二つの傾向が表から読みとれる点に資料の不足が如実に示されており、出土の傾向を簡単に論じえない状況をもたらしている。

九州では皇朝十二銭中の九種が出土しているが、ちなみに長門（後には周防）に鋳銭司の置かれた山口県下では和同開珎・神功開宝・隆平永宝・富寿神宝・承和昌宝・長年大宝・貞観永宝の出土が知られている[3]。出土銅銭の種類は九州のそれとほぼ一致しており、九州で未出土の長年大宝が山口市大畠で出土している点、未出土の三種の銅銭の今後の九州での出土が期待される。

Ⅱ　出土遺構の性格

九州における皇朝十二銭の出土地は福岡・熊本両県（筑前・筑後・肥後三国）に限られている。参考として挙げた皇朝十二銭の可能性の強い種別不明の銅銭を出土した大分県（豊前）中津市の相原墳墓を加えても、九州の北半、なかんずく古代九州の主都大宰府とその周辺に集中している。さらには太宰府市・筑紫野市・久留米市・大牟田市・熊本県玉名郡菊水町・菊池郡西合志村・熊本市でそれぞれ出土が知られていることに、点的ながらも筑前～肥後の古代官道に沿った一連の分布の流れを認めることができる。

出土遺構の性格としては先にも述べたように墳墓の例が目につく。

筑紫野市結浦から隣接する太宰府市君畑にかけての一帯は古代の墳墓地帯で、その火葬墓の一基から和同開珎が検出されている[4]。和同開珎を含む7枚の銅銭を埋納した蔵骨器は有蓋の把手付須恵器壺でそれ自体珍らしい形態をなすが、偶然の機会に発見されたため外部施設の有無などは不明である。銅銭が壺内に納められていたことは、蔵骨器の内底に銅銹痕を残すことから疑いない。7枚中2枚は和同開珎であるが、他の5枚は廃棄され現存しない。久留米市杉谷墳墓例も、方三尺ばかりの石囲いの中に納められた須恵器坩の中から和同開珎1枚が出土したというから、同様に蔵骨器内への埋納の例であろう。

これに対し汐井掛5号墳墓では蔵骨器を埋納するために掘られた墓坑内、すなわち蔵骨器の外部から銅銭が検出されている。銅銭は3枚ないし5枚を一組として5カ所に置かれていた。それらは蔵骨器の直下と、それを中心としてほぼ東西南北方向に十字形をなすように配されており、単なる副葬・埋納以上の意識の存在をうかがいうる。相原墳墓では石棺様施設の中に蔵骨器が置かれ、その内部から金環1、器の下から銅銭1枚が出土したといわれる。やはり蔵骨器外への埋納の例である。

大牟田市大間山墳墓・熊本県玉名郡日置氏墳墓・菊池郡髙木原墳墓の各例の出土状況は明らかでない。

第8表　皇朝十二銭出土地名表

	出土点数	和同開珎	万年通宝	神功開宝	隆平永宝	富寿神宝	承和昌宝	長年大宝	饒益神宝	貞観永宝	寛平大宝	延喜通宝	乾元大宝	備考
1　福岡県太宰府市大字観世音寺字学業204	1												1	
2　〃　〃　字大林325	1					1								
3　〃　大字太宰府字三条	1			1										
4　〃　〃　字泉水2743—1	1												1	
5　〃　大字北谷字宝満　宝満山上宮祭祀遺跡	?	○	○	○	○	○	○					○	○	
6　〃　筑紫野市原町結浦	7	2												6枚は不明
7　〃　福岡市南区三宅字コクフ1170～2　三宅廃寺跡	1					1								
8　〃　福岡市東区　海の中道（塩屋）　海の中道遺跡	5		1							1		3		
9　〃　粕屋郡久山町中久原2515	1			1										
10　〃　宗像郡大島村沖ノ島　沖ノ島1号祭祀遺跡	1					1								
11　〃　糟手郡若宮町・宮田町　汐井掛5号墳墓	19	5	2	5										7枚は錆のため不明（内一枚は「□□□宝」）
12　〃　久留米市高良内町杉谷	1	1												
13　〃　大牟田市　大牟田山墳墓	1					1								
14　熊本県玉名郡菊水町瀬川字奥原　日置氏墳墓	○		○											
15　〃　菊池郡西合志村高木原	○				○									
16　〃　熊本市健軍町	3				3									
参　大分県中津市相原　相原墳墓	1													種別不明
各銅銭の初鋳年		和銅元年	天平宝字4年	天平神護元年	延暦15年	弘仁9年	承和2年	嘉祥元年	貞観元年	貞観12年	寛平2年	延喜7年	天徳2年	
		708	760	765	796	818	836	848	859	870	890	907	958	

A　九州歴史資料館編『大宰府史跡一昭和56年度発掘調査概報一』1982

B　前川威洋・新原正典『筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡（2）』（福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告3）1976

C　小田富士雄「宝満山遺跡発掘調査概報」（『筑前国宝満山信仰史の研究』）1980

D　渡辺正気「和同銭副葬の一蔵骨器」（九州考古学1）1957

E　二宮忠司編『三宅廃寺』（福岡市埋蔵文化財調査報告書50）1979

F　『東京国立博物館収蔵品目録』

G　第三次沖ノ島学術調査隊編『宗像沖ノ島』1979

H　上野精志「汐井掛墳墓の調査」（九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XX）1978

2　九州出土の皇朝十二銭

出土遺構	共伴遺物	参考文献	保管	発見年
溝（SD205付近）	土師器・青磁・白磁など	文献A	九州歴史資料館	1981年
溝（SD2012）	土師器・青磁・白磁・石玉帯・火杖など	文献A	九州歴史資料館	1981年
表採			個人蔵	
溝（御笠川南条坊遺跡第3次調査下層SD306溝内上層）	土師器・須恵器・青磁・緑釉・瓦・石鍋・鉄片など	文献B	福岡県教委	1973年
祭祀遺構	土師器・須恵器・奈良三彩など	文献C	散佚	
火葬墓（蔵骨器）		文献D	西正寺	1946〜47年頃
遺物包含層	土師器・須恵器・瓦類	文献E	福岡市教委	1978年
遺物包含層	開元通宝・土師器・黒色土器・越州青磁・白磁・石鍋・鉄器など	未報告	福岡市教委	1981年
	五銖銭・開元通宝・乾元重宝・皇宋通宝・永楽通宝・寛永通宝など93462点	文献F	東京国立博物館	
祭祀遺構	土師器・須恵器・奈良三彩・八稜鏡・金銅製品・滑石製品など	文献G	宗像大社神宝館	1970年
火葬墓（蔵骨器埋納墓壙）		文献H	福岡県教委	1975年
火葬墓（小石室）	須恵器坩（蔵骨器？）	文献I	不明	1852年以前
火葬墓		文献H		
火葬墓（蔵骨器）	日置氏墓誌銅板	文献J		1704年
火葬墓（蔵骨器）		文献K		
		文献F	東京国立博物館	
火葬墓（石棺様施設中に蔵骨器）	金環1	文献L		1942年頃以前

I　矢野一貞『帰厚遺物縮図』1852（『西谷火葬墓』1971 に引用）

J　松本健郎「<日置氏墳墓>考」（『鏡山猛先生古稀記念古文化論巧』）　1980

K　坂本経堯「墓誌銅板を副葬した玉名郡人日置氏墳墓考」（『肥後上代文化の研究』）1979

L　小田富士雄「大分県の火葬墓」（『白潟遺跡』）　1958

祭祀遺構からの出土は2例知られている。

宝満山上宮祭祀遺跡からは九州出土の皇朝十二銭九種中の八種が出土している。宝満山は太宰府市の北東に位置する霊山で、企山がその山麓に鎮座する竈門神社の神体となっている。竈門神社の記録上の初見は延暦22年（803）のことであるが、出土遺物などによってその鎮座はさらに古くさかのぼって考えられる[5]。海抜868 mをはかる山頂は切り立った巨岩からなる。その巨岩に囲まれたわずかな平坦部および岩壁上方の岩の間などに遺構・遺物包含層があり、中世にいたるまでの遺物が調査・採集されている。皇朝十二銭は岩壁上方から出土したらしく奈良三彩小壺などの奈良時代の遺物も出土している。しかし祭祀が長期にわたって繰り返されている上に、遺物は採集によっており、出土の詳細は明らかでない。また銅銭のほとんどは散逸している。しかし多種類の皇朝十二銭の出土は大いに注目され、さらに宋銭・明銭などの中国銭も採集されており、皇朝十二銭以来の連綿とした銭貨の奉納を知りうる。

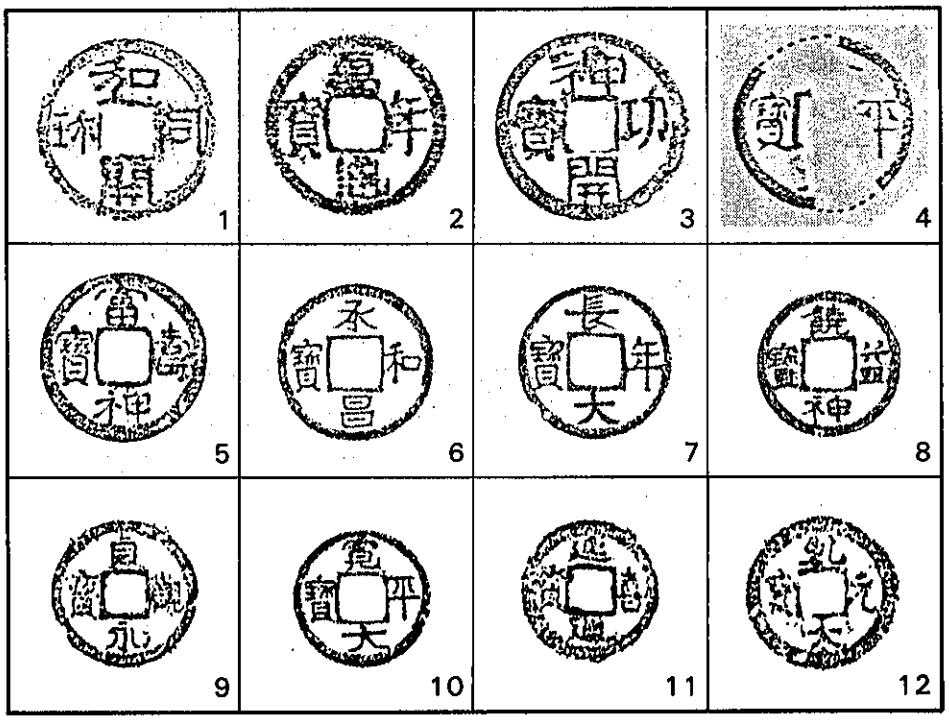
玄海の孤島沖ノ島の祭祀遺構については海の正倉院として今日広く知られている。その祭祀遺構は時期的に形態を変遷させているが、1号祭祀遺構はその最終形態の露天祭祀の代表例である。そこから祭祀としてつくられた大型の土器や滑石製形代に混在して奈良三彩小壺や富寿神宝1枚が検出されている。

このように宝満山や沖ノ島の祭祀遺構では皇朝十二銭は奉納品の一種となっている。

皇朝十二銭は寺院跡からの出土が多いといわれる[6]。しかし九州ではその例は少ない。福岡市三宅廃寺遺跡では寺跡は発掘調査によっても遺構的にはほとんど把握されていないが、出土土器に「造寺」「寺」「佛」「堂」などの文字が墨書・ヘラ書きされた例があり、寺院跡と判断される。その包含層中から富寿神宝1枚が検出されている。太宰府市大字観世音寺字学業の溝から乾元大宝が1枚出土している。この溝は観世音寺と学校院の境界付近に位置するが、出土遺物などからみて観世音寺に属する可能性が強いと思われる。

大宰府からの出土が多いことは古代九州の主都であったことを考慮すれば当然といえる。これまで紹介した以外にも、神功開宝（大字太宰府字三条）、富寿神宝（大字観世音寺字大楠）乾元大宝（大字太宰府字泉水）が出土している。三条例には採集資料のため出土遺構の性格は明らかでない。大楠・泉水例はいずれも溝中からの出土で、ことに大楠例は大宰府政庁域[7]の前面張出し部の西を限ると推定される大溝付近から出土しており、官衙地区（遺構）からの出土例とみなすことができよう。万年通宝1・貞観永宝1・延喜通宝3の計5枚を出土した福岡市海の中道遺跡は出土遺物の検討によって考察されるように、大宰府関連の施設の可能性があり、そうであれば一種の官衙遺構とすることができよう。

寺跡・官衙地区（遺構）とした出土例は明瞭な遺構をともなったり、埋納・奉納のような明確な意識の存在を推定しうる例を欠いている。その出土も1枚の例が多く、換言すれば落し物的な出土状態を示しており、その背景としての銅銭の流通を考えさせる余地が生じてくる。し



2（万年通宝）・9（貞観永宝）・11（延喜通宝）…福岡市海の中道
3（神功開宝）・4（隆平永宝）…太宰府町満山、5（富寿神宝）…太宰府町大楠
1（和同開珎）…筑紫野市結浦、12（乾元大宝）…太宰府町学業
参考：6（承和昌宝）・7（長年大宝）・8（饒益神宝）・10（寛平大宝）…奈良県平城宮跡

第77図　九州出土の皇朝十二銭各種

かしそれにしても海の中道遺跡からの5枚の出土はいささか多すぎるし、万年通宝と延喜通宝が単純に共伴するとも思えない。遺跡の全容が明らかになればさらに銅銭の出土が予測されよう。こうしたまとまった点数の出土は宝満宮上宮祭祀遺跡・結浦墳墓・汐井掛5号墳墓で知られているが、海の中道遺跡が祭祀遺跡・墳墓遺跡である可能性はまったくないといっても過言ではない。そこからのまとまっての出土は、一応官衙的な性格の場所からと考えておくが、局部的に偶然ではない何か意図的な行為の存在した空間を想定すべきかもしれない。

ともあれ述べてきたように、皇朝十二銭を出土する遺構の性格は、墳墓・祭祀遺構・寺跡・官衙地区（遺構）のおおよそ4種類に大別することはできよう。

Ⅲ　製作地の問題

九州で出土する皇朝十二銭の製作地がいずこであるのか、興味のある問題である。それについては次にあげる2点の史料があり、検討を加えておきたい。

（A）　和銅三年正月丙寅、大宰府献銅銭（『続日本紀』）

（B）　霊亀二年五月丙申、勅、大宰府佰姓家有蔵白鑞、先加禁断、然不遵奉、隠蔵売買、是以鋳銭悪党、多肆奸詐、連及之徒、陥罪不少、宜厳加禁制、無更使然、若有白鑞、捜求納於官司、（『続日本紀』）

（A）は和銅3年（710）に「大宰府が銅銭を献じた」ことの報告で、鋳銭を直接示すものではない。しかし和同開珎の鋳造開始後の間もない時期に銅銭を献ずることのできた理由はなんであろうか。八木充氏は天武12年（683）に「詔曰、自今以後、必用銅銭、莫用銀銭」（『日本書紀』）とあり7世紀後半に銭貨の存在を確認されることから、大宰府あるいは同年の播磨国の銅銭の貢献を和銅元年に始まる銭貨の官鋳の結果用いられなくなった旧銭貨の回収にともなう銅銭の貢献と解されている[8]。氏に従えば、（A）は大宰府における銅銭の鋳造を前定とした記載ではなくなくなるが、旧銭貨の回収にともなう貢献であれば大宰府では和同開珎の鋳造以前から相当に銭貨が流通していたことになる。

これに対し、栄原永遠男氏は、和銅以前の大宰府や播磨国で私鋳銅銭が流通過程における交換手段として使用されていたとは考え難いとされる。そこで和同開珎の鋳造開始の翌和銅2年8月に銀銭が廃止され銅銭への一本化がはかられることから、銀銭に見あうだけの大量の銅銭が必要となり、大宰府や播磨国などにも銅銭の鋳造を担当させたと解釈されている[9]。

（B）には、霊亀2年（716）に、大宰府の百姓の中に家に錫と鉛の合金と思われる白鑞を蔵する者が居るのでその売買に禁制を加えたこと、しかしその禁制は守られず「鋳銭悪党」が多くの奸詐をほしいままにしていること、したがって禁制をさらに厳重にもし白鑞を蔵するものがあれば捜索して官司に納めさせること、が記載されている。栄原氏は、大宰府で採銅が行なわれていた事実を踏まえられ、この記載から「鋳銭悪党」といわれる鋳銅技術者の居たことが知られるとして、この史料からも大宰府における鋳銭の可能性を指摘されている[9]。しかし（B）には大宰府に銅銭の鋳造に必須の白鑞の存在したことは記されているが、その売買の対象となった「鋳銭悪党」が大宰府管内に居たかどうかは明らかでない。もっとも観世音寺・妙心寺の銅鐘の鋳造で明白なように大宰府には優秀な鋳造技術者が居り、文脈からみても「鋳銭悪党」の大宰府管内居住の可能性は強いが、それは「鋳銭悪党」による贋せ金造りを意味しても官鋳を意味するとは解し難い。しかし贋せ金造りが横行したのであれば、その背景に相当に銅銭が流通したであろうことは推測しうる。

（A）・（B）の史料からは大宰府における案外な銅銭の流通が想定される。しかしその鋳造については可能性を否定できないといった程度で、その有無の判断は困難である。そうであれば出土皇朝十二銭のそれぞれから製作地を復原するしか方法はない。ところが出土品の中で現存しかつまた点検の可能な例は少数であり、散在しているため実物を同時に比較対照しうる機会を得難い。試みに拓影を用いて和同開珎・万年通宝・富寿神宝を比較してみたが、銅銭のような微妙な遺物の拓影による比較には限界があり、実物によって細部の検討を試みない限り、成果は得られない。幸いというか、九州における皇朝十二銭の研究はまだ資料の集積の段階にあるから、今後の研究においてはこの点を念頭に置いて製作地の検討を心掛ける必要があろう。

註

(1) 表の作成にあたっては

栄原永遠男「日本古代銭貨出土一覧表および附表」（続日本紀研究 169）1973

同　　「日本古代銭貨出土一覧表（その2）」（続日本紀研究 178）1975

小野真一・秋本真澄『駿河伏見古墳群』（沼津考古学研究所研究報告4）1971

を参考とし、小田富士雄・島津義昭・副島邦弘・西健一郎・山崎純男・横田義章氏をはじめ多くの方々に貴重な御教示を得た。

(2) 渋谷忠章・上野精志「日本各地の墳墓—九州—」（『仏教考古学講座』7）1975

(3) 山口県下には下関市長府・山口市大内一帯に鋳銭司の所在が知られており、両地をはじめ萩市見島ジーコンボ、柳井市安行、同市大蔵で出土例が知られている。

(4) 奈良国立博物館監修『天平の地宝』1961

によれば、1955年3月に福岡県太宰府町片ノ谷君ケ畑で有翼骨壺から和同開珎1枚が出土したとされている。しかし図版に示された蔵骨器は明らかに結浦墳墓出土のそれであり、所有者も一致している。同一であろう。

(5) 小田富士雄「古代に於ける筑前竈門山寺の活動」（史迹と美術31—10）1961

(6) 註(1)小野・秋本文献。

(7) 石松好雄「大宰府政庁の庁域について」（九州歴史資料館研究論集3）1977

(8) 八木充「周防鋳銭司」（『周防鋳銭司跡』）1978

(9) 栄原永遠男「鋳銭司の変遷とその立地」（『河内国府と国分寺址の検討』古代を考える10）1977

3　出土陶磁器についての二・三の問題

森田　勉

海の中道遺跡では、多数の緑釉陶器、灰釉陶器、中国陶磁器が出土した。一遺跡からまとまって以上のような陶磁器を出土する遺跡は官衙跡か寺院跡が多い。そこで、ここでは出土した中国陶磁器の特徴とそれからみた遺跡の性格および土師質緑釉陶器について若干の考察を試みることにする。

Ⅰ　中国陶磁器からみた若干の問題

1　中国陶磁の編年的問題

越州窯系青磁が我国へ将来されるのは、伝世品を除くと、8世紀頃からである。しかし貿易品として一般化し始めるのは8世紀末頃からで、量的に最も拡大するのは9世紀後半から10世紀代にかけてである。特殊なものを除くと越磁には精・粗の2種があり、双方とも8世紀末頃には我国へ輸入されている。ところが、精製品である椀Ⅰ類、杯、皿のうち椀Ⅰ－2類と杯、皿が量的に多く出土するようになるのは、もっとも多く我国へ越磁がもたらされた時期（9世紀後半から10世紀代）と合致する。このような傾向は大宰府史跡の発掘調査、特に観世音寺およびその周辺地域の発掘調査によって確認されている事実である。

海の中道遺跡でも、各次数によって越磁の量および質に変化が認められる。1次調査では出土量そのものが少なく、また椀Ⅰ－1類に限定されるといってよい程である。これは一つに8世紀中頃から9世紀初頭頃に遺跡の中心があることに起因していると推察される。2次調査では発掘面積が狭いことから出土量そのものは少ないが、ここでも椀Ⅰ－1類が多くを占め、椀Ⅰ－2類が少なく、また、粗製品である椀Ⅱ類の量が増加してくる。3次調査地域は10世紀代を中心とする遺構群であることから、前述したように椀Ⅰ－2類、杯、皿が圧倒的に多く、椀Ⅱ類がこれに次ぎ、椀Ⅰ－1類の割合いが少なくなってくる。しかし、10世紀後半から11世紀前半代にかけて数は少ないが出土する「太平戊寅」銘で代表されるような撥高台のタイプは出土していない。また、長沙窯系青磁として報告した青磁褐彩はこの3次調査によって出土した。この種の陶磁の出土例は少なく即断はできないが、大宰府史跡の発掘調査例からみると10世紀前後頃に出現し、10世紀代に中心があるように思われる。唐・五代の白磁の出土量は少なく、量的にどのように変化するのか明らかでないが、9世紀初め頃には将来され、9世紀後半頃から10世紀代にかけて多く出土する傾向にある。

以上を要約すると、

8世紀後半代に少数ではあるが、越磁椀Ⅰ－1類やⅡ類が将来され始め、次の9世紀中頃までに椀Ⅰ－1類、Ⅰ－2類、Ⅱ類、杯、皿それに唐・五代の白磁椀が揃う。しかし、椀Ⅰ－2類は

末だⅠ－1類を凌駕するにいたらない。最盛期である9世紀後半から10世紀代にかけて、3次調査出土例のように、量的にもっとも多く、かつⅠ－2類がその主役の座を占めるようになる。

2　出土陶磁器からみた海の中道遺跡の性格

越磁や唐・五代の白磁それに緑釉陶器が出土する遺跡の性格は官衙関係か寺院であることが多いという指摘がある。しかし、最近の調査例からみると必ずしも官衙関係、寺院だけに限定されて使用されてはいないようである。その一例として、「下中杖遺跡」(註1)を挙げることができる。

下中杖遺跡は佐賀県神埼郡三田町大字豆田字下中杖にある。この地は肥沃な沖積平野である佐賀平野の東部にあり、有明海からは筑後川を経由した水運に恵まれている。この遺跡で検出した9世紀代の井戸ＳＥ201、202、207から多数の越磁、唐・五代の白磁それに緑釉陶器が発見されている。検出した建物の規模や配置から官衙関係とするよりも荘園関係の施設である可能性を調査者は指摘している。そしてさらに荘園とすれば皇室（院）領荘園である「神埼荘」に相当する地域であるという。

しかし、「下中杖遺跡」は大宰府政庁から遠くはなれた地域に立地した遺跡であり、海の中道遺跡と同一視して考えることには若干の問題を含んでいることは筆者も承知の上である。

公式的には我国で唯一の門戸である大宰府鴻臚館を経由して輸入される中国陶磁も、下中杖遺跡のように有明海を経由した私貿易によって将来されていた可能性も否定できず、さらに、有力豪族による中国陶磁の消費が推察されることは、海の中道遺跡から出土する多数の越磁によってこの遺跡の性格を「公」的であるとは限定できない。しかし、権力が集中した大宰府の近くに立地している以上、常識的には「公」的性格を有する遺跡として把握した方が無理がないように思われる。

Ⅱ　緑釉陶器と土師器

緑釉陶器には須恵質と土師質とがある。それらは中国陶磁特に越磁の強い影響がみられる。特に須恵質の緑釉陶器の場合越州窯系青磁椀、杯、皿に酷似した形を有している。ところが土師質緑釉のうち第48図2のような場合中国陶磁の影響というよりも土師器椀の形態に通じる。2は体部中位で屈曲し、そのまま口縁部を丸く収め、若干外反する高台を有している。このような形態は大宰府史跡ＳＫ678段階(註2)の土師器および黒色土器Ａ類（内面のみを燻した土器）に相似する。また、海の中道遺跡3次調査出土品のなかにＳＫ678段階の次のＳＫ674段階・ＳＫ1083段階でみられる体部を内弯させ口縁部を外反する椀の一群がある。ここでは出土していないが、これと酷似する土師質緑釉椀もこれらの土師器と共伴して出土する例が多い。

また2のように体部内面中位以下をヘラミガキする土師器もＳＫ678段階から出現し、ＳＫ674、1083段階にかけて製作されている。

このような事実から、土師質緑釉陶器のある一群は、大宰府周辺地域で生産されていた可能性が強く指摘でき、また緑釉陶器の生産に土師器生産工人の一部がかかわっていたと推察できる。

註

(1)七田忠昭編『下中杖遺跡』佐賀県文化財調査報告書第54集　1980

(2)横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」『九州歴史資料館研究論集2』1976

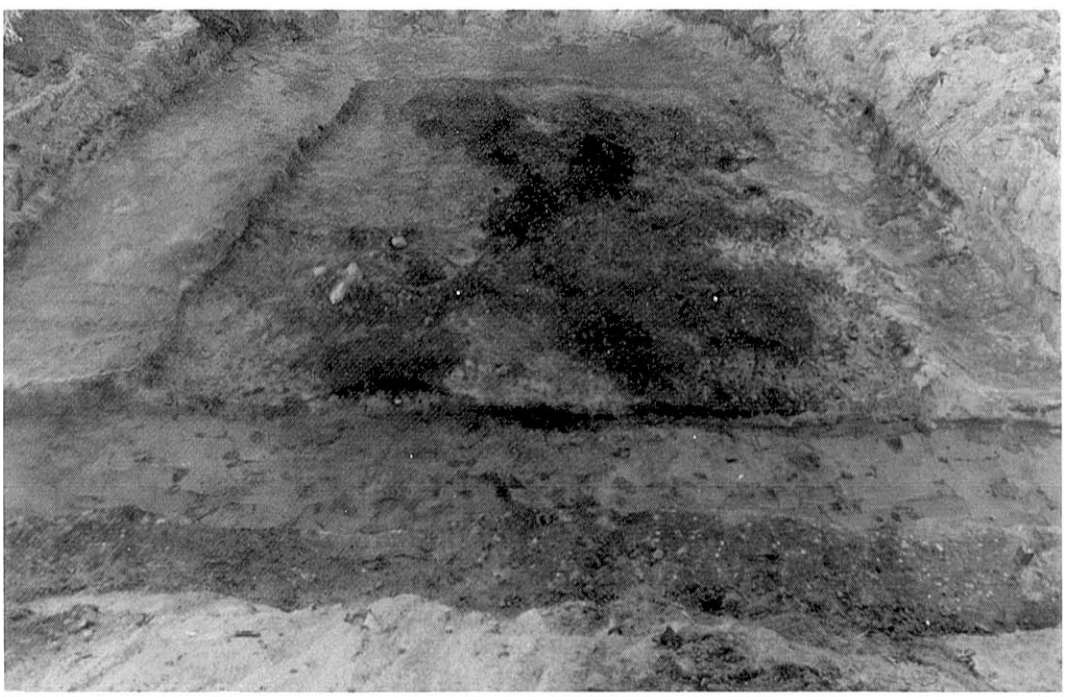
同上「大宰府出土の輸入中国陶磁器について『九州歴史資料館研究論集4』1978

1976年論文で発表した土師器の年代観を1978年論文で若干修正している。

図　版

PLATES

(1)　遺跡の立地と第 2 次調査区

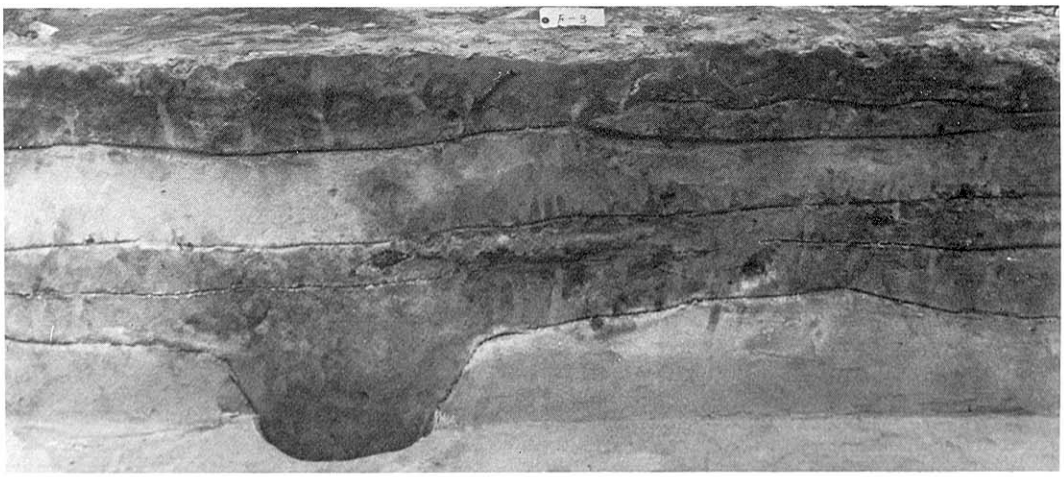


(2)　第 2 次調査　第 4 号竪穴住居址

図版 2

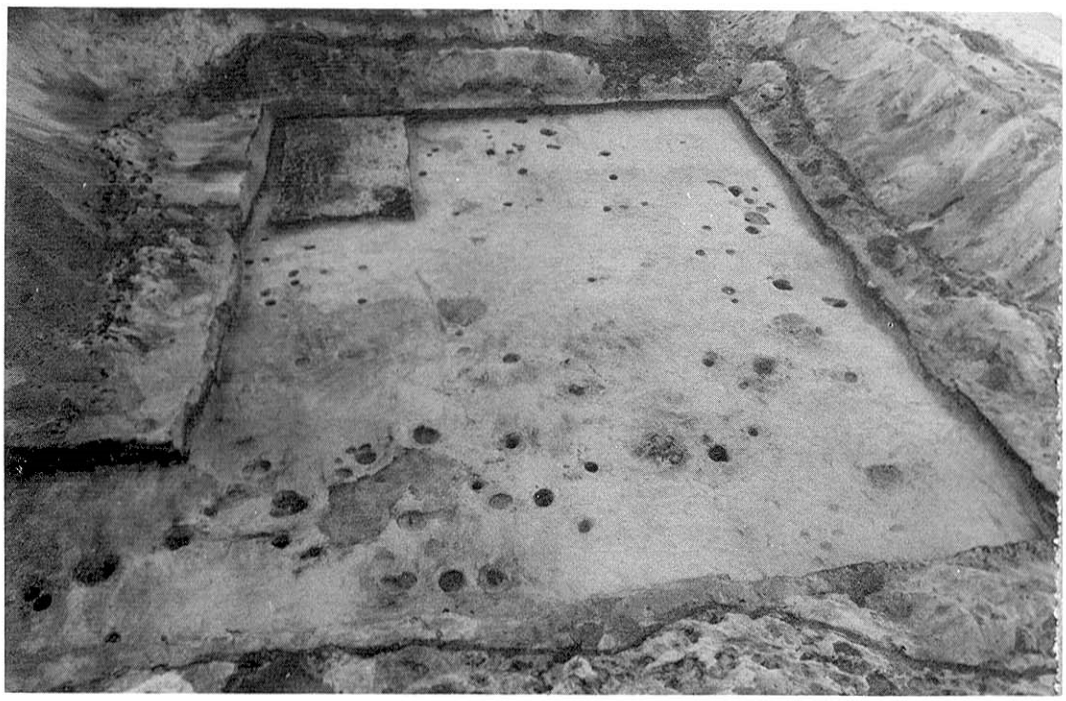
(1)　第２次調査　製塩土器集積状況

(2)　第３次調査　鉄製紡錘車出土状況



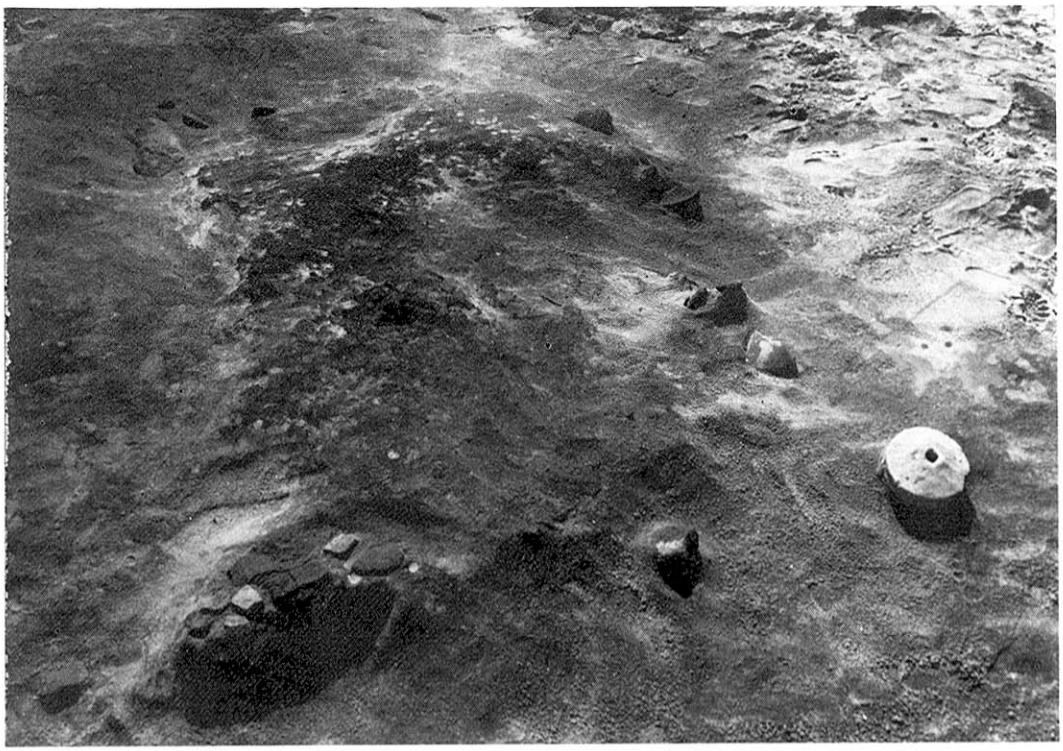
第 2 次調査　土層断面

図版 4

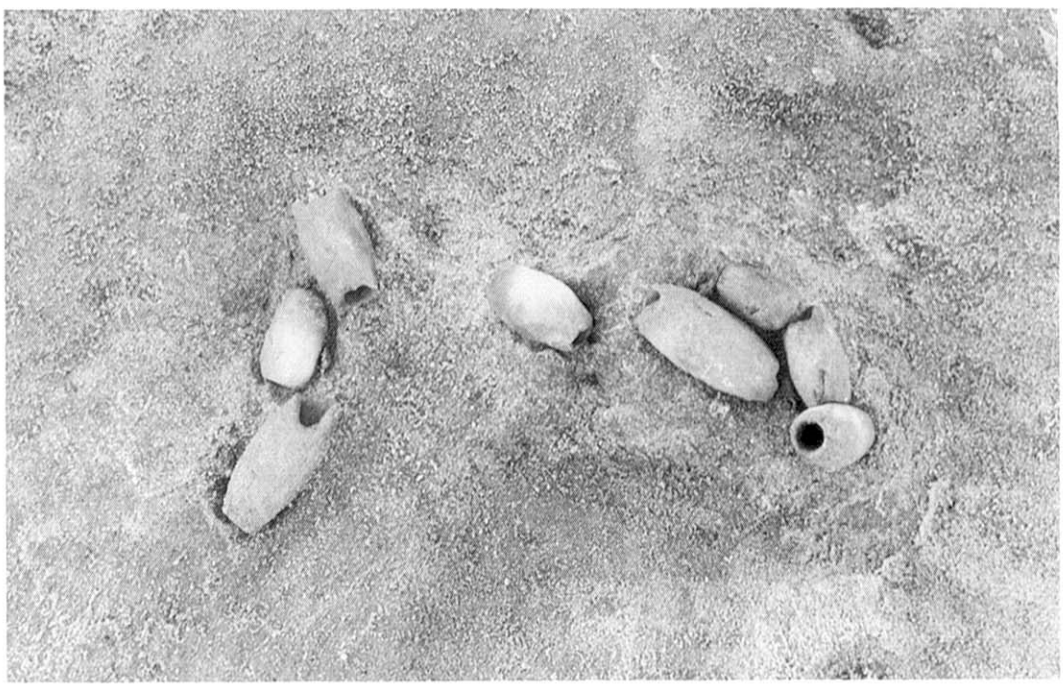


(1)　第 3 次調査区全景

(2)　第 3 次調査　土層断面

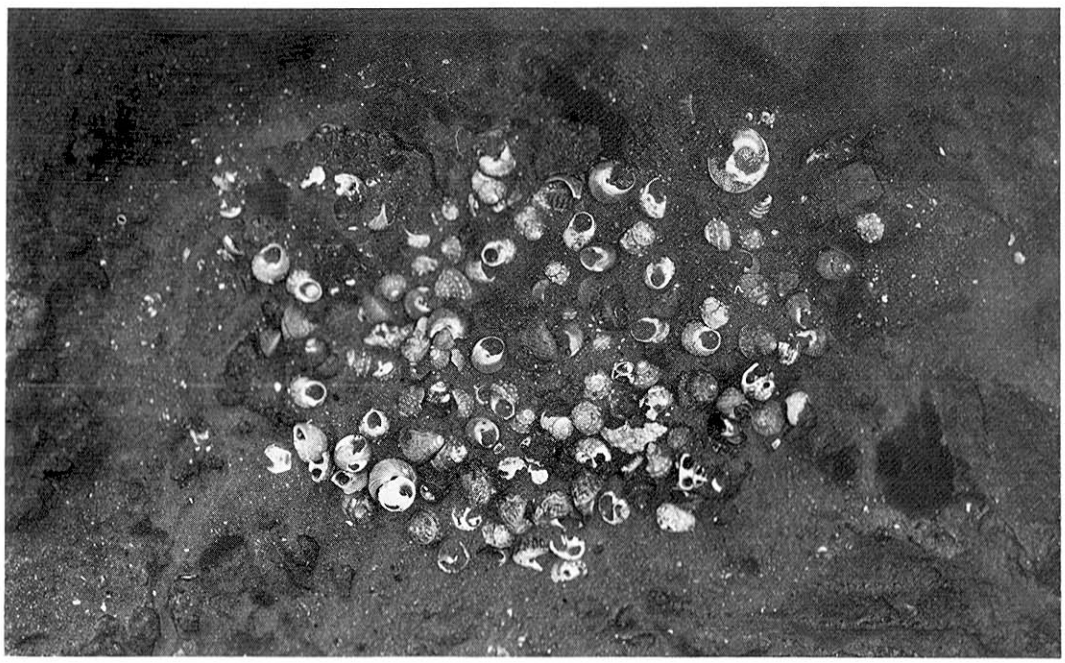


(1)　第３次調査　遺物出土状況

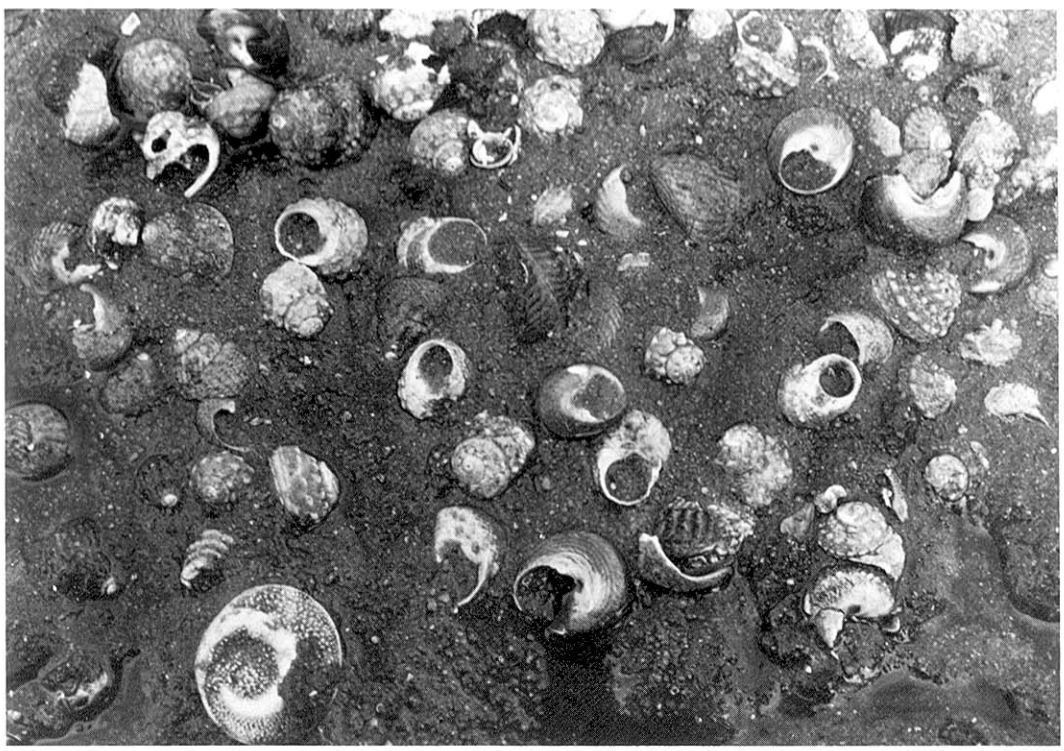


(2)　第３次調査　土錘出土状況

図版 6



(1)　貝塚貝類出土状況

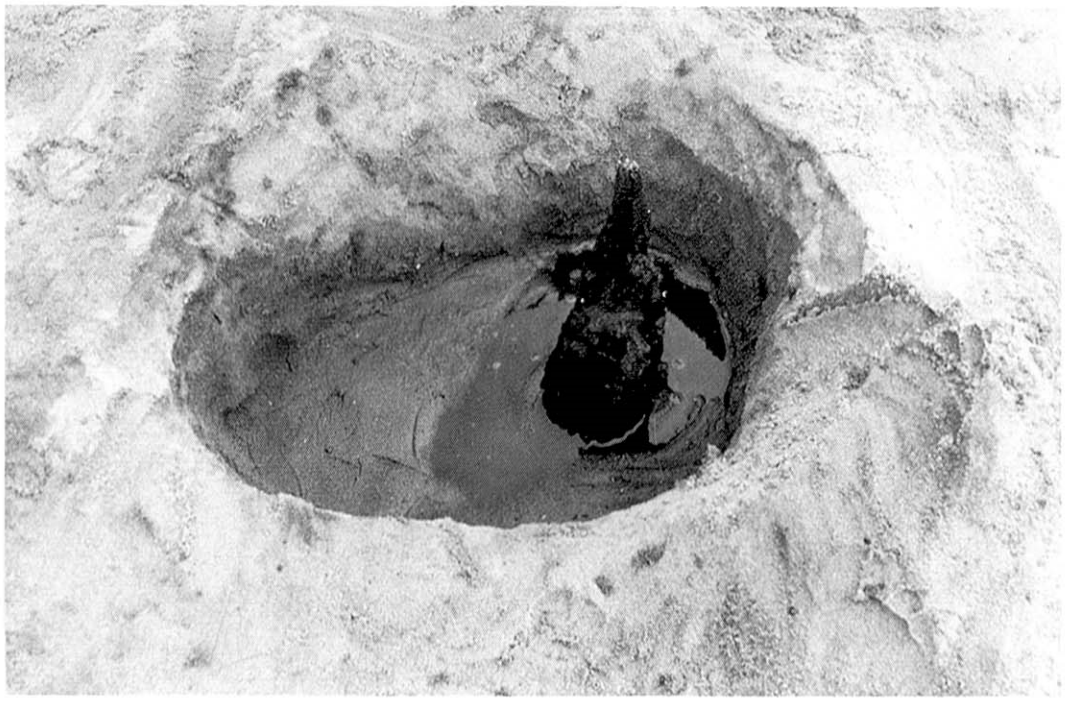


(2)　貝塚貝類出土状況

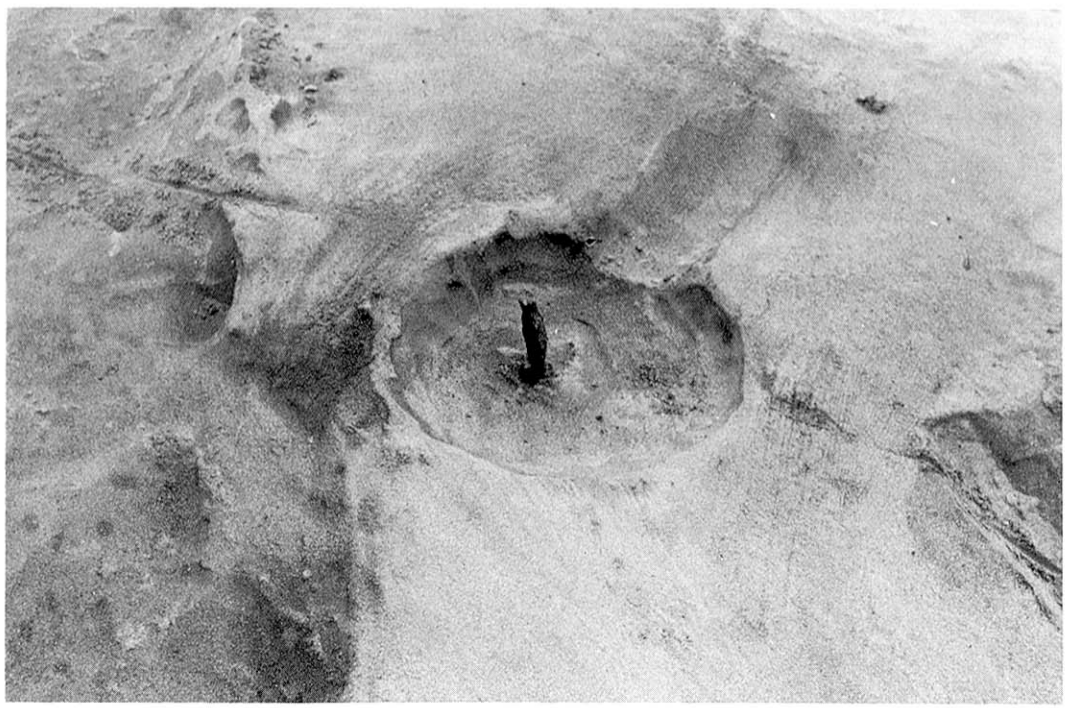
(1)　貝塚貝類出土状況

(2)　貝塚ウニ類出土状況

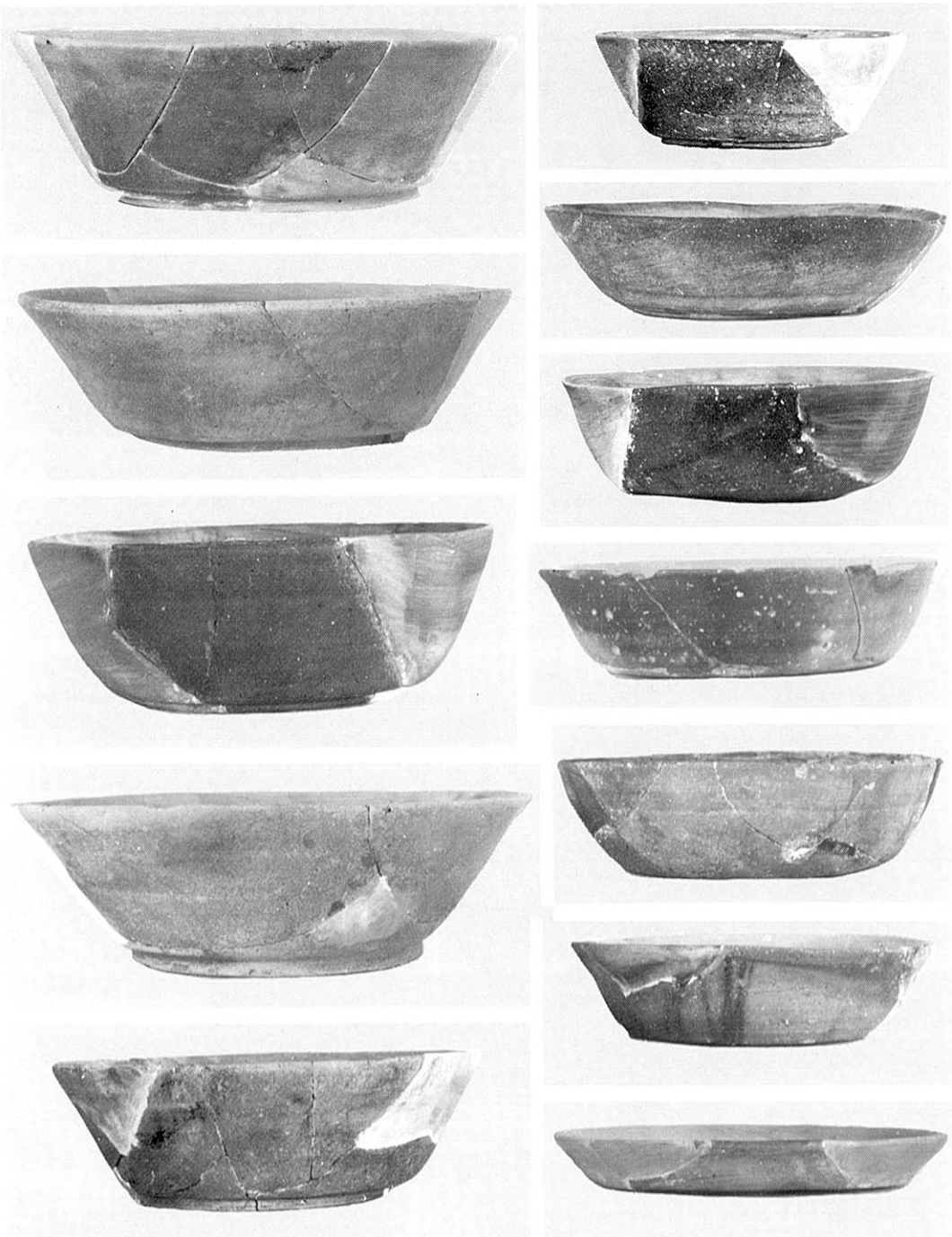
図版 8



(1) 柱穴（第３次調査）

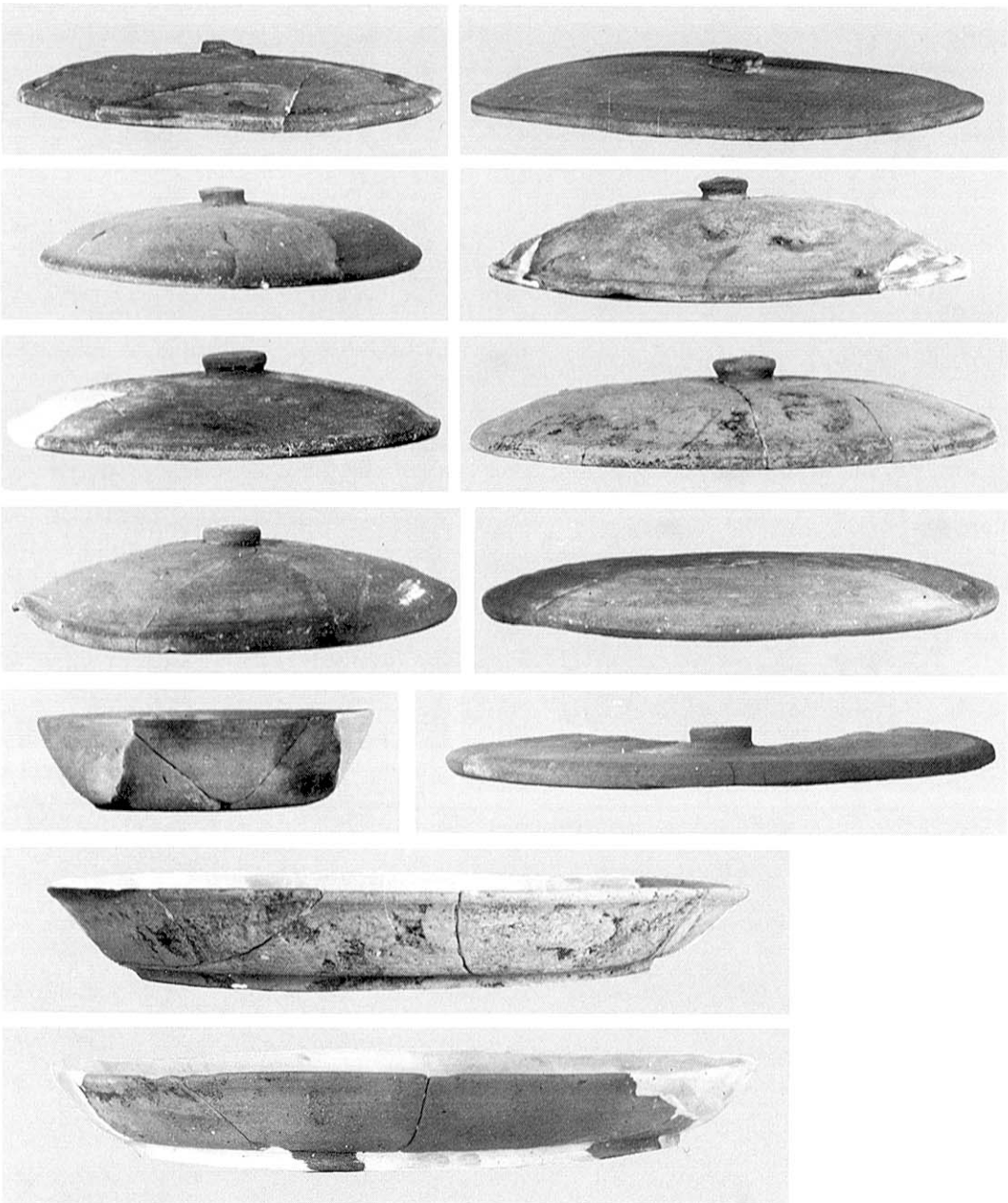


(2) 柱穴（第３次調査）



4 号住居址出土土器（須恵器）

図版 10



4 号住居址出土土器（須恵器、土師器）

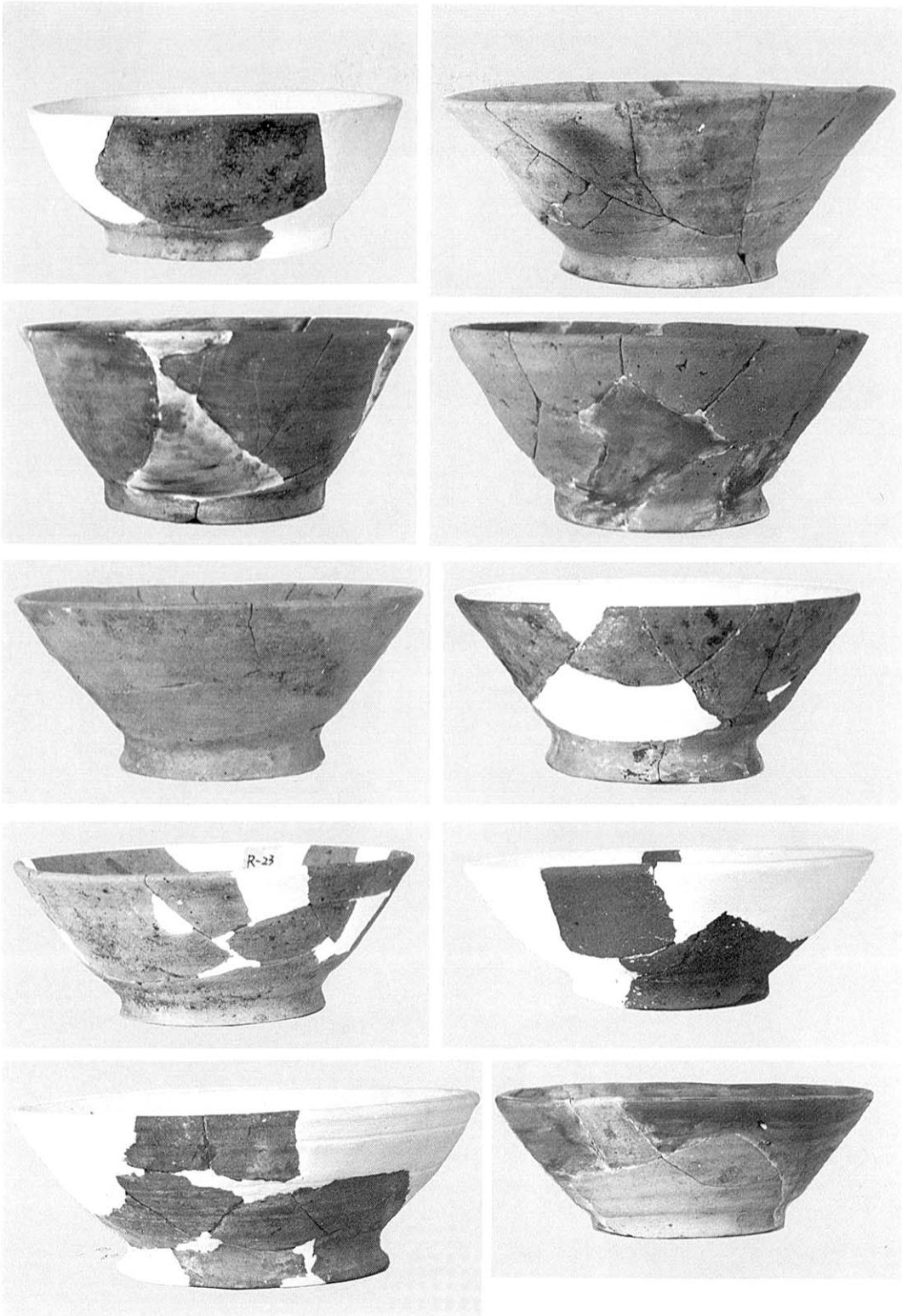
須恵器（高台付杯）

図版12

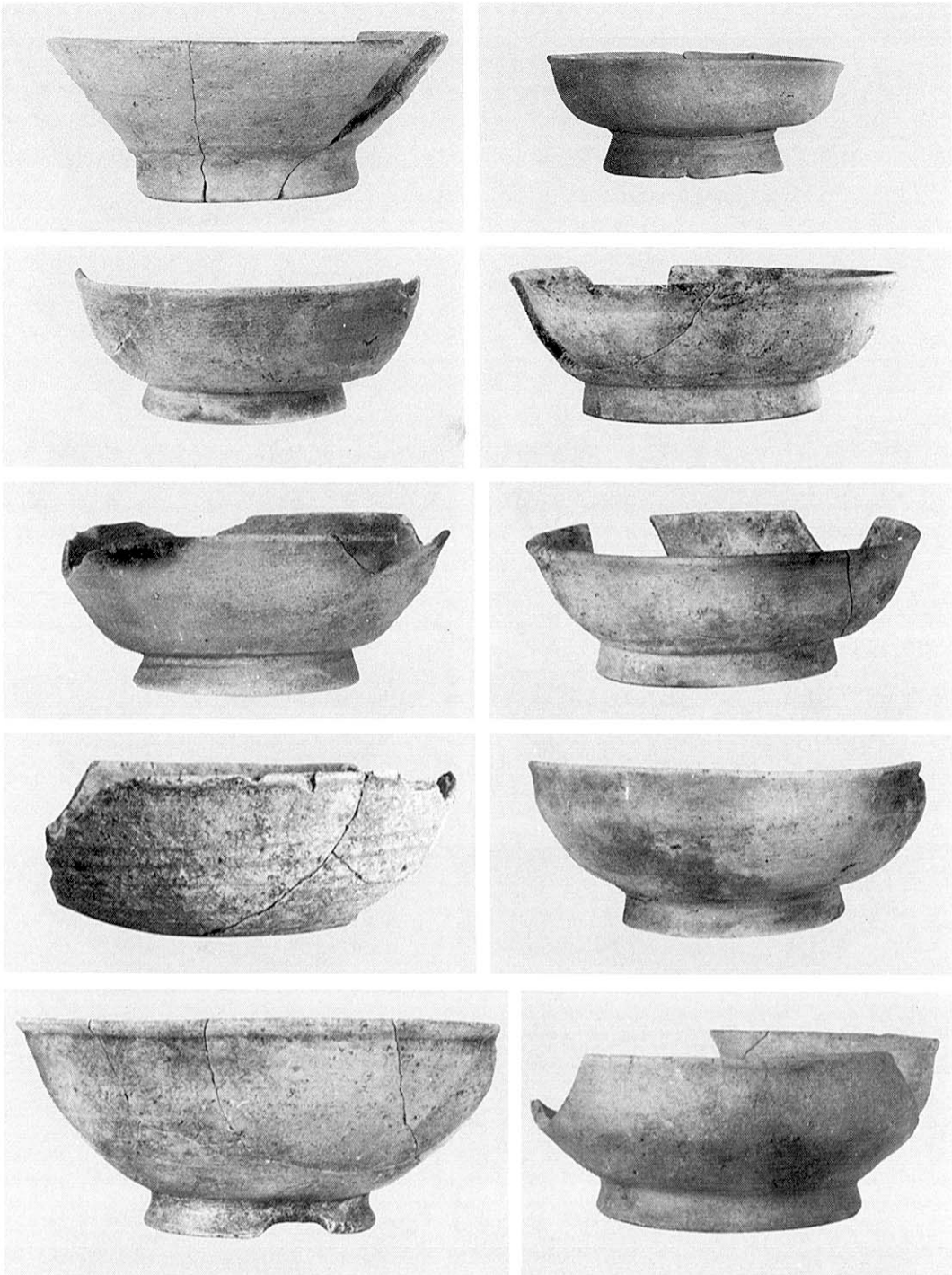
須恵器（杯、皿、蓋）

須恵器、土師器（甕、壺）、新羅式土器

図版14



土師器（高台付椀）



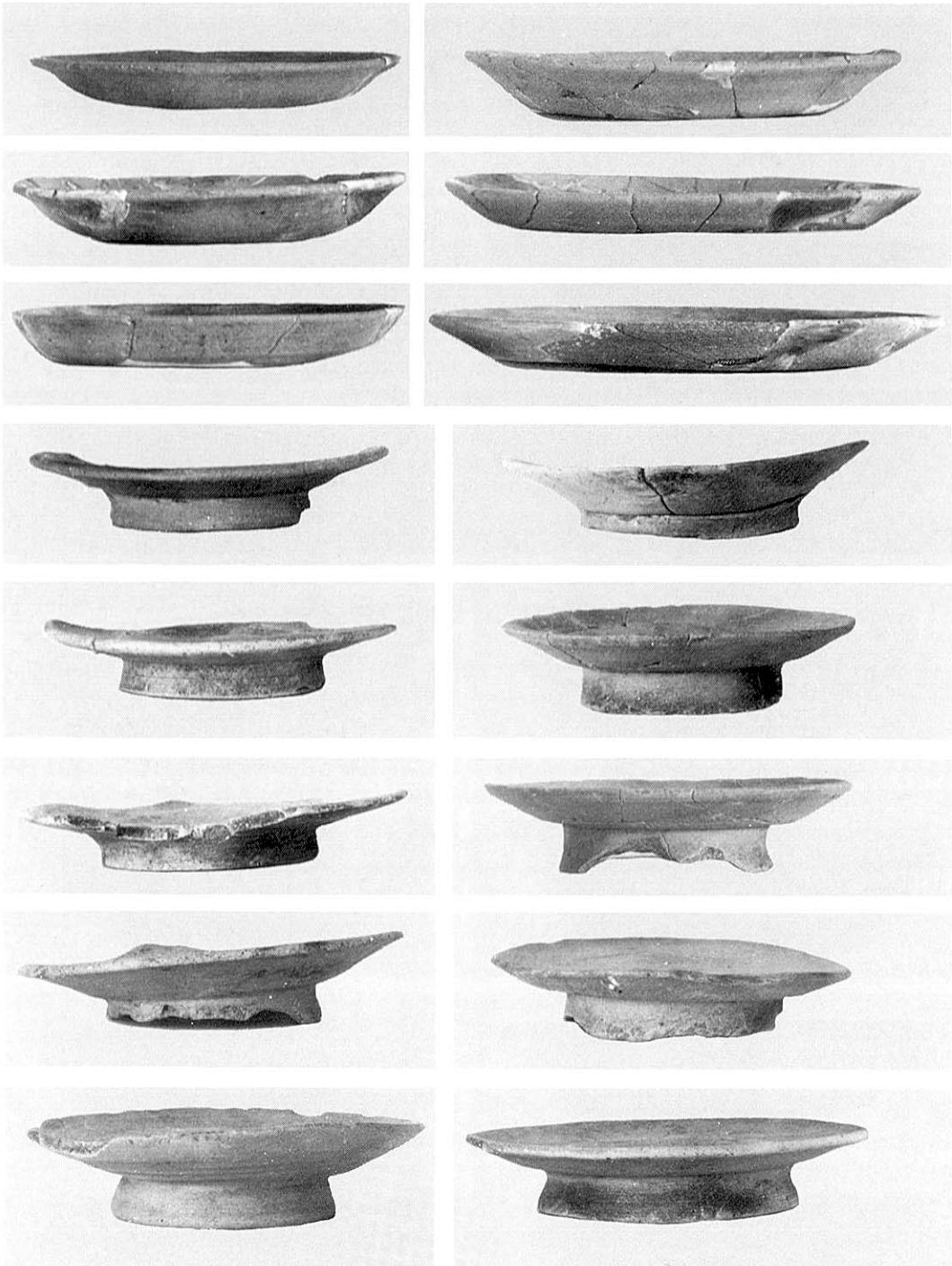
土師器（高台付椀）

図版16

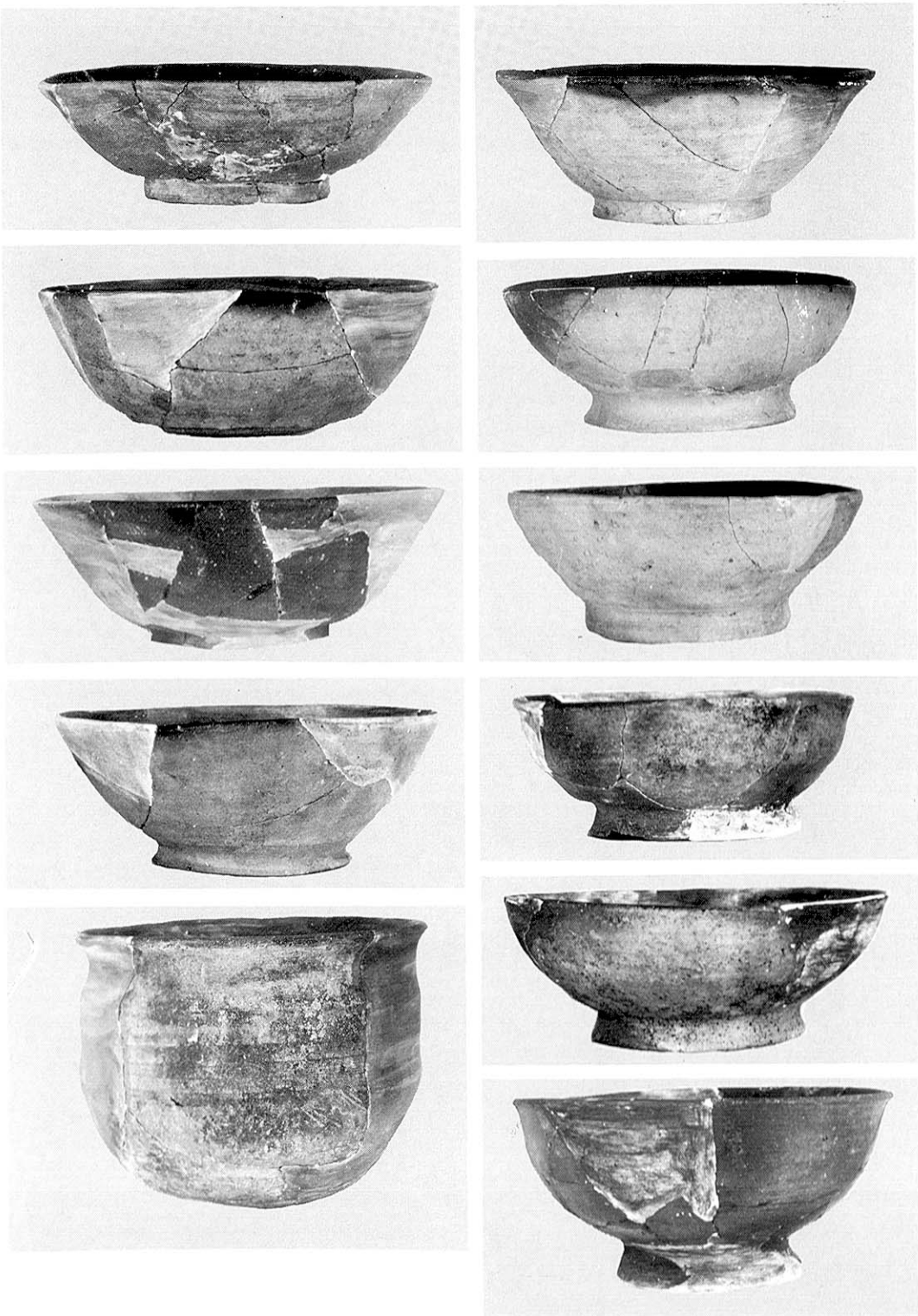
土師器（杯）

土師器（杯）

図版18

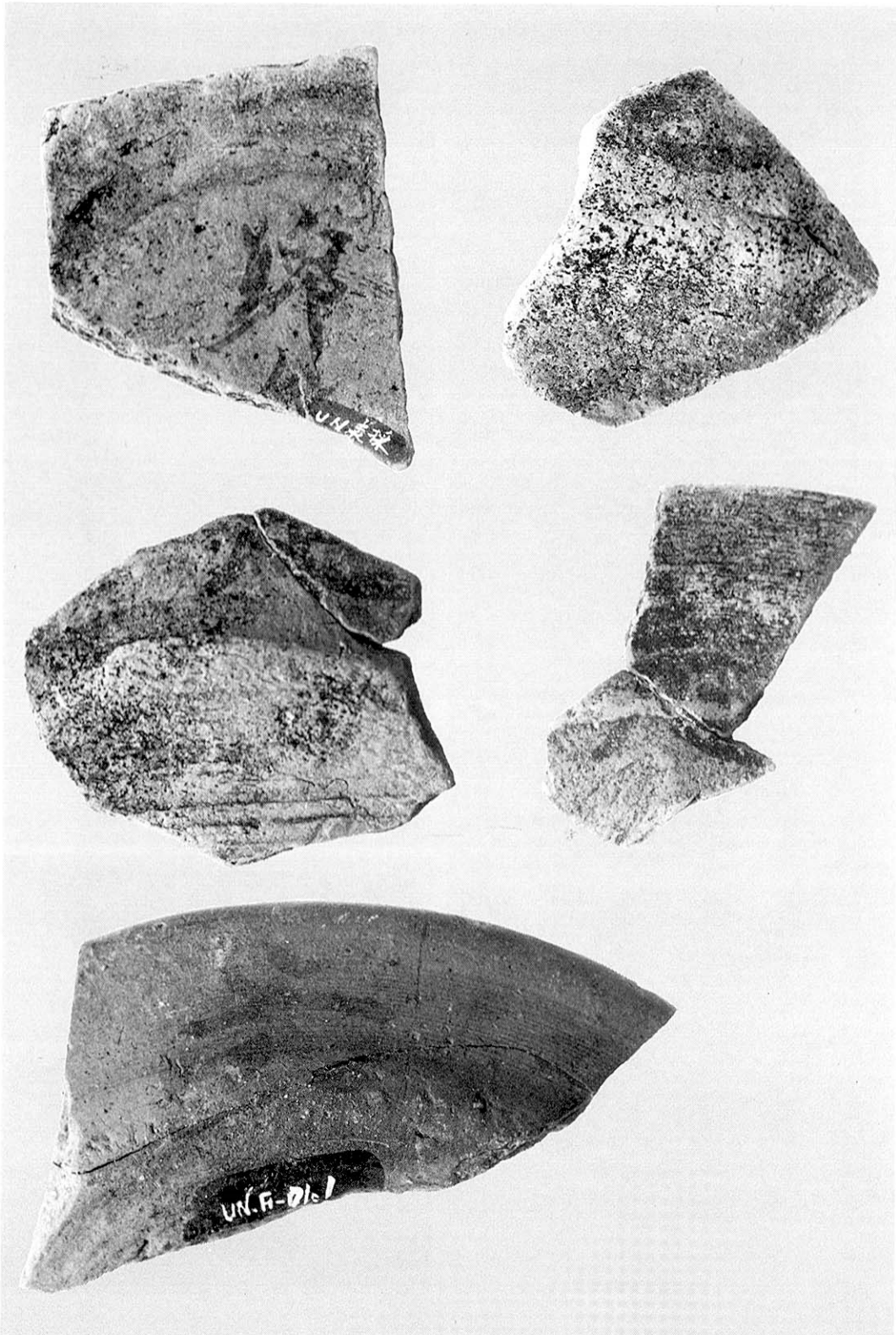


土師器（皿、托）

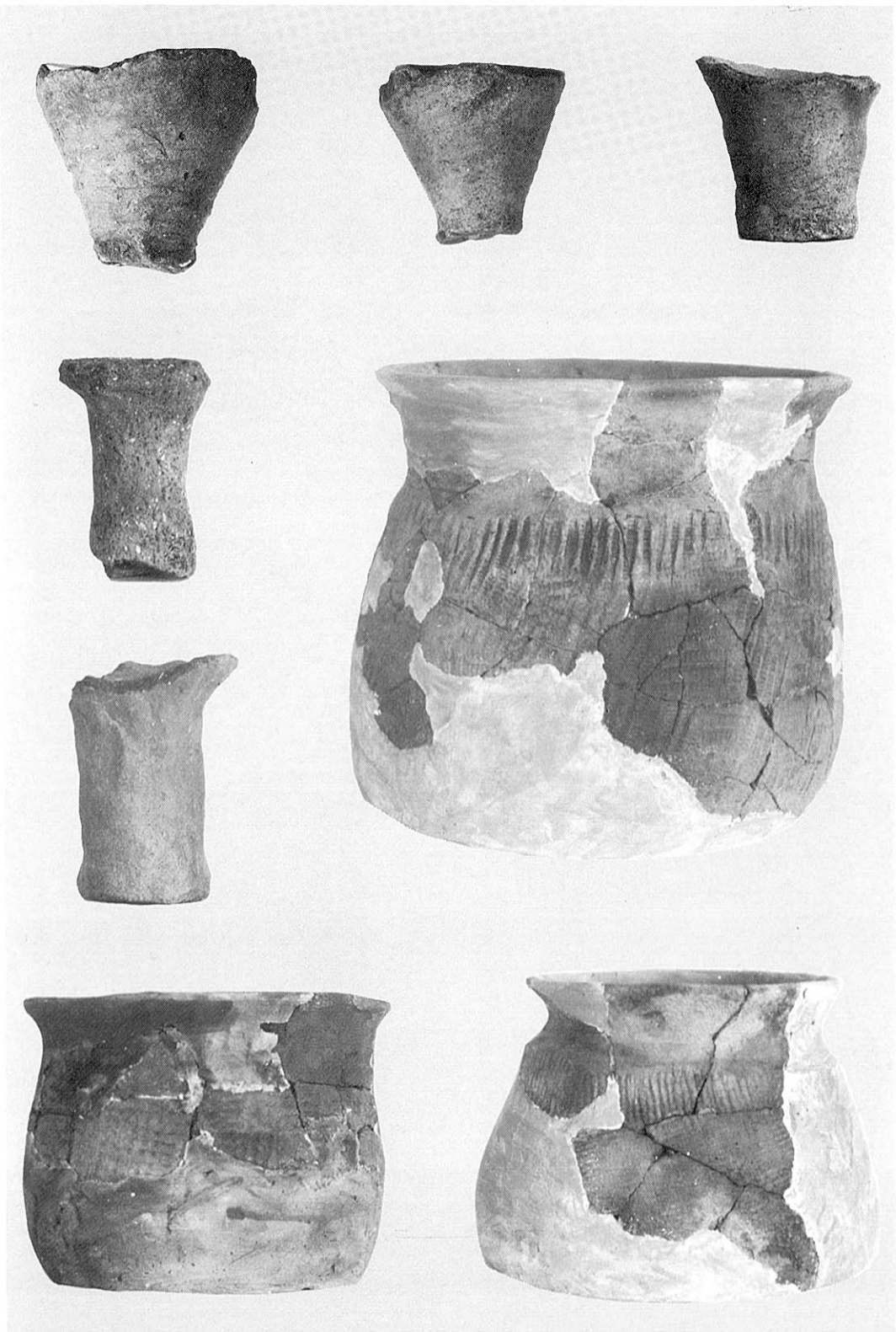


黒色土器

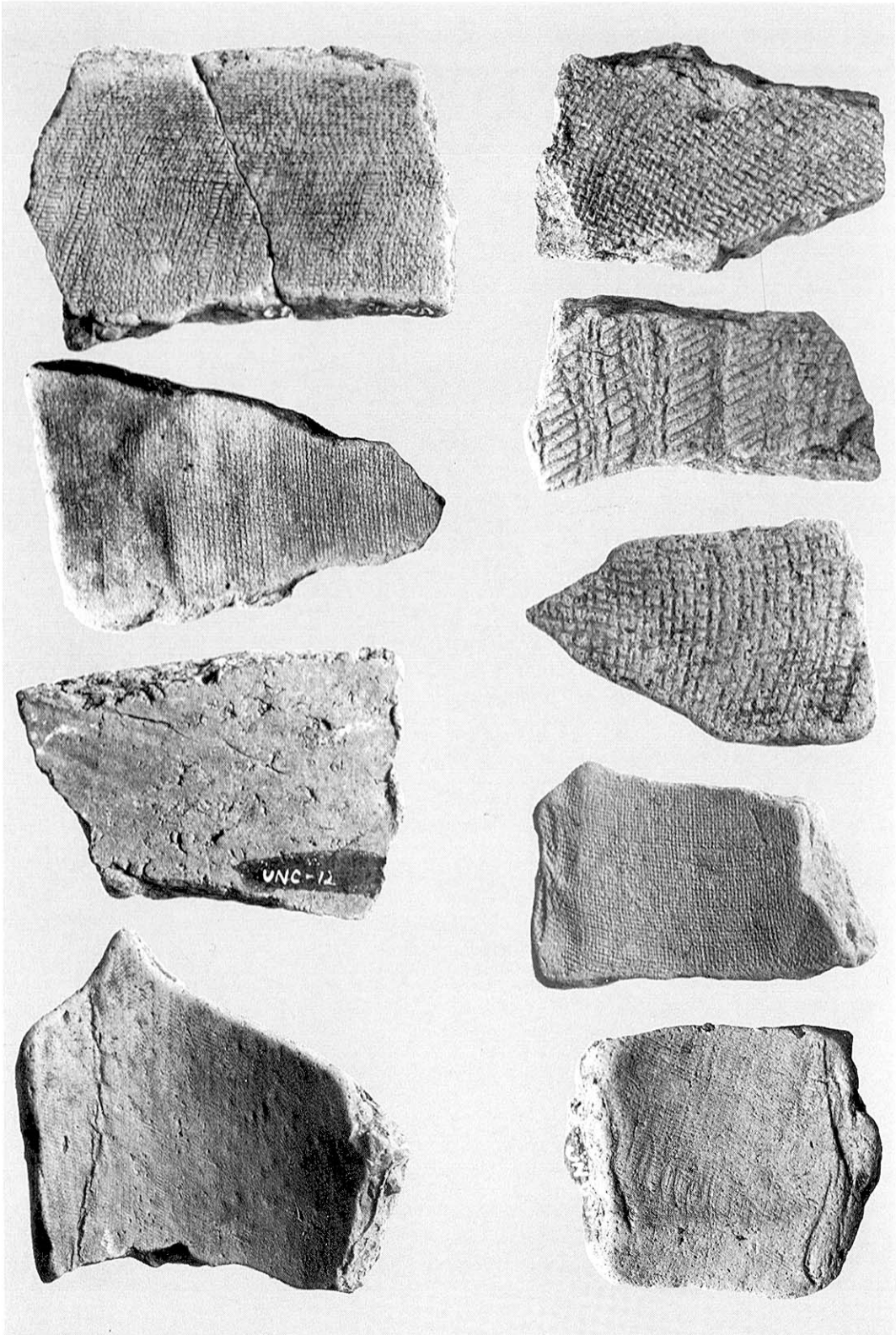
図版 20



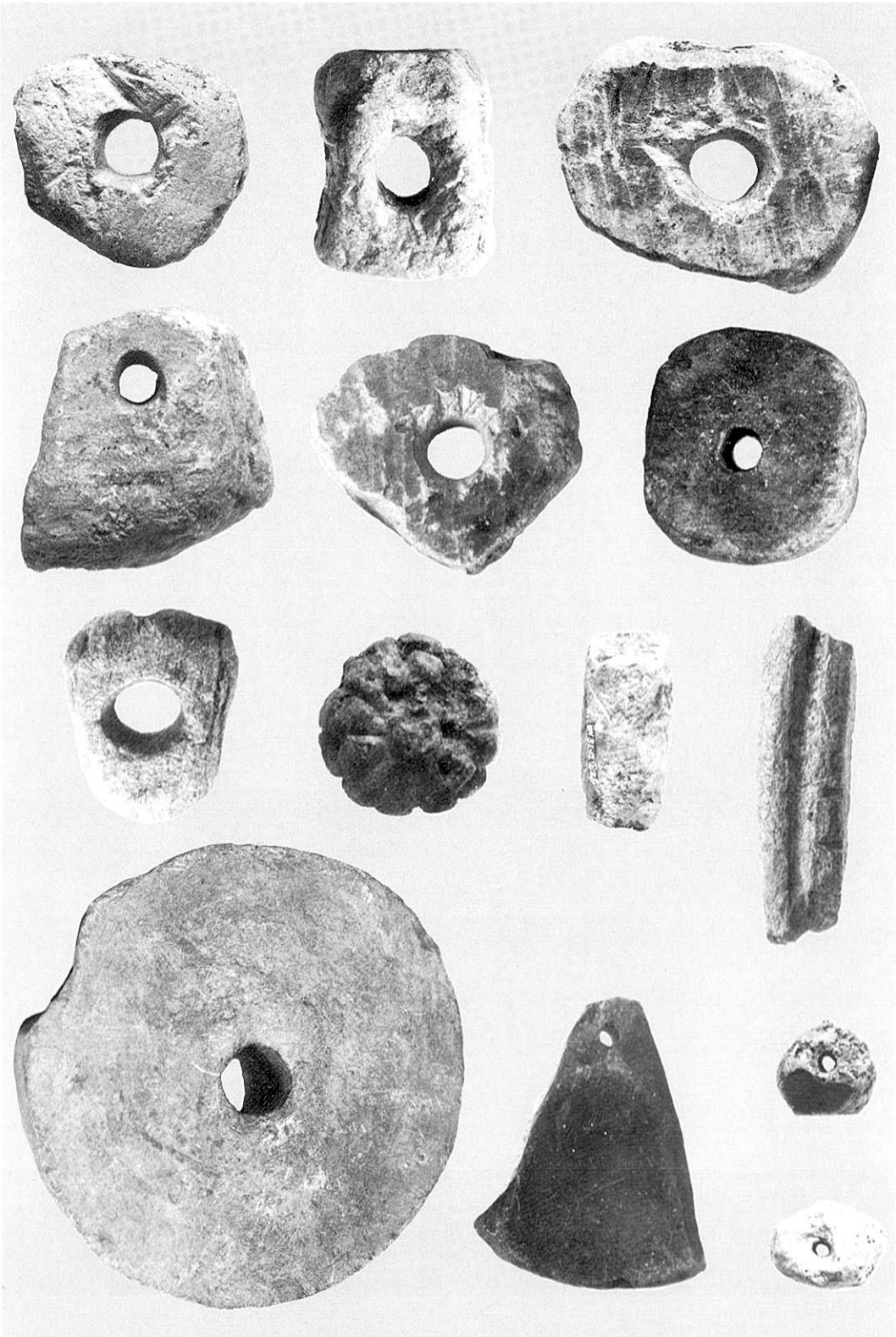
墨書土器



製塩土器

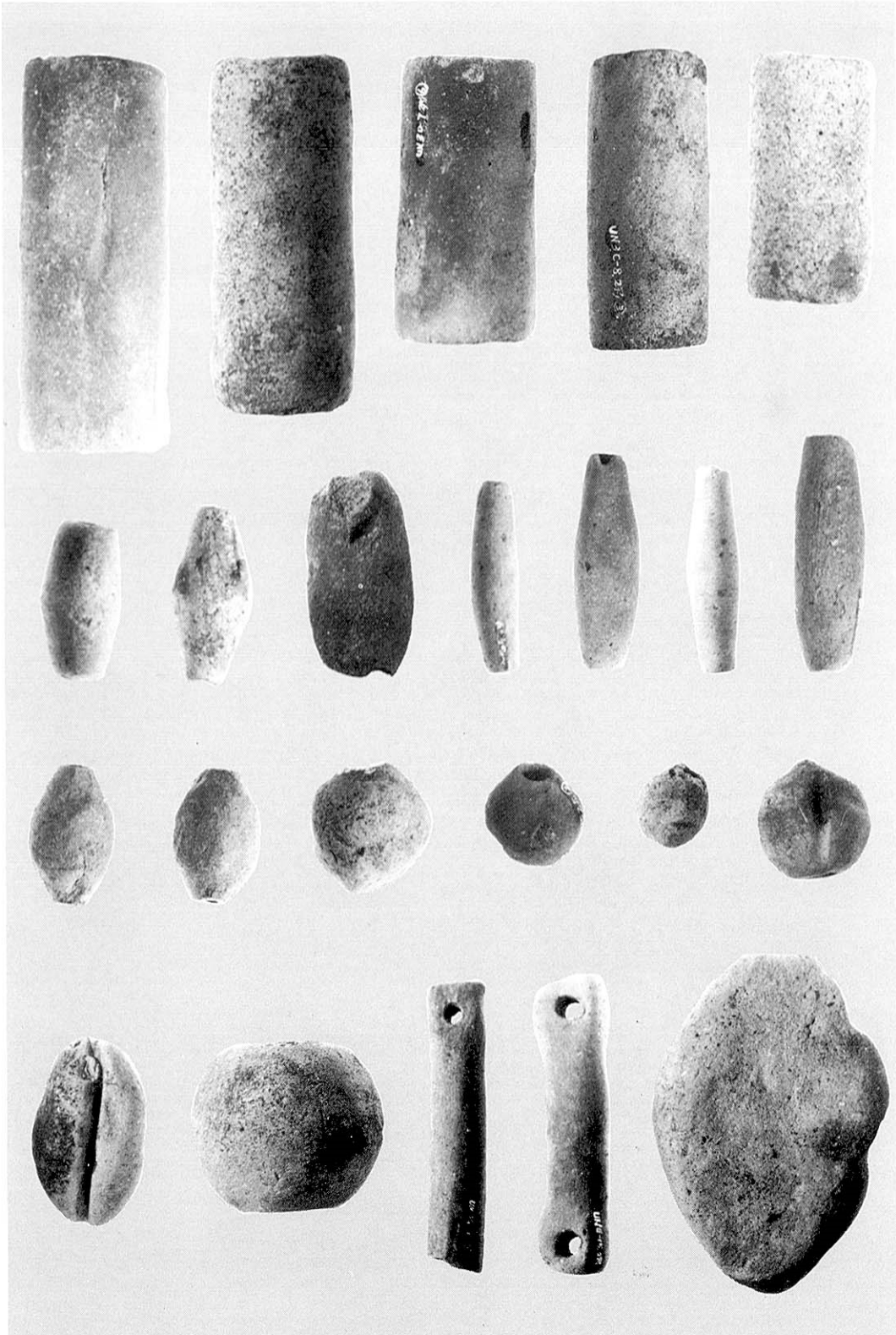


製塩土器II類（内面組織痕）

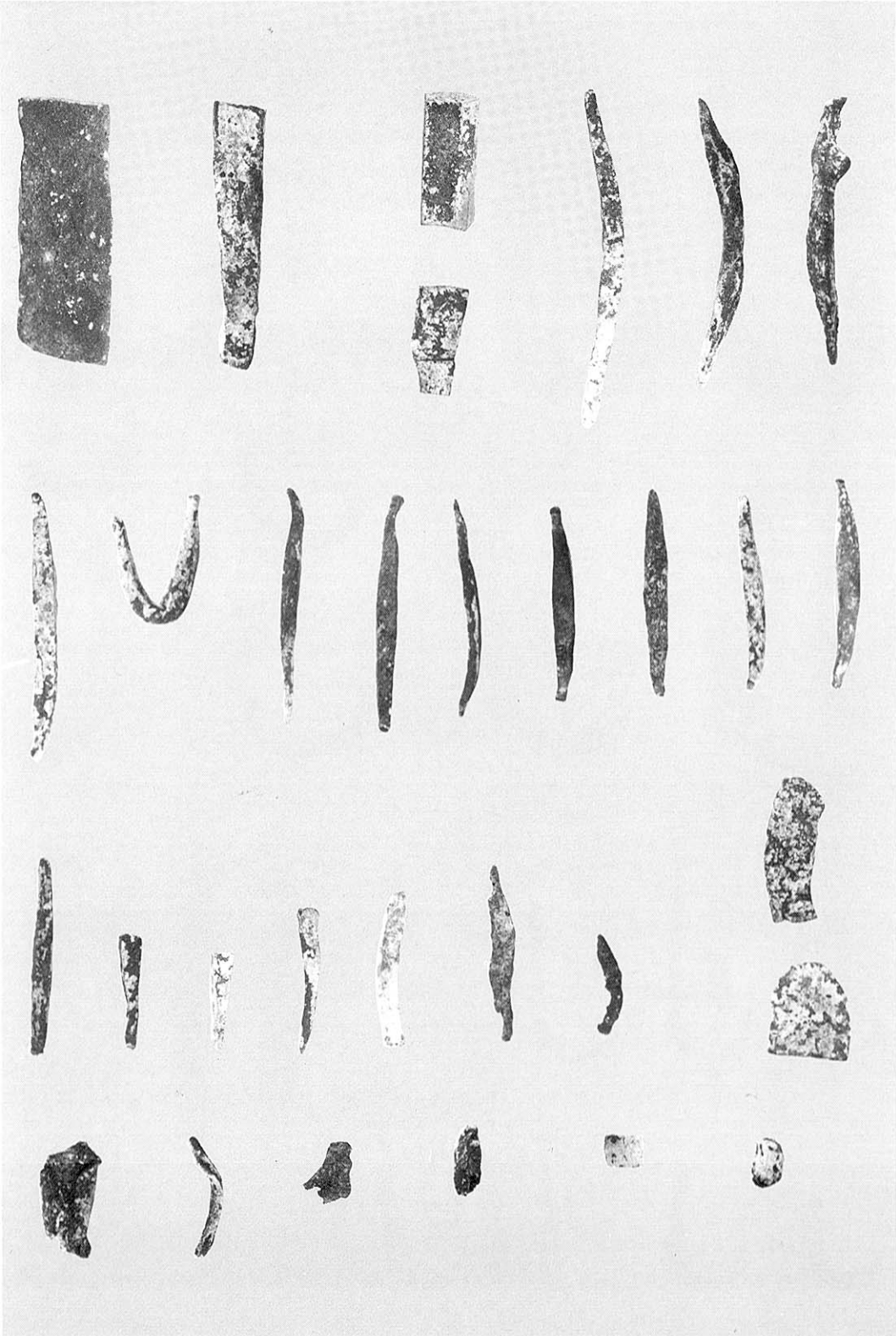


滑石製石錘

図版 24

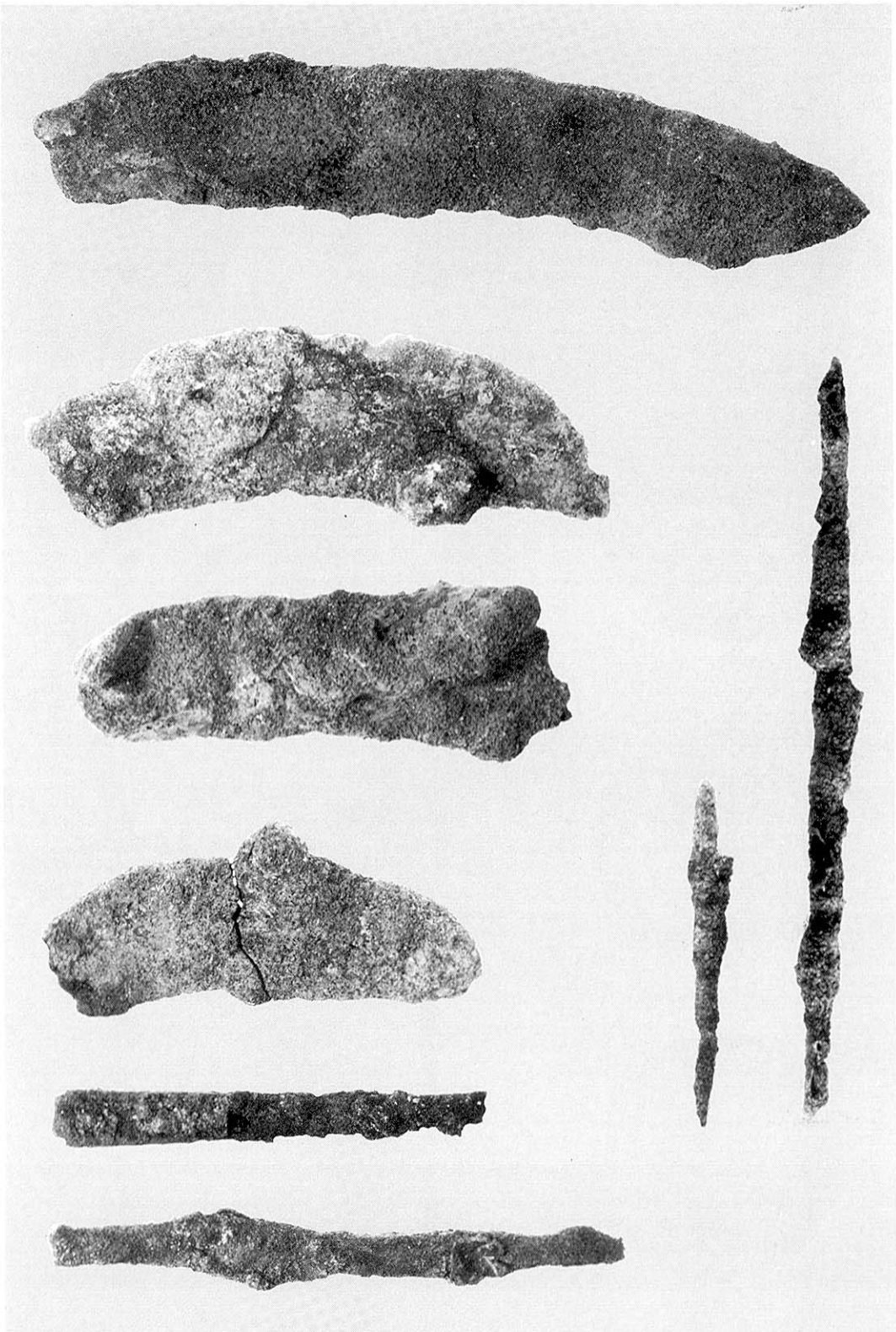


土　錘

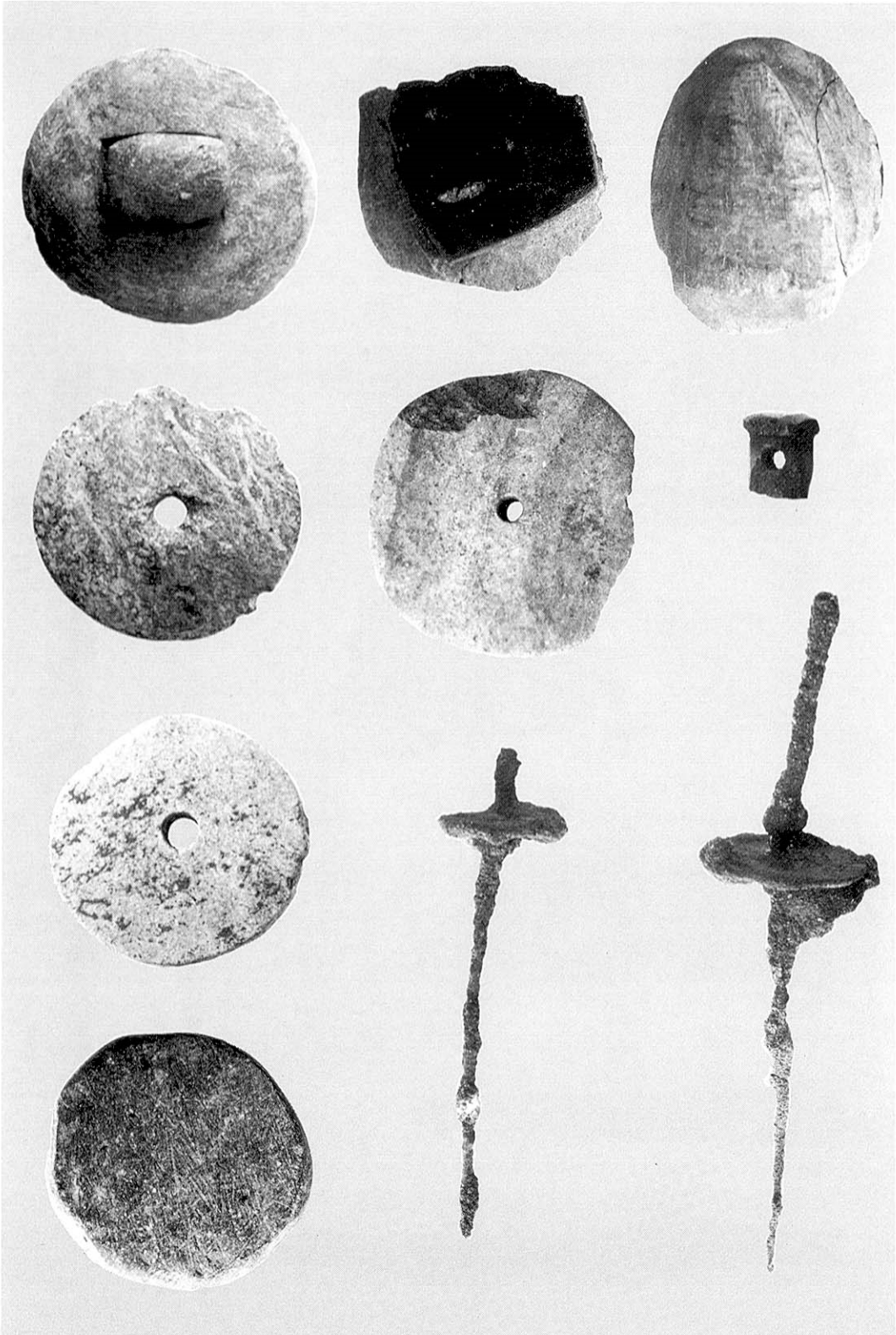


鉛　錘

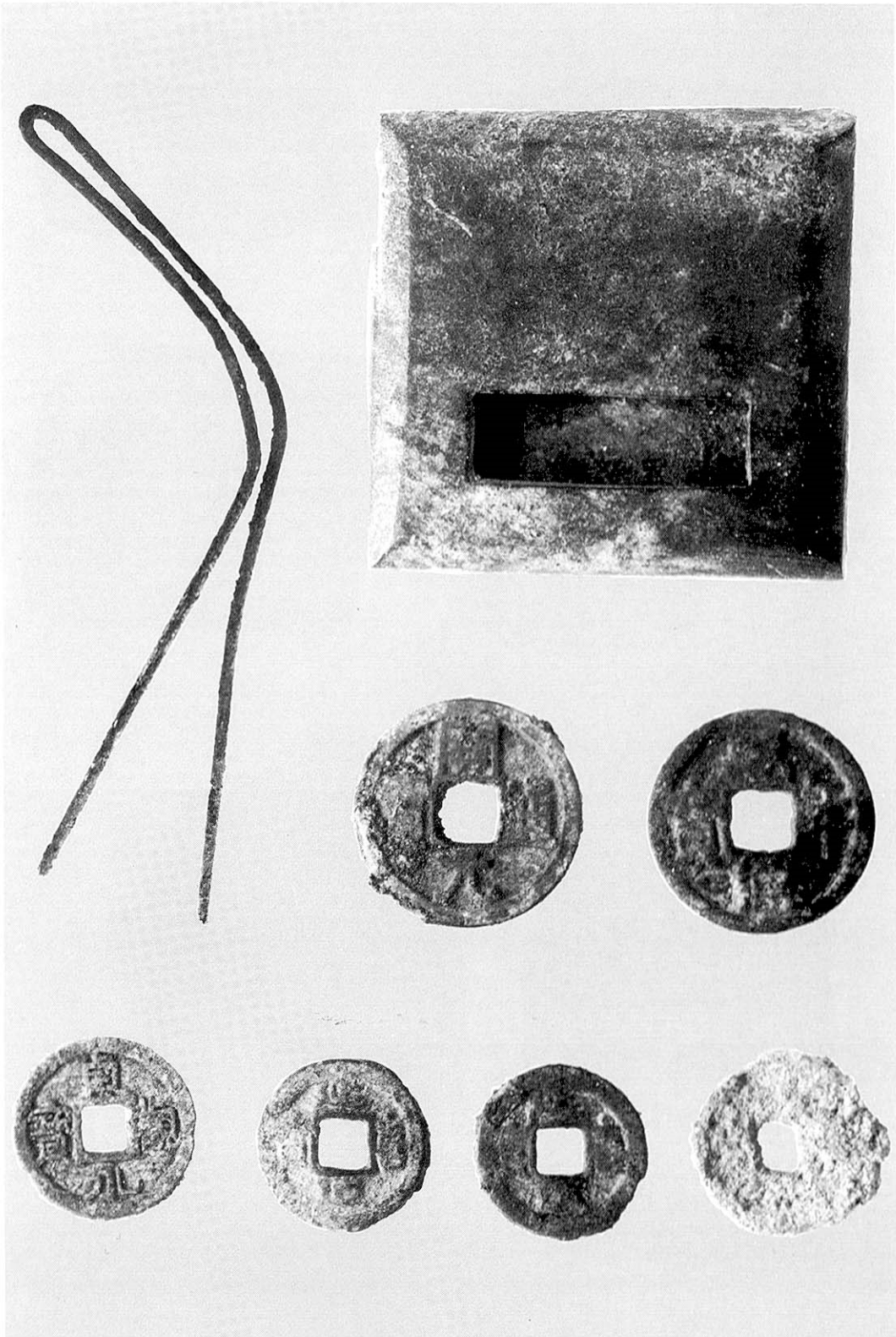
鉄製釣針



鎌、刺突具、刀子

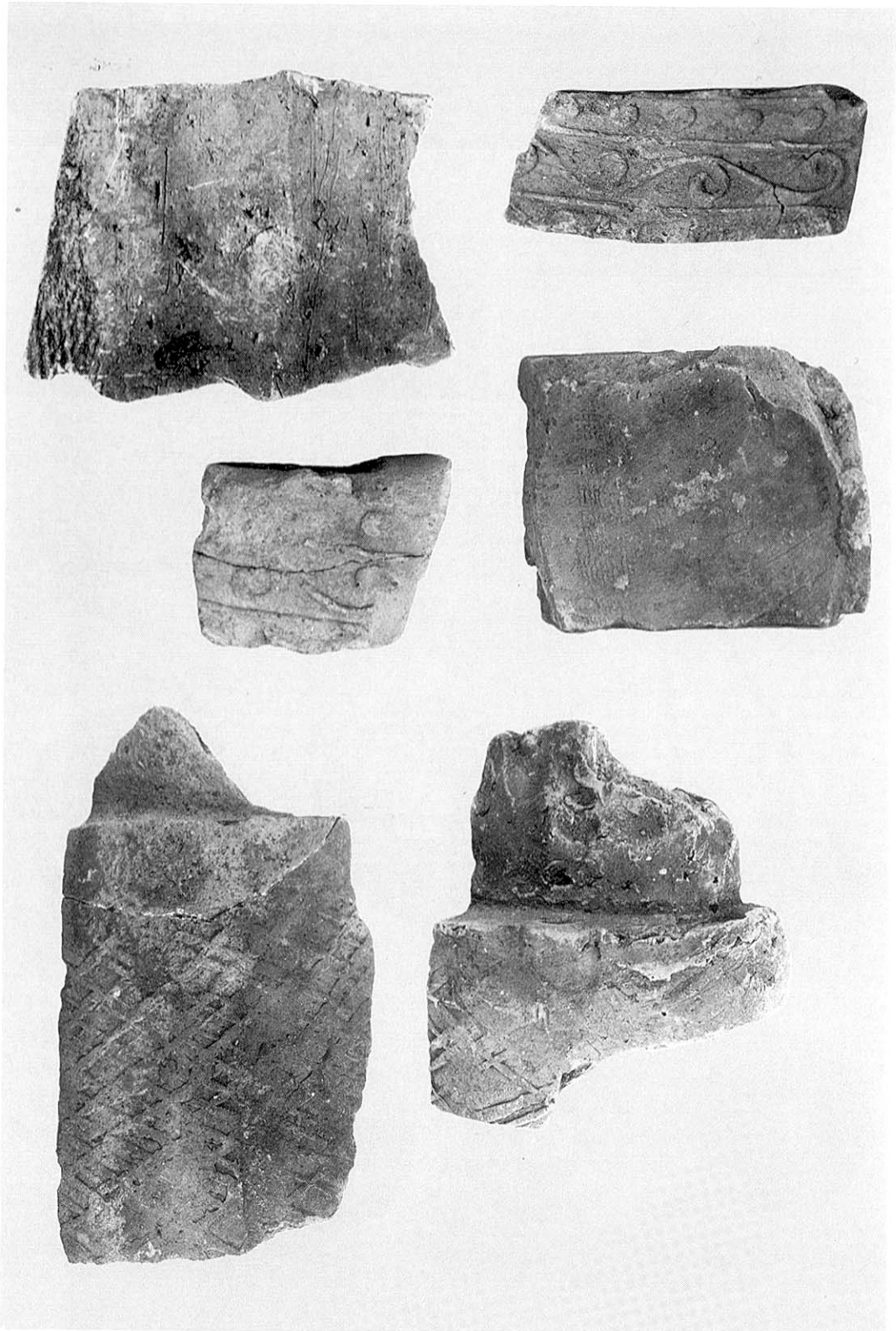


紡錘車、容器蓋類



かんざし、巡方、唐銭、皇朝十二銭

図版 30



瓦　類

福岡市東区海の中道（塩屋）

海の中道遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第87集

1982年3月31日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1－8－1

印刷　株式会社 川島弘文社
福岡市東区箱崎ふ頭6－4－4